A+B

秋田県文化財調査報告書第220集

秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

－富ケ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡　田久保下遺跡　富ケ沢１号～４号塚－

（第一分冊）

秋田県埋蔵文化財センター

１９９２・３

秋田県教育委員会

秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

－富ケ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡 田久保下遺跡 富ケ沢１号～４号塚－
（第１分冊）

１９９２・３

秋田県教育委員会

田久保下遺跡　土壙墓群(西→)

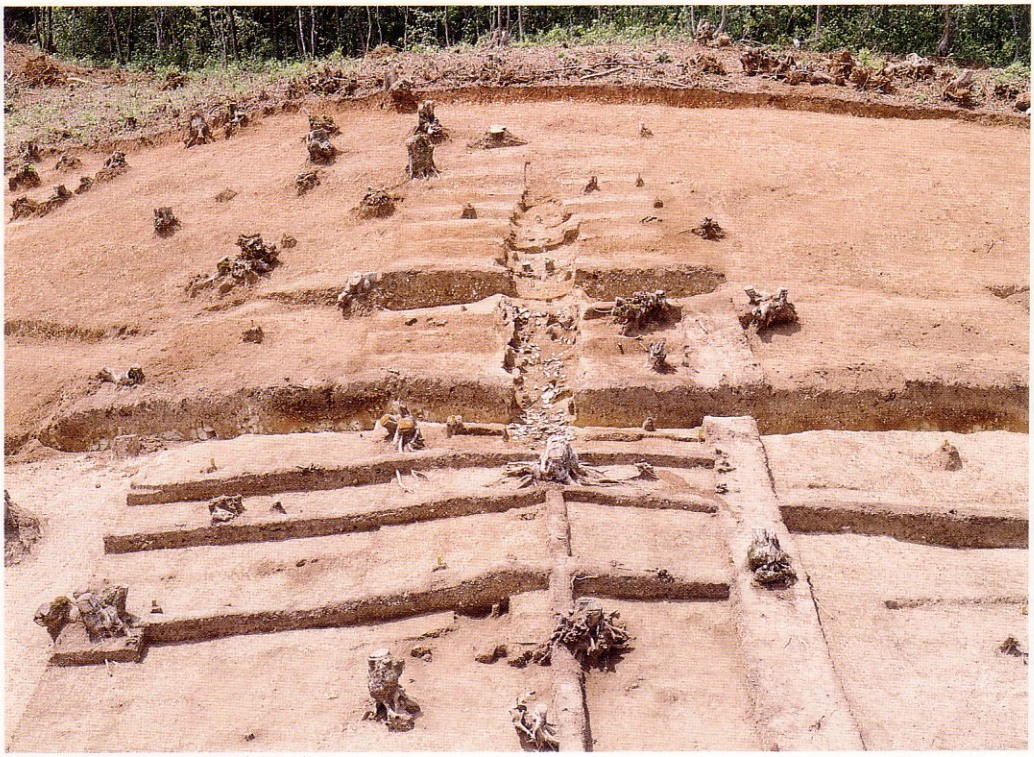
同上　SK308土壙墓(西→)

田久保下遺跡　SK309土壙墓(西→)

同上　土壙墓出土土器

富ヶ沢A窯跡　SJ01(南東→)

富ヶ沢B窯跡　SJ101・102(南→)



富ヶ沢C窯跡　SJ201(東→)

田久保下遺跡　SJ302・303(北東→)

序

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。

このたび、横手市に建設が計画されている、秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係り、富ヶ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡、田久保下遺跡、富ヶ沢１号～４号塚の８遺跡が発掘調査の対象となりました。

調査の結果、田久保下遺跡では県内では初見の６世紀代の土壙墓が８基確認された他、富ヶ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡、田久保下遺跡で合計７基の平安時代の須恵器を焼成した窯跡が検出されました。また富ヶ沢１号～４号塚は江戸時代の塚であろうと推測されています。

本書は、これらの成果をまとめたものであり、地域の歴史や文化を学習・研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査並びに報告書作成に際し、御協力いただきました秋田県企画調整部、横手市教育委員会はじめ関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成４年３月25日

秋田県教育委員会

教育長　橋　本　顕　信

例　言

1　本報告書は、秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る富ヶ沢A窯跡、富ヶ沢B窯跡、富ヶ沢C窯跡、田久保下遺跡、富ヶ沢1号塚、富ヶ沢2号塚、富ヶ沢3号塚、富ヶ沢4号塚の8遺跡の報告書であり、本書は2分冊のうちの第1分冊である。

2　本報告書に先立って、調査成果の一部を公表しているが、本報告書の内容がそれらに優先する。

3　第2分冊Ⅶ考察第1章自然科学的分析は、次の方、機関に依頼した。（依頼順、敬称略）

火山灰分析・材同定……パリノ・サーヴェイ株式会社

残存脂肪の分析……株式会社ズコーシャ総合科学研究所

鉄製品の分析……新日本製鉄株式会社八幡製鉄所ＴＡＣセンター

同社中央研究本部八幡技術研究部　大澤正己

須恵器の産地同定……奈良教育大学　三辻利一

黒曜石遺物の石材産地同定……京都大学原子炉実験所　藁科哲男

考古地磁気……秋田大学鉱山学部　西谷忠師

4　富ヶ沢B窯跡で出土した文字資料については、国立歴史民俗博物館教授平川南氏に釈文をお願いした。

5　田久保下遺跡出土の陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏に鑑定をお願いした。

6　田久保下遺跡出土の柄付刀子のＸ線写真は、後藤内科医院（仙北町）のご協力による。

7　本報告書で使用している土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠している。

8　本報告書で使用した遺跡位置図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1及び25,000分の1地形図、横手市発行の1,000分の1都市計画図である。

9　調査ならびに本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・助言を賜った。（敬称略）

石橋孝夫　上野秀一　宇部則保　大島秀俊　大谷敏三　大沼忠春　菊池徹夫　越田賢一郎
後藤眞暎　小林義孝　小松正夫　斎藤實　澤谷敬　鈴木俊男　高橋與右衛門　武末純一
千代肇　中村浩　長沼孝　野村崇　長谷部一弘　日野久　平川善祥　冨加見泰彦
藤丸詔八郎　船木義勝　三木弘　右代啓視　宮宏明　村田健二（50音順）

10　本報告書の執筆は、桜田隆、柴田陽一郎、小畑巌、高橋学があたり、各分担ついては目次の項に明示してある。編集は、桜田、高橋があたり、石川真一、小山内透の協力を得た。

11　調査に係わる全ての資料は、秋田県埋蔵文化財センターが現在保管している。

凡　例

1　本報告書に掲載してある遺構実測図に付した方位は、磁北を示す。

2　遺構実測図の縮尺は、1／40、1／50、1／60を原則とし、遺構配置図は、田久保下遺跡1／300、その他は1／600であり、それぞれスケールを付している。

3　遺物実測図は基本的に1／3であるが、大型の甕・壺類などは1／4としている。遺物の写真は縮尺不同である。

4　個々の遺物実測図は、各遺跡毎に種別・器種を問わず一連の番号を付し、写真図版の番号とも対応する。

5　土層註記は、基本層位にローマ数字を用い、遺構堆積土（埋土）にはアラビア数字を用いた。

6　遺構番号は、富ヶ沢A窯跡：01～、富ヶ沢B窯跡：101～、富ヶ沢C窯跡：201～、田久保下遺跡：301～を用い、それぞれ検出順に連番としたが、精査過程において欠番となったものもある。

7　出土した土器には、稀に文字等の認められる資料がある。いわゆる墨書土器を除けば、器面に篦状あるいは釘状工具を用いて刻している。土器を観察すると焼成以前に刻されたものと、焼成後に刻されたものが存在する。本書ではこれを区別するために、次のように定義しておきたい。

篦書土器：土器の焼成前に篦状あるいは釘状工具を用い文字・記号等を器面に刻した土器

刻書土器：土器の焼成後に釘状工具等を用い文字・記号等を器面に刻した土器

8　遺構の種別を表す略号は下記の通りである。

ＳＢ……掘立柱建物跡　　ＳＤ……溝状遺構

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＪ……窯跡（須恵器窯、平窯、炭窯）

ＳＫ……土壙墓、土坑　　ＳＫＦ……フラスコ状土坑

ＳＮ……焼土遺構

9　挿図中に使用したスクリーントーンは、次の通りである。

地山

焼土

炭化物

10　遺物重量計測及び個体数算出について

須恵器窯跡及び灰原出土の遺物は、その出土全量を対象に次の要領で重量計測及び個体数の算出を行った。これは、富ヶ沢A～C窯跡では窯と灰原の全域を調査できたことを受け、

その窯で焼成された土器の器種組成やその数量を推定するための１手段とすべく実施したものである。

重量計測に際して、その器種を、坏類、蓋類、壺類、甕類に大別した。坏類には、坏、高台付坏が、蓋類には、坏蓋、壺蓋などが含まれる。壺類と甕類は、破片では特にその識別は困難である場合が多いので、胴部資料については、外面に最終調整としての叩き目を残す破片を甕類、ロクロあるいはケズリ調整の破片を壺類として分け、計測した。従って壺類の中には、叩き目を有しない小・中型の甕が含まれることになる。また甕類には叩き目を持つ横瓶が含まれる。以下報告において、重量についての項目では、上のような分類基準であることをお含みおきいただきたい。

個体数は、坏類、壺類は、底部が1／2以上残存している個体、蓋類はつまみの個数、甕類は口縁部がおおよそ1／2以上残存しているものをそれぞれ１個体として数えている。

11　遺物実測図と観察表について

本報告書には、出土した遺物をできるだけ多く掲載したいと考え、個々の遺物の説明は、原則的には行っていない。代わりに器種別に分類基準を設け、その記号と、法量を実測図下の観察表でまとめた。分類基準は、Ⅶ考察の節（ｐ495～497）で示してある。

観察表中における口径あるいは器高の項の〔　〕は推定値、（　）は現状値であることを示す。また備考欄の「写」は掲載図が写真図版にもあることを示し、右隅の番号は、遺物計測・実測時の整理番号であり、収蔵用の番号でもある。

遺物実測の基準は、特殊な個体等は例外として、富ヶ沢Ｂ窯跡では、個体のおよそ2／3以上残存しているもの、その他の窯跡（遺跡）では1／2以上残存の個体を選別し、割り当て紙数、遺構、層位を加味して実測、掲載することとした。Ｂ窯跡以外はその残存率を、完形、2／3、1／2、破片（蓋はつまみ）の大ざっぱに類別して記載してある。

総　目　次

（第１分冊）

巻頭図版
序
例　　言
凡　　例
目　　次

Ⅰ　序論
第１章　はじめに……1
第２章　遺跡群の立地と環境……4
第３章　発掘調査の概要……12

Ⅱ　富ヶ沢Ａ窯跡
第１章　発掘調査の概要……21
第２章　調査の記録……24
第３章　小結……66

Ⅲ　富ヶ沢Ｂ窯跡
第１章　発掘調査の概要……87
第２章　調査の記録……90
第３章　小結……168

（第２分冊）

例　　言
凡　　例
目　　次

Ⅳ　富ヶ沢Ｃ窯跡
第１章　発掘調査の概要……207
第２章　調査の記録……210

第３章　小結 …… 236

Ⅴ　田久保下遺跡

第１章　発掘調査の概要 …… 253

第２章　調査の記録 …… 256

第３章　小結 …… 345

Ⅵ　富ヶ沢１号～４号塚

第１章　発掘調査の概要 …… 389

第２章　調査の記録 …… 391

第３章　小結 …… 402

Ⅶ　考　察

第１章　自然科学的分析調査 …… 417

第２章　考古学的分析調査 …… 487

第３章　まとめ …… 503

第１分冊目次

Ⅰ　序論　（桜田）

第１章　はじめに …… 1

第１節　発掘調査に至るまで …… 1

第２節　調査の組織と構成 …… 2

第２章　遺跡群の立地と環境 …… 4

第１節　自然的環境 …… 4

第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　発掘調査の概要 …… 12

第１節　遺跡群の概観 …… 12

第２節　調査区の設定 …… 13

第３節　調査の経過 …… 14

Ⅱ　富ヶ沢A窯跡
第1章　発掘調査の概要……（小畑）……21
第1節　遺跡の概観……21
第2節　調査の方法と経過……21
第2章　調査の記録……24
第1節　検出遺構と遺物……（遺構：小畑、遺物：高橋）……24
1　平安時代の遺構と遺物……24
（1）　須恵器窯跡……24
（2）　平窯跡……33
（3）　竪穴住居跡……36
（4）　土坑……36
2　時期不明の遺構と遺物……51
第2節　遺構外出土の遺物……（高橋）……62
1　縄文時代の遺物……62
2　平安時代の遺物……62
第3章　小結……（小畑・高橋）……66
図版1～18

Ⅲ　富ヶ沢B窯跡
第1章　発掘調査の概要……（桜田）……87
第1節　遺跡の概観……87
第2節　調査の方法と経過……87
第2章　調査の記録……（高橋）……90
第1節　検出遺構と遺物……90
1　平安時代の遺構と遺物……90
（1）　須恵器窯跡……90
（2）　土坑……103
2　遺構外出土の遺物……103
第3章　小結……（高橋）……168
図版19～42

I　序　論

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

秋田県は、昭和63年度に、秋田の風土や歴史、伝統、自然などの中で、地域に生きる人々がたゆまぬ努力と知恵を積み重ねながら培ってきたふるさとの美術、工芸、生活文化、食文化等の秋田にこだわった有形、無形の文化を保存・評価し、次代に継承するとともに、新たな文化の創造に資する郷土文化の拠点として、また、秋田の優れた物産の販売や観光情報の提供等をねらいとした新たな観光の拠点としての「秋田ふるさと村（仮称）」の建設基本構想を策定し、建設予定地を横手市街地の南西側に南北に広がる中山丘陵の中央部東端の横手市赤坂字富ヶ沢・婦気大堤字田久保下地内の面積約16haに決定した。

この建設予定地の北隣には周知の遺跡である郷土館窯跡などの埋蔵文化財包蔵地が多いことから、県企画調整部は県教育委員会に対し、建設予定地内における埋蔵文化財の有無の照会を行った。

県教育委員会では、平成元年９月４日～10月４日、平成２年４月16日～４月19日に遺跡分布及び範囲確認調査を実施し、４カ所の遺跡（窯跡）と４カ所の塚が建設予定地内に所在することを確認した。

県教育委員会と県企画調整部は協議を重ねたが、最終的に記録保存の措置をとることで合意し、平成２年５月７日から発掘調査を実施することになった。

参考文献

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集　1990（平成２年）

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集　1991（平成３年）

秋田県『秋田ふるさと村（仮称）建設基本計画』　1990（平成２年）

第２節　調査の組織と構成

所在地

富ヶ沢Ａ窯跡　秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62－33外

富ヶ沢Ｂ窯跡　秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62－40外

富ヶ沢Ｃ窯跡　秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62－54外

田久保下遺跡　秋田県横手市婦気大堤字田久保下62－１

富ヶ沢１号塚　秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62－9外

富ヶ沢２号塚　秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62－18外

富ヶ沢３号塚　秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62－21外

富ヶ沢４号塚　秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62外

調査期間

平成２年５月７日～11月28日

富ヶ沢Ａ窯跡　８月20日～10月31日

富ヶ沢Ｂ窯跡　７月12日～９月27日

富ヶ沢Ｃ窯跡　６月４日～８月10日

田久保下遺跡　９月19日～11月28日

富ヶ沢１号塚　６月11日～８月10日

富ヶ沢２号塚　10月29日～11月14日

富ヶ沢３号塚　10月29日～11月14日

富ヶ沢４号塚　８月６日～９月６日

調査目的

秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

調査面積

14,300㎡

富ヶ沢Ａ窯跡　4,200㎡

富ヶ沢Ｂ窯跡　4,200㎡

富ヶ沢Ｃ窯跡　2,900㎡

田久保下遺跡　1,400㎡

富ヶ沢1号塚　400㎡

富ヶ沢2号塚　400㎡

富ヶ沢3号塚　400㎡

富ヶ沢4号塚　400㎡

調査主体者

秋田県教育委員会

調査担当者

桜田　隆　秋田県埋蔵文化財センター文化財主査

柴田陽一郎　秋田県埋蔵文化財センター文化財主任

小畑　巌　秋田県埋蔵文化財センター学芸主事

高橋　学　秋田県埋蔵文化財センター学芸主事

和泉昭一　秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員（現　二ツ井町教育委員会主事）

石川真一　秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員

総務担当者

佐田　茂　秋田県埋蔵文化財センター主査

高橋忠太郎　秋田県埋蔵文化財センター主事（平成3年3月転出）

佐々木真　秋田県埋蔵文化財センター主任（平成3年4月転入）

調査協力機関

秋田県企画調整部地域開発課秋田ふるさと村建設推進事務局

秋田県企業局工務課

横手市企画創造課

横手市教育委員会

横手市立境町公民館

横手市立旭公民館

平鹿町教育委員会

十文字町教育委員会

第２章　遺跡群の立地と環境

第１節　自然的環境

横手市は、秋田県の南東部に、雄物川水系中流域に展開する横手盆地のほぼ中央、東寄りに位置する。

横手盆地は、東の奥羽脊梁山地と西の出羽丘陵の間、南北60㎞、東西15㎞の狭長な断層盆地で、東部には扇状地が並び、西部には沖積低地が開けている。横手盆地のほぼ中央、東寄り、横手市街地の南西側には、奥羽脊梁山地の一つ、金峰山山地から西北への延長部が盆地面下に埋没しきらずに残った丘陵性沈降埋没山地とも呼ぶべき中山丘陵がある。地質は新第三紀中新世の相野々層の硬質泥岩、泥岩、凝灰岩の層から成り立っている。丘陵の稜線と谷底方向が北西－南東方向に雁行状に配列され、山稜背面は西高東低で谷底は通谷をなし、山麓線は西縁で直線、東側は鋸歯状の沈降性を示し、この間に低湿地が発達している。

また、中山丘陵は、小起伏丘陵地形であるのに反比例して開析は大いに進み、山腹傾斜面は20～30°、30～40°の急傾斜の平衡的発達を示している。開析された谷は短小に散在しつつ北東方向を示し、丘陵地西北端部では盆状の雪蝕窪が山麓をとりまいて波浪状に分布している。

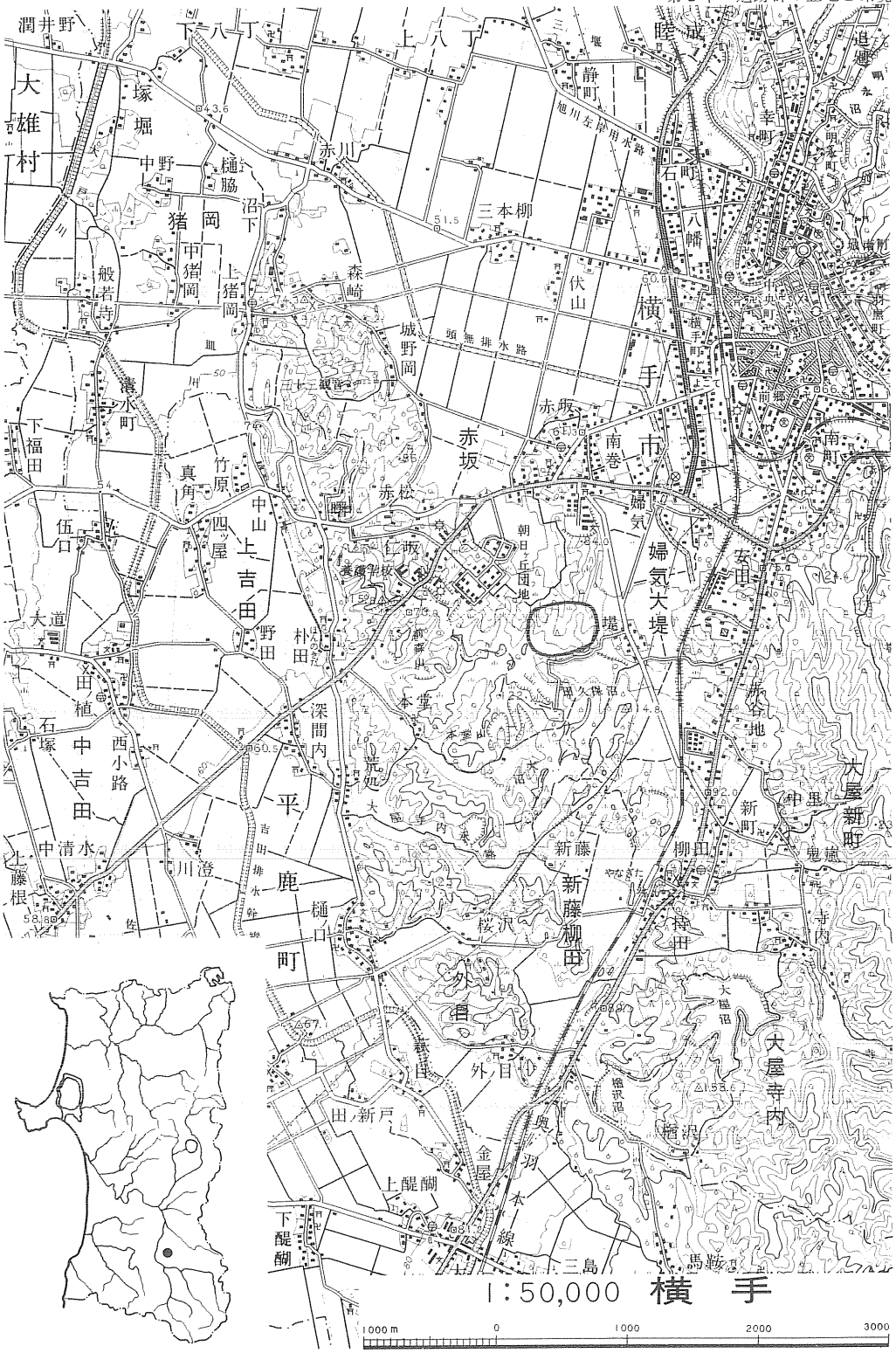
本丘陵地の山腹斜面は果樹園地をなしており、周縁地には特に潅漑用の溜池が多く造成されている。

「秋田ふるさと村（仮称）」建設予定地は、この中山丘陵の中央部東端に位置しており、北側に小沢を挟んで小丘陵、東側に沖積低地（水田）、南側に潅漑用溜池である田久保沼がある。

遺跡群は、丘陵を北東に開析する２つの自然谷の斜面と稜線上に位置している。遺跡群の中心から、ＪＲ東日本横手駅までは、北東に約４㎞の距離である。

参考文献

秋田県『雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査　横手』　1977（昭和52年）



潤井野
下八丁
上八丁
大雄村
塚堀
中野
樋脇
赤川
三本柳
静町
旭川左岸用水路
石町
八幡
幸町
追廻
明永沼
猪岡
沼下
中猪岡
上猪岡
般若寺
森崎
伏山
横手市
横手町
城野岡
頭無排水路
清水町
下福田
赤坂
南巻
南町
真角
竹原
赤松
中山
四ッ屋
上吉田
伍口
仁坂
養護学校
朝日ヶ丘団地
婦気
婦気大堤
安田
大道
野田
朴田
田植
石塚
中吉田
西小路
深間内
本堂
荒処
平鹿町
中清水
上藤根
川澄
樋口
新藤
新藤柳田
桜沢
外目
新町
中里
大屋新町
鬼瓦
柳田
持田
寺内
大屋寺内
新戸
田
上醍醐
金屋
奥羽本線
下醍醐
三島
馬鞍
1:50,000 横手
1000 m
0
1000
2000
3000

第１図　遺跡群位置図

第2節　歴史的環境

横手盆地南半地域には、旧石器時代からの多数の遺跡が分布しており、県内でも特筆される地域である。遺跡の性格も集落、墓・古墳、塚・紀年物、城・館、条里など多岐に亘っている。本項では「秋田ふるさと村（仮称）」建設予定地内の遺跡群と時代を同じくし、何らかの関連があると思われる遺跡のうち中山丘陵周辺を中心にその歴史的環境を記述したい。

古墳時代の遺跡として本遺跡群の北西約5㎞に位置するオホン清水Ｂ遺跡（3-85）があげられる。調査の結果、竪穴住居跡1軒、土坑5基とともに、多数の土師器と1点の5世紀末の須恵器有蓋高坏が出土している。

奈良・平安時代の所謂古代の遺跡として、集落遺跡、土器生産遺跡、古墳（墳丘墓）、条里遺構、城柵遺跡があげられる。

集落遺跡としては、下藤根遺跡、年子狐Ⅰ・Ⅱ遺跡（59-38・39）、上猪岡（岩野沢Ｂ）遺跡（3-115）、手取清水遺跡（3-83）、中藤根遺跡などがあげられるが、緩扇状地上に「古代」として分布する遺跡に注目すると、中山丘陵の西側縁辺を中心として湧水がみられ、清水が多く点在する塚堀・猪岡・清水町地区、中山丘陵北東側の城野岡地区、中山丘陵の南西側、やや離れた緩扇状地上の上藤根・年子狐地区の3地区に集中するように思われる。

土器生産遺構としては、主として須恵器窯跡があげられるが、横手盆地全体でみると小沢・成沢・九十九沢の大曲・神岡地区、鎧ヶ崎・川端山の六郷・千畑地区、物見・姥ヶ沢・十二牲Ａ・十二牲Ｂ・下矢来沢・保土森の金沢地区、「秋田ふるさと村（仮称）」・郷土館・竹原・上猪岡（岩野沢Ｂ）・城野岡・西ヶ沢・西ヶ沢前森・西ヶ沢山の中山丘陵地区、末館Ⅰ・末館Ⅱ・最上山・七窪の雄物川・羽後地区の4地区に分布が集中している。「秋田ふるさと村（仮称）」建設予定地のある中山丘陵地区では、丘陵北西部の竹原・上猪岡（岩野沢Ｂ）窯跡群、丘陵北東部の城野岡窯跡群、丘陵中央部の西ヶ沢窯跡群、丘陵南東部の郷土館・「秋田ふるさと村（仮称）」窯跡群の4群に細別できる。これらの土器生産遺跡のほとんどは平安時代に操業したものであるが、末館Ⅰ・末館Ⅱ・竹原の一部が奈良時代の操業である。この土器生産遺跡の存立基盤を何に求めるべきか重要な問題であるが、城柵等官衙遺跡との関係で論ぜられることが多い。

古墳（墳丘墓）として羽後町柏原古墳群、雄物川町蝦夷塚古墳群があげられる。これらは所謂古墳時代の古墳ではなく、奈良・平安時代の所産である。

条里制遺構（3-130）は、中山丘陵の北～北東、横手川と大戸川の間に広がる沖積地の東西6㎞、南北約16㎞の範囲とされているが、奈良時代の「条里制」跡と決定できる資料に乏しい。しかし、一ノ口～八ノ口・上八丁・下八丁などの条里制に関連すると思われる地名と、古い地

図に条里制類似の地割り跡が確認できる。

城柵遺跡としては、所在地が不明な雄勝城、国史に記されていない仙北町・千畑町「払田柵跡」、古代から中世への移行期の城柵である大鳥井柵遺跡（3-64）などがあげられる。

なお、第１表の番号は、『秋田県遺跡地図（県南版）』に載せられている登録番号と同一である。番号冒頭の３は横手市を、59は平鹿町であることを示している。

参考文献

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』　1987（昭和62年）

横手市教育委員会『秋田県横手市遺跡詳細分布調査報告書』横手市文化財調査報告11　1986（昭和61年）

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI－竹原窯跡－』秋田県文化財調査報告書第209集　1991（平成３年）

大雄村
上吉田
中吉田
平鹿町
十文字町
横手
大屋新町
3－83
3－84
3－85
3－86
3－88
3－80
3－92
3－93
3－94
3－95
3－96
3－97
3－99
3－106
3－109
3－110
3－117
3－119
3－116
3－118
3－115
59－32
59－34
59－31
3－122
3－123
3－130
3－170
3－172
3－126
3－128
3－171
3－168
59－79
59－80
59－81
59－78
59－70
59－55
59－40
59－36
59－39
59－38
59－12
3－61
3－65
3－64
3－68
3－59
3－62
3－60
3－58
3－57
3－56
3－55
3－54
3－53
3－52
3－51
3－50
3－49
3－48
3－47
3－46
3－45
3－44
3－43
3－42
3－41
3－40
3－39
3－38
3－37
3－36
3－35
3－34
3－33
3－32
3－31
3－30
3－29
3－28
3－27
3－26
3－25
3－24
3－23
3－22
3－21
3－20
3－19
3－18
3－17
3－16
3－15
3－14
3－13
3－12
3－11
3－10
3－9
3－8
3－7
3－6
3－5
3－4
3－3
3－2
3－1
59－1
59－2
59－3
59－4
59－5
59－6
59－7
59－8
59－9
59－10
59－11
59－13
59－14
59－15
59－16
59－17
59－18
59－19
59－20
59－21
59－22
59－23
59－24
59－25
59－26
59－27
59－28
59－29
59－30
59－31
59－33
59－35
59－37
59－41
59－42
59－43
59－44
59－45
59－46
59－47
59－48
59－49
59－50
59－51
59－52
59－53
59－54
59－56
59－57
59－58
59－59
59－60
59－61
59－62
59－63
59－64
59－65
59－66
59－67
59－68
59－69
59－71
59－72
59－73
59－74
59－75
59－76
59－77
59－82
59－83
59－84
59－85
59－86
59－87
59－88
59－89
59－90
59－91
59－92
59－93
59－94
59－95
59－96
59－97
59－98
59－99
59－100
59－101
59－102
59－103
59－104
59－105
59－106
59－107
59－108
59－109
59－110
59－111
59－112
59－113
59－114
59－115
59－116
59－117
59－118
59－119
59－120
59－121
59－122
59－123
59－124
59－125
59－126
59－127
59－128
59－129
59－130
59－131
59－132
59－133
59－134
59－135
59－136
59－137
59－138
59－139
59－140
59－141
59－142
59－143
59－144
59－145
59－146
59－147
59－148
59－149
59－150
59－151
59－152
59－153
59－154
59－155
59－156
59－157
59－158
59－159
59－160
59－161
59－162
59－163
59－164
59－165
59－166
59－167
59－168
59－169
59－170
59－171
59－172
59－173
59－174
59－175
59－176
59－177
59－178
59－179
59－180
59－181
59－182
59－183
59－184
59－185
59－186
59－187
59－188
59－189
59－190
59－191
59－192
59－193
59－194
59－195
59－196
59－197
59－198
59－199
59－200
59－201
59－202
59－203
59－204
59－205
59－206
59－207
59－208
59－209
59－210
59－211
59－212
59－213
59－214
59－215
59－216
59－217
59－218
59－219
59－220
59－221
59－222
59－223
59－224
59－225
59－226
59－227
59－228
59－229
59－230
59－231
59－232
59－233
59－234
59－235
59－236
59－237
59－238
59－239
59－240
59－241
59－242
59－243
59－244
59－245
59－246
59－247
59－248
59－249
59－250
59－251
59－252
59－253
59－254
59－255
59－256
59－257
59－258
59－259
59－260
59－261
59－262
59－263
59－264
59－265
59－266
59－267
59－268
59－269
59－270
59－271
59－272
59－273
59－274
59－275
59－276
59－277
59－278
59－279
59－280
59－281
59－282
59－283
59－284
59－285
59－286
59－287
59－288
59－289
59－290
59－291
59－292
59－293
59－294
59－295
59－296
59－297
59－298
59－299
59－300
59－301
59－302
59－303
59－304
59－305
59－306
59－307
59－308
59－309
59－310
59－311
59－312
59－313
59－314
59－315
59－316
59－317
59－318
59－319
59－320
59－321
59－322
59－323
59－324
59－325
59－326
59－327
59－328
59－329
59－330
59－331
59－332
59－333
59－334
59－335
59－336
59－337
59－338
59－339
59－340
59－341
59－342
59－343
59－344
59－345
59－346
59－347
59－348
59－349
59－350
59－351
59－352
59－353
59－354
59－355
59－356
59－357
59－358
59－359
59－360
59－361
59－362
59－363
59－364
59－365
59－366
59－367
59－368
59－369
59－370
59－371
59－372
59－373
59－374
59－375
59－376
59－377
59－378
59－379
59－380
59－381
59－382
59－383
59－384
59－385
59－386
59－387
59－388
59－389
59－390
59－391
59－392
59－393
59－394
59－395
59－396
59－397
59－398
59－399
59－400
59－401
59－402
59－403
59－404
59－405
59－406
59－407
59－408
59－409
59－410
59－411
59－412
59－413
59－414
59－415
59－416
59－417
59－418
59－419
59－420
59－421
59－422
59－423
59－424
59－425
59－426
59－427
59－428
59－429
59－430
59－431
59－432
59－433
59－434
59－435
59－436
59－437
59－438
59－439
59－440
59－441
59－442
59－443
59－444
59－445
59－446
59－447
59－448
59－449
59－450
59－451
59－452
59－453
59－454
59－455
59－456
59－457
59－458
59－459
59－460
59－461
59－462
59－463
59－464
59－465
59－466
59－467
59－468
59－469
59－470
59－471
59－472
59－473
59－474
59－475
59－476
59－477
59－478
59－479
59－480
59－481
59－482
59－483
59－484
59－485
59－486
59－487
59－488
59－489
59－490
59－491
59－492
59－493
59－494
59－495
59－496
59－497
59－498
59－499
59－500
59－501
59－502
59－503
59－504
59－505
59－506
59－507
59－508
59－509
59－510
59－511
59－512
59－513
59－514
59－515
59－516
59－517
59－518
59－519
59－520
59－521
59－522
59－523
59－524
59－525
59－526
59－527
59－528
59－529
59－530
59－531
59－532
59－533
59－534
59－535
59－536
59－537
59－538
59－539
59－540
59－541
59－542
59－543
59－544
59－545
59－546
59－547
59－548
59－549
59－550
59－551
59－552
59－553
59－554
59－555
59－556
59－557
59－558
59－559
59－560
59－561
59－562
59－563
59－564
59－565
59－566
59－567
59－568
59－569
59－570
59－571
59－572
59－573
59－574
59－575
59－576
59－577
59－578
59－579
59－580
59－581
59－582
59－583
59－584
59－585
59－586
59－587
59－588
59－589
59－590
59－591
59－592
59－593
59－594
59－595
59－596
59－597
59－598
59－599
59－600
59－601
59－602
59－603
59－604
59－605
59－606
59－607
59－608
59－609
59－610
59－611
59－612
59－613
59－614
59－615
59－616
59－617
59－618
59－619
59－620
59－621
59－622
59－623
59－624
59－625
59－626
59－627
59－628
59－629
59－630
59－631
59－632
59－633
59－634
59－635
59－636
59－637
59－638
59－639
59－640
59－641
59－642
59－643
59－644
59－645
59－646
59－647
59－648
59－649
59－650
59－651
59－652
59－653
59－654
59－655
59－656
59－657
59－658
59－659
59－660
59－661
59－662
59－663
59－664
59－665
59－666
59－667
59－668
59－669
59－670
59－671
59－672
59－673
59－674
59－675
59－676
59－677
59－678
59－679
59－680
59－681
59－682
59－683
59－684
59－685
59－686
59－687
59－688
59－689
59－690
59－691
59－692
59－693
59－694
59－695
59－696
59－697
59－698
59－699
59－700
59－701
59－702
59－703
59－704
59－705
59－706
59－707
59－708
59－709
59－710
59－711
59－712
59－713
59－714
59－715
59－716
59－717
59－718
59－719
59－720
59－721
59－722
59－723
59－724
59－725
59－726
59－727
59－728
59－729
59－730
59－731
59－732
59－733
59－734
59－735
59－736
59－737
59－738
59－739
59－740
59－741
59－742
59－743
59－744
59－745
59－746
59－747
59－748
59－749
59－750
59－751
59－752
59－753
59－754
59－755
59－756
59－757
59－758
59－759
59－760
59－761
59－762
59－763
59－764
59－765
59－766
59－767
59－768
59－769
59－770
59－771
59－772
59－773
59－774
59－775
59－776
59－777
59－778
59－779
59－780
59－781
59－782
59－783
59－784
59－785
59－786
59－787
59－788
59－789
59－790
59－791
59－792
59－793
59－794
59－795
59－796
59－797
59－798
59－799
59－800
59－801
59－802
59－803
59－804
59－805
59－806
59－807
59－808
59－809
59－810
59－811
59－812
59－813
59－814
59－815
59－816
59－817
59－818
59－819
59－820
59－821
59－822
59－823
59－824
59－825
59－826
59－827
59－828
59－829
59－830
59－831
59－832
59－833
59－834
59－835
59－836
59－837
59－838
59－839
59－840
59－841
59－842
59－843
59－844
59－845
59－846
59－847
59－848
59－849
59－850
59－851
59－852
59－853
59－854
59－855
59－856
59－857
59－858
59－859
59－860
59－861
59－862
59－863
59－864
59－865
59－866
59－867
59－868
59－869
59－870
59－871
59－872
59－873
59－874
59－875
59－876
59－877
59－878
59－879
59－880
59－881
59－882
59－883
59－884
59－885
59－886
59－887
59－888
59－889
59－890
59－891
59－892
59－893
59－894
59－895
59－896
59－897
59－898
59－899
59－900
59－901
59－902
59－903
59－904
59－905
59－906
59－907
59－908
59－909
59－910
59－911
59－912
59－913
59－914
59－915
59－916
59－917
59－918
59－919
59－920
59－921
59－922
59－923
59－924
59－925
59－926
59－927
59－928
59－929
59－930
59－931
59－932
59－933
59－934
59－935
59－936
59－937
59－938
59－939
59－940
59－941
59－942
59－943
59－944
59－945
59－946
59－947
59－948
59－949
59－950
59－951
59－952
59－953
59－954
59－955
59－956
59－957
59－958
59－959
59－960
59－961
59－962
59－963
59－964
59－965
59－966
59－967
59－968
59－969
59－970
59－971
59－972
59－973
59－974
59－975
59－976
59－977
59－978
59－979
59－980
59－981
59－982
59－983
59－984
59－985
59－986
59－987
59－988
59－989
59－990
59－991
59－992
59－993
59－994
59－995
59－996
59－997
59－998
59－999
59－1000
1:25,000　横　手

第２図　周辺の遺跡

第１表　「秋田ふるさと村」周辺の主な遺跡一覧

横手市

番号	遺跡名	所在地	時代・時期	文献
3－55	下久保目	睦成字久保目・関根	平安	
3－59	鶴巻	睦成字鶴巻	縄文、平安	1
3－61	長田	静町字長田	平安	
3－62	台処館	新坂町	平安	2
3－63	台処館	新坂町	縄文、平安	2
3－64	大鳥井柵	大鳥町、新坂町	平安	3
3－65	小吉山	大鳥町	旧石器、縄文、平安	3
3－68	大鳥井山十三塚	大鳥町	平安、塚	
3－71	愛宕山	睦成字城付	縄文、平安	
3－83	手取清水	塚堀字手取清水	弥生、平安、中世	4
3－84	オホン清水北	塚堀字オホン清水北	平安、縄文、弥生	5
3－85	オホン清水Ｂ	塚堀字オホン清水	縄文、古墳、平安、中世	5
3－86	オホン清水Ａ	塚堀字オホン清水	縄文(後～晩)、平安、江戸	5
3－88	鷹匠道下	猪岡字鷹匠道下、萱原	平安	
3－89	中堰西	猪岡字中堰西	平安、中世	
3－91	般若寺	塚堀字般若寺	平安	6
3－92	中猪岡Ａ	猪岡字中猪岡、中堰西	平安	
3－93	中猪岡Ｂ	猪岡字中猪岡	平安	
3－94	宮下	清水町新田字宮下	平安	
3－95	川口Ａ	猪岡字川口、八幡	平安	
3－97	猪岡字八幡	猪岡字八幡	縄文、平安	
3－98	清水町新田字堤	清水町新田字堤下	縄文、平安	
3－99	大堰端	清水町新田字大堰端	縄文、平安	
3－100	宮東	清水町新田字宮東	縄文、平安	
3－104	野際	赤川字野際	縄文、平安	
3－106	長瀞Ａ	猪岡字長瀞	平安	
3－109	赤坂字高口	赤坂字高口、森崎	平安	
3－110	柴崎	赤坂字柴崎、日山前	平安	
3－113	猪岡	猪岡字猪岡、山神下	平安	
3－115	岩野沢Ｂ(上猪岡)	猪岡字猪岡	縄文、平安	7
3－116	城野岡	赤坂字城野岡	平安	
3－117	城野岡前Ａ	赤坂字城野岡前	縄文、平安	
3－118	城野岡前Ｂ	赤坂字城野岡前、堤下	平安	
3－119	赤坂字堤下	赤坂字堤下	平安	

番号	遺跡名	所在地	時代・時期	文献
3－122	城野岡窯跡	赤坂字城野岡	平安（窯跡）	
3－123	沢口	赤坂字沢口	平安	8
3－126	郷士館B	赤坂字郷士館	縄文、平安	
3－127	郷士館窯跡	赤坂字郷士館	平安（窯跡）	9
3－128	大沼沢A	赤坂字大沼沢	平安	
3－130	条里制	黒川・下境・上境	条里制	10
3－167	郷士館D	赤坂字郷士館	平安	
3－168	富ヶ沢D	赤坂字富ヶ沢	平安	
3－170	郷士館C	赤坂字郷士館	平安	
3－171	大沼沢B	赤坂字大沼沢	平安	
3－172	大沼沢窯跡	赤坂字大沼沢	平安（窯跡）	

平鹿町

59－12	一関向	浅舞字一関向	縄文、平安	11
59－31	明通	上吉田間内字明通	平安	11
59－32	竹原	上吉田間内字竹原	平安	12
59－33	中山Ⅰ	上吉田間内字中山	中山焼窯跡	11
59－34	中山Ⅱ	上吉田間内字中山	中山焼窯跡	11
59－35	福島	上吉田間内字福島	平安	
59－36	中清水	中吉田字清水の上	平安	11
56－37	中谷地	中吉田字中谷地	平安	
59－38	年子狐Ⅰ	中吉田字年子狐	平安	11、13
59－39	年子狐Ⅱ	中吉田字年子狐	平安	
59－40	上藤根Ⅰ	中吉田字上藤根	平安	11、14
59－41	上藤根Ⅱ	中吉田字上藤根	平安	
59－44	中藤根C	中吉田字中藤根	平安	
59－55	向内の目	醍醐字向内の目	平安	
59－76	大沼入	醍醐字大沼入	平安	
59－77	西ヶ沢前森	醍醐字西ヶ沢前森	平安（窯跡）	11
59－78	西ヶ沢	醍醐字西ヶ沢	平安（窯跡）	11
59－79	西ヶ沢山Ⅰ	醍醐字西ヶ沢山	平安（窯跡）	
59－80	西ヶ沢山Ⅱ	醍醐字西ヶ沢山	平安（窯跡）	
59－81	西ヶ沢山Ⅲ	醍醐字西ヶ沢山	平安（窯跡）	

文献

1　秋田県『秋田県史』1960（昭和35年）

奈良修介・豊島昴『秋田県の考古学』1967（昭和42年）

2　1990年　横手市教育委員会で発掘調査

3　横手市教育委員会『大鳥井山Ⅰ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査既概報』1978（昭和53年）

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅱ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査既概報』1979（昭和54年）

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅲ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査既概報』1980（昭和55年）

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅳ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査既概報』1981（昭和56年）

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅴ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査既概報』1982（昭和57年）

4　横手市教育委員会『手取清水遺跡発掘調査報告書』1974（昭和49年）

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ－手取清水遺跡－』1990（平成２年）

5　横手市教育委員会『オホン清水第３次遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59年）

6　杉山寿栄男『日本原始繊維工芸史（原始編）』1967（昭和42年）

7　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1982（昭和57年）

秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ－上猪岡遺跡－』1991（平成３年）

8　冨樫泰時「秋田県横手市発見の彫刻器」『若木考古63・64』國學院大学考古学研究会1962（昭和37年）

9　横手市教育委員会『郷土館窯跡』1976（昭和51年）

10　佐川良視「奈良時代の開田～池田建設省技官調査」『横手郷土史資料第29号』1956（昭和31年）

新野直吉『古代史上の秋田』1981（昭和56年）

冨樫泰時『日本の古代遺跡24秋田』1985（昭和60年）

石母田正「辺境の長者～秋田県横手盆地の歴史地理的一考察～」『歴史評論１月号、４月号、５月号』1958（昭和33年）

11　平鹿町史編纂委員会『平鹿町史』1984（昭和59年）

12　秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI－竹原窯跡－』1991（平成３年）

13　（元）年子狐遺跡

平鹿町教育委員会『年子狐地区遺跡詳細分布調査報告書』1988（昭和63年）、11文献

14　（元）上藤根遺跡、11文献

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡群の概観

「秋田ふるさと村（仮称）」建設予定地は、南北６㎞、東西2.5㎞の中山丘陵のほぼ中央東端に位置し、北側に小沢を挟んで小丘陵、東側に沖積低地、南側に潅漑用溜池である田久保沼に面している。この中山丘陵には、古代の窯業遺跡が多く、丘陵北東側に位置する城野岡窯跡、北西側に位置する上猪岡（岩野沢Ｂ）・竹原窯跡、中央西側に位置する西ヶ沢窯跡群、中央東側に位置する郷土館窯跡という須恵器を焼成した窯跡（所謂窖窯、登窯）が確認あるいは発掘調査されている。

「秋田ふるさと村（仮称）」の建設予定地には、北側に２つの自然谷が開析しており、鋭角的な稜線が形成されている。遺跡群は、この自然谷の斜面と下方の平坦面、稜線上に位置している。

富ヶ沢Ａ窯跡は、北東側に開口する自然谷の標高74～80ｍの緩やかな東向き斜面に、富ヶ沢Ｂ窯跡は西側の自然谷と（富ヶ沢）の谷尻、標高75～82ｍの南西向き斜面に位置している。Ｂ窯跡の東側が、２本の自然谷の分水嶺となっており、Ａ窯跡とＢ窯跡は90ｍ距てている。富ヶ沢Ｃ窯跡は西側の自然谷（富ヶ沢）の谷尻、標高71～80ｍの東向き斜面に所在し、Ｂ窯跡とは130ｍ距てて対峙している。この２つの自然谷には、白黄色・青灰色の良質の粘土が、現地表面下50㎝に２～４ｍの層厚で堆積している。３カ所の窯跡の下方には、湧水が流れており、土器製作の条件は十分満たされている。田久保下遺跡は、東側の自然谷の開口部東側の標高72～79ｍの丘陵斜面と下方の平坦面に所在する。田久保下遺跡の平坦面下にも白黄色粘土が厚く堆積している。富ヶ沢１号塚～４号塚は西側の自然谷（富ヶ沢）を囲むように標高90ｍ前後の丘陵の稜線上に所在するが、稜線頂部から北側斜面にかけて盛土築造されている。遺跡群の現況は、田久保下遺跡が果樹園（りんご園）で斜面には段々状の作業道が掘削されていたが、他の遺跡はナラなどの雑木林となっていた。

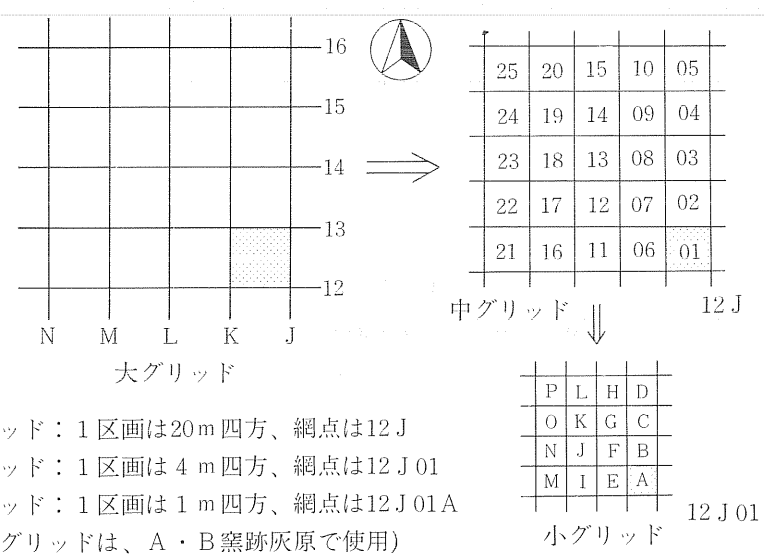
「秋田ふるさと村（仮称）」建設予定地域に隣接して古代の遺跡が３カ所確認され、横手市教育委員会が発掘調査を行っている。郷土館窯跡（3-127）は、Ａ窯跡の立地する丘陵が２つの自然谷のため、南北に細長い島状を呈するが、これに小沢を挟んで丘陵が連なっており、東側斜面の標高77～82ｍに立地している。Ａ窯跡からは160ｍ、田久保下窯跡からは250ｍ距てている。富ヶ沢Ｄ遺跡（3-168）は、西側自然谷（富ヶ沢）の中央からやや谷尻寄り、Ｃ窯跡と同じ東向き斜面、標高67～72ｍに立地し、竪穴住居跡と土器焼成遺構である平窯が検出されて

いる。Ｃ窯跡からは、北方に約130ｍ距てている。郷土館Ｃ遺跡（3-170）は、郷土館窯跡と同じ丘陵北部の西向き斜面に立地している。調査の結果、竪穴住居跡２軒と縄文時代と思われるフラスコ状土坑が１基検出されている。Ａ窯跡とは500ｍ程距てている。

第２節　調査区の設定

調査区の設定は、前年度の詳細分布調査（範囲確認調査）時までに、建設工事を担当する県企業局工務課が、国家座標第Ｘ系のＸ＝－78.920.000，Ｙ＝－24.160.000を原点（東西軸原点№０－南北軸原点６）として20ｍ×20ｍの方眼杭を建設予定区域全域に打設し、原点から西方向に№１～№30、北方向に７～27、南方向に５～１を付し、方眼杭を（№１－５）、（№８－10）のように呼称していたので、この杭を大グリッドとして使用することにした。ただし、この方眼杭の名称は、南北軸は工務課の付した１～27のままとし、東西軸№０～№30を、Ａ～Ｚ、２Ａ～２Ｅに読み替え、大グリッドの名称を、（南北軸・東西軸）で表現し、17Ａ、18Ｃ……のように呼称した。

この20ｍ×20ｍの大グリッドを、４ｍ×４ｍの中グリッドに25分割し、南東隅から01～05、西隣の列は南側から06～10、更に11～15、16～20、21～25と名称し、中グリッドは17Ａ01、17Ａ25‥‥のように呼称した。この中グリッドが発掘調査の基本的単位となるが、遺物収納等で必要が生じた場合は、この４ｍ×４ｍのグリッドを更に１ｍ×１ｍの小グリッドに16分割し、Ａ～Ｐまで中グリッドと同じ名称方法を用い、17Ａ01Ａ、17Ａ25Ｐ‥‥と呼称することにした。



大グリッド：１区画は20ｍ四方、網点は12Ｊ
中グリッド：１区画は４ｍ四方、網点は12Ｊ01
小グリッド：１区画は１ｍ四方、網点は12Ｊ01Ａ
（小グリッドは、Ａ・Ｂ窯跡灰原で使用）

第３図　グリッド区分図

各遺跡の調査区は、次の通りである。

富ヶ沢A窯跡　18G～18Ⅰ・19G～19Ⅰ・20G～20Ⅰ・21G～21Ⅰ・22G～22Ⅰ

富ヶ沢B窯跡　11K～11M・12K～12N・13K～13N・14K～14N・15L～15N

富ヶ沢C窯跡　12V・12W・13U～13W・14U～14X・15U～15X・16V～16W

田久保下遺跡　17B～17D・18B～18D・19B～19D

富ヶ沢1号塚　11Z・11A・12Z・12A

富ヶ沢2号塚　7R・7S・8R・8S

富ヶ沢3号塚　5P・5Q・6P・6Q

富ヶ沢4号塚　21J・21K・22J・22K

第3節　調査の経過

「秋田ふるさと村（仮称）」建設予定地内に所在する遺跡群の発掘調査は、平成2年5月7日（月）から開始した。遺跡群のうち、塚の現況の地形測量と写真撮影から開始することにし、4号塚から地形測量を実施した（5月15日終了）。写真撮影は、A～C窯跡も追加して行った。

5月18日（金）に横手市立旭公民館で作業員募集の説明会を開催したが、募集人員80名に対し、13名が参集したにすぎなかった。（その後も各方面に募集を呼びかけるが、農繁期・土木工事の急増等によりなかなか増員できなかった。）5月21日（月）より作業員を雇用し、A窯跡と4号塚の下草刈り、枝葉かたづけを行い、A窯跡の調査対象区域（4,200㎡）に測量用杭（グリッド杭兼用）を19ラインを基準線として南北に10m間隔で打設した。5月23日（木）B窯跡の調査対象区域（4,200㎡）にMラインを基準線として東西に10m間隔で測量用杭を打設中、県企業局工務課から、工事工程上、A窯跡→B窯跡→C窯跡→田久保下遺跡という調査スケジュールをC窯跡・B窯跡→A窯跡・田久保下遺跡という調査スケジュールに変更し、また、塚も1号塚を急いで欲しいとの話があった。このため、5月28日（月）から工事工程に合せる形でC窯跡と1号塚を最初に調査することにし、C窯跡（2,900㎡）と1号塚（400㎡）の下草刈りと枝葉かたづけを行い、Xラインを基準線として南北に10m間隔で測量用杭を打設した。A～Cの各窯跡とも下草刈りが終了し、表面観察すると、窯体部は若干地表面が溝状に凹み、灰原部分は逆に地表面が扇状地状に盛り上がっており、窯体の所在が容易に把握できた。各窯跡のレベル原点を、県企業局工務課が水準点から誘引し、建設予定区域内に設置してある基準点から引照した。

5月21日には9名だった作業員も6月に入ると40名を超えるようになった。

6月4日（月）から本格的にC窯跡の粗掘り作業を開始すると共に、窯体と灰原部分の現況

地形測量を縮尺１：50，20cm等高線で実施した。この頃、横手市教育委員会と国際航業株式会社による磁気探査のデモンストレーションがＡ～Ｃ窯跡と田久保下遺跡の４カ所で行われた。１号塚は５月10日（木）に現況の地形測量を縮尺１：50，20cm等高線で実施しており、土層断面観察用ベルトを設定して６月11日（月）から精査を開始した。Ｂ窯跡の窯体・灰原部分の現況地形測量を同条件で６月13日まで実施し、ほぼ等高線に沿って設定されている前年度の試掘トレンチの上方に２本のトレンチを設定し、窯体の確認作業を行った。遺構番号について、Ａ窯跡では01～100、Ｂ窯跡では101～200、Ｃ窯跡では201～300、田久保下遺跡では301～400とし、各遺跡毎に確認順に遺構略号をその前に付して遺構を呼称することにした。

６月20日（水）１号塚に設定したトレンチ内で土師器甕形土器の破片が１点出土した。この出土位置・層位からこの土器片は旧地表面下の土層中のものと確認され、塚の盛土はそれ以降（平安時代より以降）の所作と判断された。６月22日（金）からＣ窯跡ＳＪ201窯の精査を開始した。また、灰原部分は、１ｍ×１ｍの小グリッドを設定し、遺物の実測・収納を開始した。７月に入り作業員が80～90名となった。

７月６日（金）Ｃ窯跡ＳＪ201窯の窯体と灰原の遺物出土状況撮影。秋田大学鉱山学部の西谷忠師助教授が、窯体の熱残留地磁気測定用サンプリングの事前調査に来跡。

７月11日（水）にはＣ窯跡の粗掘りがほぼ終了し、ＳＩ202竪穴住居跡、土坑２基、焼土遺構２基その他柱穴様ピット多数が検出された。

７月12日（木）からＢ窯跡の調査を本格的に開始した。７月14日（土）秋田大学西谷助教授が来跡し、Ｃ窯跡ＳＪ201窯の熱残留地磁気測定用のサンプリングを行う。

７月24日（火）Ｂ窯跡ＳＪ101・ＳＪ102窯と灰原に土層断面観察用ベルトを設定し精査を開始した。Ｃ窯跡ＳＪ201窯の截割りを実施し、窯の床面が１枚であること、掘り方が存在しないことを確認した。１号塚は、土層断面図を作成中であるが、盛土が版築によることが明瞭である。

８月１日（水）Ｂ窯跡ＳＪ101・102窯の灰原を掘り下げ、１ｍ×１ｍの小グリッドで遺物の収納を開始。

Ｃ窯跡の精査が終了し、全景写真撮影も完了（図面チェック等を行い、８月10日調査終了）。

８月６日（月）４号塚の調査を開始。盛土部分は表土が薄く、すぐ版築したと考えられる地山ロームが検出された。

８月８日（水）４号塚の盛土粗掘り中寛永通宝３枚出土（９日には更に４枚出土）。

８月10日（金）１号塚の実測・写真撮影等精査が終了し、調査完了。

８月21日（火）Ａ窯跡の調査を開始。４号塚で寛永通宝がまた出土し合計10枚となる。

Ｂ窯跡ＳＪ101・102窯の窯体の精査を開始した。

8月24日（金）文化課長一行4名と鈴木俊男羽後町教育委員会係長、藤原司大曲中学校教諭来跡。

9月4日（火）A窯跡のSJ01窯の窯体と灰原の現況地形測量を縮尺1：50，20cm等高線で開始。

9月6日（木）4号塚の調査を完了。県議会総務企画委員会一行が視察のため来跡。県地域開発課秋田ふるさと村建設推進事務局長が来跡し、窯体切り取り保存について話題となる。

9月13日（木）からA窯跡調査区内にある5号塚の調査を開始したが、精査の結果風倒木による地山の盛り上りと判明し、9月25日に調査を打ち切った。

9月18日（火）窯体切り取り保存について文化課・秋田ふるさと村建設推進事業局、企業局工務課、工事業者と発掘担当者が話し合いをした。

9月19日（水）田久保下遺跡の調査を開始。A窯跡SJ01窯の窯体精査も開始した。

9月21日（金）田久保下遺跡SJ301窯の覆土を除去したが、現地表下60cmまで開墾時の盛土があり、窯体上の撹乱土にもキャタピラの跡等が認められた。

9月26日（水）湯沢市に在住する郷土史研究者グループ「さんぽ道」（今一弥・伊藤充子氏ら15名）が来跡。

9月27日（木）県公営企業管理者来跡。B窯跡が窯跡2基、土坑2基を精査し、調査を完了した。

10月1日（月）田久保下遺跡でSJ301窯に近接して北側に2基の窯体（SJ302・303）を確認した。

10月2日（火）田久保下遺跡の平坦面に楕円形プランの土坑が南北に5基並んで確認された。最南端の土坑は4月の範囲確認時に6世紀代の土師器が2点出土した土坑である。土壙墓の可能性が考えられた。

10月3日（水）B窯跡の遺物の洗浄中、灰原から出土した蓋に「智光研」の刻書があるのが確認された。

10月9日（火）田久保下遺跡の土壙墓の精査を開始。A窯跡で須恵器窯1基、土坑25基、平窯2基、溝4条、竪穴住居跡1軒を検出し、精査を続行。

10月13日（土）午後2時から「秋田ふるさと村」遺跡現地説明会を開催。参加者120名。

10月17日（水）切り取り保存する窯体としてB窯跡のSJ102窯にすることになったとの連絡があった。田久保下遺跡のSK311・312土壙墓の埋土中から黒曜石剝片が出土。

10月19日（金）B窯跡SJ102窯を砂で埋め戻し、切り取り作業時（時期未定）まで保存することにした。

10月22日（月）A窯跡SJ01窯の窯壁両面に天井架構材を差し込んだ穴列と、炭化材列が検

出された。検出状況から天井部の粘土は架構材の外側にのみ貼りつけられたと考えられた。田久保下遺跡では須恵器窯、平窯、竪穴住居跡、土坑の検出・精査が続けられた。

10月29日（月）２号塚・３号塚の精査開始。秋田大学鉱山学部鉱山地質学教室の学生が熱残留地磁気測定試料のサンプリングを、Ａ窯跡・Ｂ窯跡・田久保下遺跡で行う（31日まで）。

10月31日（水）Ａ窯跡で須恵器窯１基、平窯２基、竪穴住居跡１軒、土坑２基、溝４条（以上平安時代）、土坑22基、フラスコ状土坑１基（以上時期不明）を検出・精査して調査を完了した。時期不明土坑のうち１基の坑底に逆茂木の一部と考えられる木材が出土した。

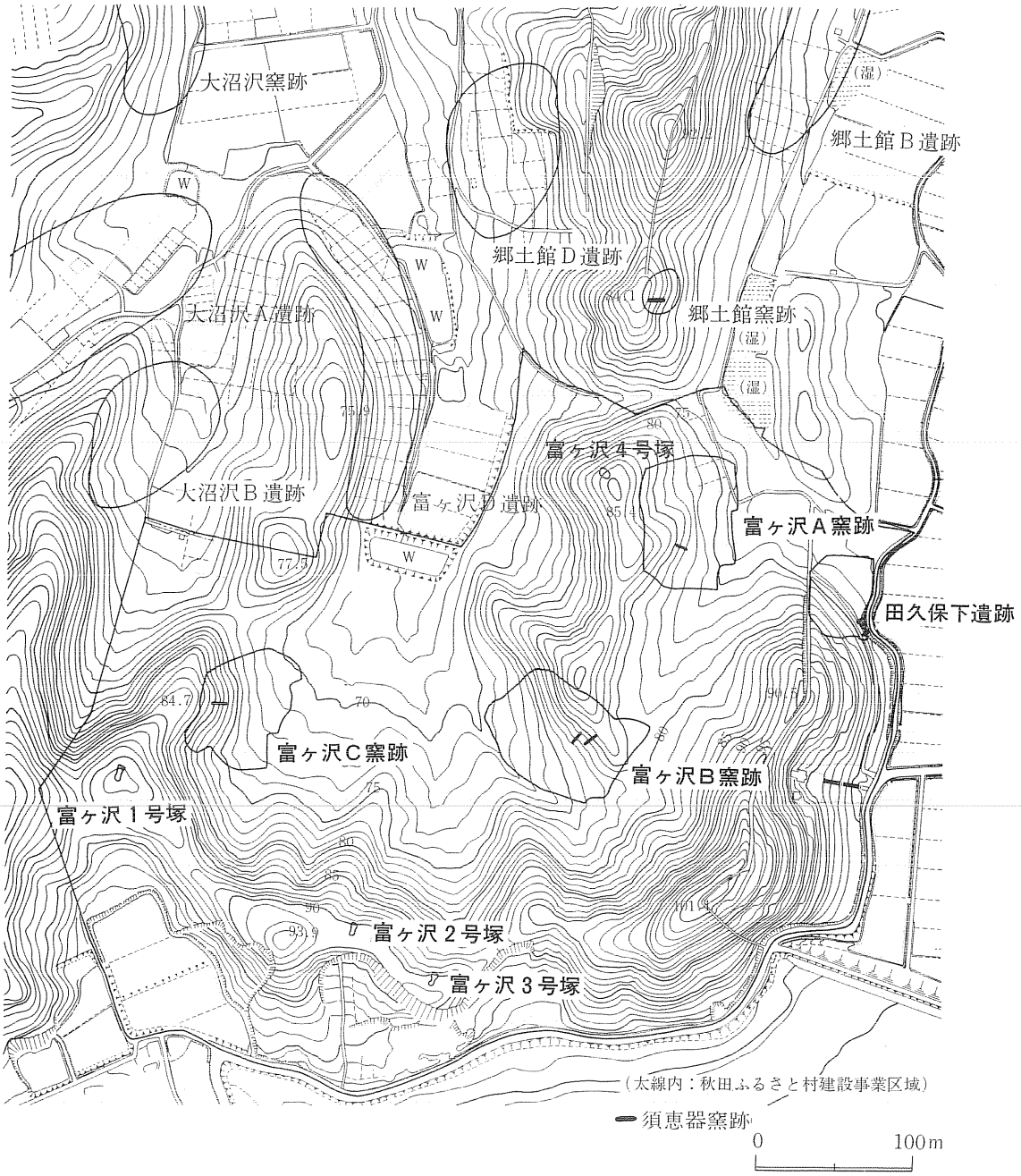
11月１日（木）２号塚の東南側で須恵器壺の肩部破片が出土した。塚の盛土より下位の出土であり、直接盛土の年代を示す資料とはならない（塚が平安時代より後年の所産という資料にはなる）。

11月９日（金）田久保下遺跡のＳＩ320竪穴住居跡の南側で二面硯出土。後日、ＳＩ334竪穴住居跡内出土と判明。ＳＪ303窯北側で遺構の重複が多く精査難行。

11月14日（水）２号塚と３号塚の精査終了。

11月22日（木）秋田大学鉱山学部地質学教室の学生が田久保下遺跡の熱残留磁気測定試料のサンプリングに来跡。

11月28日（水）田久保下遺跡で、古墳時代の土壙墓８基、平安時代の須恵器窯３基、平窯６基、炭窯１基、竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡１棟、溝状遺構１条、土坑20基、焼土遺構３基、柱穴様ピット多数、粘土採掘坑１カ所を精査し、発掘調査範囲内の地形測量を終了し、調査を完了。



第４図　秋田ふるさと村地内遺跡群の位置と立地

II　富ケ沢A窯跡

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

富ヶ沢Ａ窯跡は、今回調査された秋田ふるさと村建設事業に係る遺跡の中で、最も北に位置しており、南北にやや長い丘陵の東側斜面に立地している。同じ丘陵の南西斜面には富ヶ沢Ｂ窯跡がある。また、本窯跡の北約160ｍには、昭和50年横手市教育委員会により調査された郷土館窯跡が位置する。

本窯跡の標高は、73.5～83.8ｍあり、水田面との比高は2.5～12.8ｍである。窯跡の北半には浅い沢が入り込み、斜面の傾斜は比較的緩やかである。調査区の東側は、丘陵の裾にあたり、降雨時には雨水の流路となる。

遺跡の基本土層は、第Ⅰ層：黒褐色表土層、第Ⅱ層：褐色漸移層、第Ⅲ層：地山である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層の厚さは、第Ⅰ層が７～10㎝、第Ⅱ層が10～20㎝であるが、沢状の地形の北半部においては、それぞれの層厚は増す傾向にある。

第２節　調査の方法と経過

秋田ふるさと村建設事業用地内には、建設工事用の杭が20ｍ毎に設けられていたので、調査はこの杭をそのまま利用することとした。調査にあたって、先の方眼（グリッド）杭を基準として、調査区内に４ｍ×４ｍになるように小グリッドを設定した。遺構実測、遺物の取り上げは、このグリッドを基準に行うこととし、特に灰原については、小グリッドをさらに１ｍ×１ｍの16の方眼に区分して、南東隅から北に順にＡ～Ｐのアルファベットを小グリッド名の後に付して取り上げることとした（第３図参照）。

調査は、須恵器窯跡については窯体部の構築法を明らかにすることに重点を置いて行った。それとともに、灰原の広がりとその遺物の出土状況を記録することにより、遺物の時間的な移り変わりをとらえることを目的とした。そこで、窯体部の図上での復元を容易にするため、土層観察用のベルトをなるべく多く設定した。また、半地下式の窯の場合、天井部の構造に不明な点が多いので、天井部構築材と側壁の精査に慎重を期した。

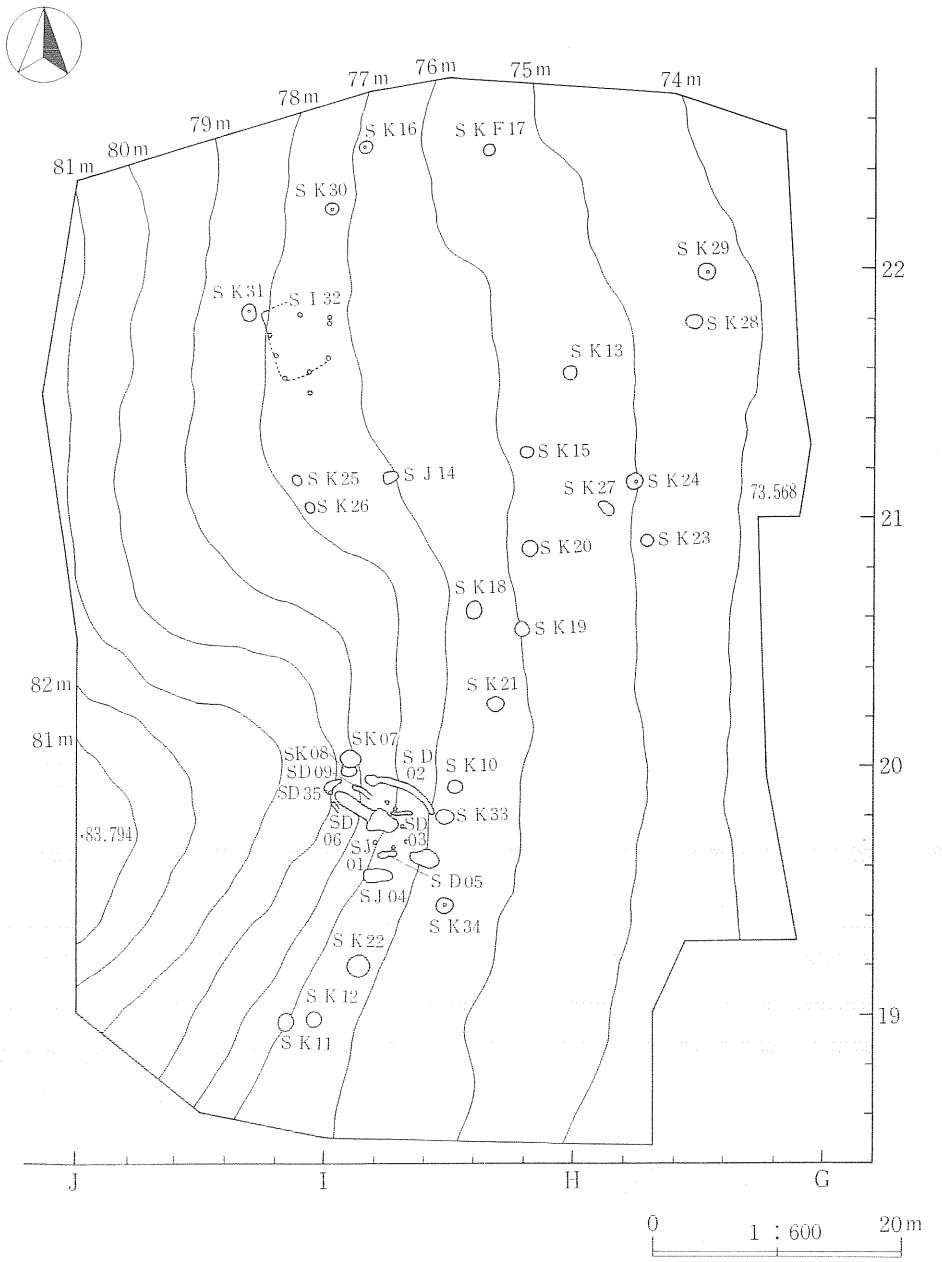
調査の記録は、図面の作成と写真による記録を行った。作成図面の縮尺は、20分の１ないし10分の１としたが、須恵器窯の調査前の地形測量図は50分の１で行った。

調査は、概ね以下のような経過で行われた。

8月21日、粗掘りを開始。9月4日、須恵器窯跡のプランを検出し、その状態で地形測量を開始。9月6日、須恵器窯跡と灰原部分にグリッド杭を打設する。遺構プランの検出作業も行った。9月10日、須恵器窯跡（ＳＪ01）の調査前近景を撮影後、窯体部と灰原に土層観察用のベルトを設定し、掘り下げを開始。9月17日、灰原の第1回目の遺物取り上げを行った。9月19日、窯体部の精査を行った。残存している遺物は、僅少であった。9月21日、窯体の両脇からも須恵器破片が出土している。9月27日、ＳＪ01土層断面の写真撮影を行った。

10月1日、ＳＪ01の断面図作成を行った。10月3日、ＳＪ01の完掘写真を撮影。ＳＪ01の北側に弧状の溝1条、その内側にもう1条溝を検出し、それぞれＳＤ02、ＳＤ03とした。10月4日、ＳＪ01の平面図を作成した。窯体天井部を構築する際、芯材を突き刺したと思われる穴を検出した。さらに精査したところ、芯材が炭化して残っていることが判明した。

10月8日、ＳＪ01の灰原の下から、平窯と思われるプランを検出し、ＳＪ04とした。10月11日、ＳＪ04の断面図を作成し、完全に掘りあげた。10月15日、ＳＪ01の天井構築芯材痕の側面図を作成。調査区の北部を中心に、土坑と思われる円形のプランを10数基検出した。10月23日、21Ｈ16グリッドで、土坑と推定しＳＫ14とした遺構を調査したところ、平窯と判明し遺構略号をＳＪ14に変更した。10月26日、ＳＫ24とした土坑の底面の柱穴様のピットを精査したところ、遺材を検出した。10月29日、21Ｈ04グリッドで、竪穴住居跡と推測される柱穴と僅かな落ち込みを検出した（ＳＩ32）。プラン確認時に土を削りすぎ、北西コーナー部分しか確認できなかった。10月31日、ＳＩ32の平面図を作成し、調査を終了した。



第５図　富ヶ沢Ａ窯跡遺構配置図

第2章　調査の記録

第1節　検出遺構と遺物

1　平安時代の遺構と遺物

平安時代に帰属する遺構は、須恵器窯跡1基、平窯跡2基、竪穴住居跡1軒、土坑2基、溝状遺構6条である。これら遺構の分布は、遺跡中央南西側に位置する須恵器窯跡の周辺にまとまっており、竪穴住居跡と1基の平窯のみ遺跡中央北西側に点在している。

（1）須恵器窯跡

ＳＪ０１須恵器窯跡（第6～12図、図版2～6）

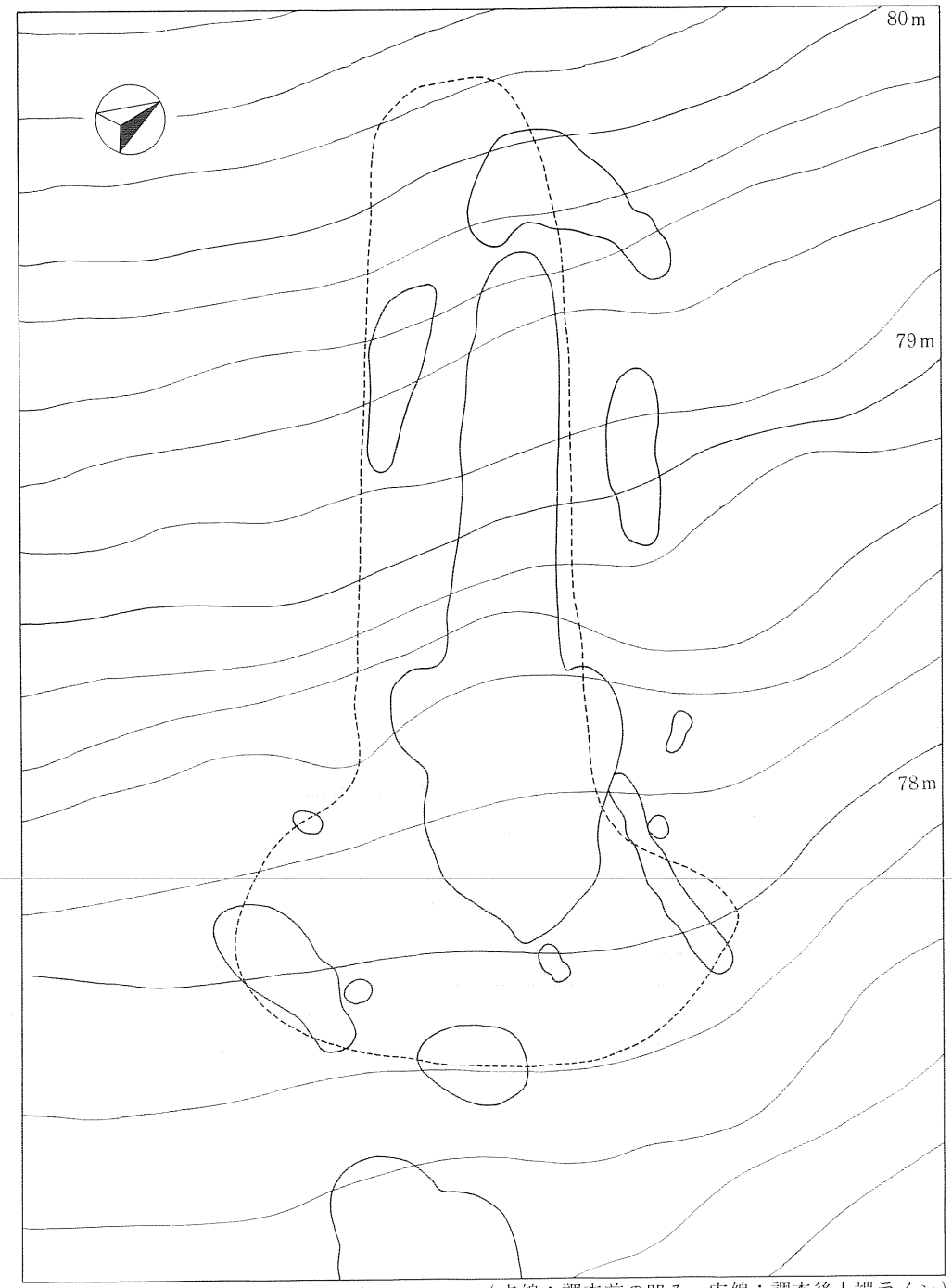
遺跡中央西側斜面、19H19・20・24・25グリッドにおいて、前庭部を含む窯体を検出した。地表面観察時にも、完全に埋まりきらない溝状のくぼみ（第6図点線部分）が僅かに認められた。表土を除去し、その下の地山漸移層を出した段階で、窯体のプランをほぼ確認した。

窯の周囲には、これを取り巻くように大小の溝が合計6条、また、前庭部を囲むように柱穴様ピットが合計8基、そして窯の下方には灰原が認められた。

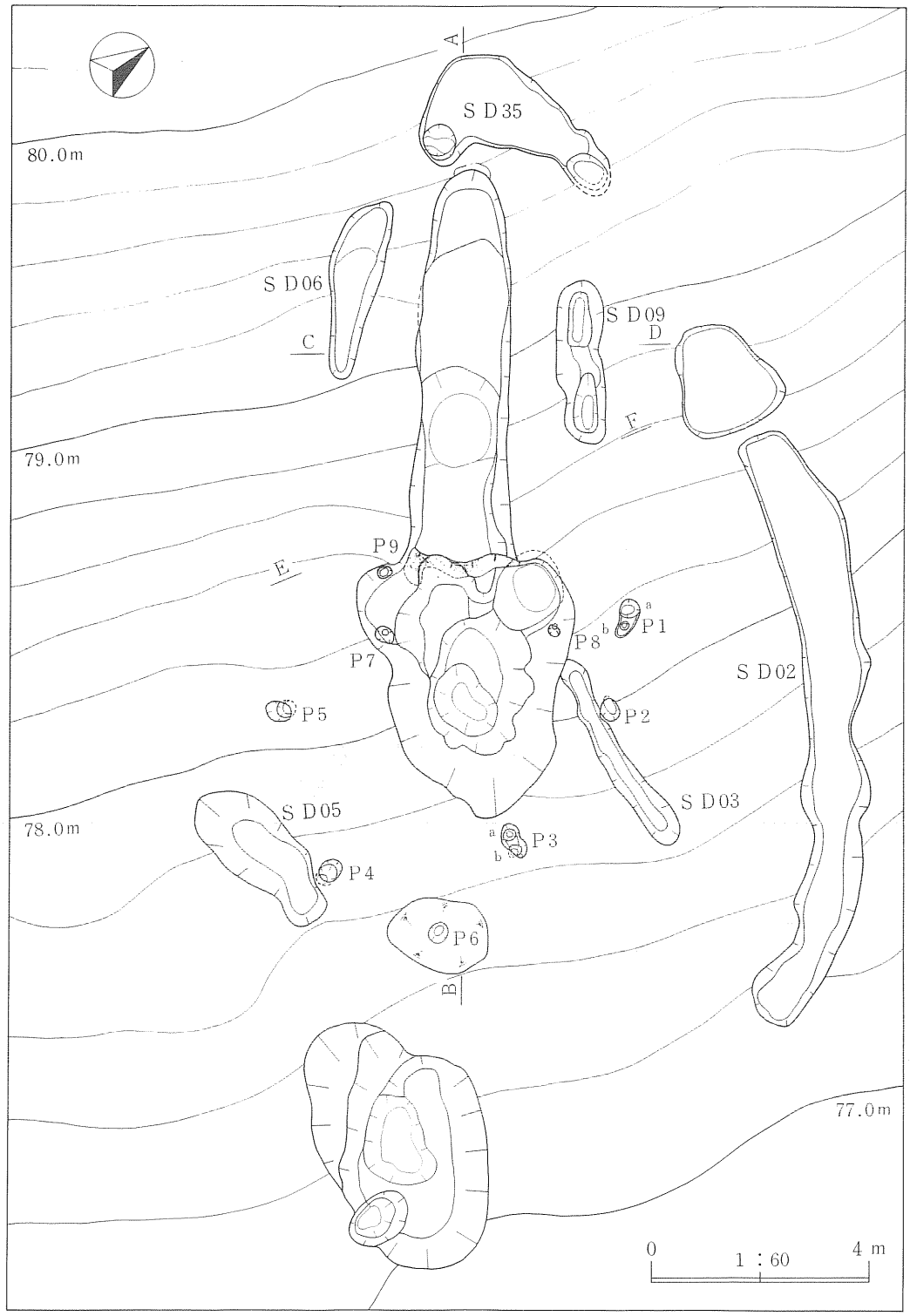
前庭部を含む窯体についてみると、前庭部の標高が77.8m、煙出し部分の標高が79.6mあり、比高差が1.8mである。前庭部と煙出しのそれぞれの中点を結ぶ線を窯の主軸とすると、この主軸線と磁北とのなす角度は、Ｎ－58°－Ｗとなる。また、主軸線と等高線とは、直交しておらず、ややズレを生じる。

窯本体の規模は、焚き口から煙出しまでの全長363cm（水平距離）、幅は焚口で102cm、煙出し近くで約60cm、その他では70～80cmである。断面図から、窯の底面は、焚き口から約1mほぼ水平に推移し、約23°の傾斜角で上昇した後さらに角度を増して煙出しに達する。地表面から底面までの深さは、最大80cm前後である。側壁部分の精査を行ったところ、窯の天井部をつくる際に使用したと考えられる芯材が、炭化した状態で検出された。検出された炭化芯材は、両側壁とも25本である。ほぼ同じ場所に、2ないし3本がまとまっている場合もある。図上で見る限り、各25本がそのまま対になるとするには難しいところがある。

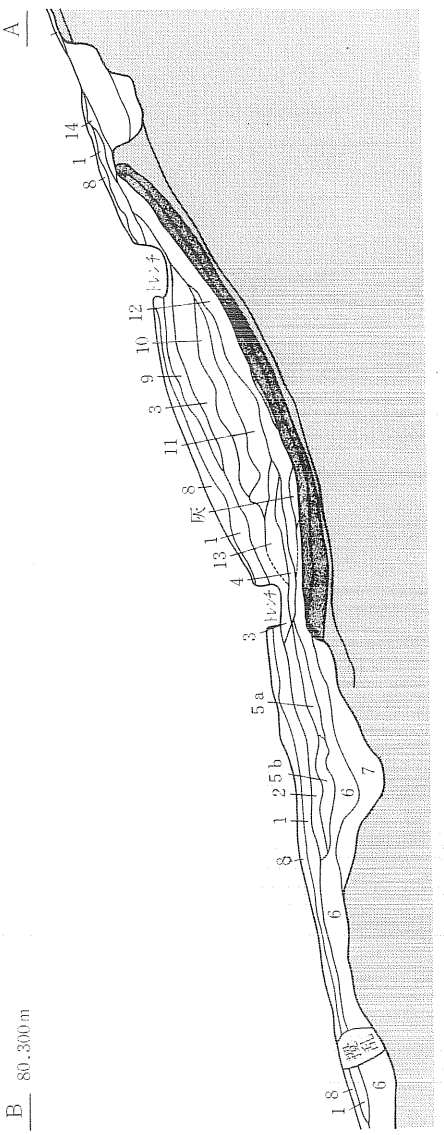
窯体部の土層観察では、灰色の還元色を呈する底面と炭の層を挟んで崩落した天井部がみられることから、窯が使用されなくなった後、間もなく天井部が落ち込んだものと推測される。また、窯体を断ち割って断面を観察したところ、灰色から橙色または赤色に変化した地山を認めることができた。これは、操業によって地山が熱を受けて酸化され、その内側はさらに還元されて灰色に変化したことを物語っている。

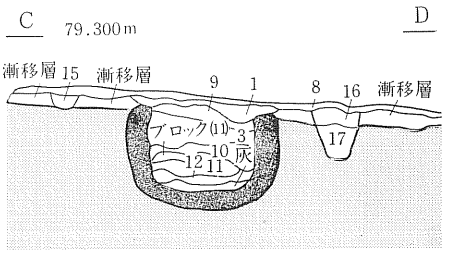


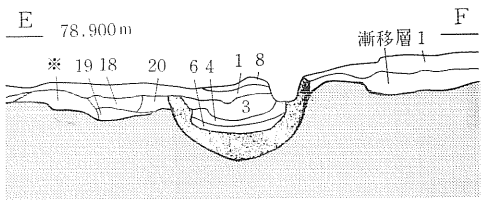
第６図 ＳＪ01須恵器窯跡周辺地形図（調査前）



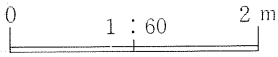
第7図　ＳＪ01須恵器窯跡周辺地形図（調査後）



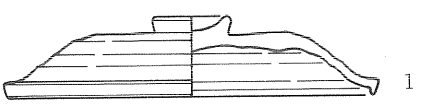


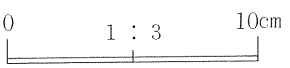


還元面



ＳＪ０１
1　褐　色(10Ｙ R4/4)粘性無、炭化物・焼土ブロック少量含む
2　黒褐色(10Ｙ R2/2)粘性無、焼土微量含む
3　褐　色(7.5Ｙ R4/4)炭化物・焼土ブロック・窯壁少量含む
4　明赤褐色(５Ｙ R5/8焼土ブロック化した窯壁(天井部か)
5 a にぶい黄褐色(10Ｙ R4/3)炭化物・焼土少量含む
5 b 明黄褐色(10Ｙ R7/6)火山灰か
6　黒　色(10Ｙ R2/1)粘性強、焼土・炭化物少量含む
7　黒褐色(10Ｙ R2/2)炭化物・焼土・窯壁少量含む
8　黒褐色(10Ｙ R2/3)表土
9　褐　色(7.5Ｙ R4/4)窯壁微量含む
10　褐　色(7.5Ｙ R4/6)粘性強、焼土やや多く・窯壁・炭化物少量含む
11　橙　色(7.5Ｙ R6/6)粘性無くボソボソ、窯壁多量に含む
12　灰　色(10Ｙ5/1)還元化した窯壁を主体、炭化物少量含む
13　明褐色(7.5Ｙ R5/6)締まり強、窯壁多量に含む
14　黄褐色(10Ｙ R5/6)焼土少量含む
15　暗褐色(10Ｙ R3/4)炭化物微量含む
16　褐　色(7.5Ｙ R4/4)炭化物少量含む
17　褐　色(7.5Ｙ R4/4～4/6)締まり強、炭化物微量含む
18　暗褐色(10Ｙ R3/4)15層と同質
19　黒褐色(10Ｙ R3/2)炭化物・地山粒子多量・焼土微量含む
20　褐　色(10Ｙ R4/4)締まり強、炭化物・焼土・地山多量に含む

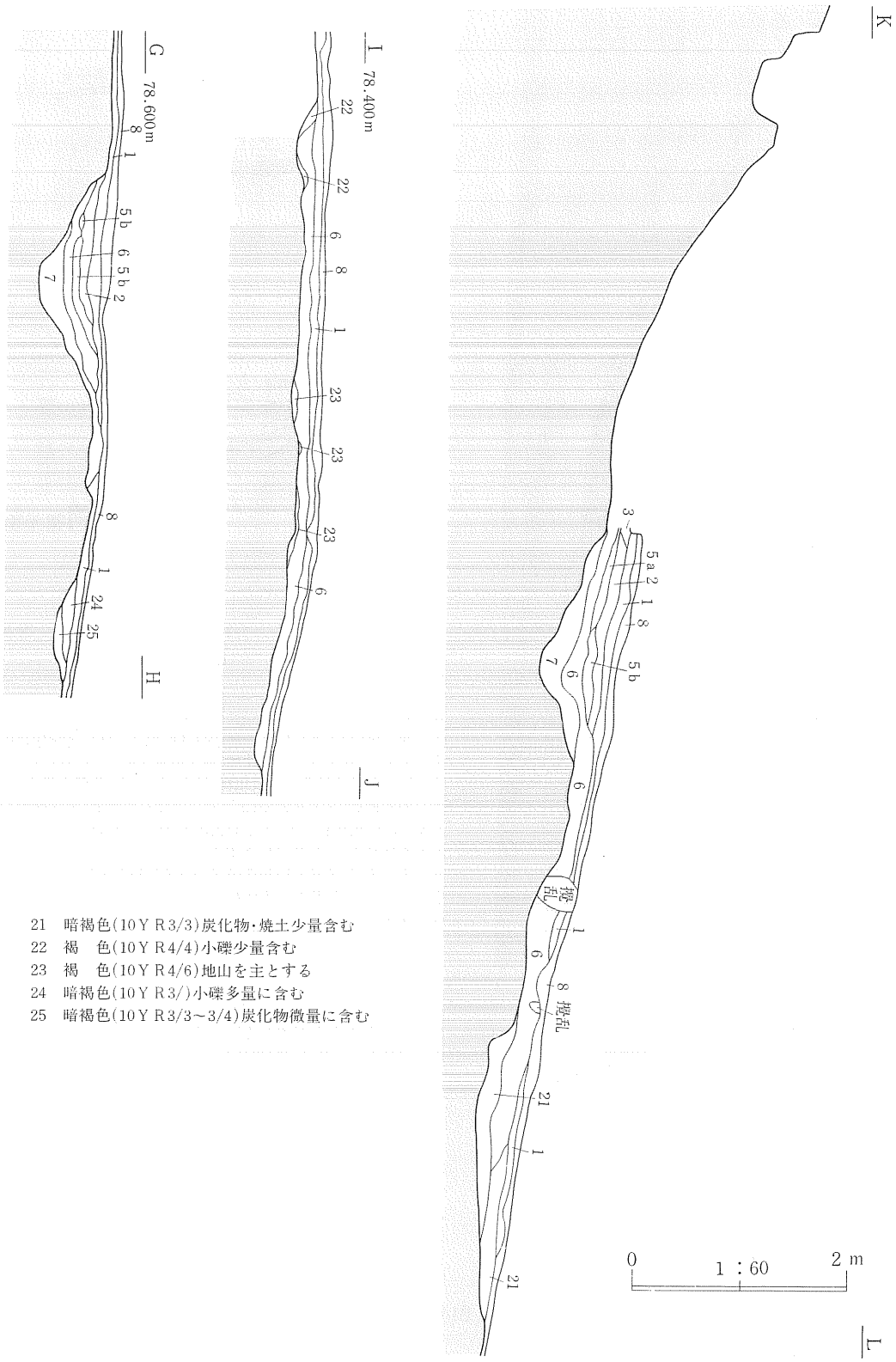




番号	器　種	出土位置・層位	口径	器高	つまみ径	残存率
1	須・蓋	ＲＰ1-15M-L3	14.5	3.2	2.8	1／2

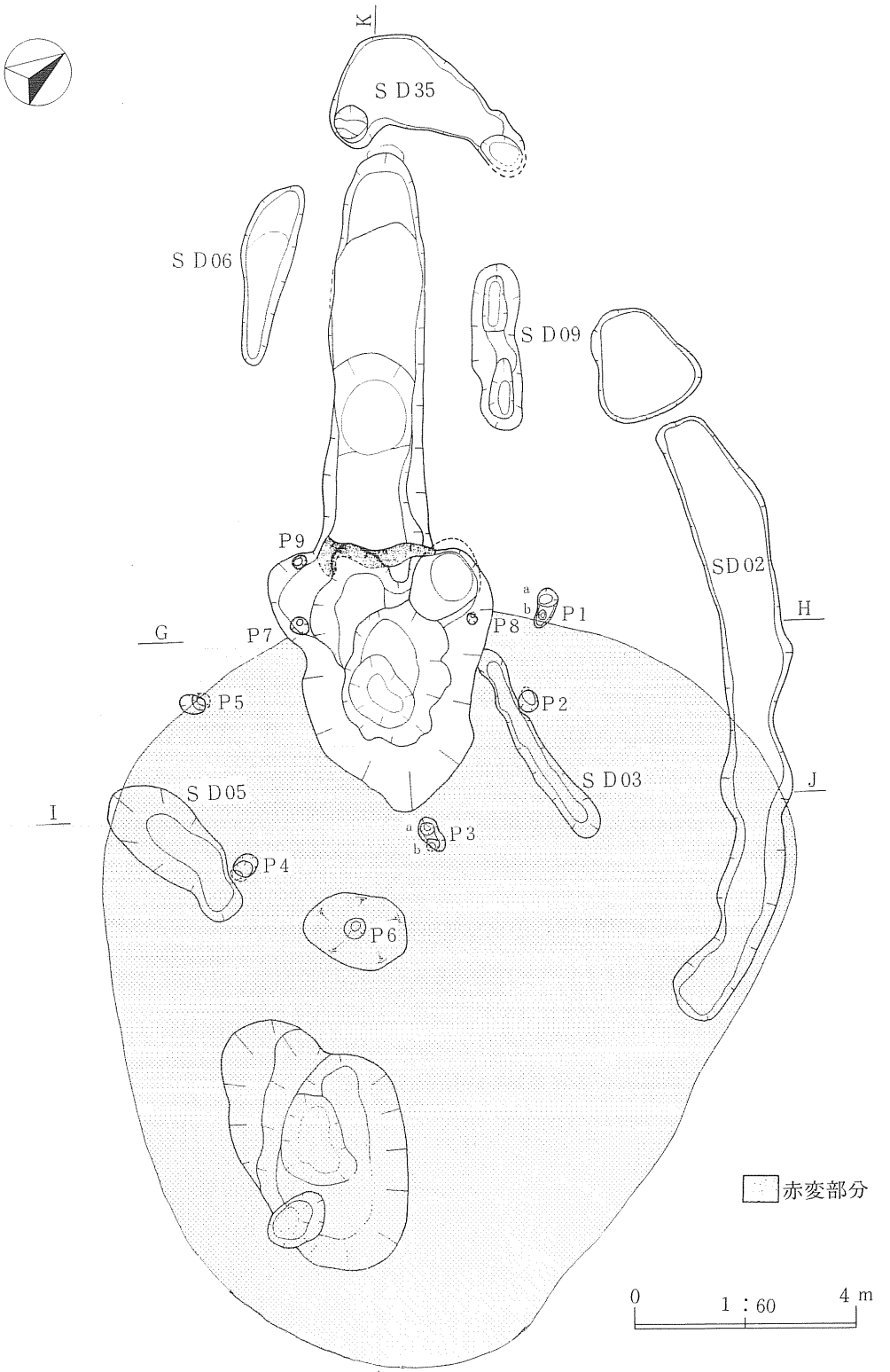
ＳＪ01窯内出土土器

第８図　ＳＪ01須恵器窯跡土層図

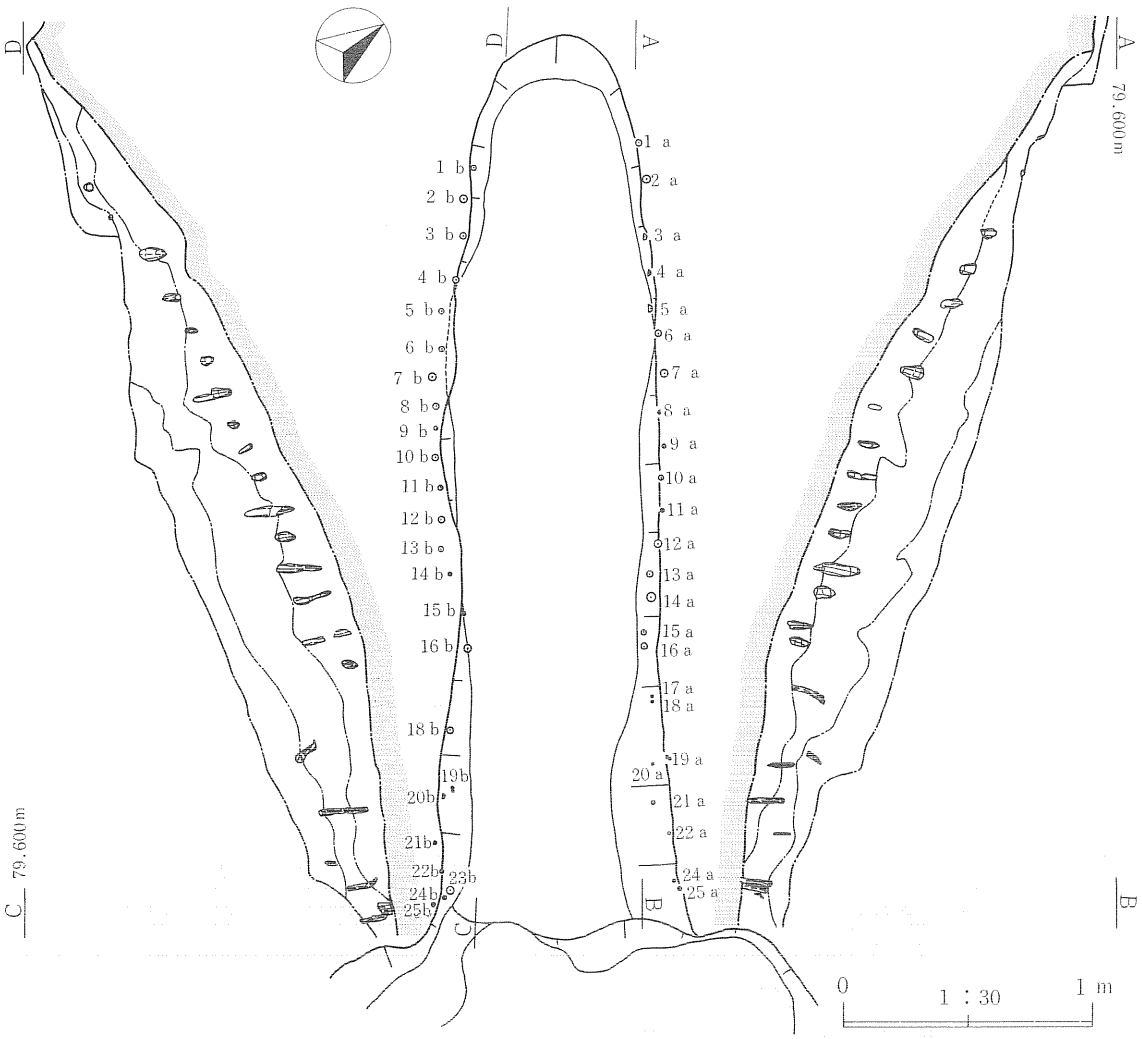


21　暗褐色(10Y R3/3)炭化物・焼土少量含む
22　褐　色(10Y R4/4)小礫少量含む
23　褐　色(10Y R4/6)地山を主とする
24　暗褐色(10Y R3/)小礫多量に含む
25　暗褐色(10Y R3/3～3/4)炭化物微量に含む

第9図　ＳＪ01須恵器窯跡灰原土層図



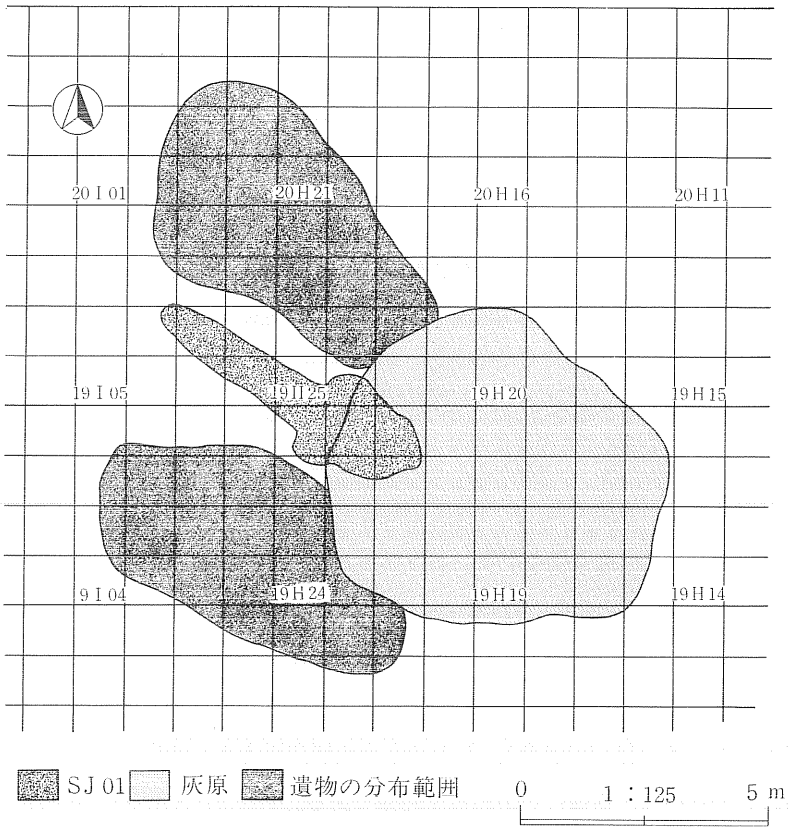
第10図　ＳＪ01　須恵器窯跡灰原の広がり



第11図　ＳＪ01須恵器窯跡炭化材検出状況

窯内からは、燃焼部床面あるいはその直上から僅か５点の須恵器（坏、壺、蓋、第８図１）が出土している。これは最終操業後に未製品・炭・灰等を含めて窯内を整理・掻き出しを行った結果と理解できよう。

前庭部の平面形は、逆三角形状を呈し、長さ235cm、幅142～202cmである。断面形は、すり鉢形で、確認面からの深さが79cmである。前庭部の南西側すなわち焚き口の左側の部分は、炭化物、焼土粒、地山ブロックを含む土で埋め戻されている。その土を取り除いたところ、柱穴様ピット２基が検出された。このことから、前庭部の作り替えが少なくても１回行われたことが推測される。また、前庭部埋土中位に粒子の非常に細かい明黄褐色土が堆積している（５ａ及び５ｂ層）。これは、火山灰と推測されるが、そうだとすると、本窯跡の操業年代の決定に



第12図　ＳＪ01須恵器窯跡　Ｌ２面での灰原・遺物の広がり

あたり、鍵になるものと言えるであろう。

前庭部及びその周囲から検出された柱穴様ピットは、前庭部で３基（Ｐ７～Ｐ９）、前述のように周囲から８基（Ｐ１～Ｐ９）の合計11基である。それぞれの規模は、Ｐ１：36cm×16cmの細長い掘り込みの中に、２基のピットが認められ、ａが径16cm×18cm、確認面からの深さ（以下同じ）46.4cm。ｂが径８cm、深さ23.9cm。Ｐ２：径16cm×21cm、深さ61cm。Ｐ３：33cm×19cmの細長い掘り込みの中に、２基のピットが認められ、ａが径11～12cm、深さ58.9cm。ｂが径10cm×14cm、深さ60.3cmである。Ｐ４：径19cm×23cm、深さ57.1cm。Ｐ５：径18cm×24cm、深さ69.2

cm。Ｐ６：67cm×93cmの長円形の掘り込みの中に、径17～19cm、掘り込みの底面からの深さ10cmのピットが認められた。Ｐ７：径15cm×18cm、前庭部の底面からの深さ27.2cm。Ｐ８：径10cm×12cm、深さ21.8cm。Ｐ９：径14cm、深さ8.3cm。

窯を取り囲むように位置する溝の規模は、ＳＤ02が全長581cm、幅38～70cm、深さ1.2～21.4cm。ＳＤ03：全長194cm、幅16～29cm、深さ4.8～8.8cm。ＳＤ05：全長155cm、幅36～66cm、深さ7.2～10.5cm。ＳＤ06：全長169cm、幅24～49cm、深さ7.5～19.2cm。ＳＤ09：全長150cm、幅37～43cm、深さ36.6～46.2cm。ＳＤ35：全長228cm、幅35～80cm、深さ21.4～36.1cmである。

灰原の下から、不整円形の落ち込みが検出された。その規模は、東西方向244cm、南北方向155cm、深さ34cmである。

灰原の調査は、10cm前後の深さで４ないし５回に分けて掘り下げ、上からそれぞれレベル１～レベル５とした。遺物の取り上げは、グリッド名と前述のレベルを記録した。灰原に設定したベルトの土層断面との対比では、レベル１（以下Ｌ１とする）は第８層、Ｌ２は第１層、Ｌ３は第６層の上半、Ｌ４は第６層の下半、Ｌ５は第15層に対応する。そして、レベルごとに灰原の形成される様子をみると、Ｌ５ないし４では、前庭部のほぼ下方（南東側）に遺物が捨てられている。Ｌ３では、前庭部の下方に捨てられる量も増大するが、前庭部の左側（南側）にも灰原が形成されてくる。Ｌ２では、前庭部の下方と両側という範囲に拡大し、さらに窯体の両側にまで及んでくる（第12図参照）。Ｌ１でもその傾向にあまり変化はないが、全体量は減少してくる。この傾向は、器種にかかわらず同様である。

灰原及び窯体周辺から出土した遺物は大多数の須恵器とごく少量の土師器に大別できる。ただし土師器は、本窯で焼成されたのではなく、土器製作に携わった工人などによってもたらされ、遺棄されたと理解している。

須恵器は、坏、高台付坏、蓋、壺、甕、横瓶に分けられる。それぞれの出土量とレベルの関係をみると、いずれの器種においてもＬ２またはＬ３において著しく増大する。具体的に個々の重量をみると、坏類66.8kg（57％）、蓋9.2kg（８％）、壺類22.9kg（19％）、甕類18.8kg（16％）である。これは個体数ではなく、あくまで重量であるので即断はできないが、相対的に小型である坏の重量が著しく多いことから、本窯跡で焼成された器種の主体をなすものは坏ではなかったかという推測ができる。このうち坏は、底部が糸切りのものとヘラ切りのものがあるが、糸切りのものは非常に少数である。

冒頭の凡例で示したように、坏類、壺・甕類の底部1／2以上残存している個体、蓋のつまみの残存している個体をそれぞれ１個体として数えてみると、窯内と灰原及び窯体周辺出土の器種別の個体数は次のようになる。

坏255個体（うちヘラ切り245、糸切り10）、高台付坏43個体、蓋73個体、壺類25個体、甕類

15個体となる。この他、双耳坏の耳部５点、蓋のうち１点は壺蓋（第19図36）と見られ、38は当初よりつまみの付されていない坏蓋である。甕で外面にタタキ目をもつ大型の製品は量的にも少なく、殊にここで言う大甕は第26図78に示した波状文をもつ破片に可能性が考えられる程度で、残りは口径20～22cm前後の中甕であるとみられ、窯の規模に起因するものと理解できよう。

なお、各実測図下の観察表には「出土位置・層位」を記しているが、出土量の多い19Hグリッドについてのみ、これを省略して記している。例えば、“19H01”出土であれば“01”と略している。

（２）平窯跡

平窯は、ＳＪ01須恵器窯跡の南側に１基と、ＳＩ32竪穴住居跡の南東約12mに１基の計２基を検出した。

ＳＪ０４平窯跡（第13図、図版７）

ＳＪ01の灰原を精査中に、19H18、19H23グリッド漸移層中でプランを検出した。当初は、ＳＪ01を取り巻くように位置する溝状遺構の一つと考え、灰原に設定した土層観察用ベルトの延長がちょうど本遺構のＣ－Ｄ及びＥ－Ｆ断面に当たることから、それを残し掘り下げを開始した。掘り下げたところ、熱を受け焼土化した面が認められたことから、溝状遺構でないことが明らかになり、土層観察ベルトを新たに設定し直したのが、Ａ－Ｂ及びＧ－Ｈ断面である。

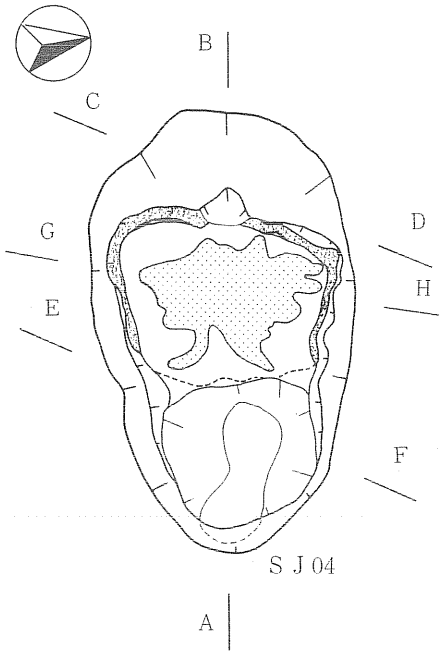
長円形のプランを有し、東西方向237cm、南北方向120～136cmの規模である。Ａ－Ｂの断面で見ると、東から前庭部、一段高くなって焚き口と燃焼部、そしてやや急な角度で立ち上がる煙道部に分けることができる。前庭部は、75cm×81cmの規模で、焚き口部との比高は20～25cmである。焚き口及び燃焼部は、100cm×123cm、確認面からの深さ33～37cmの規模である。前庭部側を除く壁と燃焼部中央部は赤変硬化が特に著しい。煙道部は、原形を保っていないが、幅20～20数cm、約43°の角度で立ち上がるものと推測される。埋土中には、火山灰（５ｂ層）が堆積しているが、面的な広がりは前述の調査経過から把握できなかった。

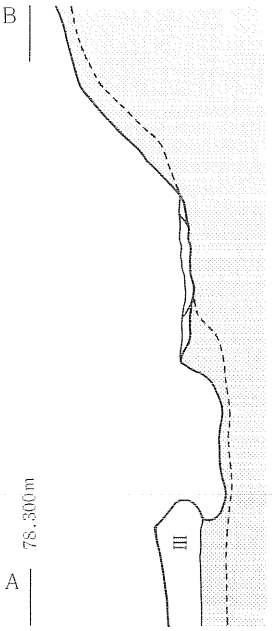
ＳＪ01の灰原との関係では、本遺構の上に灰原が形成されていることから、ＳＪ01がつくられる以前に本遺構が機能（操業）していたものと推測される。

埋土中より土師器甕（第28図93）が出土している。

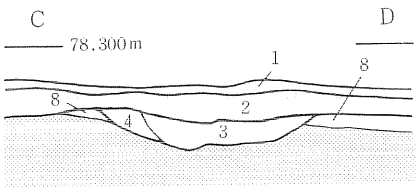
ＳＪ１４平窯跡（第13図、図版８）

21H16グリッド地山漸移層でプランを検出した。平面形は、隅丸方形基調であるが、東側は丸味を帯びている。規模は、東西方向138cm、南北方向112cm、深さ８～16cmである。東側の緩い傾斜角で底面に達する部分が前庭部、赤変硬化している部分が燃焼部と推測される。前庭部は、ＳＪ04のような掘り込みが認められない。燃焼部の掘り込みは、南側において２段となっ

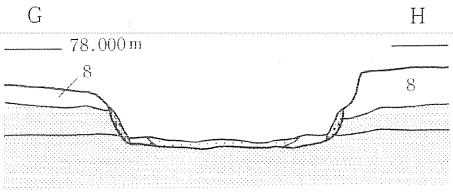


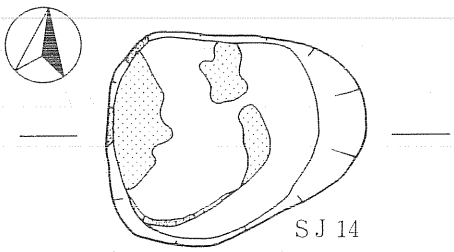


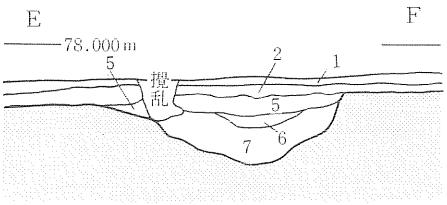
SＪ０４
1　明黄褐色～黄褐色(10Ｙ Ｒ ６／６～５／６)締まり強、小礫混入
2　明褐色(10Ｙ Ｒ ６／８)締まり強、小礫混入
3　暗褐色(10Ｙ Ｒ ３／４)粒子細かい
4　褐　色(10Ｙ Ｒ ４／４)砂状粒子微量混入
5　暗褐色(10Ｙ Ｒ ３／３)炭化物微量・火山灰少量混入
6　火山灰層
7　褐　色(7.5Ｙ Ｒ ４／４)粘性強、締まり強、炭化物・火山灰少量含む、ややにぶく赤変している
8　にぶい黄褐色～褐色(10Ｙ Ｒ ５／４～４／４)粘性強、締まり強、炭化物微量含む

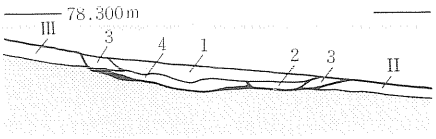


酸化面

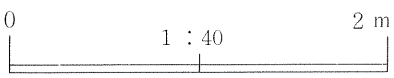




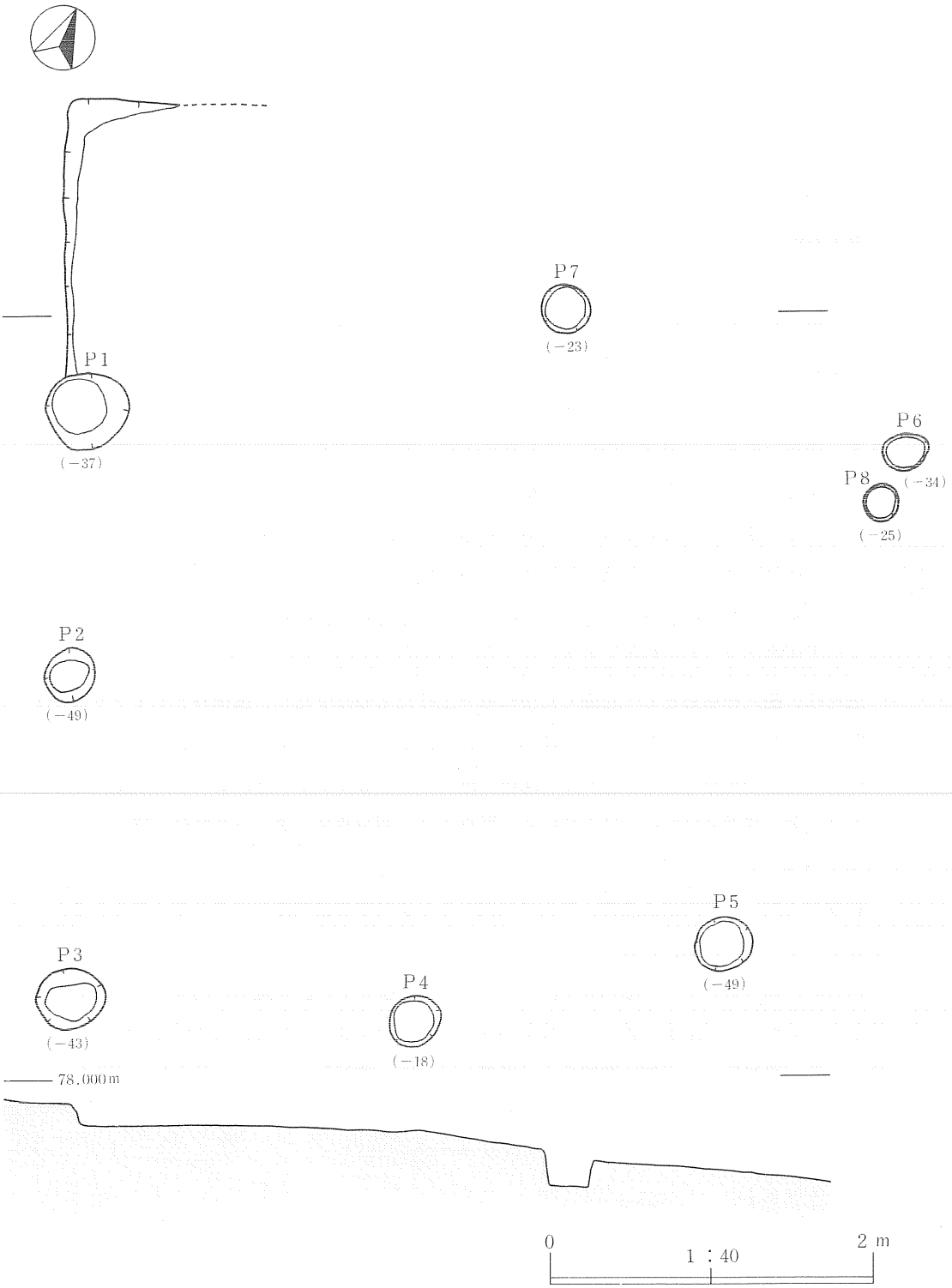




SＪ１４
1　黒褐色(10Ｙ Ｒ ２／３)締まり・粘性強、炭化物・地山粒子少量含む
2　黒　色(10Ｙ Ｒ ２／１)粘性強、炭化物多量に含む
3　暗褐色(10Ｙ Ｒ ３／４)炭化物やや多く・焼土少量含む
4　褐　色(10Ｙ Ｒ ４／４)炭化物やや多く・焼土少量含む



第13図　ＳＪ04・14平窯



第14図　ＳＩ32竪穴住居跡

ている。また、赤変硬化部分は、部分的にしか認められない。煙道部は、西側中央部にあったものと思われるが、失われてしまっており不明である。埋土中には、焼土粒と炭化物が含まれるが、焼土粒の量は多くない。また、天井部を形作っていたような構築材の混入は見られない。

（３）竪穴住居跡

竪穴住居跡は、遺跡北西部の緩斜面で１軒確認しただけである。

ＳＩ３２竪穴住居跡（第14図、図版８）

表土を除去した段階で、21Ｉ05グリッド付近に焼土を検出し、その周辺を精査したところ、明確なプランをつかむことができなかった。そこで、数回にわたって遺構検出作業を行ったところ、地山面で竪穴住居跡と推定されるプランの一部と柱穴を検出した。なおその際に、誤って焼土も除去してしまった経緯がある。

竪穴住居跡の推定プランは、方形と思われ、明らかにできたのは、その北西コーナー部分である。西側の壁長は、推定で580cm、北西隅付近の壁高が11.6～16.8cmである。床面は、西側は地山まで掘り込んで床としており、東側は地山まで掘り込まれておらず、黒色土を幾分掘り込んだ程度で床面としていたものと推測される。柱穴は、Ｐ１～Ｐ９まで検出されたが、Ｐ１～Ｐ５が壁際及びコーナー部分に位置するものと推定される。表土を除去した段階で検出した焼土は、竪穴住居跡の北側の壁近くに位置するものと思われ、竪穴住居跡に伴うとすれば、カマドの火床部であった可能性もある。

遺物は、竪穴住居跡として認識した後に取り上げたものは少なく、遺構外としてグリッド名層位を付して取り上げたものが、後に竪穴住居出土と追認したものが多い。従って出土状況が明確ではない資料も多いが、周辺の遺構・遺物の分布を見ると、第28図に示した個体は本竪穴出土と考えて誤りはないと考えている。器種では、須恵器坏、甕、土師器甕、鍋がある。

（４）土坑

該期の土坑は、坑内出土遺物、埋土の状況からＳＪ01須恵器窯跡北側の２基と見られる。

ＳＫ０７土坑（第15図、図版９）

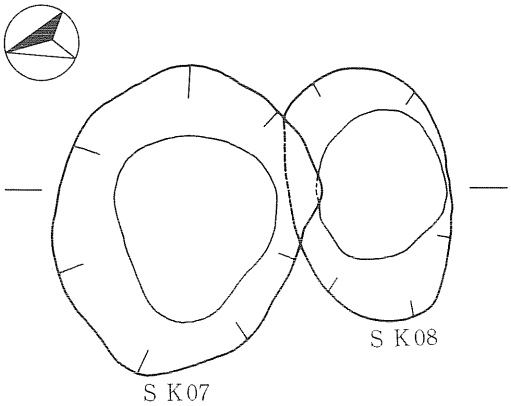
19H25、20H21グリッド地山面で、円形のプランを検出した。本遺構の南側にあるＳＫ08と切り合っており、本遺構が新しい。口径132cm×167cm、深さ36～47cm、底径88cm×98cm。埋土は、上部に黒褐色土、下部に黄褐色土が堆積している。黄褐色土中には、焼土粒、炭化物等が混入しており、南側約３～５mに位置するＳＪ01との関連も想像される。

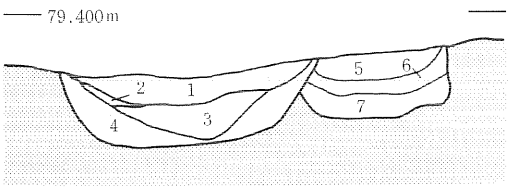
埋土中から、須恵器が出土している。第41図111は、坏底部に「一」の両端に小さい点が付された墨書が確認できた。

ＳＫ０８土坑（第15図、図版９）

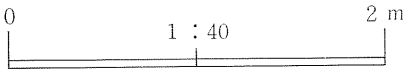
19H25、20H21グリッド地山面で、長円形のプランを検出した。ＳＫ07と切り合っており、

（Ｐ51へ）

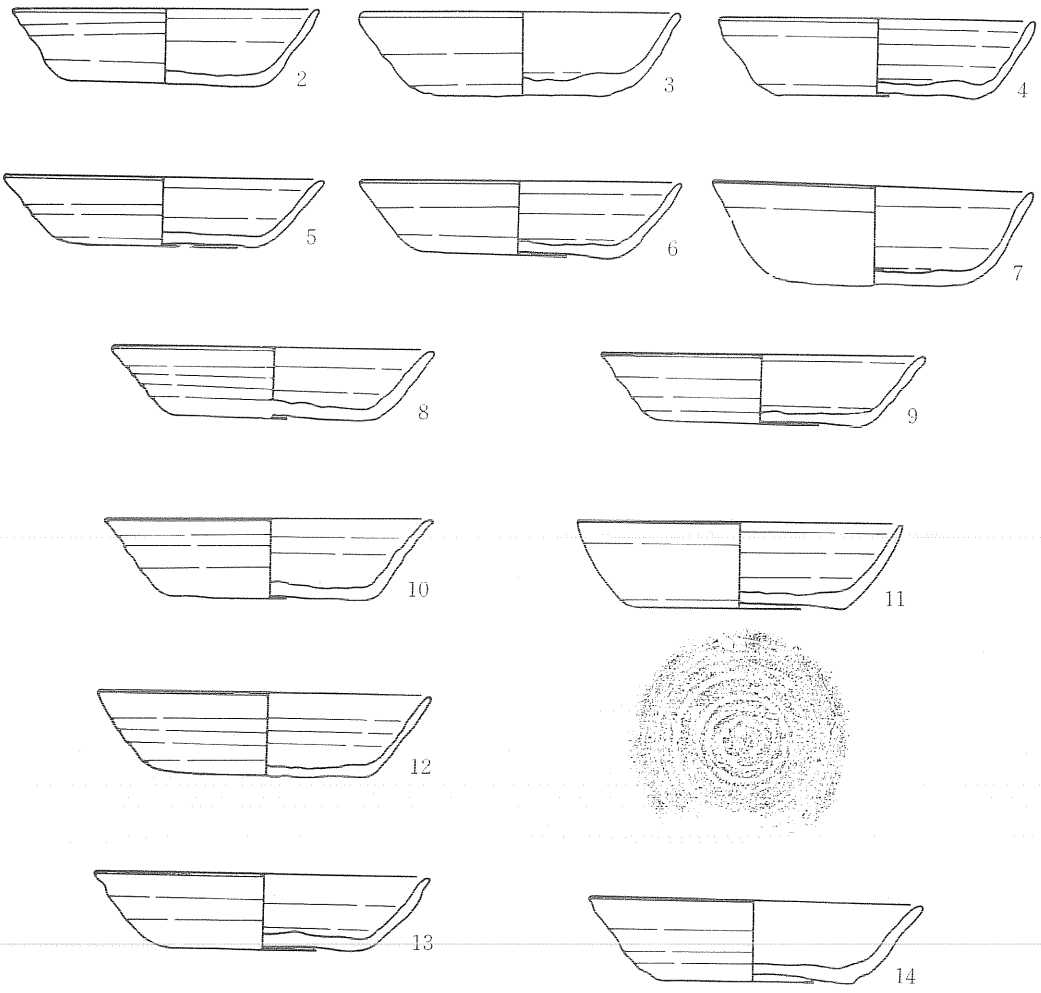




S K07・08
1　黒褐色(10Y R 2／2)粘性強、炭化物少量含む
2　暗褐色(10Y R 3／3)締まり強
3　にぶい黄褐色(10Y R 5／4)締まり強、粘性なし
4　明黄褐色(10Y R 6／6)粘性強、焼土・炭化物少量含む
5　にぶい褐色(7.5Y R 5／4)炭化物少量含む
6　褐　色(7.5Y R 4／4)炭化物少量、焼土ブロック多量に含む
7　褐　色(7.5Y R 4／3)炭化物・焼土ブロック少量含む

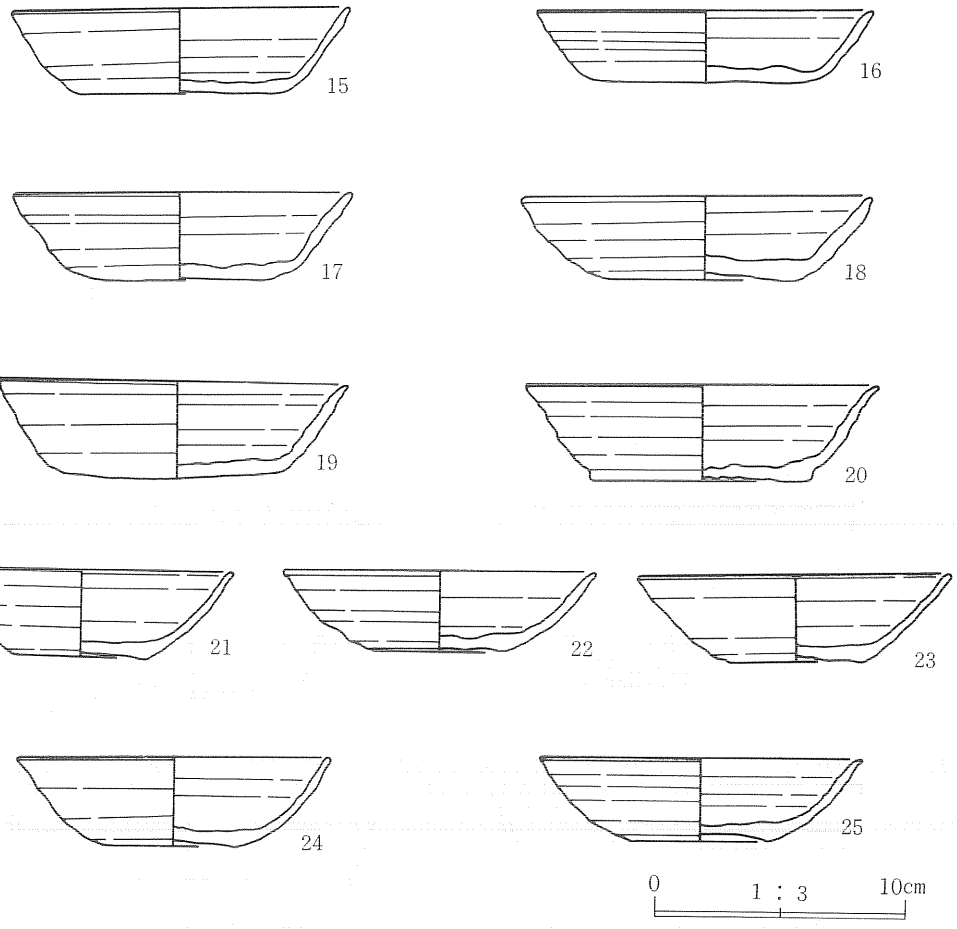


第15図　S K07・08土坑



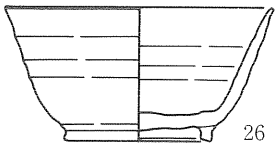
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	残存率	備　考
2	須・坏A0	18D-L4～2	11.9	7.9	3.0	2／3	「写」35
3	須・坏A0	01～03,06～08-Ⅱ,21I04-Ⅱ	12.4	7.0	3.3	2／3	「写」39
4	須・坏A0	24E・F・J-L2・3	12.5	7.9	3.1	2／3	「写」34
5	須・坏A0	20H16A-L4,20H16E-L4・1	12.5	7.8	2.7	2／3	「写」47
6	須・坏A0	19H-L3・1	12.6	7.7	3.1	2／3	「写」43
7	須・坏A0	19I04J-L2	12.6	7.6	4.1	2／3	40
8	須・坏A0	19A-L4～2,24B-L3,24D-L5	12.6	7.7	2.8	完	「写」31
9	須・坏A0	18D-L4・3	12.7	8.2	2.9	完	「写」44
10	須・坏A0	18D-L3・1	12.8	8.2	4.2	完	「写」45
11	須・坏A0	14D-L3,15C-L2,19D-L4,19J-L3,24G-L1	12.8	8.4	3.4	2／3	48
12	須・坏A0	19D-L4,20E-L2,20F-L1	13.0	8.4	3.3	2／3	「写」29
13	須・坏A0	19H-L1	13.0	8.0	3.0	完	「写」46
14	須・坏A0	14O-L4	13.0	7.9	3.2	完	「写」27

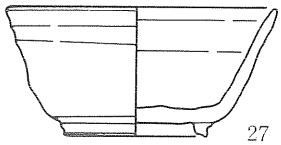
第16図　SJ01灰原出土土器(1)

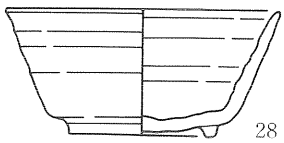


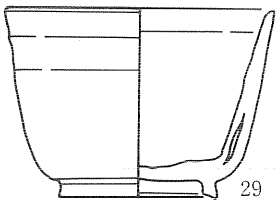
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	残存率	備　考
15	須・坏A 0	14D-L3・1、14N・O・P-L3、19C・E-L3	13.2	8.4	3.4	2／3	「写」42
16	須・坏A 0	14I-L2、19A-L4・3、19P	13.2	8.2	2.8	2／3	「写」41
17	須・坏A 0	20M	13.4	7.7	3.5	2／3	「写」33
18	須・坏A 0	14O-L4、19C-L4	13.5	7.5	3.3	完	「写」37
19	須・坏A 0	02-II・I	13.7	8.8	3.8	2／3	「写」30
20	須・坏A 0	19C-L3	13.7	8.8	3.8	1／2	49
21	須・坏B 0	19G-L3、SD06	12.0	5.4	3.5	1／2	53
22	須・坏B 0	19B-L2、20-L2	12.1	5.0	3.2	1／3	51
23	須・坏B 0	24-II、SD06	12.2	5.3	3.5	1／2	「写」50
24	須・坏B 0	19H・O-L3、20I-L1、20N-L2	12.2	5.2	3.5	2／3	「写」38
25	須・杯B 0	19J-L3、19O-L1、24-II、SK07	12.6	5.4	3.3	1／2	52

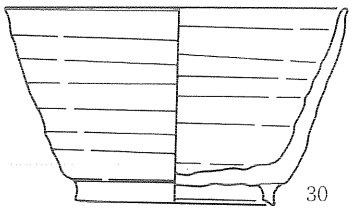
第17図　SJ01灰原出土土器(2)

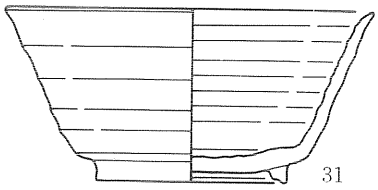


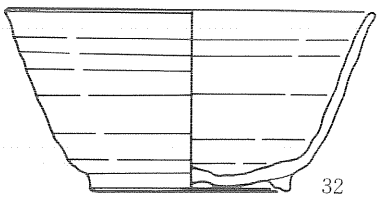


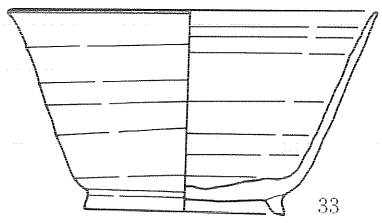


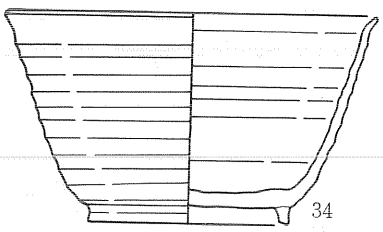


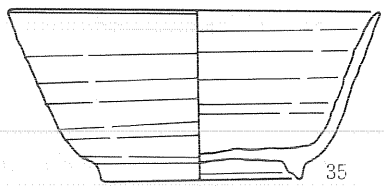


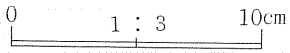






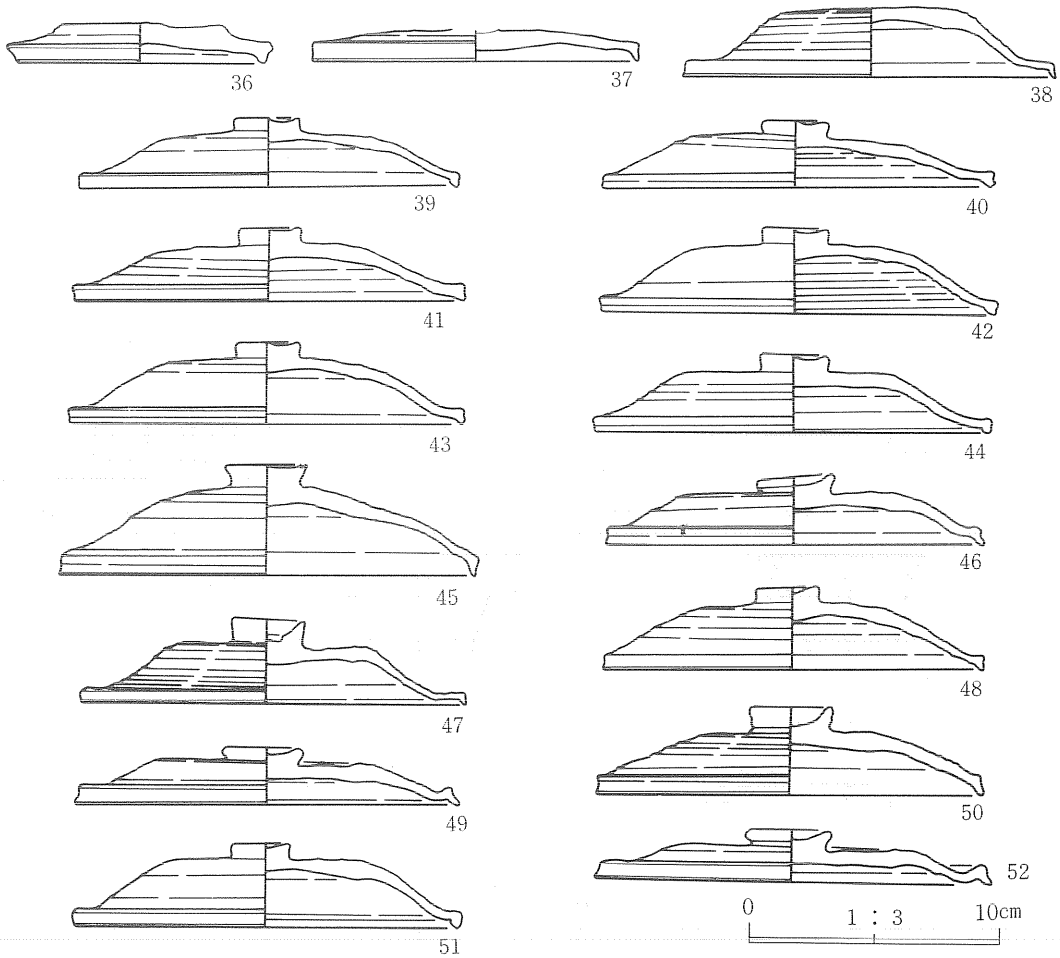






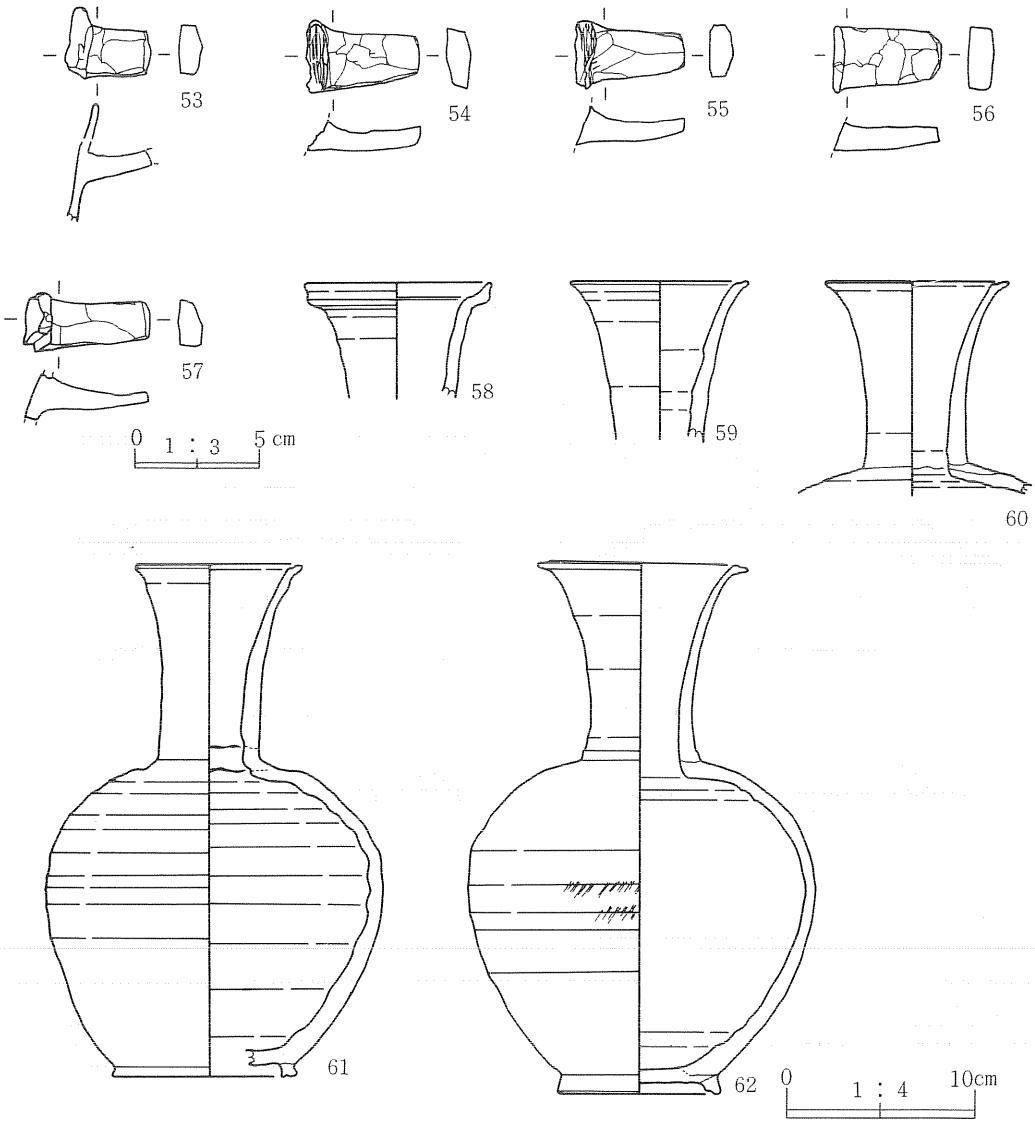
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	残存率	備　考
26	須・高台付坏B3	19N－L3・2、20K・N－L2、20M、20G20－Ⅰ	10.0	5.6	5.3	1／2	「写」59
27	須・高台付坏B3	14M、15M・19A・B・C－L3、19Ⅰ、19J－L2、20M	10.5	5.6	5.1	2／3	「写」58
28	須・高台付坏B3	14J・15M－L3、19P・20E－L2、19Ⅰ	10.9	5.7	5.0	1／2	60
29	須・高台付坏B3	15E－L3、19H20	10.5	6.2	7.5	1／2	61
30	須・高台付坏A1	19N－L3・2、19M－L2、23D－L3、24A－L1、24B－L2・1	13.5	8.0	7.7	完	「写」56
31	須・高台付坏A3	13J・19B－L1、14I－L3、14L・0・23D－L2、20H06－Ⅱ、21Ⅰ、22Ⅰ	14.2	7.3	6.8	2／3	「写」57
32	須・高台付坏A3	20G22－Ⅱ、20H11C－L2	14.4	7.7	7.2	完	「写」55
33	須・高台付坏A3	19Ⅰ－L8・4、19J－L1、19M、19N－L3・2、24B－L2、24P－L3、SD06	14.4	7.9	8.0	2／3	「写」62
34	須・高台付坏A3	12C・14N－L2、15E－L3、13－Ⅱ、SJ04	14.5	7.8	8.4	2／3	「写」63
35	須・高台付坏A1	20B－L2、SD02	14.6	7.9	6.7	完	「写」54

第18図　SJ01灰原出土土器(3)



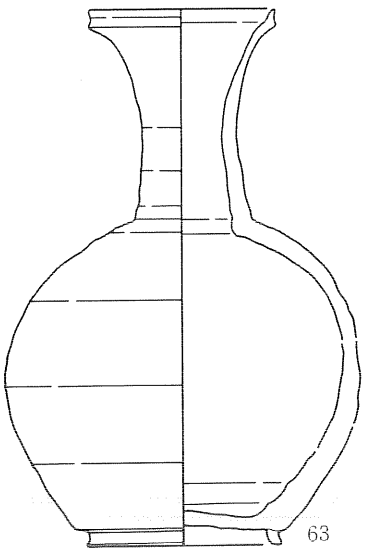
番号	器　種	出土位置・層位	口径	器高	つまみ	残存率	備　考
36	須・壺蓋D	14J・P－L3、14O－L2	9.9	1.6		完	「写」9
37	須・坏蓋	20H21－I	12.8	(1.2)	—	1／2	0
38	須・坏蓋G	14M－L4、19B、20N－L2	14.7	2.7		1／2	「写」8
39	須・坏蓋C	18L－L8、20H、20H16A・E－L4	14.8	2.7	2.6	完	「写」11
40	須・坏蓋C	19I04A－L3・2、19I05B－L1	15.3	2.7	2.7	完	「写」16
41	須・坏蓋C	20L－L2、20H16A・E－L4	15.4	2.8	2.6	完	「写」10
42	須・坏蓋C	18D－L1、20H16E－II	15.4	3.3	2.6	完	「写」13
43	須・坏蓋C	20L－L2、20H16E－L4	15.5	3.2	2.6	2／3	「写」14
44	須・坏蓋C	20H－L1、20H16A・E－L4	15.6	3.1	2.5	完	「写」15
45	須・坏蓋C	24A－L2、24B－L1、24－II、SK07	16.4	4.4	3.2	完	「写」12
46	須・坏蓋D	14N・19C－L4、15M、19H－II、19J－L3、20F－L2、20JL1	14.8	2.7	3.0	2／3	「写」3
47	須・坏蓋D	14G－L2、20B、20F－L3～1、25D－L1、20H16A・E－L4	15.0	3.3	2.8	2／3	「写」4
48	須・坏蓋D	20D－L1、20H16A・E－L4	15.0	3.3	2.5	完	「写」5
49	須・坏蓋D	19D・24A－L2、20E・24F・J－L3・2、24A－L2	15.1	2.3	3.2	2／3	「写」6
50	須・坏蓋D	01～03、06～08－II	15.2	3.5	3.3	1／2	2
51	須・坏蓋D	13O－L2・1、13P－L2	15.2	3.3	2.3	1／2	「写」7
52	須・坏蓋D	20M、20G23－II	15.5	2.1	3.2	2／3	「写」1

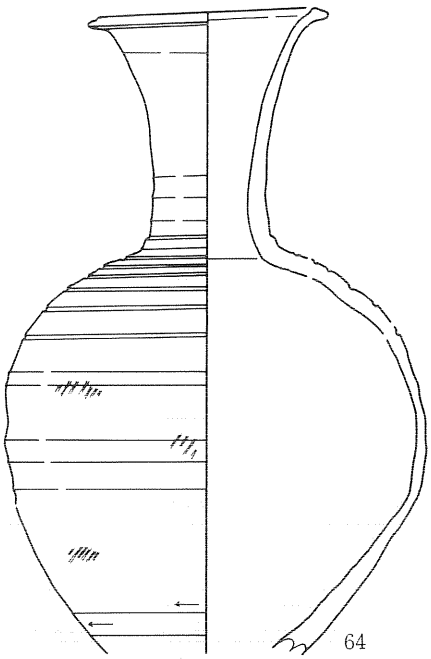
第19図　ＳＪ01灰原出土土器(4)

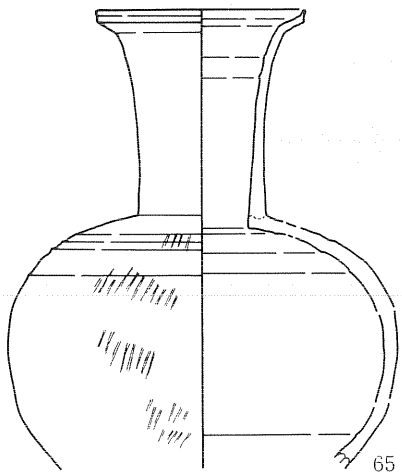


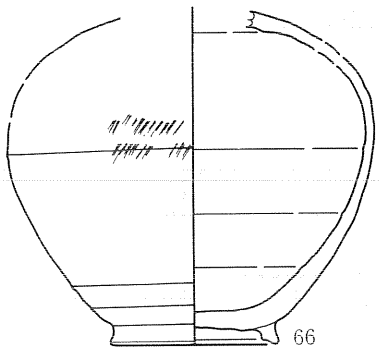
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
53	須・双耳坏	19H-H	—	—	—	—	耳部	24
54	須・双耳坏	19I	—	—	—	—	耳部	19
55	須・双耳坏	20E	—	—	—	—	耳部	21
56	須・双耳坏	19H-L-2	—	—	—	—	耳部	22
57	須・双耳坏	19E-L3	—	—	—	—	耳部	17
58	須・長頸壺B	13N・19B-L2、19A-L4、19E-L-3・2	9.7	—	—	(6.2)	破片	79
59	須・長頸壺B	24E・I・K-L3・2、25O-L1	9.2	—	—	(8.5)	破片	81
60	須・長頸壺B	18C-L1、18P-L2、24I-L3～1、24E・M-L3・2、19-II	9.5	—	—	(11.2)	破片	80
61	須・長頸壺Bla	13・24-I、19M・20I・23D・H・L・24E・F・N-L3・2、24A-L2、24I・J-L3～1、SD06、SK07	8.8	9.7	18.2	27.0	2／3	77
62	須・長頸壺Ba	12-II、13I-L4、13M-L2・1	9.8	8.4	18.3	28.3	完	「写」 73

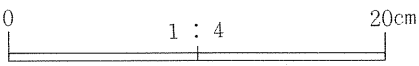
第20図　ＳＪ01灰原出土土器(5)





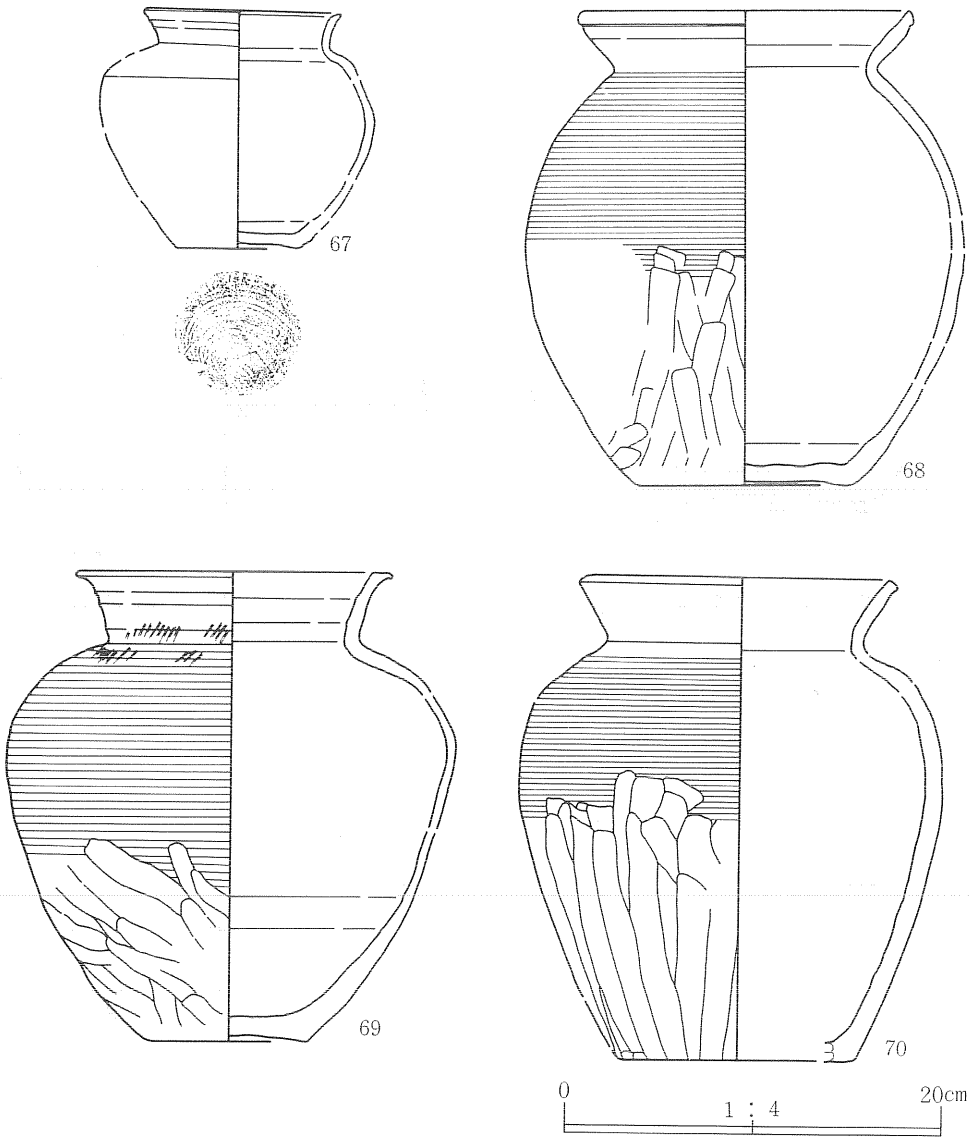






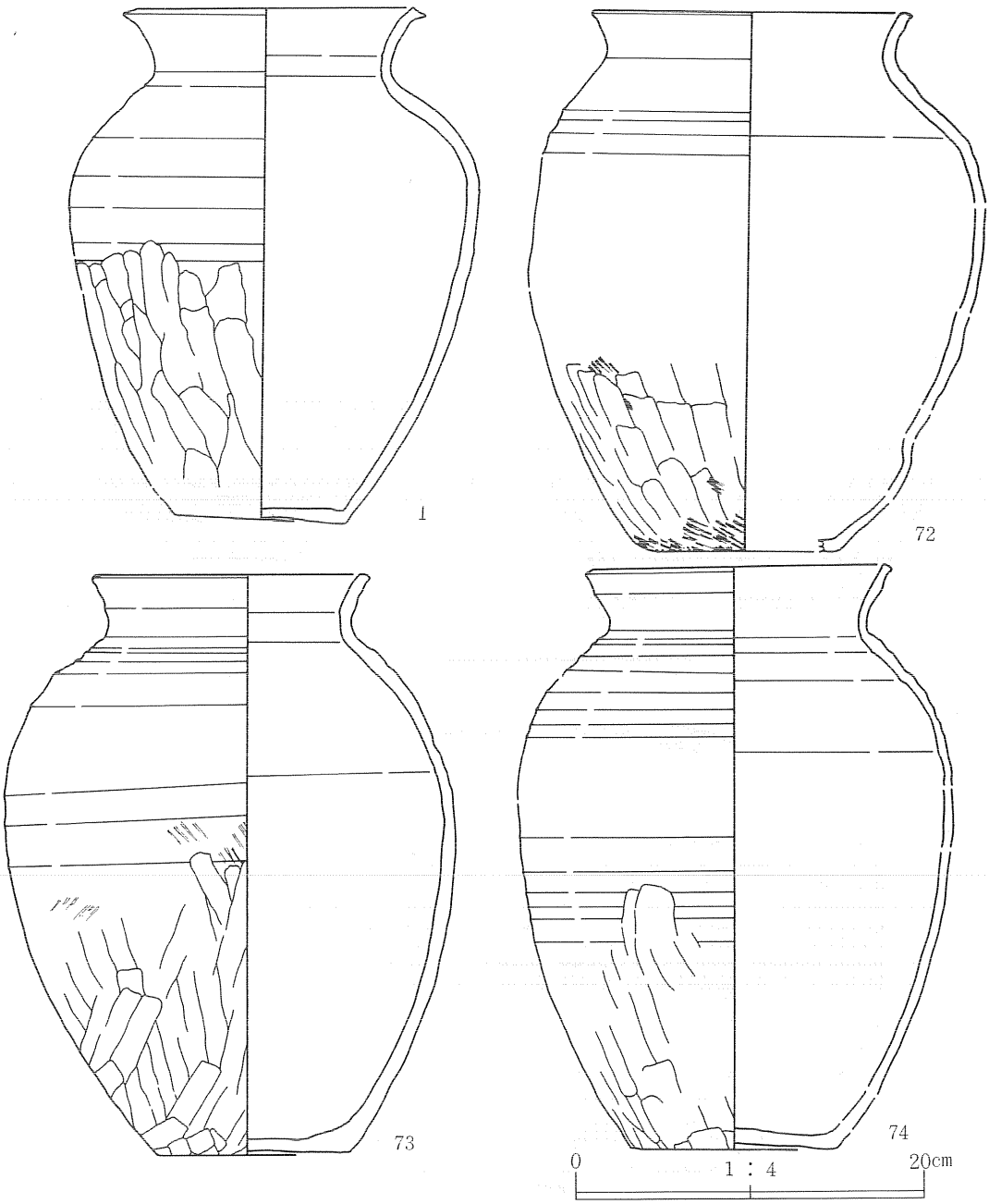
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　　考
63	須・長頸壺BIa	01~03,06~08,14I L1,14N・19J-L3,18H・L・19C・I・J・20F-L2,18-II,19H-L4,19I・N-L3・2,19M-L4~1,20E,19G12-II,SD06	9.9	10.3	18.6	28.4	2／3	歪み大「写」75
64	須・長頸壺Ba	13A-L4,15N・23A-L2,22L-II,23N-L1,24I・K-L3・2,19I03B-L2・1,19I03C・F・J-L2,SK07	11.3	—	22.3	(34.0)	2／3	「写」74
65	須・長頸壺Ba	23A-L2・1,23B-L8・2・1,23F・H-L2	11.0	—	20.6	(24.3)	1／2	「写」76
66	須・長頸壺Ba	19I・M-L4・3,19J-L1,19N,SD06	—	8.7	19.3	(17.7)	2／3	78

第21図　SJ01灰原出土土器(6)



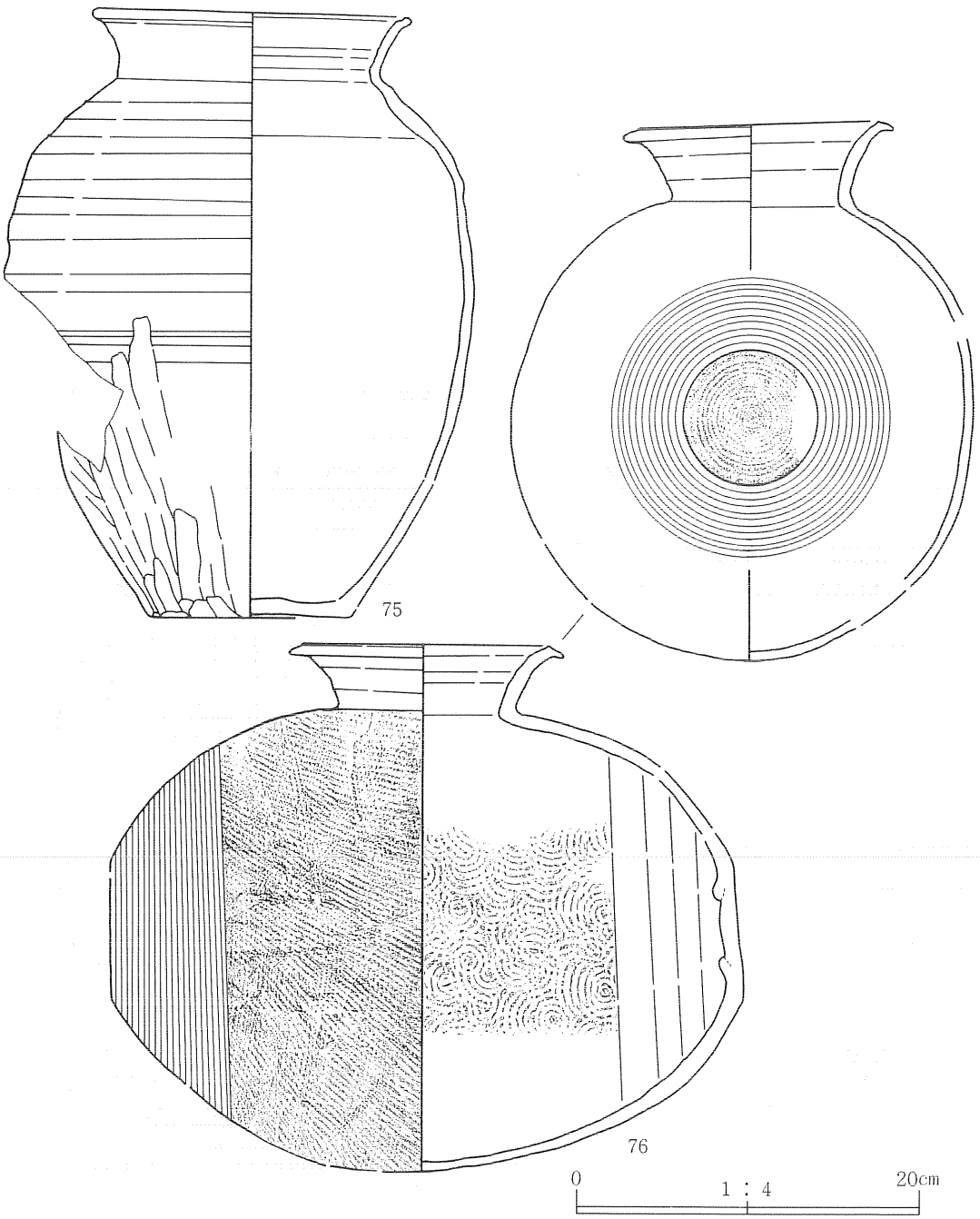
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
67	須・小甕Ba	13・19-Ⅱ,20K-L4,22C・H-L1,23B・D-L2,SJ04	10.2	6.7	14.5	12.5	1／2	歪み大、回転糸切り「写」64
68	須・中甕Bb	13Ⅰ-L4,13E・20J・N-L2,18D-L3,19N,20B,21-Ⅱ,22-Ⅰ,23A・24H・M-L1,24D,24F-L3・2,20Ⅰ01L-L2	17.2	11.3	23.2	25.0	1／3	「写」71
69	須・小甕Ab	01~03,06~08・12-Ⅱ,13A-L4	16.4	8.4	(23.7)	24.9	1／2	「写」85
70	須・中甕Ab	04F・19A-L2,12・18・23-Ⅱ,19E-L3,24Ⅰ・N-L3・2,19Ⅰ03B・04B-L3・2,19Ⅰ04E・FG・J・K-L2,21Ⅰ02	15.9	12.4	22.4	25.6	1／2	「写」70

第22図　ＳＪ01灰原出土土器(7)



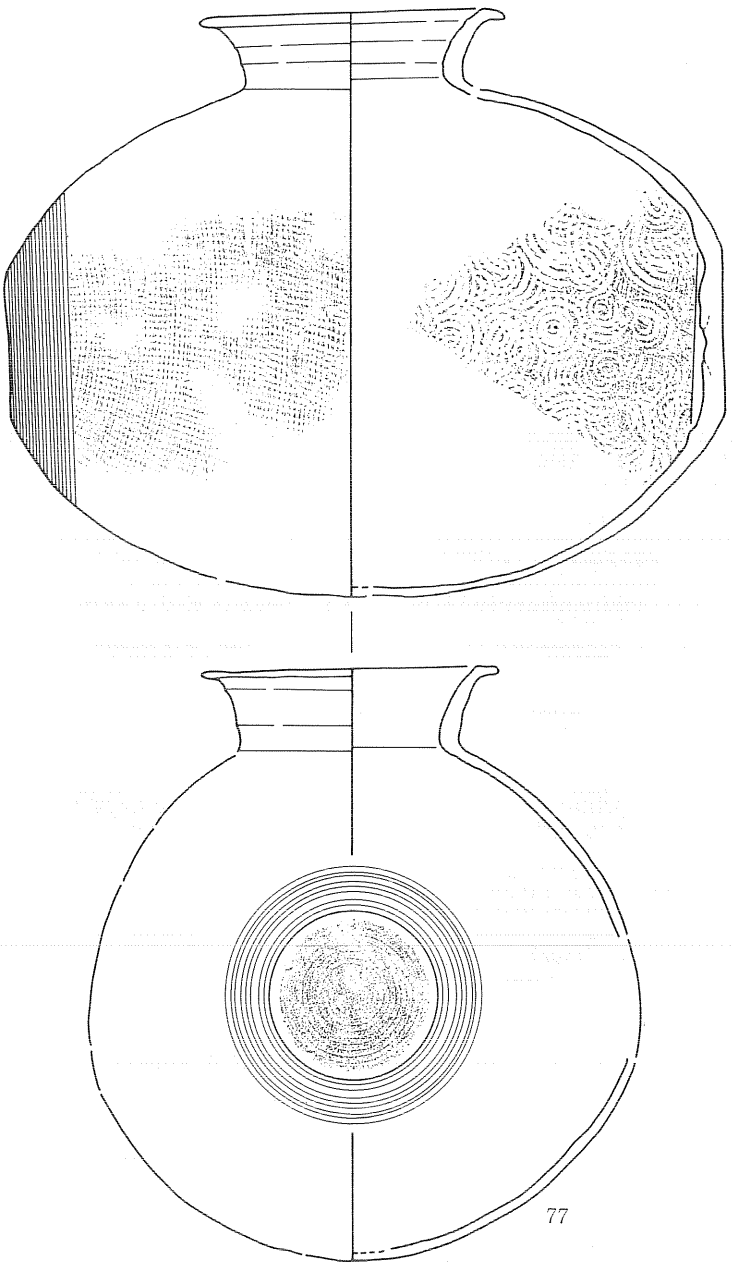
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
71	須・中甕Bb	14B・19H-L2,19C-L4・3,19F-L1,19K・20E-L3,19P,24C・D,24F-L3・2,19G22-I,21I03-II,21I04-I,21H17・18・24-II,21H22-I・II,SK05・07・08,SD06	15.7	9.8	23.4	29.2	2／3	「写」66
72	須・中甕Bb	14・16-I,19J-L4,19M・23D・24A・F-L3・2,19P,20E-L3,20J・24G-L1,20N・24B・C-L2,23C-L2・1,24-II,19G14・15-II,20G13・16-II,18I08-II,19I03D-L3・2P1,SD06	18.0	10.6	25.9	30.8	1／2	「写」65
73	須・中甕Bb	01～03,06～08・24-II,14P・15M・18I・19H・20K-L4,18D・F-L2,18I-L4・2,19J・L・24B-L3,18O・19I・20A・E・24A・G-L3・2,19N・20I-L1,19P,24H-L3・1,20H06-II,20H21F-L1,20H21O-L2,22H16-I,19I05,20I01D-L2,20I03-II,21I08-II,22I06-II,SJ04,SD06,SK07	15.5	11.0	25.6	33.3	1／2	67
74	須・中甕Bb	13・19H-II,13L・14D・G・19H-L2,14I・0・19D-L3・2,14J-L1,14M-L4,15M,19A・E-L4・3,19B-L5・3,19C-L3,20E-L3・1,24D,19G13-I,19G17-II,20G22-II,20H09-II	16.6	11 8	24.9	33.5	2／3	「写」68

第23図　ＳＪ01灰原出土土器(8)



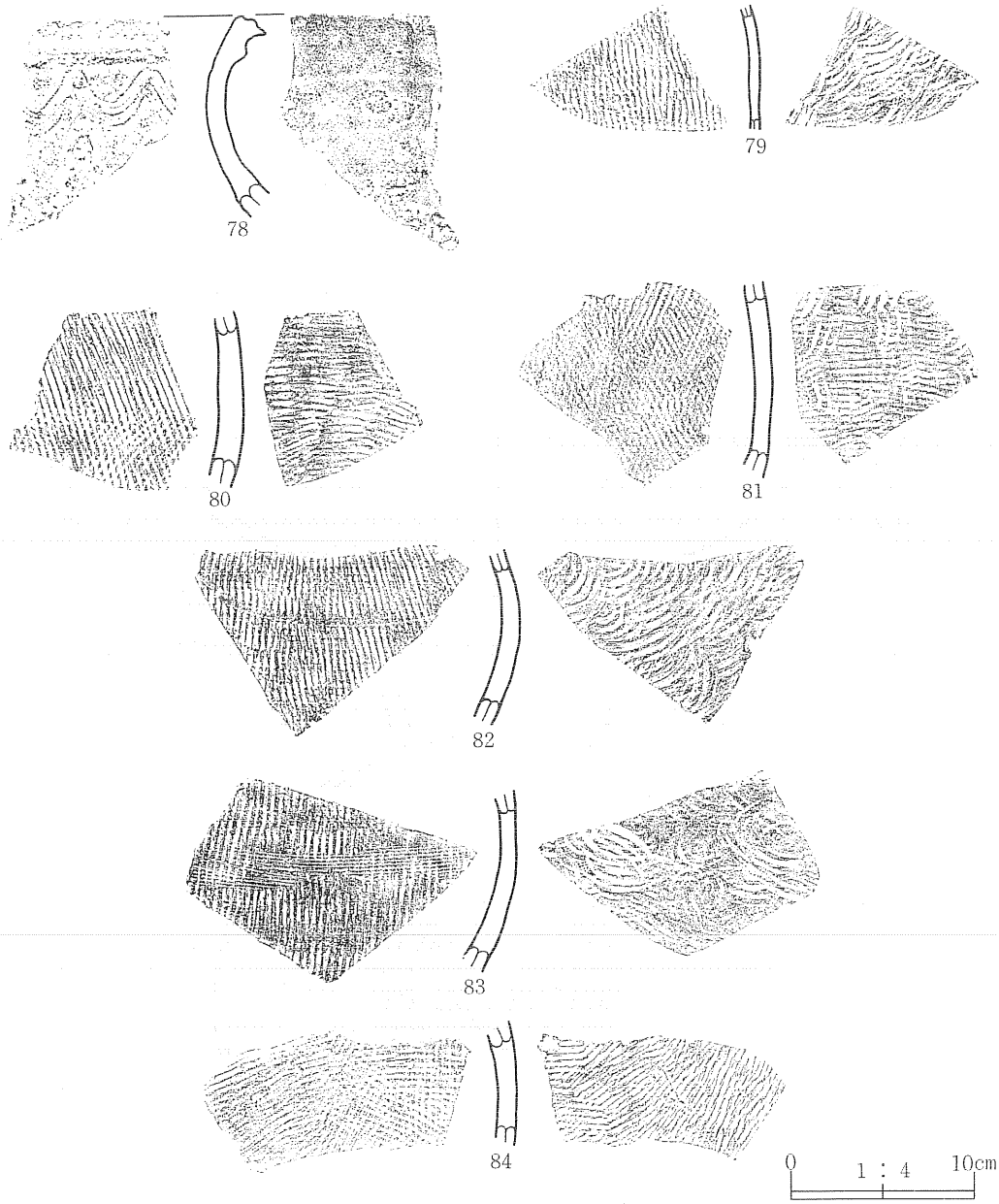
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
75	須・中甕Bb	02-Ⅰ,03~05,06~08・13・14・19H-Ⅱ,12C・20E・Ⅰ-L1,13A・D・15M・18H-L4,14Ⅰ・18B・19A・Ⅰ-L2、14M-L5,14N・19H・J-L3,18D・19C・N・20A-L3・2,19D-L4・3,19F・O・P,19M-L4・1,20F-L2・1,19G15-Ⅱ,19G16・17・22-Ⅰ,18H24-Ⅱ,20Ⅰ11	18.1	11.6	—	35.3	2／3	「写」69
76	須・横瓶	09・12・13・18・22・23-Ⅱ,13E・17J-L1,17P-L3・1,18M-L2,P4	14.3	—	—	30.9	2／3	「写」83

第24図　ＳＪ01灰原出土土器(9)



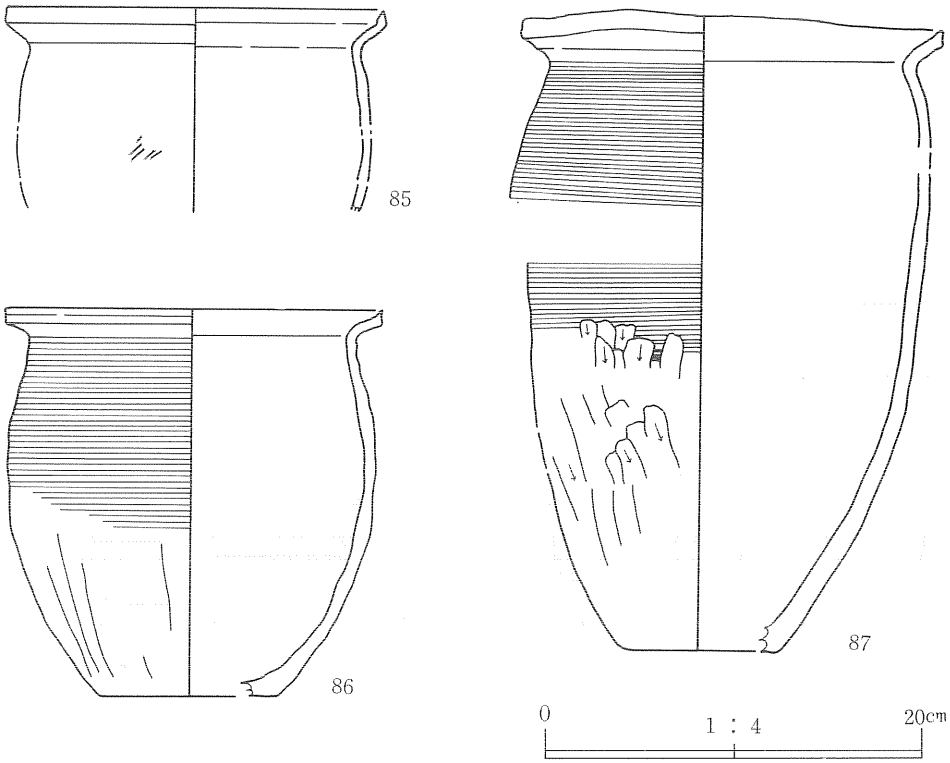
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　　考
77	須・横瓶	22-II	14.0	－	－	30.9	2／3	「写」84

第25図　ＳＪ01灰原出土土器(10)



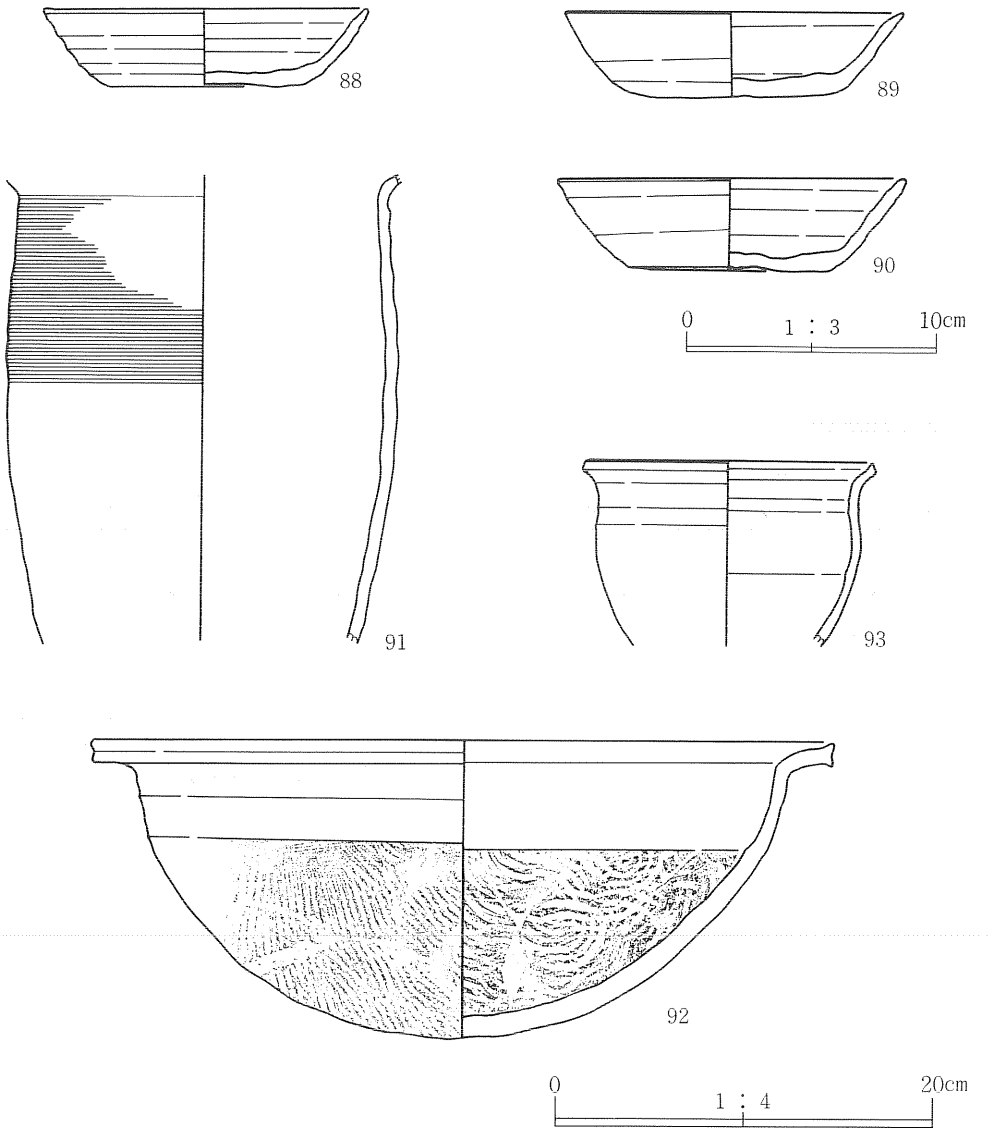
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　　考
78	須・甕	19G-L4	—	—	—	—	破片	波状文　93
79	須・甕	19G	—	—	—	—	破片	99
80	須・甕	SK07	—	—	—	—	破片	98
81	須・甕	13F-L1	—	—	—	—	破片	96
82	須・甕	24D	—	—	—	—	破片	95
83	須・甕	19A-L2	—	—	—	—	破片	94
84	須・甕		—	—	—	—	破片	97

第26図　SJ01灰原出土土器(1)



番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　　考	
85	土・甕	14G・H-L2	20.0	—	20.3	(10.7)	破片		90
86	土・甕	SJ01-I	19.9	9.4	20.0	20.5	1／3		87
87	土・甕	13O・19F-L4,14N,18D・19G・O-L3,19B-L5・2,19C・E-L4・3,19M・N・24P・H・J-L3・2,19P,20B・24A-L2,20N・24G・P-L1,20M,19I04-II	22.0	8.1	—	33.7	1／2	歪み大,土師器を須恵窯で焼成,一部還元化	72

第27図　SJ01灰原出土土器(12)



番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
88	須・坏A0	SI32、21I03-II	12.5	8.0	—	3.1	完	36
89	須・坏A0	SI32、21I09-II	13.3	8.3	—	3.4	完	32
90	須・坏A0	SI32、21I03·04·09-II	13.6	8.0	—	3.6	完	28
91	土・甕	SI32、21I04-II、21I05-I	—	—	—	(22.8)	1／3	89
92	土・鍋	SI32、21I02·04-I	39.4	丸底	—	15.7	2／3	92
93	土・甕	SJ04	15.2	—	15.6	—	1／2	86

第28図　SI32・SJ04出土土器

本遺構が古い。規模は、口径84cm×136cm、深さ31～38cm、底径68cm×77cmである。埋土は、褐色土により占められている。褐色土中には、焼土ブロック、炭化物が混入しており、本遺構についてもＳＪ01との関連が想像される。

２　時期不明の遺構と遺物－土坑・フラスコ状土坑－（第29～38図、図版10～15）

所属時期の不明確な遺構は、土坑22基、フラスコ状土坑１基の計23基である。これらの遺構は、出土遺物が全く認められなかったことから時期不明として扱っているが、後で述べるように、遺構の形態、埋土の状態から縄文時代に帰属すると推定している。各土坑の位置、規模、形態等については第２表でまとめることとし、ここでは表で表現し得ない点について触れておきたい。

①埋土について

埋土は、黒色土、褐色土、黄褐色または橙色を呈する地山再堆積土等からなる。それらの土の堆積の状況は、一般に土坑下部に地山再堆積土、上部に黒色系の土が堆積している場合が多い。また、黒色土と地山再堆積土と交互に堆積していて、自然堆積と見られる場合がある（ＳＫ10・15・18・33）。これとは反対に、明らかに人為堆積と認められる場合がある。それは、地山ブロックを多量に含み、非常に良くしまっている層が観察されるもので、ＳＫ19・20・23・24・28・29の６基がこれである。

②底面に掘り込まれたピットについて

22基の土坑の内、７基には底面ほぼ中央に柱穴状ピットが掘り込まれている。ＳＫ24ではピット埋土中から、木材が立ったままの状態で検出し、またＳＫ34は、底面のピット部分の最下層に炭化物を多く含んでいる。

ＳＫ24ピットからは、棒状の木材を６本検出した。木材は、坑底面に対して垂直に突き立てられたものと認められた。遺存していた材の長さは8.9～11.8cm、径は３cm前後であり、詳細は第39図下の表を参照いただきたい。第39図94～97は、先端部を尖頭を意識した加工（削り）がなされている。ピット精査中には、湧水が著しく、遺材について、これ以上の詳しい調査はできなかった。これらの材については、同定の結果、コナラとモクセイ科トネリコ属の一種であることが明らかとなっている（Ⅶ考察第１章第１節参照）。

③立地・配列

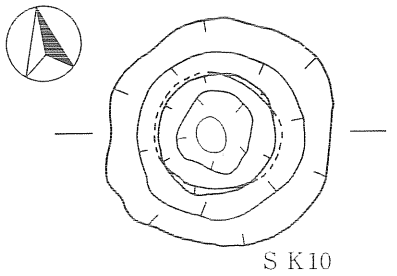
緩斜面上に立地し、等高線にほぼ沿うような配列をとっている。そして、いくつかの土坑が集まってひとつの単位を構成しているように推測される。調査区の北寄りの標高77～78mにＳＫ16・30・31、調査区のほぼ中央部の標高75～77mにＳＫ15・20・19・21・10・33、調査区北東側の標高74～75mにＳＫ29・28・24・23、調査区南寄りの標高76～78mにＳＫ34・22・12・11というように合計４つの単位を認めることができる。

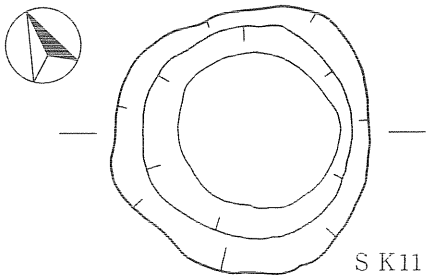
④用途・機能

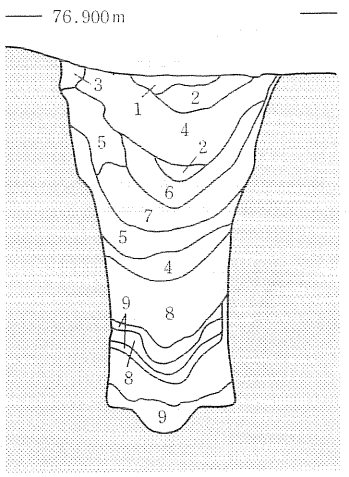
土坑の用途・機能を推定する場合、土坑底面に設けられたピットの埋土中から検出された炭化材が、唯一の手がかりとなるであろう。この遺材は、合計6本が直立した状態で、SK24の底面のピットから検出された。これから推測されることは、底面のピットに木材を埋め込んで立て、その先端を鋭利にし、土坑に転落してくる動物に傷を負わせる役割があったのではないかと思われる。このように考えてくると、これらの土坑が狩猟用の陥し穴であるという推定が可能であろう。底面にピットを持たない土坑についても、形態、埋土、配列の類似性から、陥し穴と推定される。

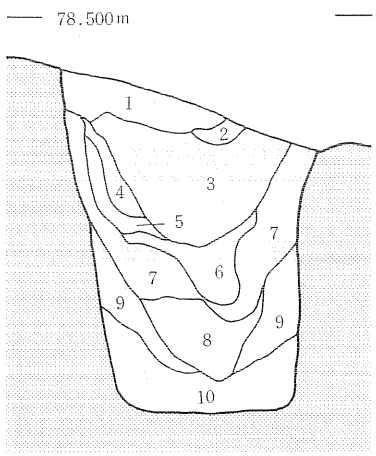
第2表　富ケ沢A窯跡検出土坑・フラスコ状土坑一覧

遺構番号	検出位置	規模（cm）				平面	備考
		開口部	坑底部	深さ	ピット		
SK10	19H15	117×120	60×68	185	43×46×13	円形	
SK11	18I05、19I01	径140～143	径82～87	183	なし	円形	
SK12	18I05、19I01	114×122	58×62	254	なし	円形	
SK13	21H04	116×127	56×65	18	なし	円形	
SK15	21H02・07	113×121	59×70	174	なし	円形	
SK16	22H23	109×124	49×52	147	径17×31	長円形	
SK18	20H14	127×147	52×56	192	なし	長円形	
SK19	20H03・08	120×105	45×49	179	なし	楕円形	
SK20	20H05・10	119×129	径53	172	なし	円形	
SK21	20H07	122×150	径60～72	222	なし	円形	
SK22	19H21・22	径168～170	64×73	220	なし	円形	
SK23	20G20	100×111	44×52	140	なし	円形	
SK24	21G16	131×146	径54～61	156	24×26×15	円形	ピット内に木材遺存
SK25	21I01	89×69	76×51	22～27	なし	楕円形	
SK26	21I02	89×94	40×60	109	なし	円形	
SK27	21G21	172×90	43×68	47	なし	長円形	
SK28	21H14・15	131×112	72×76	139	なし	楕円形	
SK29	21G15、22G11	径130～134	46×54	108	径18～20×14	円形	
SK30	22H22、22I02	117×124	69×80	130	径18×27	円形	
SK31	21I09・10	137×110	65×77	124	径21×22	楕円形	
SK33	19H14・15	130×115	径36～42	231	なし	楕円形	
SK34	19H13	145×124	69×80	176	27×32×49	楕円形	ピット最下層に炭化物
SKF17	22H07	88×98	78×80	150	なし	円形	頸部径58×64



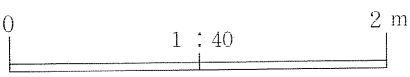




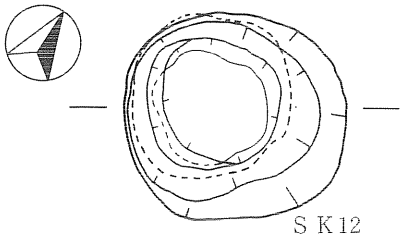


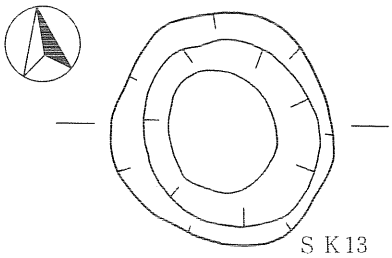
ＳＫ１０
1　褐色(10ＹＲ４／４)黄褐色火山灰(?)少量含む
2　暗褐色(10ＹＲ３／４)
3　明黄褐色(10ＹＲ６／８)地山ブロック
4　黒褐色(10ＹＲ２／２)粘性強、地山小ブロック少量含む
5　暗褐色(10ＹＲ３／３)粘性強、地山粒子少量含む
6　黒　色(10ＹＲ２／１)粘性強、地山粒子少量含む
7　黒褐色(10ＹＲ３／１)粘性強、地山粒子少量含む
8　明黄褐色(10ＹＲ６／８)粘性・締まり強、シルト質土を斑状に含む
9　暗褐色(10ＹＲ３／３)粘性・締まり強、地山粒子を少量含む

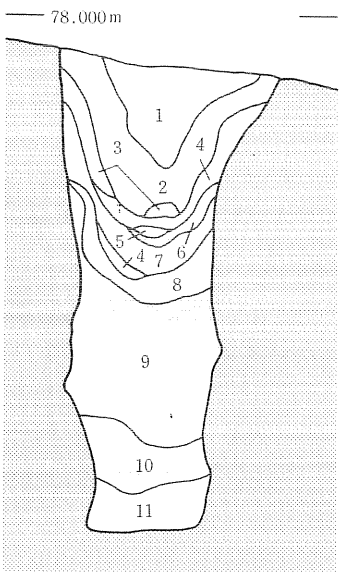
ＳＫ１１
1　暗褐色(10ＹＲ３／４)地山粒子多量・炭化物少量含む
2　黒褐色(10ＹＲ２／３)地山粒子少量含む
3　黒褐色(10ＹＲ２／２)地山粒子・ブロック少量含む
4　褐　色(10ＹＲ４／４)締まり強、地山粒子・炭化物少量含む
5　明黄褐色(10ＹＲ６／６)締まり強、地山ブロック多量に含む
6　褐色(10ＹＲ４／４)締まり・粘性強、地山ブロック少量含む
7　明黄褐色(10ＹＲ６／６)締まり強、地山ブロック多量に含む
8　黄橙色(10ＹＲ７／８)締まり強、地山粒子・ブロック多量に含む
9　黄褐色(10ＹＲ５／８)締まり強、地山粒子・ブロック多量に含む
10　褐　色(10ＹＲ４／４)締まり・粘性強、地山ブロック多量に含む

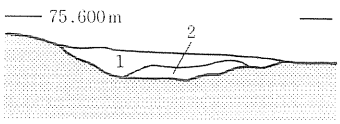


第29図　土坑(1)　ＳＫ10・11

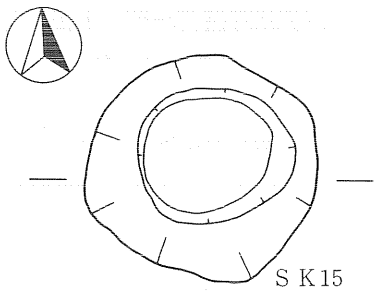




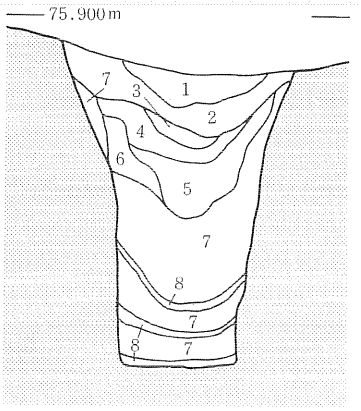




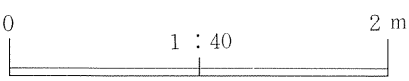
SK13
1　褐　色(10YR4／4)地山粒子・ブロック少量含む
2　暗褐色(10YR3／3)炭化物少量含む



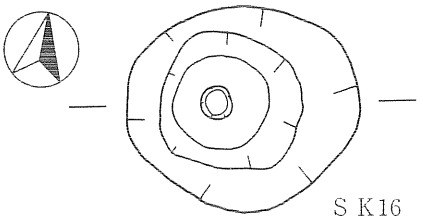
SK12
1　褐　色(10YR4／4)粘性なし、地山粒子・ブロック少量含む
2　黄橙色(10YR7／8)地山ブロック多量に含む
3　暗褐色(10YR3／4)炭化物・地山粒子・ブロック少量含む
4　黒　色(10YR2／1)地山ブロック少量含む
5　にぶい黄褐色(10YR4／3)
6　黒　色(10YR2／1)4層に類似、4層より地山の含有多い
7　暗褐色(10YR3／3)粘性強、地山粒子・炭化物少量含む
8　暗褐色(10YR3／3)7層に類似、炭化物含まない
9　褐　色(10YR4／4)粘性強、地山多量含む
10　黄褐色(10YR5／6)
11　暗褐色(10YR3／4)

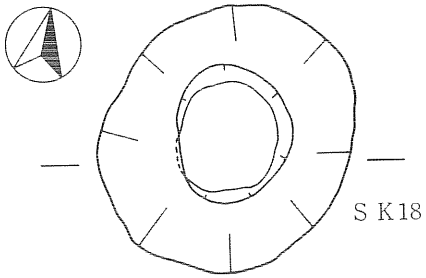


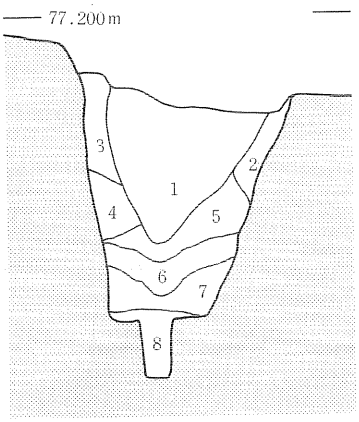
SK15
1　黒　色(10YR2／1)地山ブロック少量含む
2　暗褐色(10YR3／4)~褐色(10YR4／4)締まり強、地山粒子少量含
3　暗褐色(10YR3／3)地山ブロック微量含む
4　黒褐色(10YR3／1)締まり強、地山ブロック少量含む
5　黒褐色(10YR2／2)地山粒子・ブロック少量含む
6　暗褐色(10YR3／3)締まり強、地山ブロック含む
7　黄褐色(10YR5／6)締まり強
8　暗褐色(10YR3／3)地山粒子少量含む

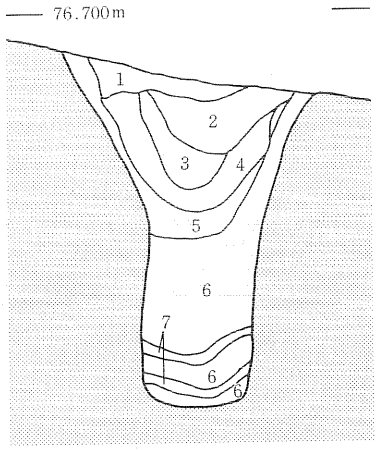


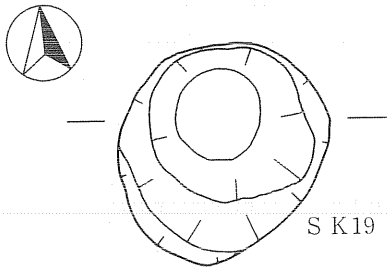
第30図　土坑(2)　SK12・13・15

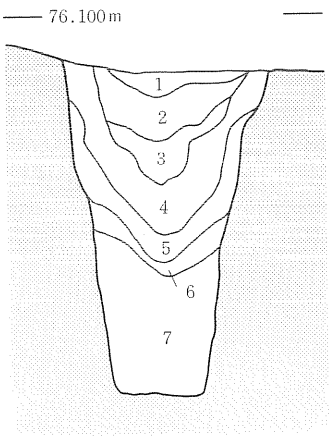






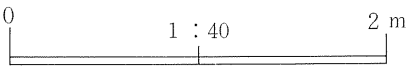






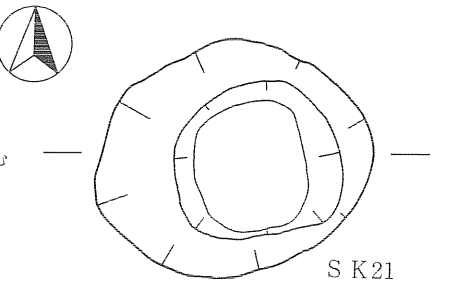
ＳＫ１６
1　黒　色(10Ｙ Ｒ ２／１)粘性強、地山粒子少量含む
2　褐　色(10Ｙ Ｒ ４／４)粘性・締まり強、シルト質土ブロック少量含む
3　黒褐色(10Ｙ Ｒ ３／２)粘性強・地山ブロック多量に含む
4　明褐色(7.5Ｙ Ｒ ５／６)締まり強
5　暗褐色(10Ｙ Ｒ ３／４)～褐色(10Ｙ Ｒ ４／４)粘性強
6　黒褐色(10Ｙ Ｒ ３／２)締まり強、地山ブロック少量含む
7　褐　色(10Ｙ Ｒ ４／６)締まり強、地山ブロック少量含む
8　黒褐色(10Ｙ Ｒ ３／２)地山ブロック多量に含む

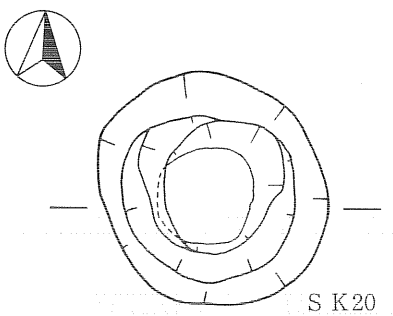
ＳＫ１８
1　黒褐色(10Ｙ Ｒ ３／２)粘性強、火山灰ブロック(?)少量含む
2　黒　色(10Ｙ Ｒ ２／１)締まり強、粘性弱
3　黒褐色(10Ｙ Ｒ ３／１)
4　黒褐色(10Ｙ Ｒ ３／２)～暗褐色(10Ｙ Ｒ ３／３)締まり・粘性強
5　明黄褐色(10Ｙ Ｒ ６／６)粘性強
6　明赤褐色(2.5Ｙ Ｒ ５／６)赤褐色を呈する地山土を主とする
7　黒　色(10Ｙ Ｒ ２／１)炭化物少量含む

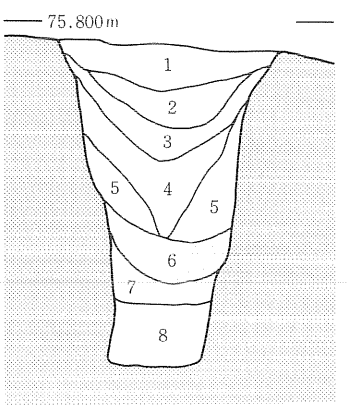


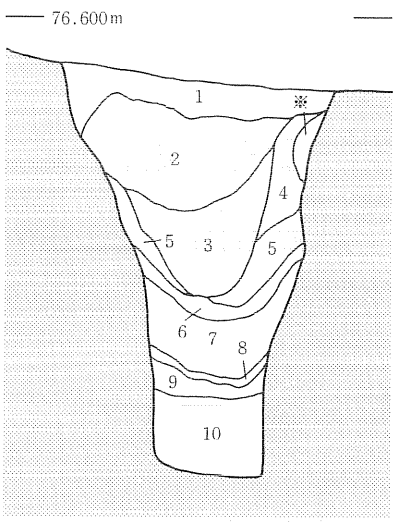
第31図　土坑(3)　ＳＫ16・18・19

SK19
1　黒褐色(10YR3／1)粘性弱、地山粒子少量・炭化物微量含む
2　黒　色(10YR1.7／1) 炭化物微量含む
3　黒　色(10YR2／1)締まり強、地山粒子少量含む
4　黒褐色(10YR3／2)堅く締まる、粘性弱、地山粒子少量含む
5　褐　色(10YR4／4)粘性・締まり強、地山ブロック多量に含む
6　褐　色(10YR4／4)5層に類似、地山ブロック5層よりやや少
7　褐　色(10YR4／4)粘性強、シルト質土多量に含む



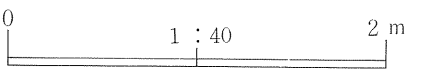




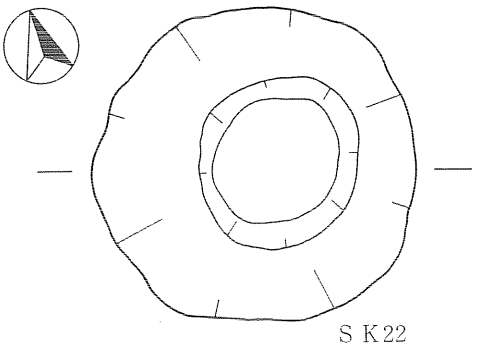


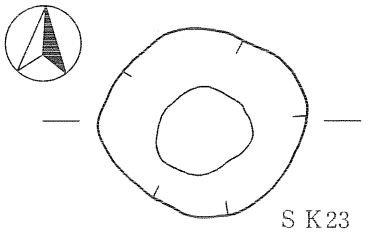
SK21
1　黒褐色(10YR2／3)地山粒子少量含む
2　黒　色(10YR1.7／1)地山ブロック少量含む
3　黒褐色(10YR2／2)地山粒子少量含む
4　暗褐色(10YR3／4)地山ブロック多量に含む
5　明黄褐色(10YR6／6)地山ブロック多量に含む
6　黄褐色(10YR5／8)締まり弱、シルト質土多く含む
7　明黄褐色(10YR6／6)地山ブロック多量に含む
8　黄褐色(10YR5／8)締まり弱、シルト質土多く含む
9　明黄褐色(10YR6／6)地山ブロック多量に含む
10　橙　色(5YR6／6)粘性強、締まり弱、白色粘土多く含む
※　地山ブロック

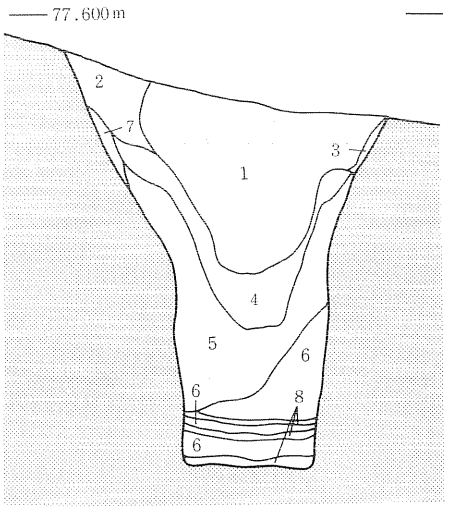
SK20
1　黒褐色(10YR3／2)炭化物微量含む
2　黒　色(10YR2／1)締まり強、炭化物少量含む
3　黒褐色(10YR2／2)締まり強
4　暗褐色(10YR3／3)粘性・締まり強、地山粒子・ブロック含む
5　褐　色(10YR4／6)粘性・締まり強、小礫少量含む
6　褐色(7.5YR4／4～4／6)粘性強、シルト質土ブロックに入る
7　黒褐色(10YR2／3)粘性強、6層ブロック混入
8　明赤褐色(2.5YR5／6)赤褐色を呈する地山土を主とする

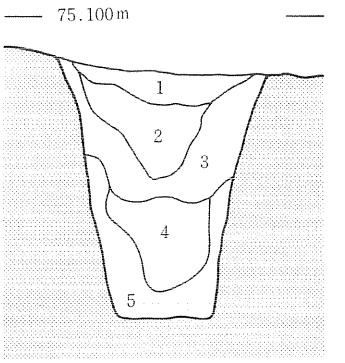


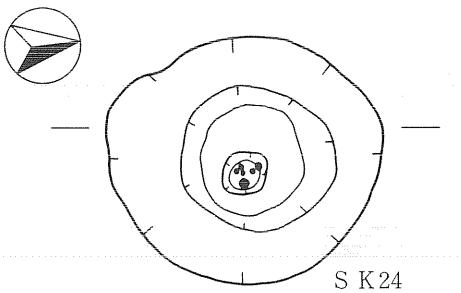
第32図　土坑(4)　SK20・21





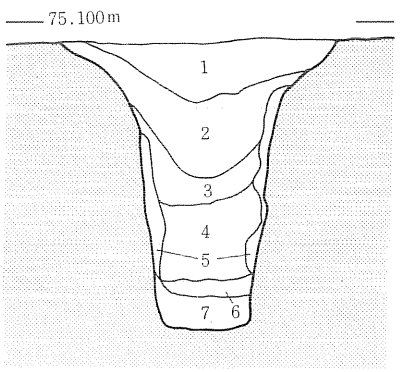


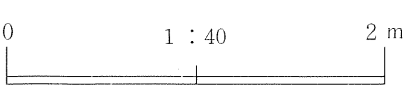


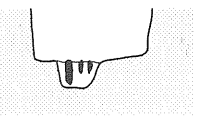


ＳＫ２２
1　黒　色(10ＹＲ1.7／１)締まり強、地山粒子少量含む
2　暗褐色(10ＹＲ３／３)締まり強、地山粒子・ブロックやや多く含む
3　暗褐色(10ＹＲ３／３)粘性強、地山ブロック多量に含む
4　暗褐色(10ＹＲ３／３)～黒褐色(10ＹＲ２／３)地山粒子多量に含む
5　にぶい黄橙色(10ＹＲ５／４)
6　黄橙色(7.5ＹＲ７／８)
7　明黄褐色(10ＹＲ６／８)　締まり強
8　褐　色(10ＹＲ４／４)地山粒子少量含む

ＳＫ２３
1　暗褐色(10ＹＲ３／３)地山粒子少量含む
2　黒　色(10ＹＲ２／１)締まり強、地山ブロック少量含む
3　褐　色(10ＹＲ４／４)締まり強、地山ブロック多量に含む
4　暗褐色(10ＹＲ３／３)締まり・粘性強、地山ブロック少量含む
5　黄褐色(10ＹＲ５／６)締まり・粘性強、湧水あり

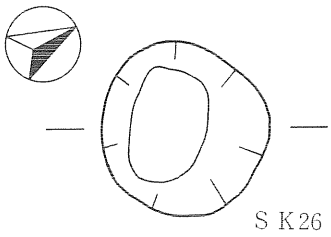


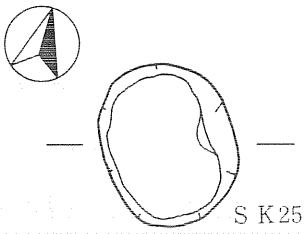


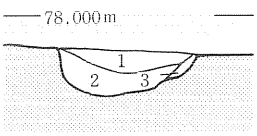


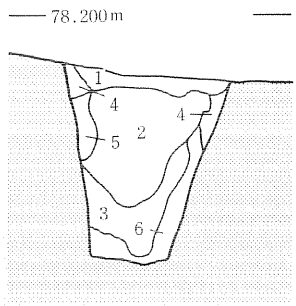
第33図　土坑(5)　ＳＫ22・23・24

ＳＫ24
1　暗褐色(10ＹＲ３／３)地山粒子少量含む
2　黒　色(10ＹＲ1.7／１)　締まり強
3　黒褐色(10ＹＲ２／３)締まり強、地山粒子少量含む
4　黒褐色(10ＹＲ３／２)堅く締まる、地山ブロック多量に含む
5　明黄褐色(10ＹＲ６／６)堅く締まる
6　褐灰色(10ＹＲ４／１)粘性強、地山ブロック多量に含む
7　褐灰色(10ＹＲ４／１)粘性強



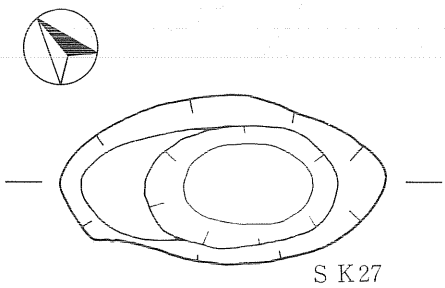


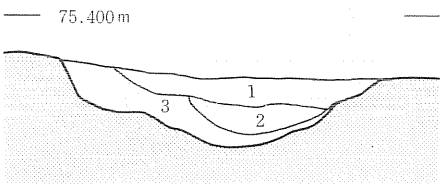




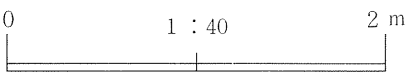
ＳＫ２６
1　暗褐色(10ＹＲ３／３)地山粒子少量含む
2　黒　色(10ＹＲ２／１)締まり強
3　黒褐色(10ＹＲ３／２)粘性・締まり強、地山ブロック少量含む
4　褐　色(10ＹＲ４／４)締まり強、粘性弱、地山ブロック少量含む
5　暗褐色(10ＹＲ３／１)粘性・締まり強、地山ブロック少量含む
6　暗褐色(10ＹＲ３／４)粘性・締まり強、地山粒子多量に含む

ＳＫ２５
1　暗褐色(10ＹＲ３／３)地山粒子少量、炭化物微量含む
2　褐　色(10ＹＲ４／４)締まり強、地山ブロック少量含む
3　にぶい黄褐色(10ＹＲ５／４)締まり強、地山ブロック少量含む

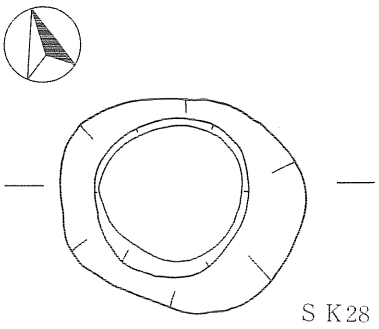


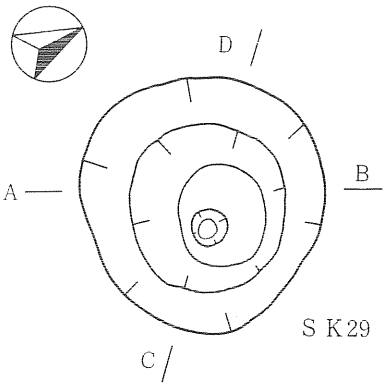


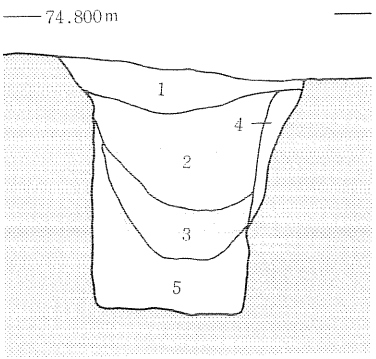
ＳＫ２７
1　暗褐色(10ＹＲ３／４)締まり強、粘性なし
2　黒褐色(10ＹＲ２／２)
3　暗褐色(10ＹＲ３／３)粘性強、地山ブロック少量含む

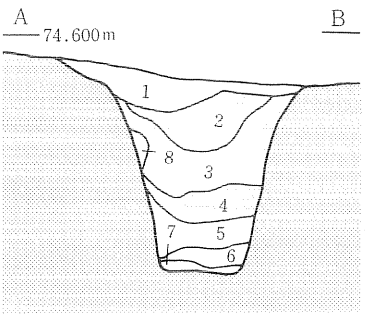


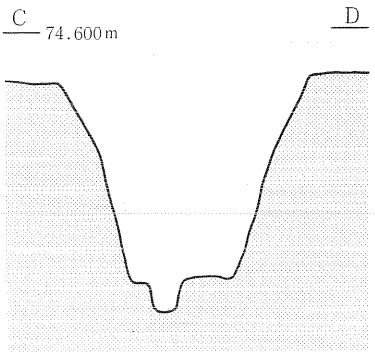
第34図　土坑(6)　ＳＫ25・26・27









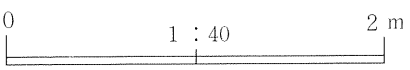


SＫ２８

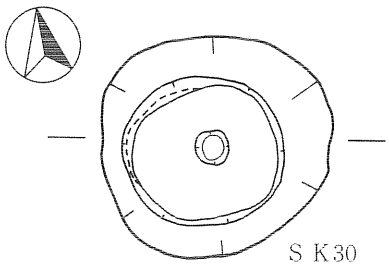
1　暗褐色(10ＹＲ３／４)粘性強、地山ブロック少量含む
2　黒　色(10ＹＲ1.7／１)粘性・締まり強、上部に地山ブロック少量含む
3　灰黄褐色(10ＹＲ４／２)堅く締まる、地山ブロック少量含む
4　褐　色(10ＹＲ４／４)粘性強、１層粒子少量含む
5　灰黄褐色(10ＹＲ６／２～５／２)締まり・粘性強、地山ブロック少量 含む、湧水あり

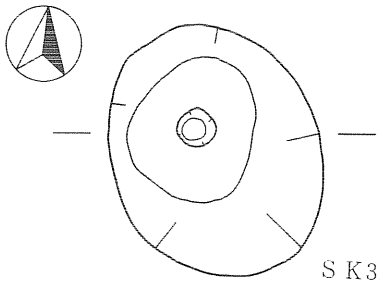
SＫ２９

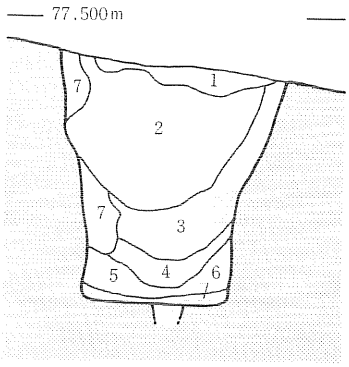
1　暗褐色(10ＹＲ３／４)粘性強
2　黒褐色(10ＹＲ２／２)粘性強
3　暗褐色(10ＹＲ３／３)堅く締まる、地山ブロック多量に含む
4　灰黄褐色(10ＹＲ４／２)堅く締まる、地山粒子多量に含む
5　灰黄褐色(10ＹＲ５／２)堅く締まる、地山ブロック多量に含む
6　褐灰色(10ＹＲ４／１)
7　灰黄褐色(10ＹＲ６／２)締まり強、粘性なし
8　褐　色(10ＹＲ４／４)粘性強、地山粒子少量含む

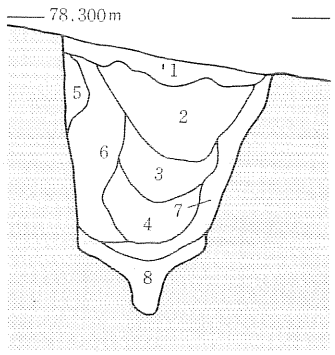


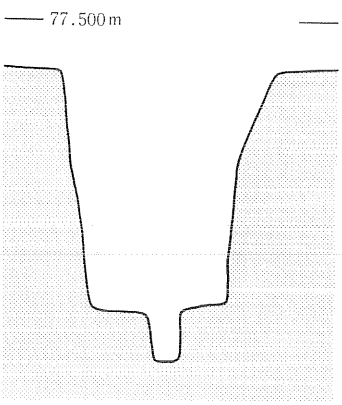
第35図　土坑(7)　ＳＫ28・29





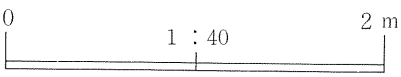




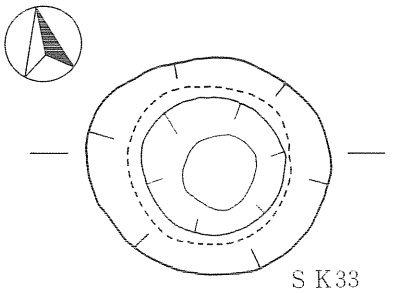


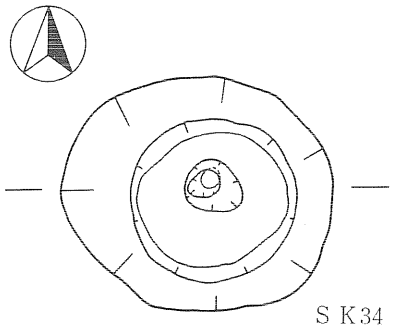
SK31
1　黒褐色(10YR3／2)地山粒子多量に含む
2　黒　色(10YR1.7／1)粘性強、地山ブロック多く含む
3　黒褐色(10YS2／2)締まり強
4　褐　色(10YR4／4)締まり・粘性強
5　明黄褐色(10YR6／6)ブロック状に入っている
6　褐　色(10YR4／6)
7　にぶい黄褐色(10YR5／4)地山ブロック多量に含む
8　暗褐色(10YR3／3)粘性強、締まり弱、地山ブロック多量に含む

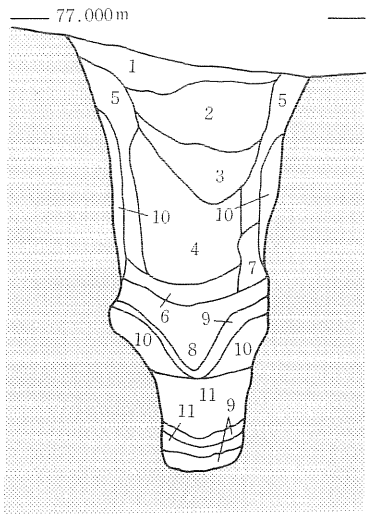
SK30
1　暗褐色(10YS3／3)粘性弱、地山粒子少量含む
2　黒　色(10YR1.7／1)粘性・締まり強
3　暗褐色(10YR3／3)締まり強、地山ブロック多量に含む
4　黒褐色(10YR2／2)粘性強、地山ブロック多量に含む
5　明褐色(7.5YR5／8)締まり強
6　褐　色(10YR4／4)締まり・粘性強、地山粒子多量に含む
7　褐　色(10YR4／4)地山ブロック多量に含む

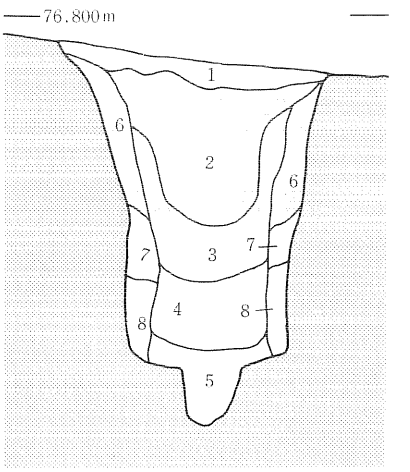


第36図　土坑(8)　SK30・31



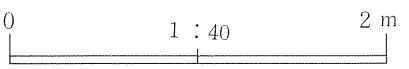




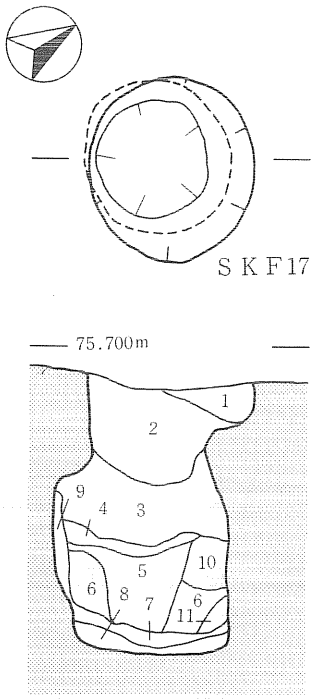


ＳＫ３３
1　暗褐色(10ＹＲ３／４)地山粒子少量含む
2　黒褐色(10ＹＲ２／２)炭化物少量含む
3　黒　色(10ＹＲ２／１)粘性強
4　黒褐色(10ＹＲ２／２)締まり強、地山粒子少量含む
5　暗褐色(10ＹＲ３／３)地山ブロック多量に含む
6　暗褐色(10ＹＲ３／４)締まり弱、地山粒子多量に含む
7　黄褐色(10ＹＲ５／６)
8　黄褐色(10ＹＲ５／６)地山ブロック多量に含む
9　黒　色(10ＹＲ２／１)締まりなし、地山粒子多量に含む
10　橙　色(7.5ＹＲ6／８)
11　明褐色(7.5ＹＲ５／６)粘性強、締まり弱、地山ブロック多量に含む。

ＳＫ３４
1　暗褐色(10ＹＲ３／３)粘性弱、地山粒子少量・炭化物微量含む
2　黒　色(10ＹＲ1.7／１)粘性弱、上部に地山ブロック多量に含む
3　褐　色(7.5ＹＲ４／３)粘性強、地山粒子少量含む
4　暗褐色(10ＹＲ３／４)粘性強、地山ブロック多量・炭化物少量含む
5　暗褐色(10ＹＲ３／３)粘性強、締まり弱、炭化物・地山粒子多量に含む
6　黄褐色(10ＹＲ５／８)
7　明黄褐色(7.5ＹＲ５／８)
8　明赤褐色(５ＹＲ５／８)赤褐色を呈する地山土、白色粘土を含む



第37図　土坑(9)　ＳＫ33・34



SKF17
1　暗褐色(10YR3／3)撹乱土
2　黒　色(10YR2／1)粘性弱、地山粒子・ブロック少量含む
3　黒褐色(10YR3／1)粘性強、地山粒子・ブロック少量含む
4　黒　色(粘性強、地山粒子少量含む
5　黒褐色(10YR3／2)粘性強、地山粒子・ブロック少量含む
6　褐色(10YR4／6)～黄褐色(10YR5／6)締まり強、地山ブロック多量に含む
7　黒　色(10YR1.7／1)粘性強、締まりなし、地山ブロック多量に含む
8　褐色(10YR4／6)～黄褐色(10YR5／6)締まり強、地山ブロック多量に含む(6層より多い)
9　明黄褐色(10YR6／6)
10　明黄褐色(10YR6／8)締まり強、シルト質土少量含む
11　黄褐色(10YR5／6)

0　1：40　2m

第38図　フラスコ状土坑　SKF17

第2節　遺構外出土の遺物

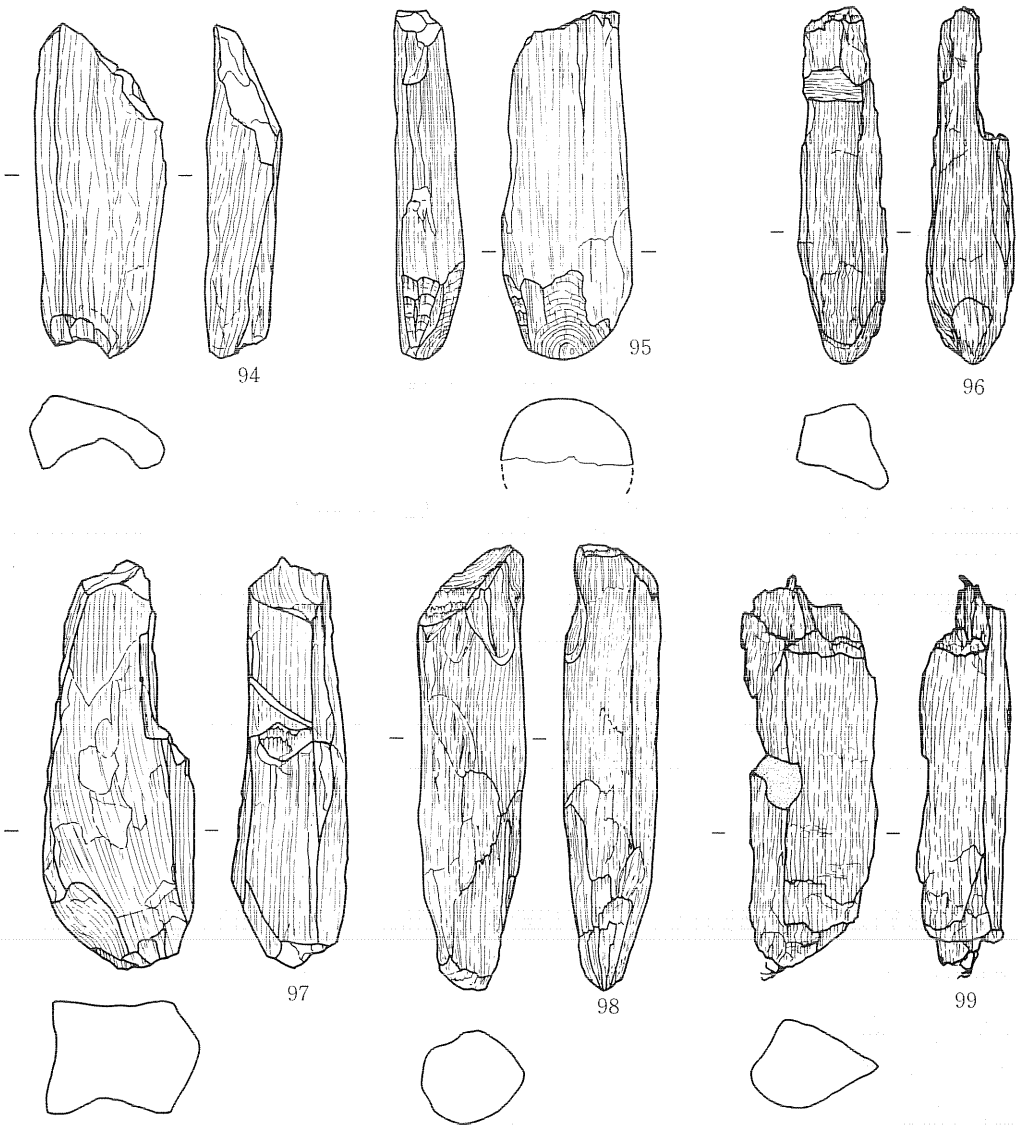
1　縄文時代の遺物（第40図100）

富ヶ沢A窯跡出土の縄文時代の遺物は、僅かに土器片2点、剥片2点の計4点のみである。出土位置は、遺跡南東側の19G・Hグリッド Ⅱ層である。

100は口唇部に面取りがなされている。器面は浅黄橙色を呈し、胎土には比較的多くの石英を含み緻密、焼成良好である。表面にはLR縄文が認められる。剥片は2点とも頁岩を石材としている。

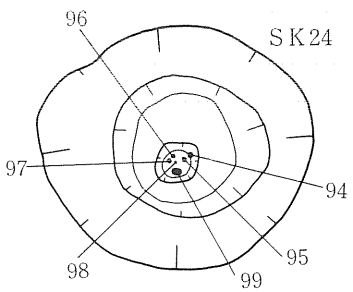
2　平安時代の遺物（第40図101～第41図）

該期の遺構外出土遺物は、須恵器・土師器と1点の砥石である。土器類の出土量はコンテナ2箱である。須恵器は、遺跡ほぼ全域から、土師器は、少量のSJ01灰原出土を除けば、遺跡北西部の2ブロックにほぼ限られる。それは、21I04・05グリッドとこの南側の21H17・18・22、21I02グリッドである。量的には前者が多い。前者はSI32竪穴住居跡出土と認定でき、

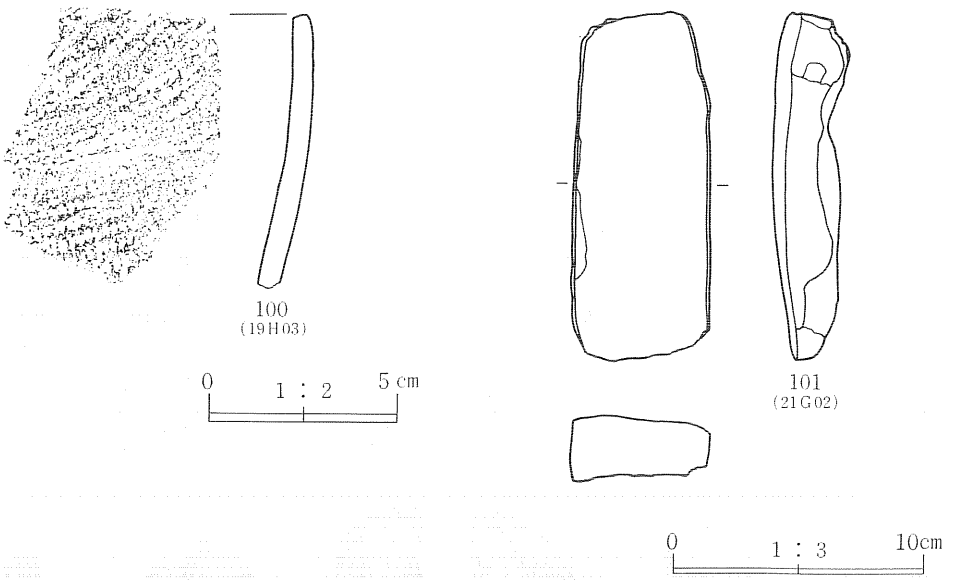


番号	遺物番号	現存長	幅	厚さ
94	ＲＣ01	8.9	3.5	1.9
95	ＲＣ02	9.3	3.5	1.7
96	ＲＣ03	9.5	2.5	2.3

番号	遺物番号	現存長	幅	厚さ
97	ＲＣ04	11.0	4.1	3.0
98	ＲＣ05	11.8	2.7	2.5
99	ＲＣ06	10.5	3.5	2.3



第39図　ＳＫ24土坑出土木材



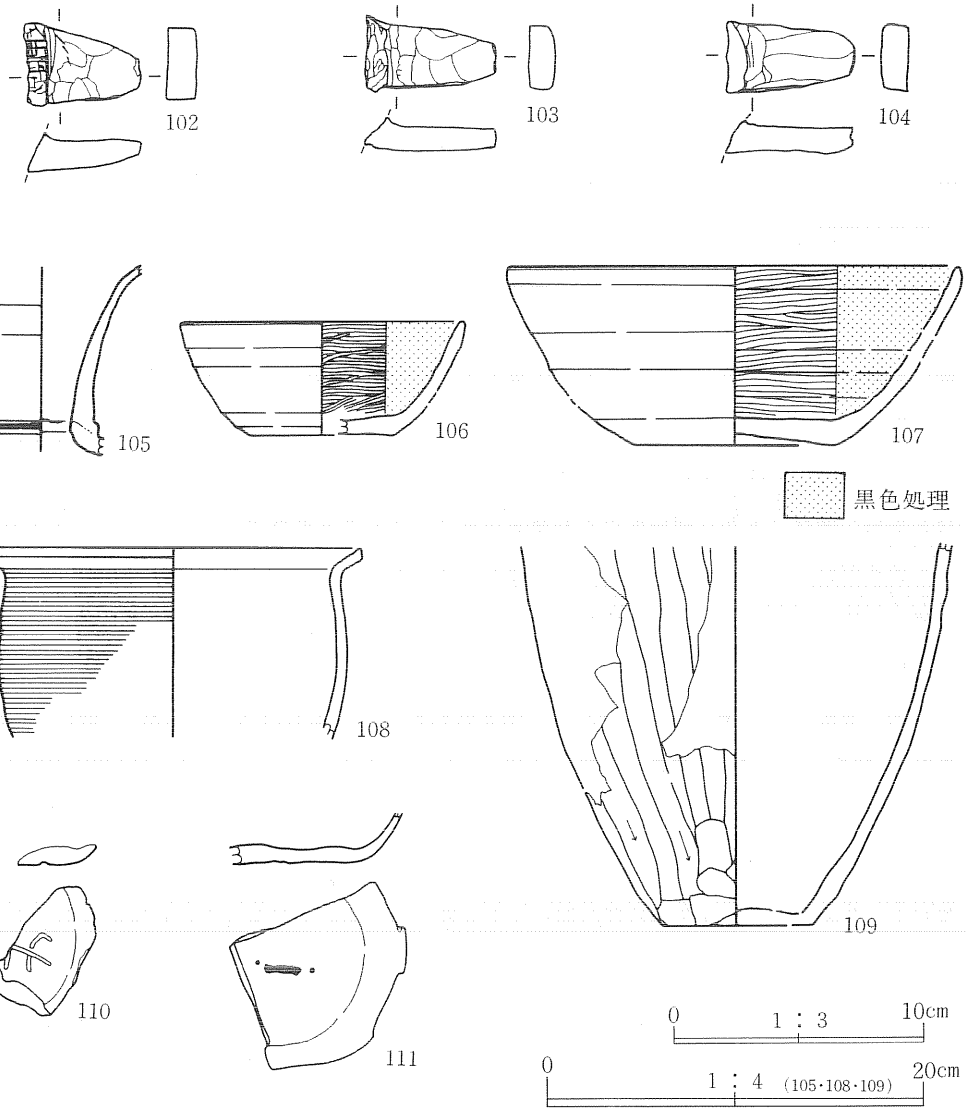
第40図　遺構外出土遺物(1)

後者はＳＩ32と、この南東約12mに位置するＳＪ14平窯の間の区域Ⅰ・Ⅱ層で見つかっている。後者出土の土師器には、坏、埦、甕があり、内面を黒色処理した坏、埦２個体（106、107）はここで検出されている。また須恵器の耳坏の耳部は８点確認されているが、内５点はＳＪ01灰原出土で、残り３点（102～104）の内２点は本区域から出土している。

110は、昨年の範囲確認調査時に出土した土師器坏の底部破片である。出土位置はＳＪ01灰原南側に設定したトレンチ内である。底部には、その一部が欠落し判読できないが篦書文字が認められる。横画２本の後縦画を引いている。

101は、遺跡東端21Ｇ02グリッドⅠ層出土の凝灰岩を素材とする砥石である。図示面と両長側面の３面を使用している。裏面は欠損し、重量298ｇである。

この他、近世以降と見られる遺物も少量出土している。陶磁器類は遺跡北側Ⅰ層で、１点出土した古銭（寛永通宝）は、ＳＪ01灰原上面でそれぞれ確認している。



番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
102	須・双耳坏	21I02	—	—	—	—	耳部	20
103	須・双耳坏	21G18-II	—	—	—	—	耳部	18
104	須・双耳坏	21H17-I	—	—	—	—	耳部	23
105	須・長頸壺A	21I06・08-II	—	—	—	—	破片	82
106	土・坏BO	21H18-I	11.1	5.7	—	4.5	1／3	内黒　25
107	土・坏BO	21H17-I	17.7	7.8	—	7.2	2／3	内黒　26
108	須・小甕Aa	21I02-I	20.0	—	—	—	破片	88
109	土・甕	21H18・19	—	8.2	—	(20.2)	1／3	91
110	土・坏	範囲確認調査時トレンチ	—	—	—	—	破片	筮書土器「写」—
111	須・坏A0	SK07	—	—	—	—	破片	墨書土器「写」—

第41図　遺構外出土遺物(2)

第3章　小　　結

富ヶ沢A窯跡の調査で検出された遺構の内訳は、平安時代の須恵器窯跡1基、平窯跡2基、竪穴住居跡1軒、土坑2基、溝状遺構6条、時期不明の土坑22基、フラスコ状土坑1基である。

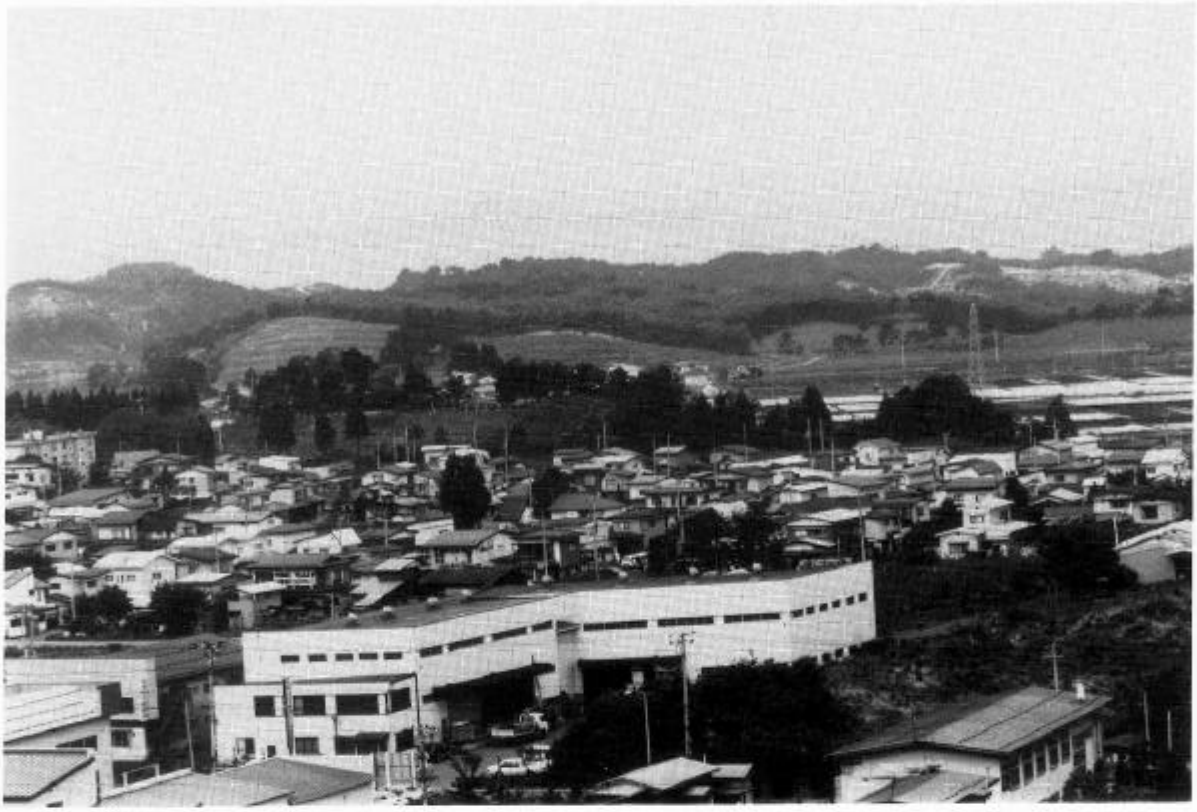
須恵器窯跡は、全長363cmと比較的小規模なものであったが、その構造を解明する上で大きな成果を得ることができた。窯跡は、調査区内の最も急な斜面を利用し、地山を掘り込んだ半地下式のものである。半地下式の窯は、天井部を別に造るわけであるが、その際に窯の上部に細い木材を使って骨組みを行ったものと推測されている。調査では、骨組みの木材を突き刺したと思われる痕跡と炭化した材を検出することができたわけである。この痕跡は、焚き口にあたる部分で同じ位置に複数検出されていること。さらに、前庭部がつくり替えられていたことなどから、窯体（天井）部分もつくり替えられているものと推測される。

須恵器窯跡の周囲から検出された溝状遺構については、その性格に不明な部分が多い。溝状遺構は、窯跡の周囲に限って検出されており、それ以外には認められない。このことから、溝状遺構と須恵器窯跡との関係が推測される程度である。

窯内、灰原とその周辺出土の遺物は、須恵器坏類（坏、高台付坏、双耳坏）、蓋類（坏蓋、壺蓋）、壺類（長頸壺）、甕類（中甕、小甕）、横瓶などがある。重量から見て坏類、特に無台の坏を主に生産していたことが推定できた。

時期不明とした土坑22基のうち、ＳＫ25、ＳＫ27を除く20基は、円筒形を呈するものであり、その中の6基については底面に柱穴様ピットを伴っている。このピットからは逆茂木として用いたと推測される木材を検出している（ＳＫ24）。この点から、底面にピットを有する土坑の性格を狩猟用の陥し穴とすることができるであろう(註)。この他の円筒形の土坑については、底面にピットを有しないものの、分布、形態、埋土等に類似点が多く、陥し穴と推定される。但し、土坑内から遺物は出土していないことから、時期の特定は不可能であった。

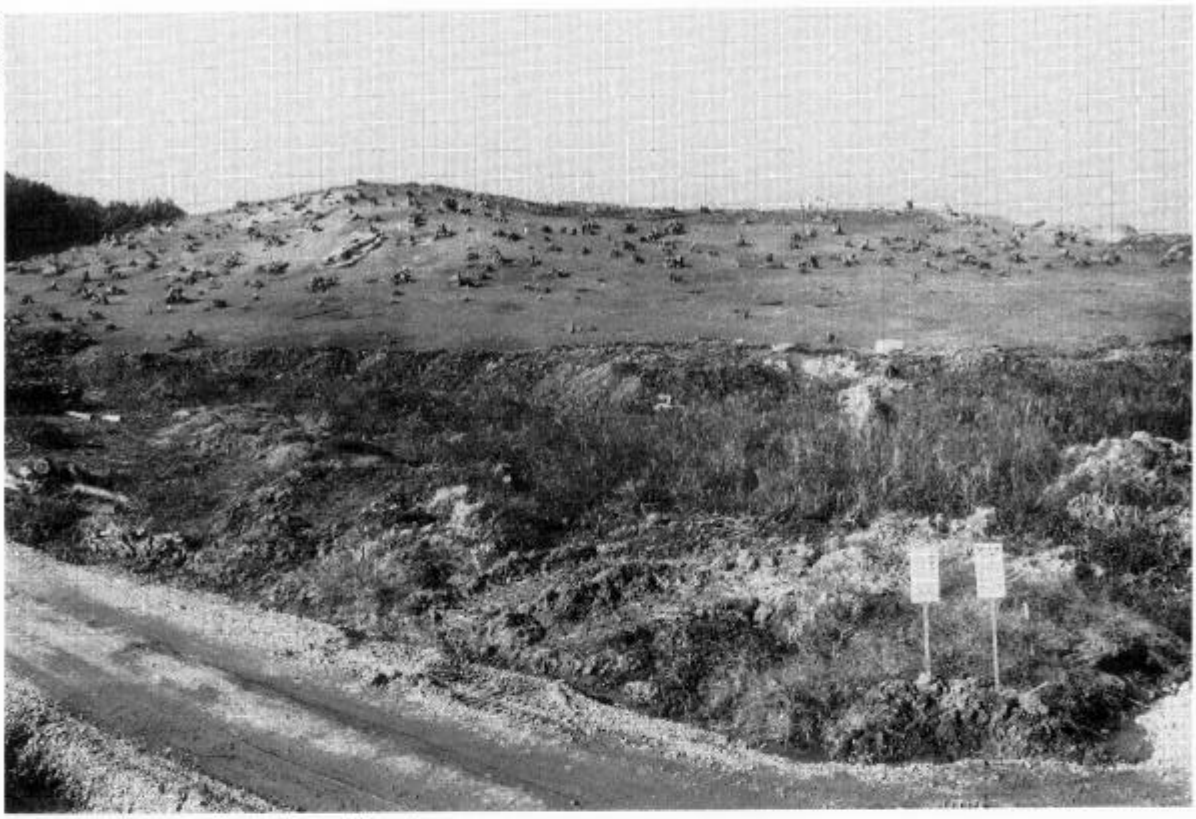
（註）石岡憲雄『「Ｔピット」について（再論）』埼玉考古学論集（1991）では、坑底ピットの棒状痕について、棒状埋設物に槍のような殺傷能力が認められないとして、坑口を覆う蓋や格子の支柱としての機能を示唆している。



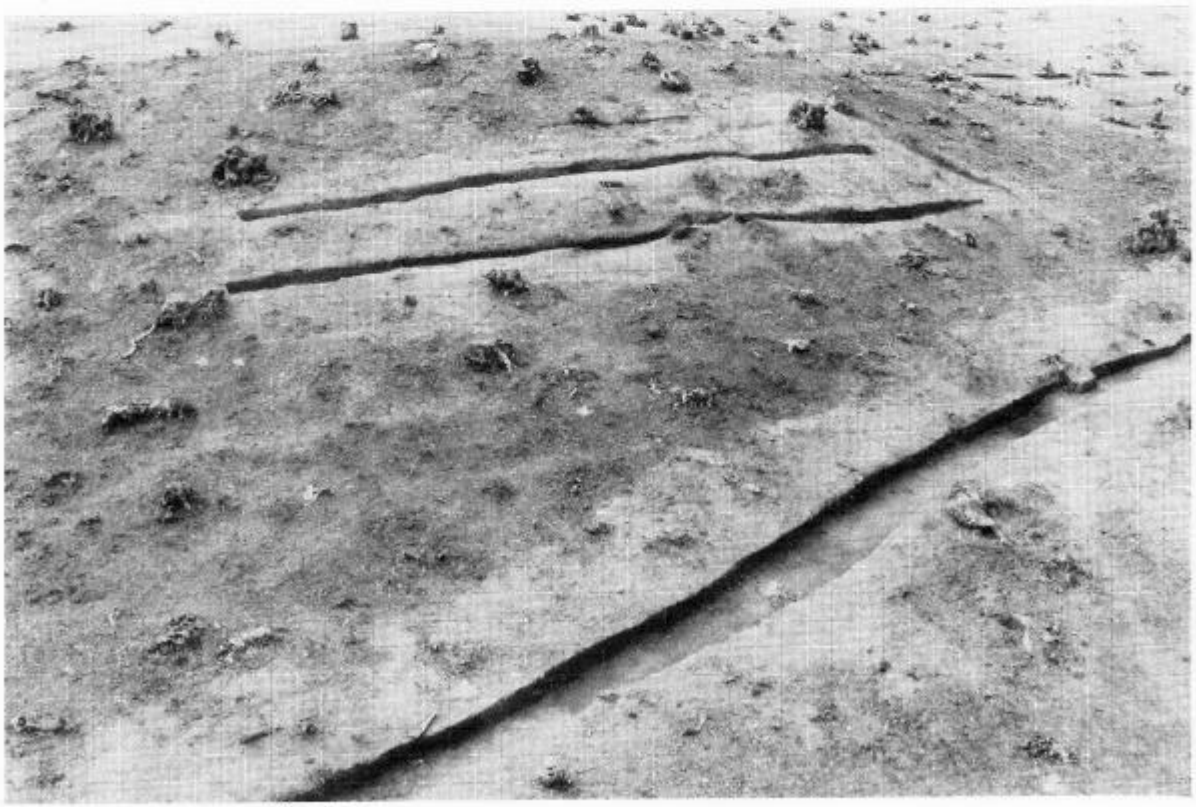
秋田ふるさと村地内遺跡群遠景（東→）

富ヶ沢A窯跡　調査前全景（東→）

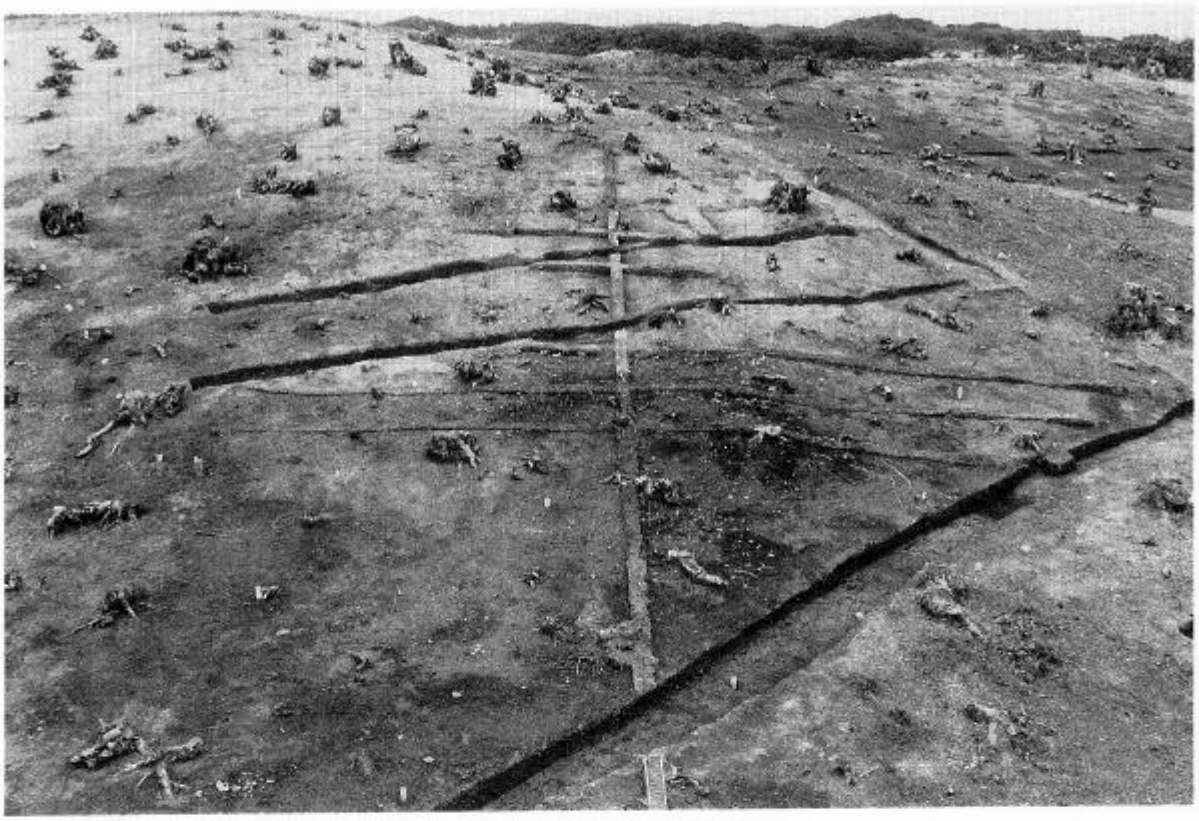
図版2



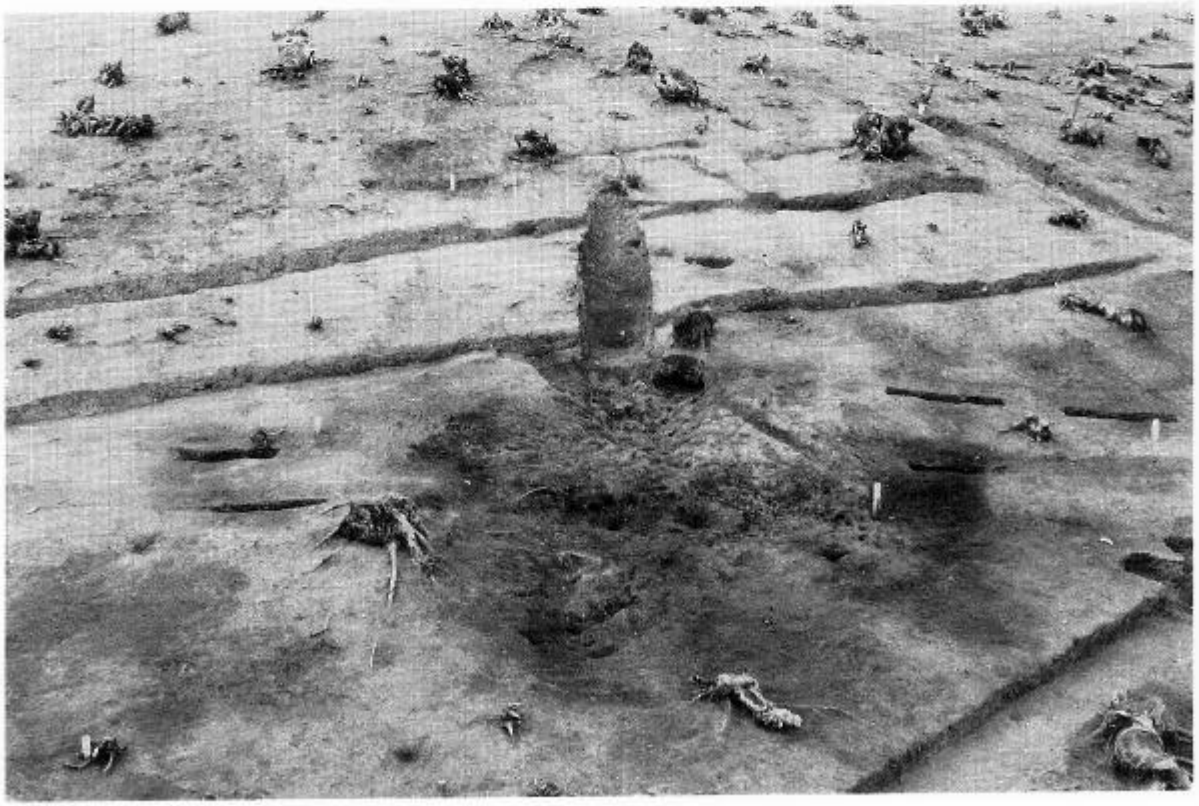
富ヶ沢A窯跡　調査後全景（東→）



SJ01　調査前状況（東→）



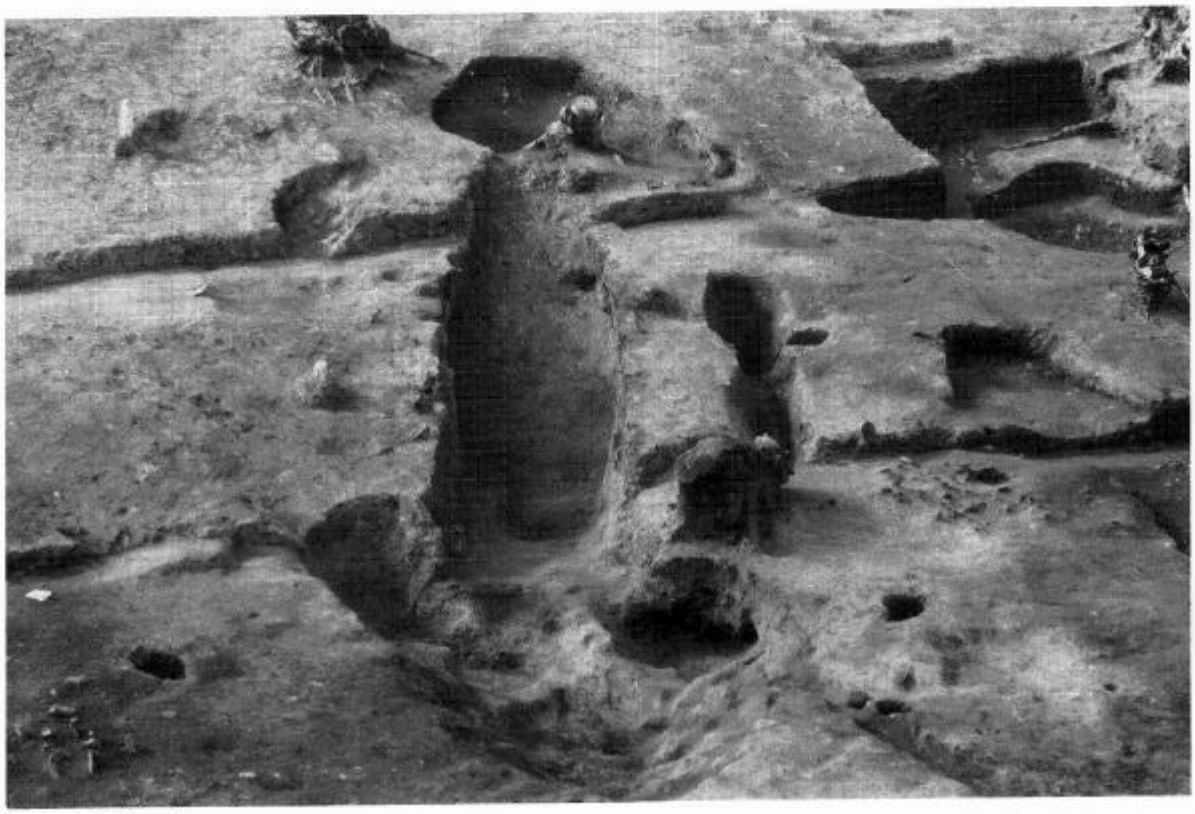
ＳＪ01灰原　遺物出土状況（東→）



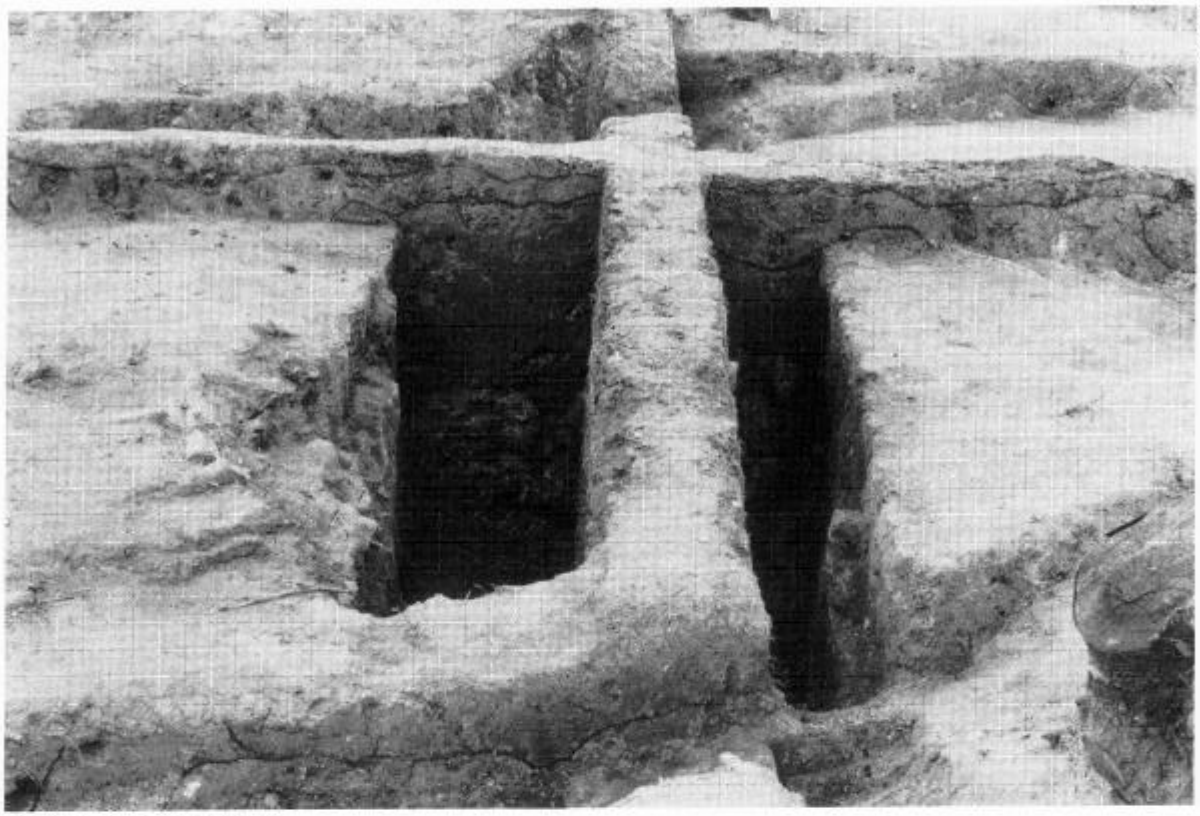
ＳＪ01　完掘（東→）

図版4

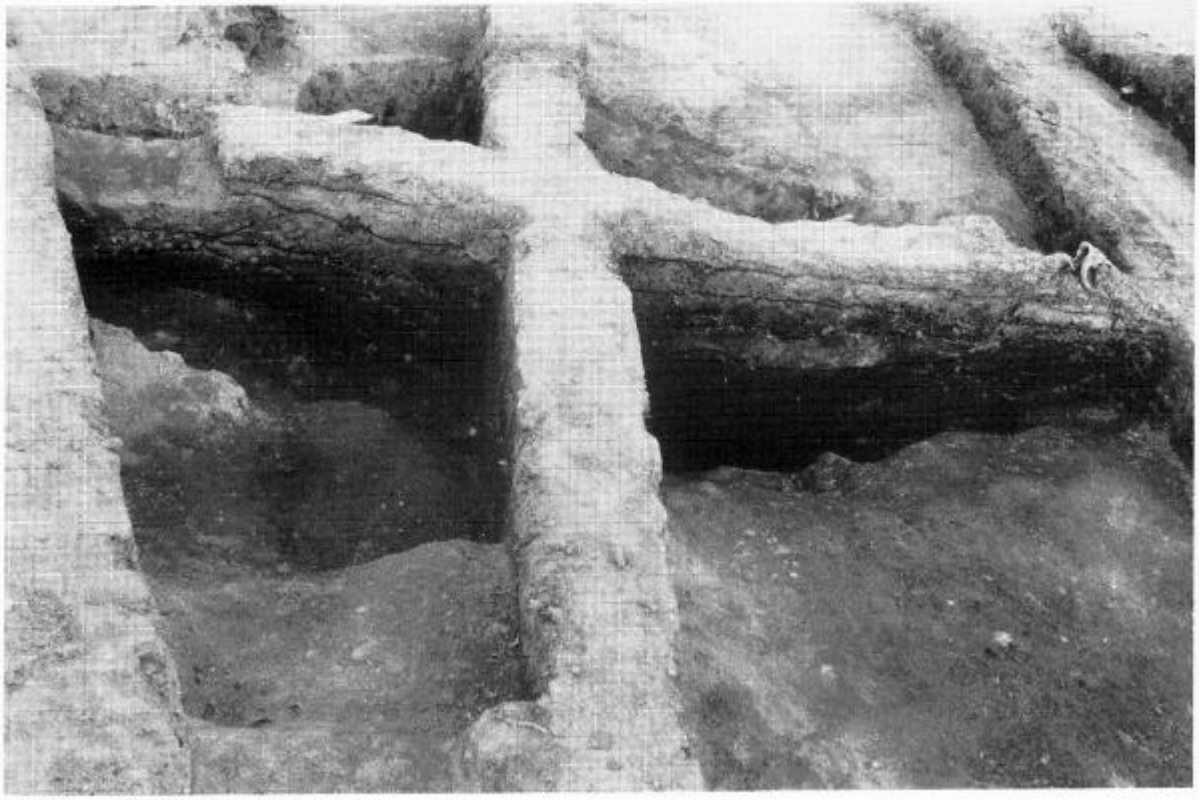
S J01　窯体及び周辺部完掘（南東→）



同上（南東→）

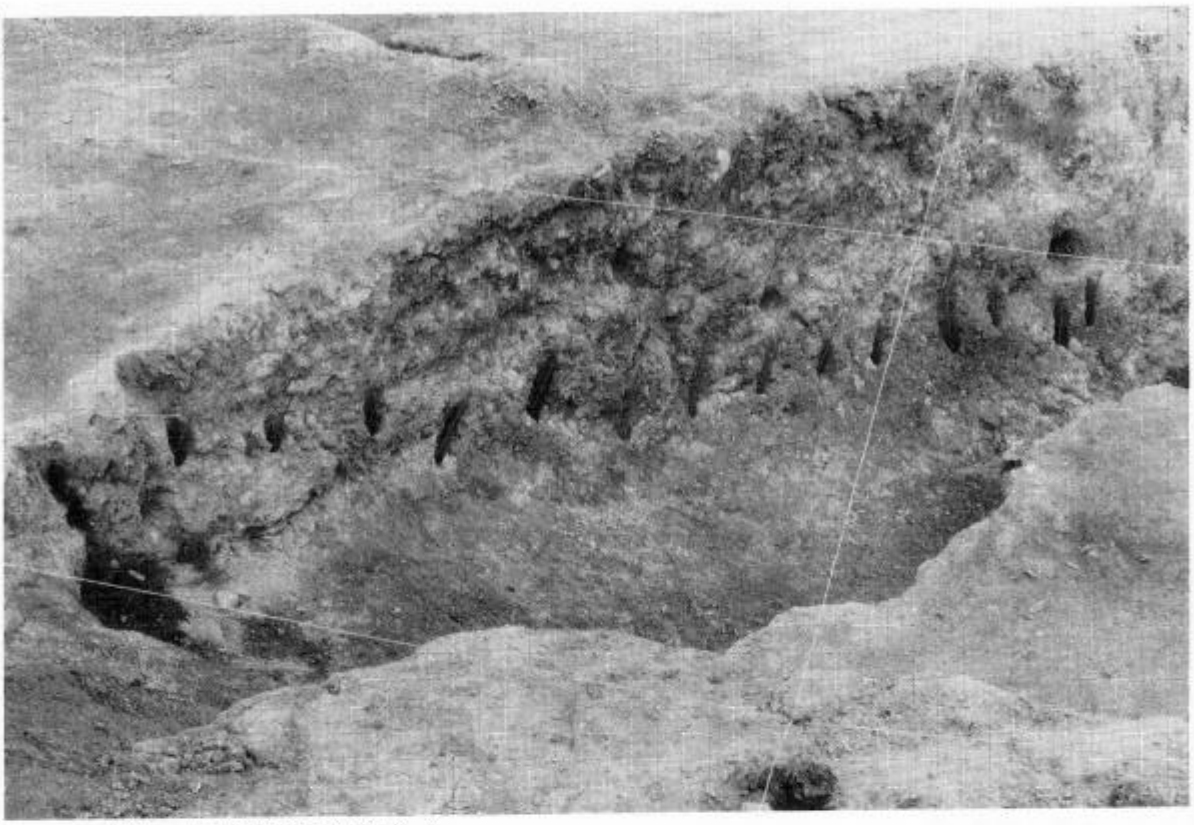


ＳＪ01　土層（南東→）

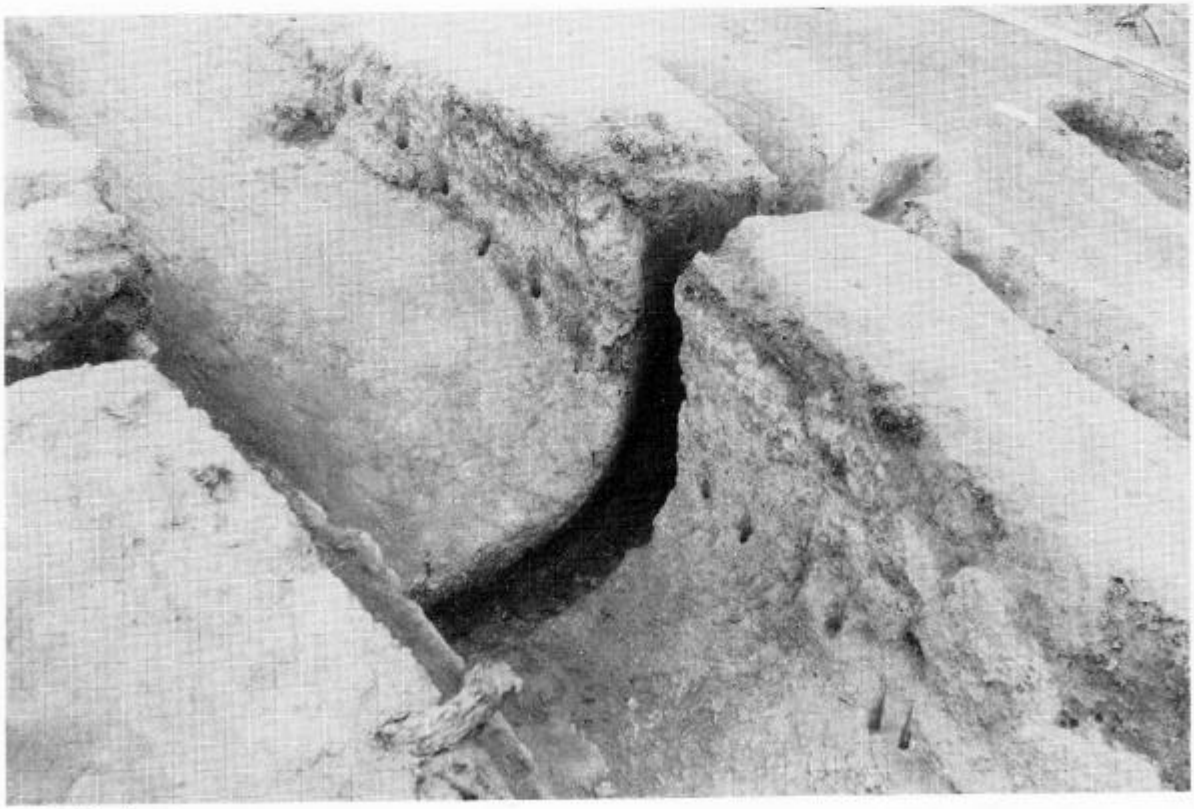


ＳＪ01　前庭部土層（南西→）

図版6



ＳＪ01　側壁の架構材痕跡（北東→）



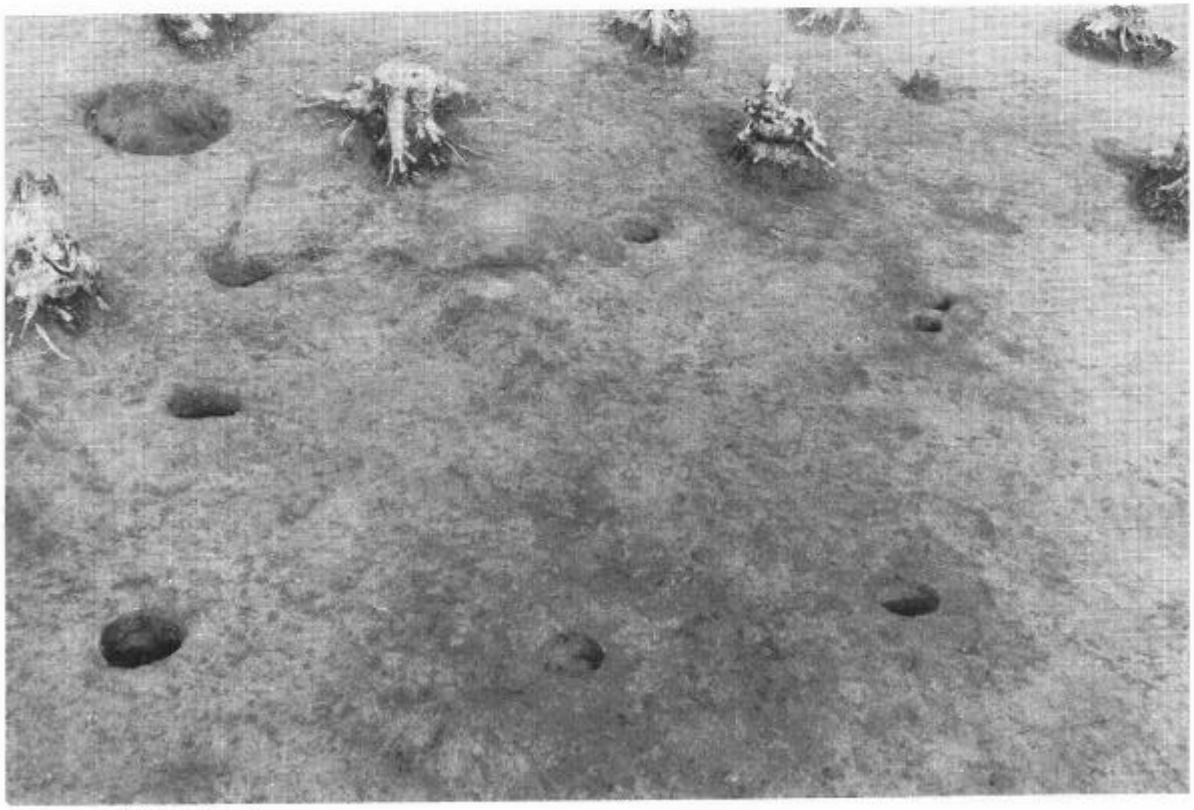
同上（南東→）

S J 04　完掘（南東→）

同上土層（北→）

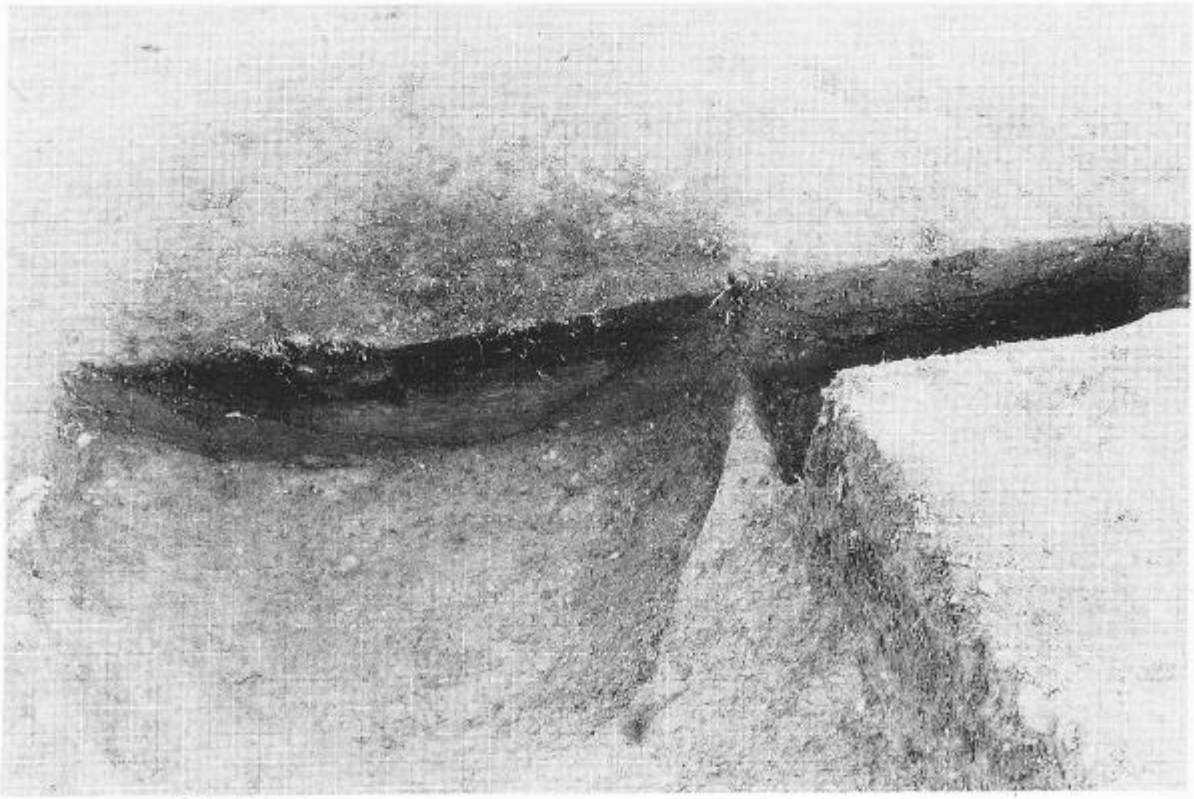
図版8

ＳＪ14　完掘（東→）



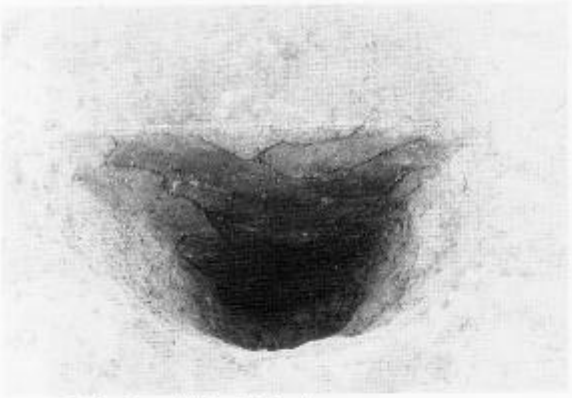
ＳＩ32　完掘（南→）

S K07　完掘（北→）

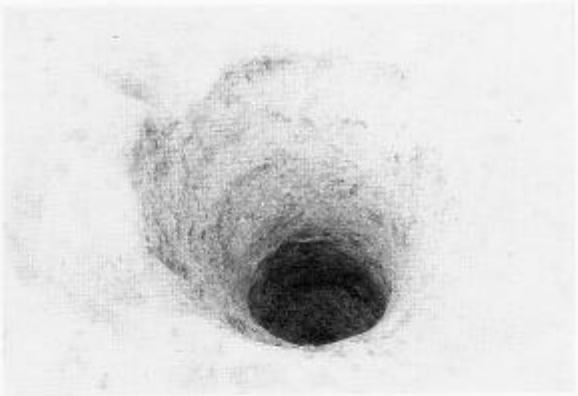


S K07・08　土層（西→）

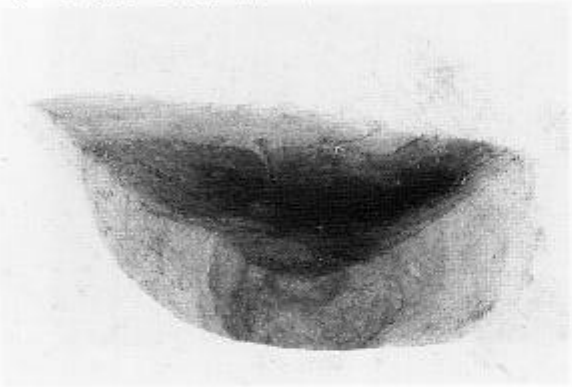
図版10



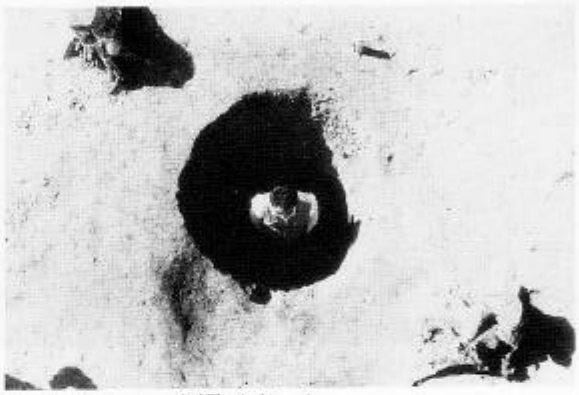
1　ＳＫ10　土層（南→）



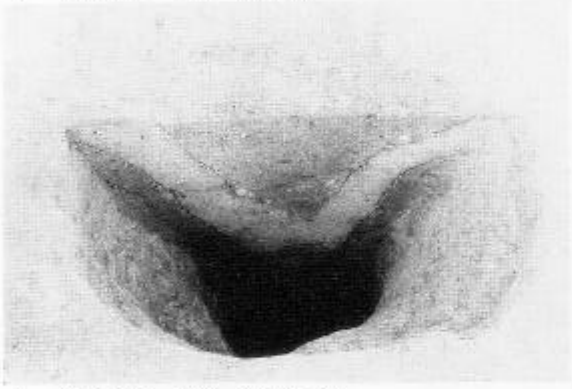
2　ＳＫ10　完掘（南→）



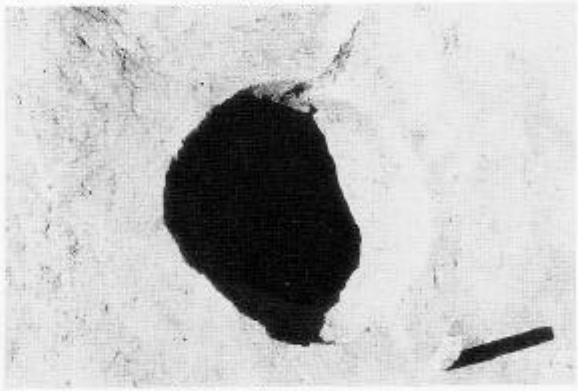
3　ＳＫ11　土層（南→）



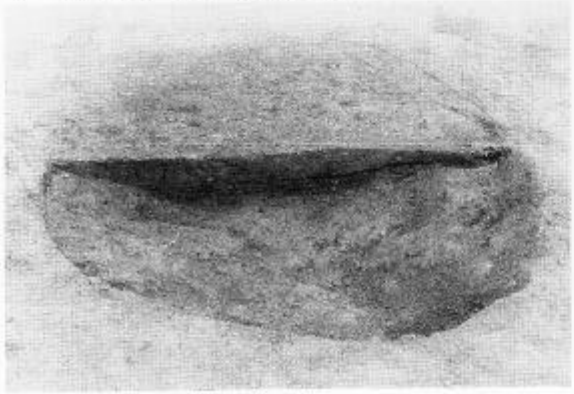
4　ＳＫ11　完掘（東→）



5　ＳＫ12　土層（南東→）

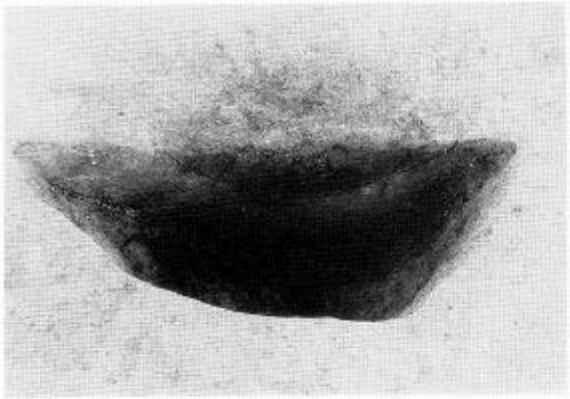


6　ＳＫ12　完掘（東→）

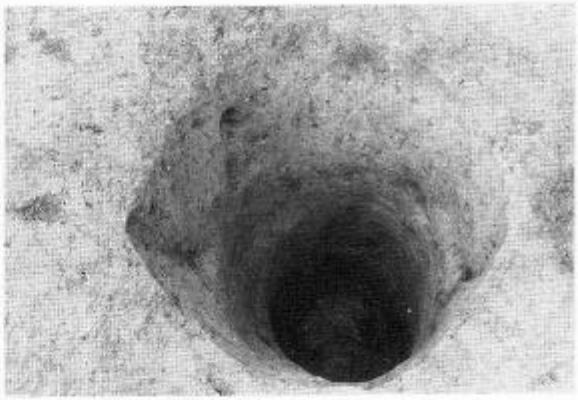


7　ＳＫ13　土層（南→）

8　ＳＫ13　完掘（東→）



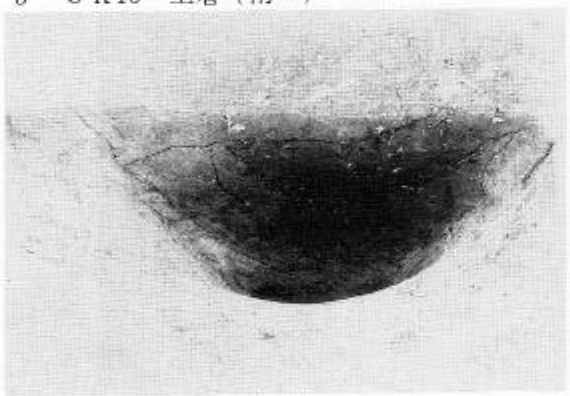
1　SK15　土層（南→）



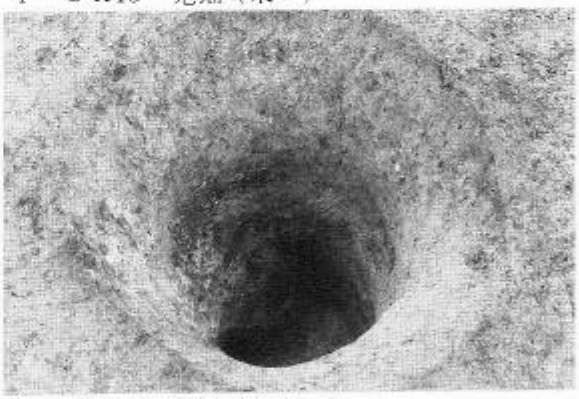
2　SK15　完掘（東→）

3　SK16　土層（南→）

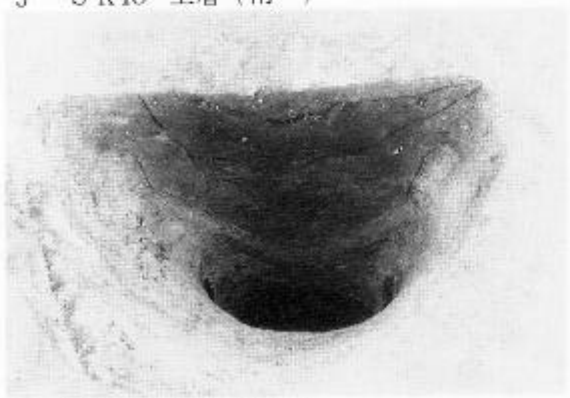
4　SK16　完掘（東→）



5　SK18　土層（南→）



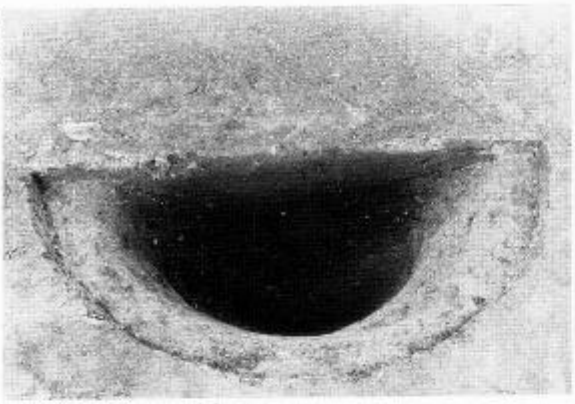
6　SK18　完掘（北東→）



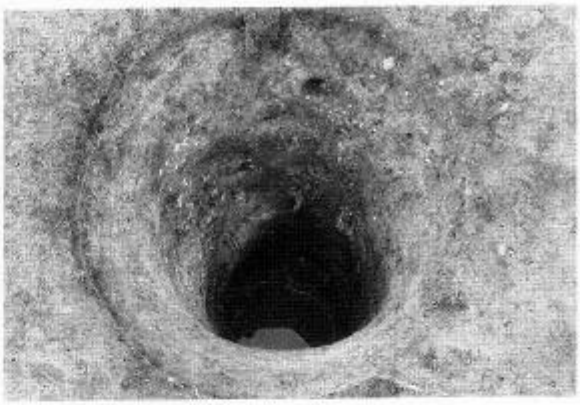
7　SK19　土層（南→）

8　SK19　完掘（東→）

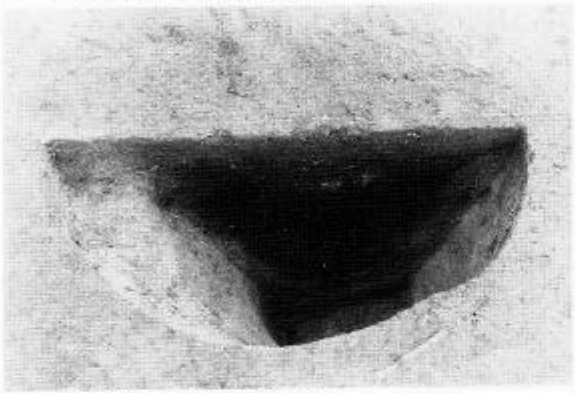
図版12



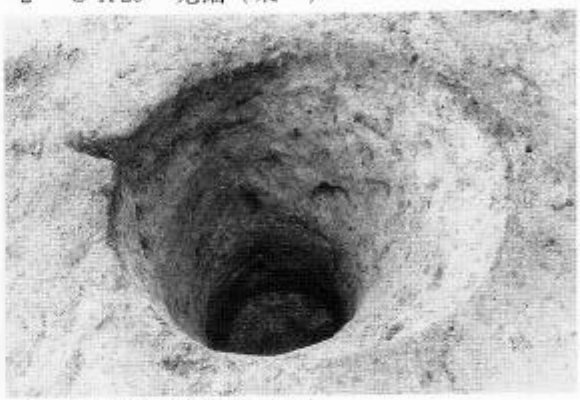
1　ＳＫ20　土層（南→）



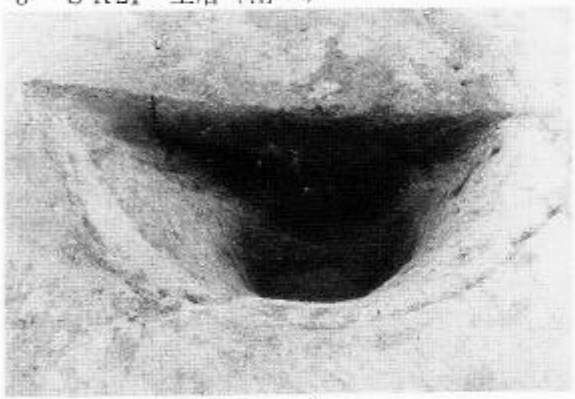
2　ＳＫ20　完掘（東→）



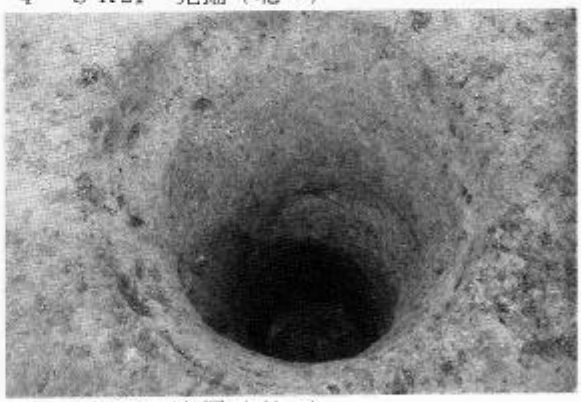
3　ＳＫ21　土層（南→）



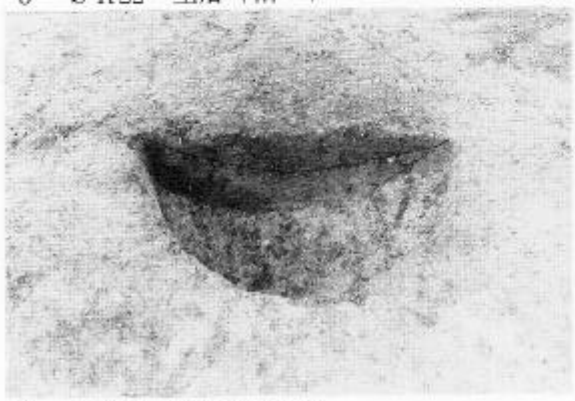
4　ＳＫ21　完掘（北→）



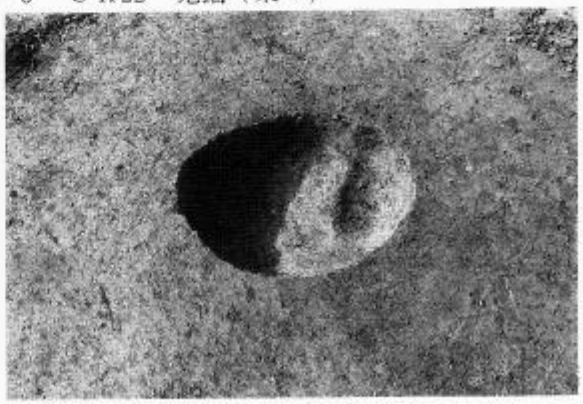
5　ＳＫ22　土層（南→）



6　ＳＫ22　完掘（東→）



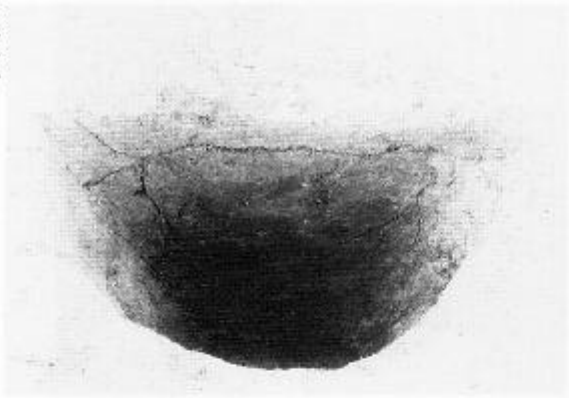
7　ＳＫ25　土層（南→）



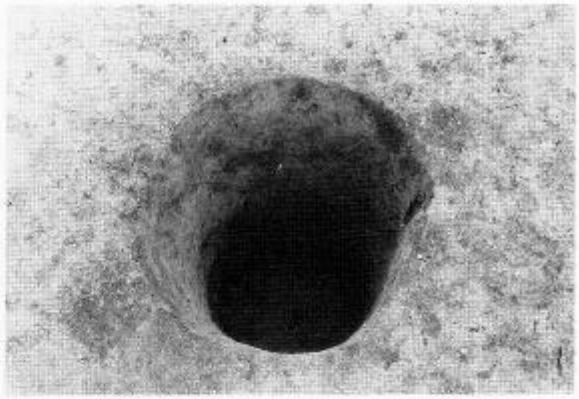
8　ＳＫ25　完掘（東→）

ＳＫ24　完掘（上：北→）、底面の木材出土状況（中：西→）、土層（下：東→）

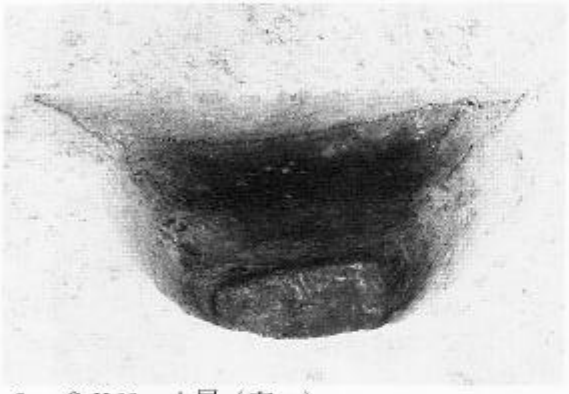
図版14



1　ＳＫ26　土層（東→）

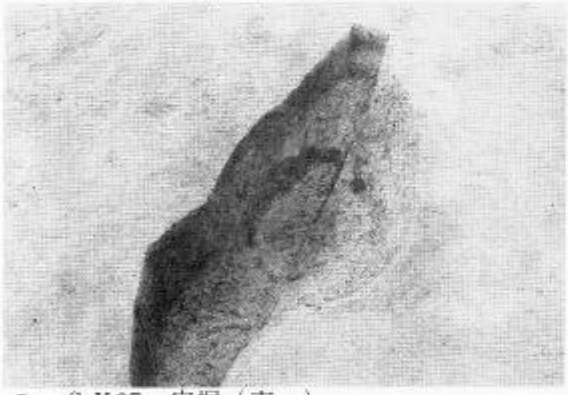


2　ＳＫ26　完掘（東→）

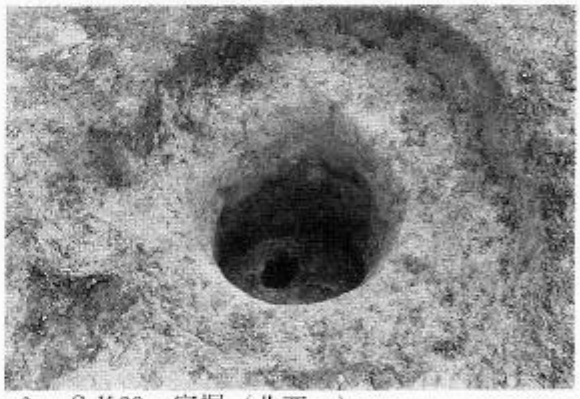


3　ＳＫ28　土層（南→）

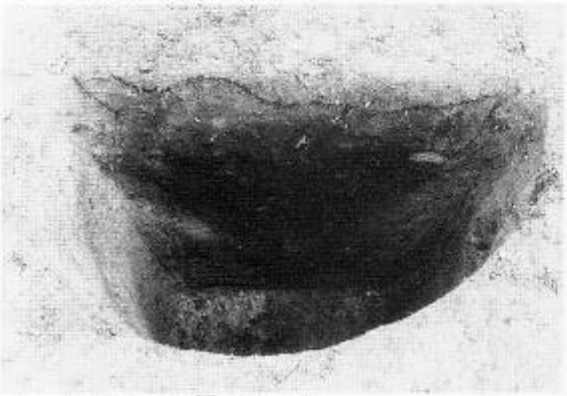
4　ＳＫ28　完掘（南→）



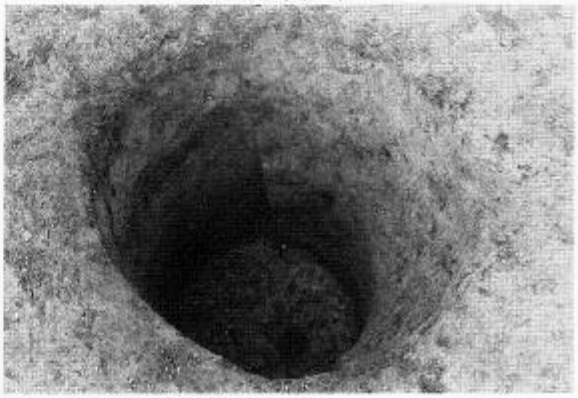
5　ＳＫ27　完掘（東→）



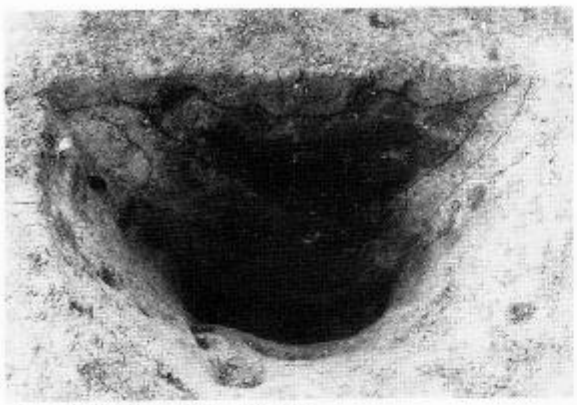
6　ＳＫ29　完掘（北西→）



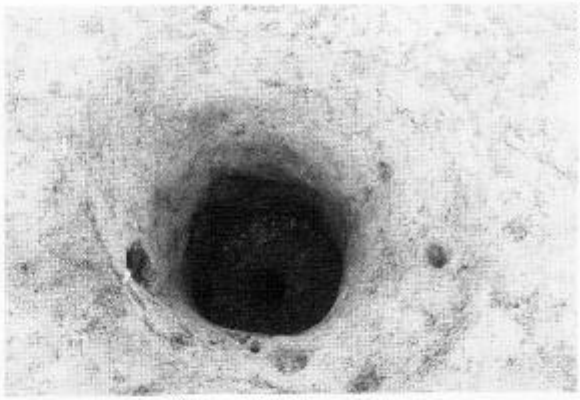
7　ＳＫ30　土層（南→）



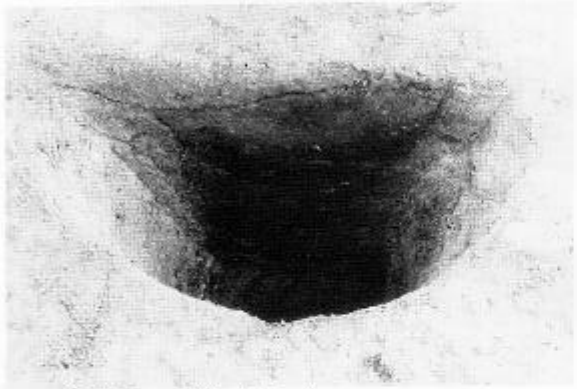
8　ＳＫ30　完掘（東→）



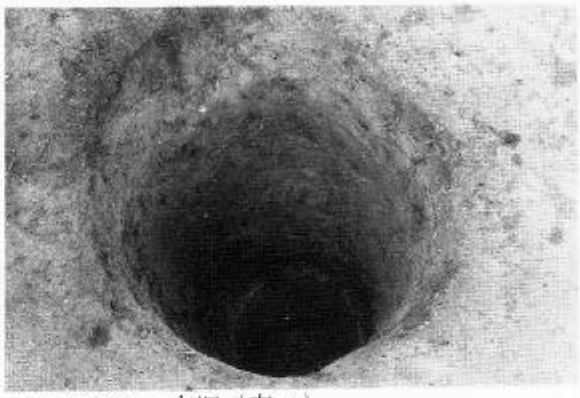
1　ＳＫ31　土層（南→）



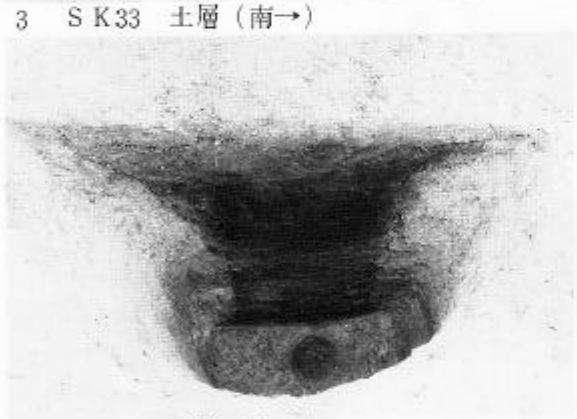
2　ＳＫ31　完掘（南→）



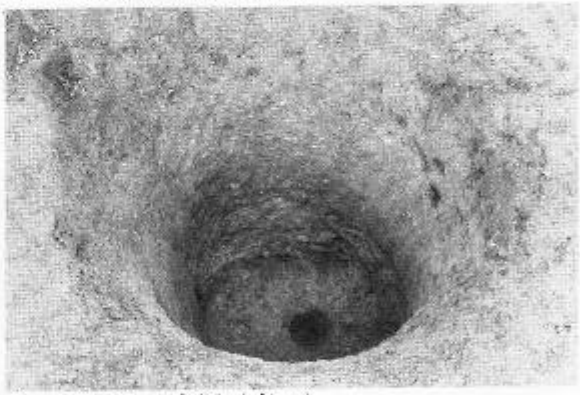
3　ＳＫ33　土層（南→）



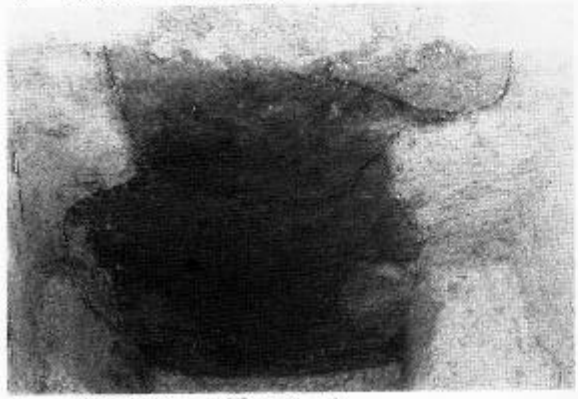
4　ＳＫ33　完掘（東→）



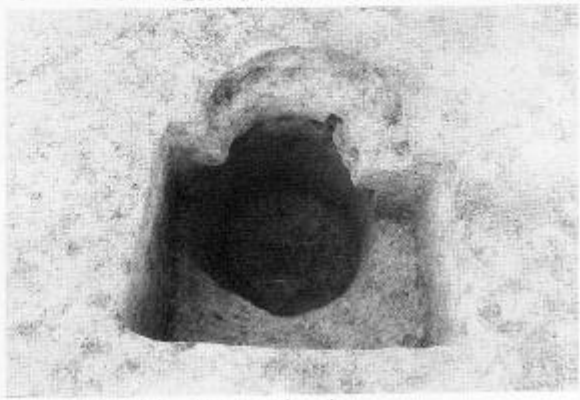
5　ＳＫ34　土層（南→）



6　ＳＫ34　完掘（東→）

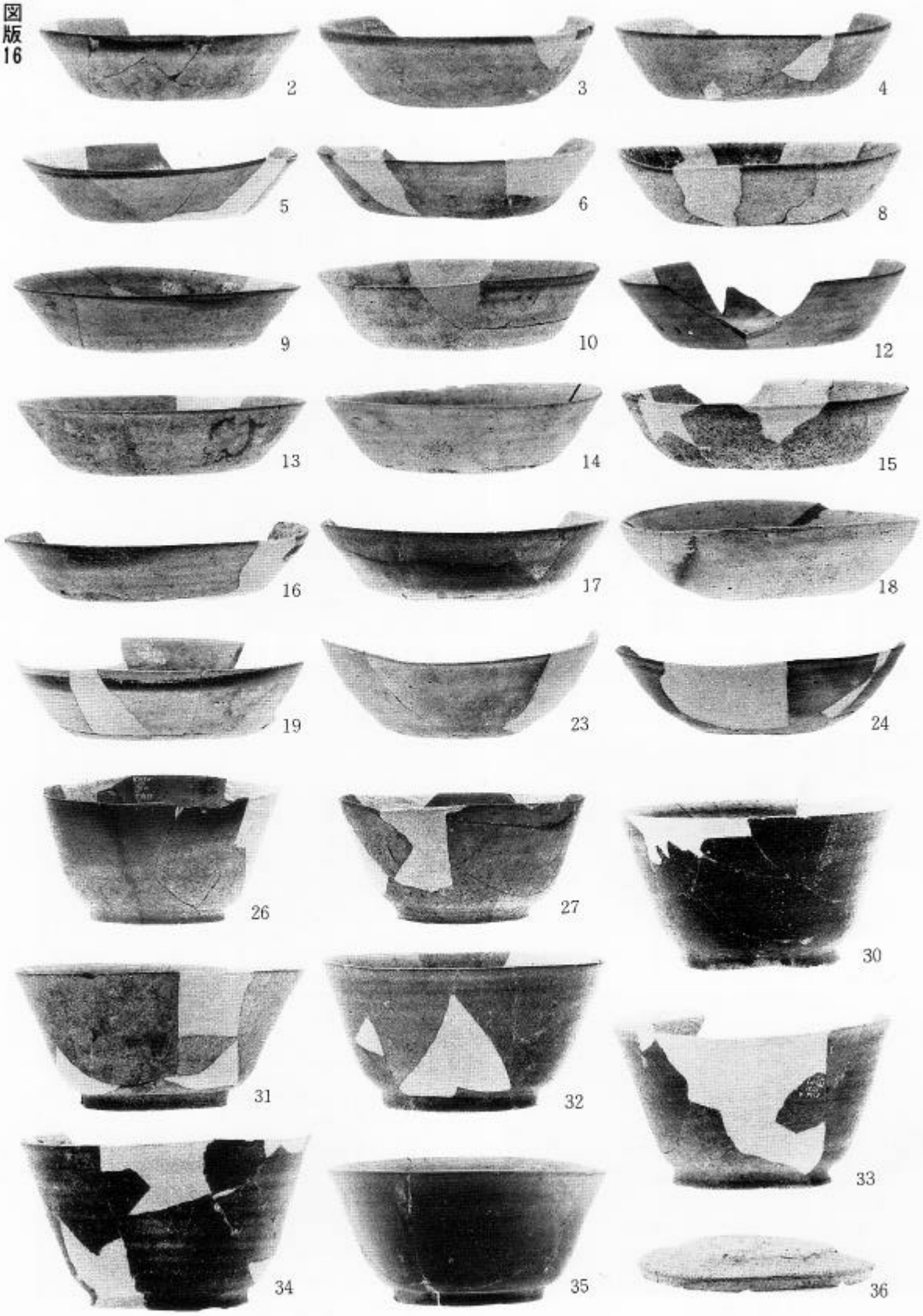


7　ＳＫＦ17　土層（東→）



8　ＳＫＦ17　完掘（東→）

図版16

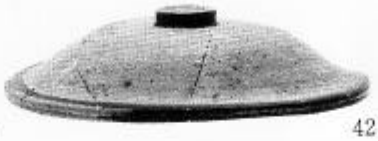


38

39

40

41


42

43

44

45

46

47

48

49

52

51

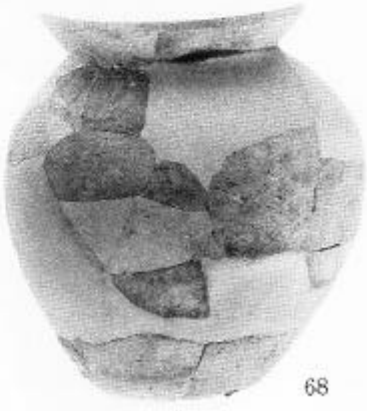
62

63

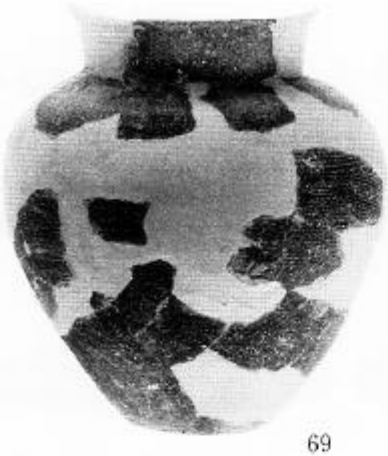
64

65

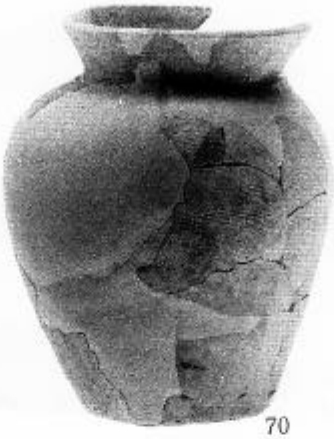
67


68

図版18



69



70

71

72

74

75

76

77

111

110

III　富ケ沢B窯跡

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

富ヶ沢Ｂ窯跡は、南北に延びる細長い丘陵の南端、この丘陵を取り囲むように北側から延びる２つの自然谷の分水嶺南西斜面に位置する。「秋田ふるさと村（仮称）」建設予定区域ではほぼ中央に位置することになる。標高72～85ｍの南西向き斜面の上半はかなりの急傾斜であるが、下半は緩やかな傾斜となっている。須恵器窯跡は斜面上半に構築され、灰原は傾斜の変換する区域に形成されていた。緩斜面の下方には小さな湧水が幾つか点在し、そこから溢れでた水が流路を作っている。この流路の下方（北西側）の自然谷には厚さが４ｍ以上の良質な粘土が堆積している。

遺跡の基本土層は、第Ⅰ層：黒褐色表土層、第Ⅱ層：褐色漸移層、第Ⅲ層：地山である。第Ⅰ層と第Ⅱ層の厚さは、第Ⅰ層が５～10cm、第Ⅱ層が12～20cmであるが、緩傾斜面では層厚を増す傾向にある。

第２節　調査の方法と経過

ふるさと村建設工事用の杭が20m方眼で打設されているので、その杭をそのまま大グリッド杭に利用することにした。この20m×20mの大グリッドの中に４ｍ×４ｍの中グリッドを設定した。遺物の取り上げは、このグリッドを基準に行うこととしたが、特に灰原については、中グリッドをさらに１ｍ×１ｍのグリッドに16区分して、南東隅を出発点として南から北に、東の列から西の列に順にＡ～Ｐのアルファベットを付した小グリッドを設定した。灰原の遺物は、表面から削土して遺物が面的に出土したところで小グリッド毎に収納し、そのときの遺物下面のレベルで等高線図を作成し、これをレベル１（以下Ｌ１とする）と表現した。これを遺物が出土しなくなるまでＬ12、Ｌ13、・・・Ｌ16と続けることとした。

調査は、須恵器窯体部の構築法を明らかにすることに重点を置いて行った。それとともに、灰原の広がりとその遺物の出土状況を記録することにより、遺物の時間的な移り変わりをとらえることを目的とした。そこで、窯体部の図上での復元を容易にするため、土層観察用ベルトをなるべく多く設定した。また、半地下式構造の窯の場合、天井部の架構方法に不明な点が多いので、天井部架構材と側壁の構築方法の精査に慎重を期した。

調査の記録は、図面の作成と写真による記録を行った。作成図面の縮尺は、20分の１ないし10

分の１としたが、登窯の調査前の地形測量図は50分の１で行った。

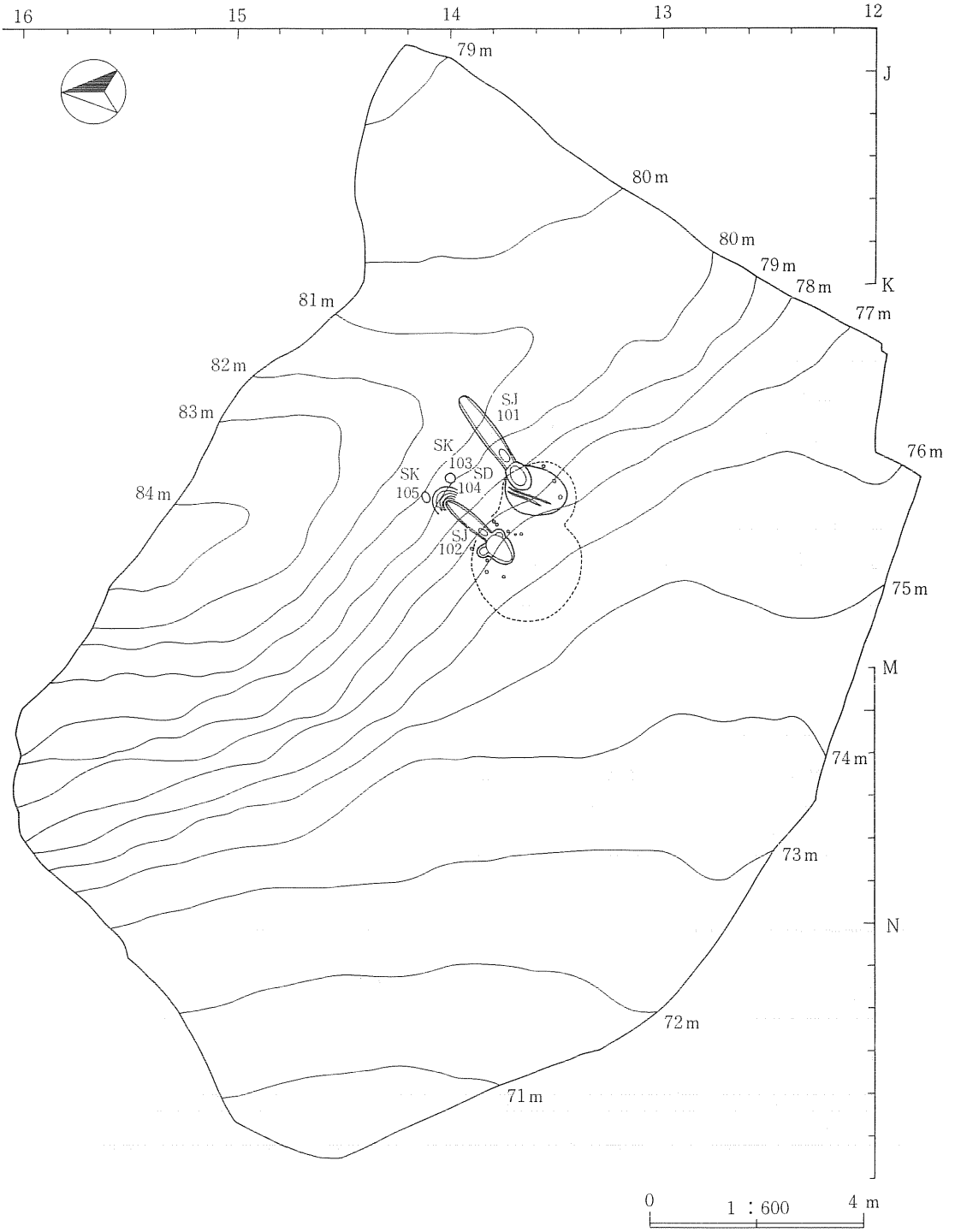
調査は、概ね以下のような経過で行われた。

５月９日に発掘調査前の全景写真を撮影した。５月23日からNo.12ラインを基準線として東西10ｍ毎の地形測量用の杭打ちを31日まで実施した。また、下草刈りを６月４日まで実施した。現地形での観察では窯体は斜面の傾斜に沿って溝状に落ち込み、その下方に地面の高まりが見られた。６月１日にＢＭ２からレベル原点を移動。５日に下草等を除去して全景写真を撮影した。11日から13日まで現地形の測量を行った。また、範囲確認時のトレンチを掘り返してプラン確認に努めたが灰原上を通っているため、それより上方の斜面に範囲確認時のトレンチと平行するトレンチを設定し、窯体２基（ＳＪ101、ＳＪ102）を確認した。15日になって、東側のＳＪ101窯より下方に、西側のＳＪ102窯の煙出口があることが判明したが、ＳＪ101窯とＳＪ102窯の新旧関係は不明であった。28日にトレンチを精査したところ、12Ｌ、12Ｍ、13Ｍ、13Ｋ、14Ｊ、14Ｋ、14Ｌで須恵器と土師器が少量出土した。

７月３日から粗掘りを開始。20日から窯体区域に実測用杭を１ｍメッシュで打設した。23日に２基の窯体と灰原に土層観察用ベルトを設定し、24日からＳＪ101窯の灰原の精査を開始した（Ｌ１）。27日にＳＪ101・ＳＪ102窯の周囲を粗掘りし、ＳＪ102窯も灰原の精査を開始した（Ｌ１）。８月２日にＬ２（ＳＪ101、ＳＪ102窯とも）、６日にＬ３、９日にＬ４を精査した。20日からＬ５の精査とＳＪ101窯の精査を開始し、窯体内の土層断面図を作成した。24日からＬ６、28日からＬ７の精査を開始した。Ｌ７の下面がＳＪ101窯の灰原の底面であった。29日からＬ８の精査を開始した。30日にＳＪ101窯の窯体掘り下げがほぼ終了した。焚口から推定煙出口までの斜距離は6.5ｍ、前庭部からは、10.5ｍを測る。31日からＳＪ102窯の精査を開始し、窯体内の土層断面図を作成した。また、ＳＪ101窯の内部に残る遺物の出土状況写真を撮影した。

９月１日からＬ９の精査、２日にＳＪ102窯の焚口から前庭部の掘り下げを開始した。４日にＬ10、８日にＬ11、10日にＬ12の精査を開始した。11日からＳＪ101窯の窯体平面図の作成と、Ｌ13の精査を開始した。13日にＬ14とＬ15の精査を開始した。Ｌ15の下面で灰原底面となる。底面に凹凸があり、凹部から出土した遺物をＬ16として扱った。18日からＳＪ102窯の窯体平面図を作成した。21日からＳＪ101窯、ＳＪ102窯の前庭部を精査した。26日にＳＪ102窯の上方に位置するＳＫ103・104土坑を精査したところ、ＳＫ104はＳＪ102窯に付属する溝状の施設で排水用溝か作業用道路かと思われた。21日にＳＪ102窯の完掘写真と、ＳＪ101窯、ＳＪ102窯の完掘後の全景写真を撮影し、調査を終了した。

「秋田ふるさと村」建設予定地内に須恵器窯１基を保存することになり、10月17日にＳＪ102窯を保存のため埋めもどした。



第42図　富ヶ沢Ｂ窯跡遺構配置図

第２章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

１　平安時代の遺構と遺物

富ヶ沢Ｂ窯跡で検出された遺構は、須恵器窯跡２基及びこの周辺に構築された土坑２基、溝状遺構・柱穴状ピットがあり、特に後二者は窯に付属する施設と考えている。また土坑についても埋土の観察から、窯と同一時期の廃棄が想定でき、両者の密接な関係が窺える。

（１）須恵器窯跡

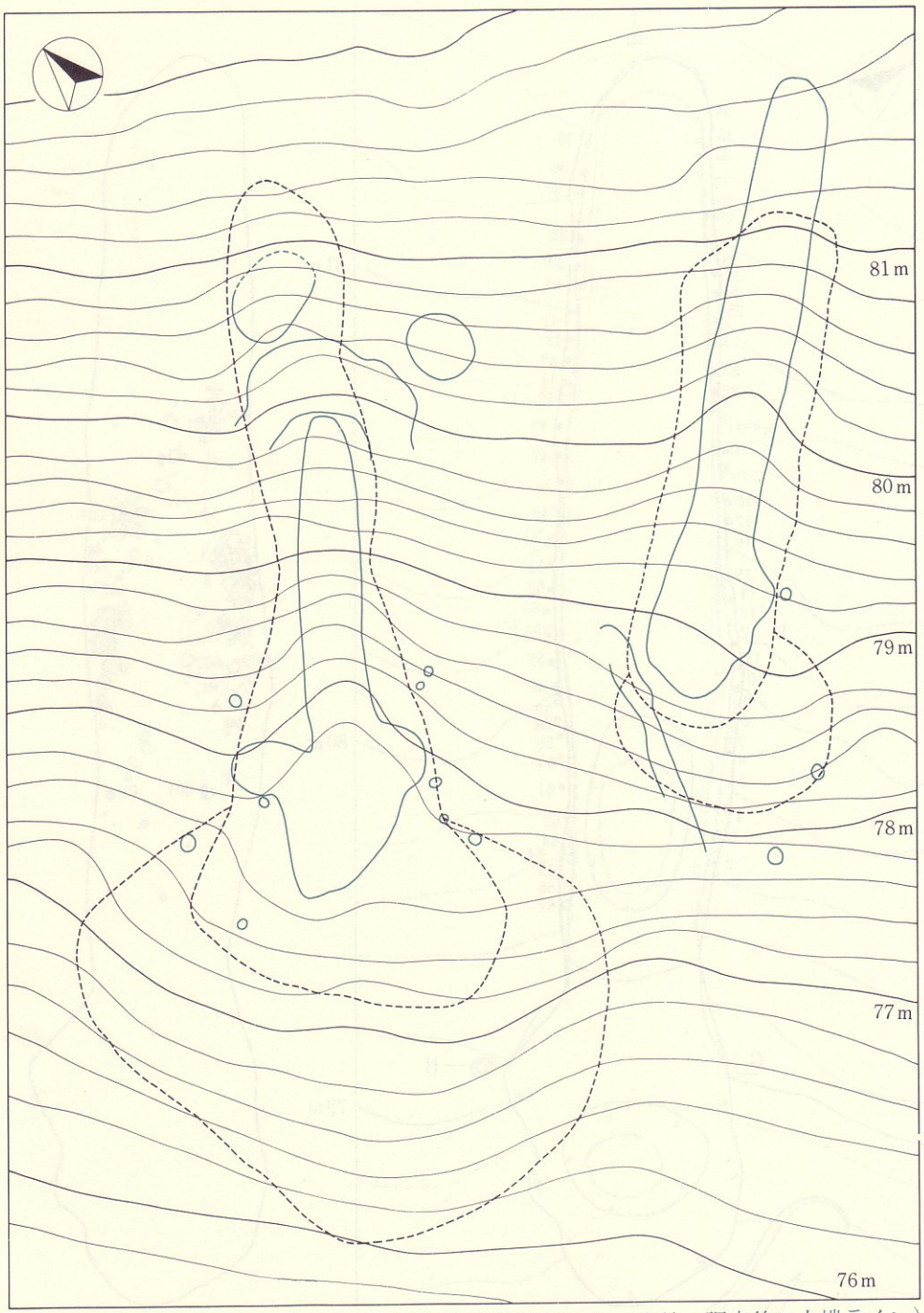
２基の須恵器窯跡ＳＪ101・102は、昨年の範囲確認調査においてその存在が知られており、現状でも２箇所の窯体の窪み（第43図点線部分）と、西側の窯の下方に灰原と考えられる表土の盛り上がりを確認できる。

ＳＪ１０１須恵器窯跡（第43～45図、図版20～25）

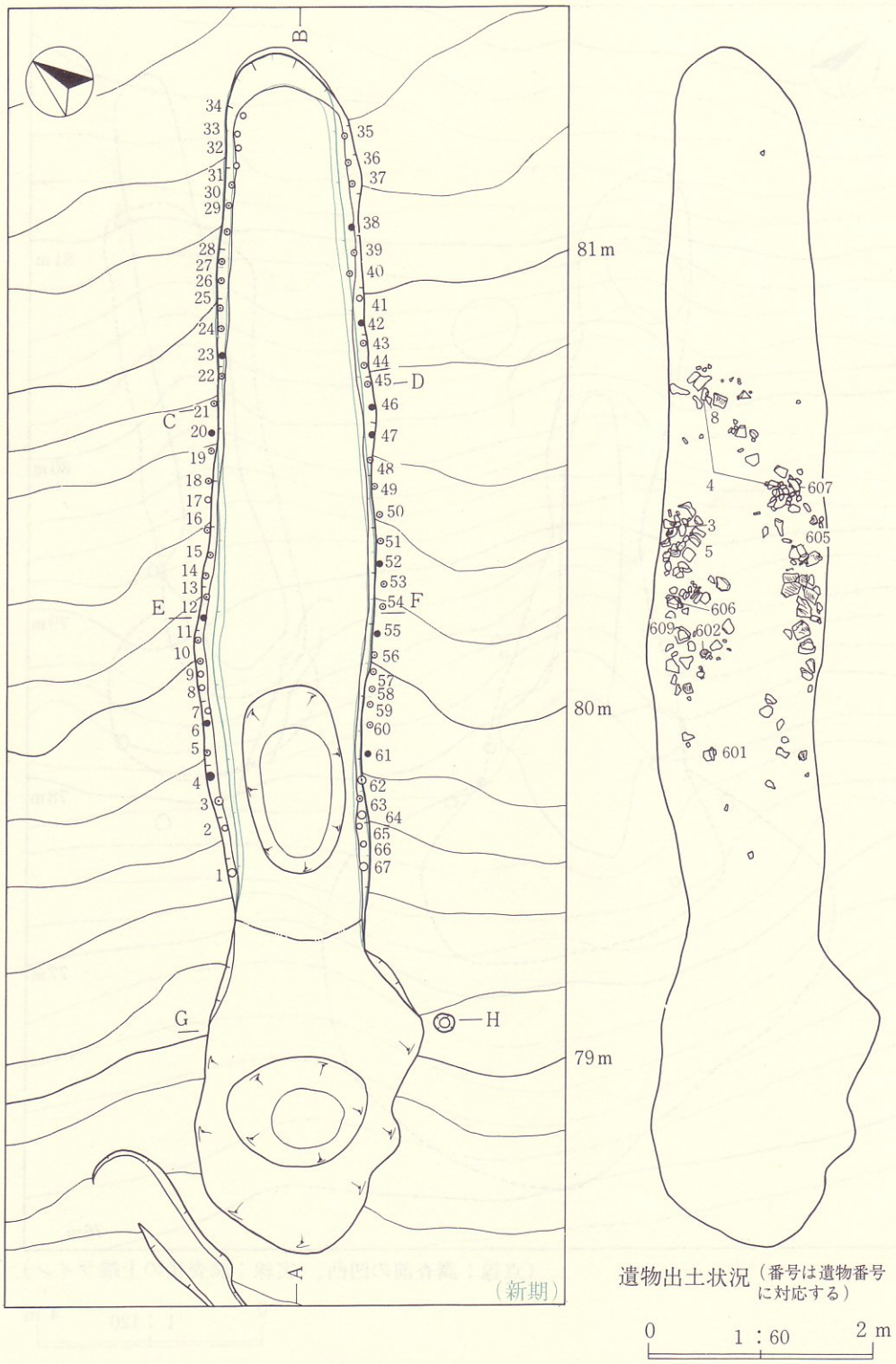
遺跡中央東側、13Ｋグリッド地山面で検出した。西側に隣接してＳＪ102が位置している。確認面での標高は、煙出部分で81.6m、焚口部分で79.3m、比高差2.3mである。窯体は等高線に直交するように構築され、窯中軸線はＮ－54°－Ｅを示す。精査により、壁面は２時期あることが判明した。

窯の規模は、煙出部分から前庭部端までの全長が10.6m、推定される焚口部分までの窯体長は7.8mとなる。窯幅は燃焼部で古期1.4m、新期1.2m、焼成部で古期1.3～1.6m、新期1.1～1.4m、煙出部では古期1.1m、新期１mとなる。新期の窯は、従来の壁の一部分に地山土やスサ入り粘土などを貼って補修・改築しており、古期の窯幅より幾分狭くなっている。ただし、床面は側壁と対応せず１枚であった。煙出～焚口部は床面・側壁ともに還元状態にあり、著しく硬化している。燃焼部にあたる床面には、長さ1.65m、幅0.9mの楕円状に掘り込まれ、この部分のみ還元面が失われている。製品、炭や灰などを取り出す際に窪んだ結果と見ている。焼成部は斜度20°～25°で立ち上がっていく。煙出部はピットなどの上部施設を想起させる遺構は検出できなかったが、煙出先端部から焼成部に向かう30cm程の間の床面は平らとなっている。

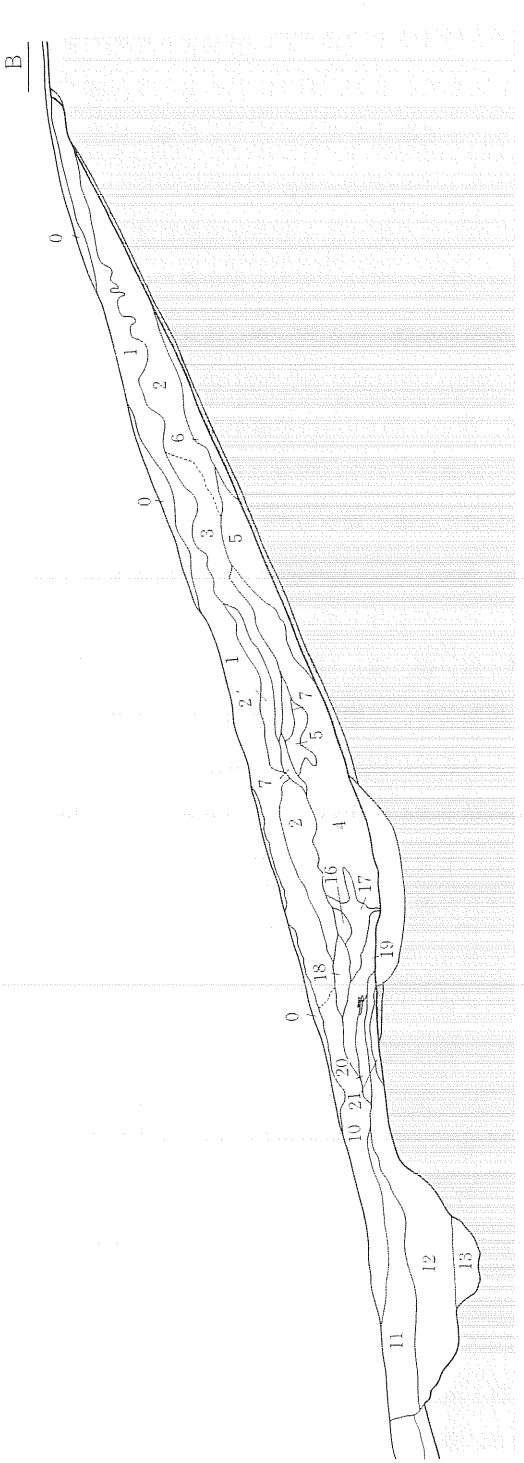
さらに側壁の精査により、架構材と思われる炭化材、小穴を焚口～煙出部分の間で確認した。焚口に立って左手（左壁）で34本、右壁で33本、計67本の材・小穴を検出した。この材・小穴はほぼ垂直な壁面に沿ってまっすぐに穿たれており、際立って内側に傾くといった例はない。また小穴の間隔は15～25cm程であるが、２時期の壁と小穴がいかに対応するのかは不明である。炭化材が小穴内に数cm～10数cmの高さで良好に遺存していたのは第44図に付した●印で12本あ

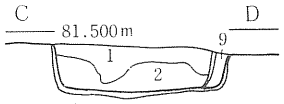


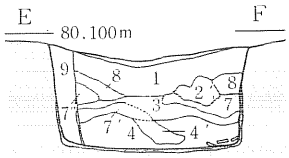
第43図　ＳＪ101・102須恵器窯跡周辺地形図

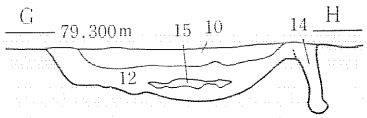


第44図　ＳＪ101須恵器窯跡周辺地形図（調査後）及び遺物出土状況



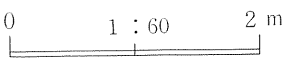






還元面

SJ101
0　表土
1　暗褐色(10YR3/4)地山粒子・炭化物少量含む
2　褐色(10YR4/4)壁材・粘土など小ブロック状に十位ほど多く含む
　2'は壁材を特に多く含む
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)壁材などは殆ど含まれない
4　褐色(10YR4/4)2層と同質
5　黒褐色(10YR2/3)壁材などは含まれない
6　明黄褐色(10YR6/6)地山の二次堆積土
7　明黄褐色(10YR7/6)地山土・炭化物を少量含む。7'は7層より黄味やや弱、7''は7層より堅く締まる
8　褐色(10YR4/6)しまりやや弱、炭化物を少量含む
9　褐色(10YR4/4)地山粘土・壁材などを黒褐色シルト質土と共に古壁面に貼って新期の壁面としている
10　暗褐色(10YR3/4)1層より黄味やや強い
11　黒色(10YR2/1)炭化物を多く、焼土少量含む
12　黒褐色(10YR2/2)炭化物主体で、焼土も多く含む
13　黒色(10YR2/1)炭化物主体、焼土は12層よりは少ない
14　褐色(7.5YR4/6)柱穴状ピット埋土、炭化物を下位ほど多く含む
15　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土の二次堆積
16　褐色(7.5YR4/6)しまりややあり、焼土少量含む
17　明黄褐色(10YR7/6)堅く締まっている、粘土質
18　黄橙色(10YR7/8)17層よりに類する、しまり17層よりやや弱
19　にぶい赤褐色(5YR4/4)焼土層、比較的堅く締まる、炭化物・地山小ブロックを斑状に多く含む
20　褐色(7.5YR4/4)焼土と細片化した壁材の混合土、堅く締まる
21　黄褐色(10YR5/6)砂質粘土層、堅く締まり貼床の可能性あり



第45図　ＳＪ101須恵器窯跡土層断面図

る。他の大部分は小穴内に材の基部のみ残っており、◎印をしてある。○印は小穴のみの確認である。小穴1本当たりの径は2.5～4㎝の円形を呈しているが、焚口に近い1・3・62・64・67の5本は他に比して径が大きく5～5.5㎝あり、上屋構造を考える上でも重要な遺構であろう。なお左壁の21は長さ5㎝、幅2㎝程の板状を示している。

前庭部は、焚口の前面に長さ2.8m、幅2m程の楕円形の掘り込みを伴って存在する。前庭部底面は焚口部床面より70㎝低い。前庭部掘り込みにあたっては、次の工程を経ている。すなわち、おそらく窯体掘削の際の廃土（地山土）を前庭部に厚さ0.3～0.5m、径5m程の範囲に盛る。結果、前庭部分の傾斜は緩やかとなる。この後楕円形の掘り込みを行ない、完成となる。前庭下方の盛土には、幅0.4m前後、長さ約3.8m、深さ0.25～0.4mの溝が掘られている。底面は凹凸著しく、地山土で一気に埋められている。灰原はこの上に形成されていることから、本溝が窯に係わりあるとしても、第1回目の窯出し時には既に埋まっていたことになる。

前庭部東脇には3本の柱穴状ピットが位置する。後述するＳＪ102のように対になるようには確認できなかったが、前庭部に架かる上屋の柱穴の一部をなしていたと推定しておきたい。

床面、あるいは埋土中より多量の須恵器（坏類、蓋、壺、甕）が出土している。重量的には総計約39.9kgであり、その器種別の重量比率は、甕類76％、坏類20％、壺類3％、蓋類1％である。個体数では坏類が32個体あり、そのいずれもが底部に回転ヘラ切り痕跡を留める。床面出土の土器は、焼け歪みの著しいもの、土器と壁の粘土または土器どうしが溶着している例が多く、これらの中には焼台として二次利用されたものも含まれていると考えられる。

前庭部前面には径7m程の暗褐色～黒褐色を呈する灰原が広がる。灰原層の厚さは20㎝前後である。ＳＪ101の灰原はＳＪ102のそれと重複しており、平面・断面観察の結果によっても、新旧関係などは明らかにできず、遺棄された土器がどちらの窯で焼成されたのかについても不明と言わざるを得ない。

ＳＪ１０２須恵器窯跡（第46・47図、図版20～22、26～28）

遺跡中央東側、13Ｌグリッド地山面で検出した。東側に隣接してＳＪ101が位置している。確認面での標高は、煙出部分で79.9m、焚口部分で77.8m、比高差2.1mである。窯体は等高線に直交するように構築され、窯中軸線はＮ－41°－Ｅを示す。精査により、壁面と燃焼部から前庭部の床面が2時期あることが判明した。

窯の規模は、煙出部分から前庭部端までの全長が8.1m、推定される焚口部分までの窯体長は5.4mとなる。窯幅は燃焼部で古期1.05m、新期1m、焼成部で古期0.9～1.15m、新期0.8～1.05m、煙出部では古期0.8m、新期0.6mとなる。新期の窯は、従来の壁－特に東側の壁－の一部分に地山土やスサ入り粘土などを貼って補修・改築しており、古期の窯幅より幾分狭い。煙出～焚口部は床面・側壁ともに還元状態にあり、著しく硬化している。燃焼部にあたる床面

には、長さ1.4m、幅0.7mの楕円状に掘り込まれ、この部分のみ還元面が失われている。焼成部は斜度30°前後で立ち上がる。

さらに側壁の精査により、架構材と思われる炭化材、小穴を焚口～煙出部分の間で確認した。焚口に立って左手（左壁）で24本、右壁で22本、計46本の材・小穴を検出した。小穴の間隔はＳＪ101と比較してばらつきが多く、燃焼部ではまばらであるのに対し、焼成部では近接して穿たれている。炭化材が小穴内に良好に遺存していたのは焚口部の２本のみであり、他の大部分は○印の小穴のみの確認である。小穴１本当たりの大きさはＳＪ101と近似するが、形態的には円形以外に、14・16～18・21・24・27・31の８本は一辺3.5cm程の方形、28・29は４×５cmの楕円形を呈している。焚口に近い３と45、焼成部の４と44はほぼ相対する位置にあり、他に比して径が大きく５～5.5cmあり、ＳＪ101例同様上屋構造を考える上で示唆するものがある。

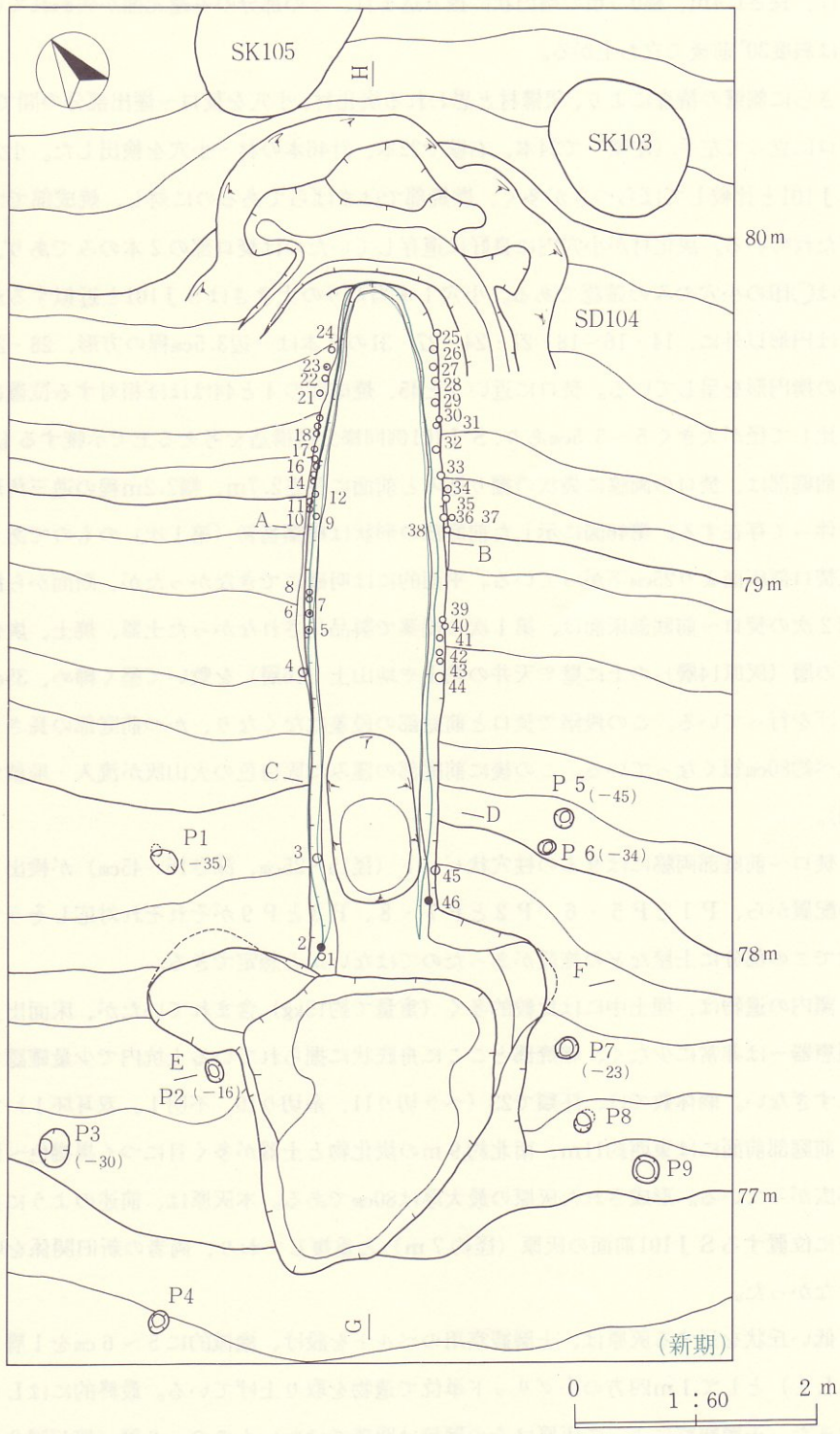
前庭部は、焚口の両脇に袋状の掘り込みと前面に長さ2.7m、幅2.2m程の逆三角形掘り込みを伴って存在する。第46図に示した前庭部の形状は構築当初（第１次）のものであり、同底面は焚口部床面より25cm下がっている。平面的には明確にできなかったが、断面から観察して、第２次の焚口～前庭部床面は、第１次の操業で製品化されなかった土器、焼土、炭化物、灰などの層（灰原14層）の上に壁や天井の粘土や地山土（16層）を敷いて堅く締め、35cm程のかさ上げを行っている。この段階で焚口と前庭部の段差はなくなり、かつ前庭部の長さも第１次に比べ約80cm短くなっている。この後に前庭部の窪みに灰白色の火山灰が流入・堆積する（第47図）。

焚口～前庭部両脇には９本の柱穴状ピット（径15～25cm、深さ16～45cm）が検出された。その配置から、Ｐ１とＰ５・６、Ｐ２とＰ７・８、Ｐ３とＰ９がそれぞれ対応しそうであり、３対でこの部分に上屋などの施設があったのではないかと想定できる。

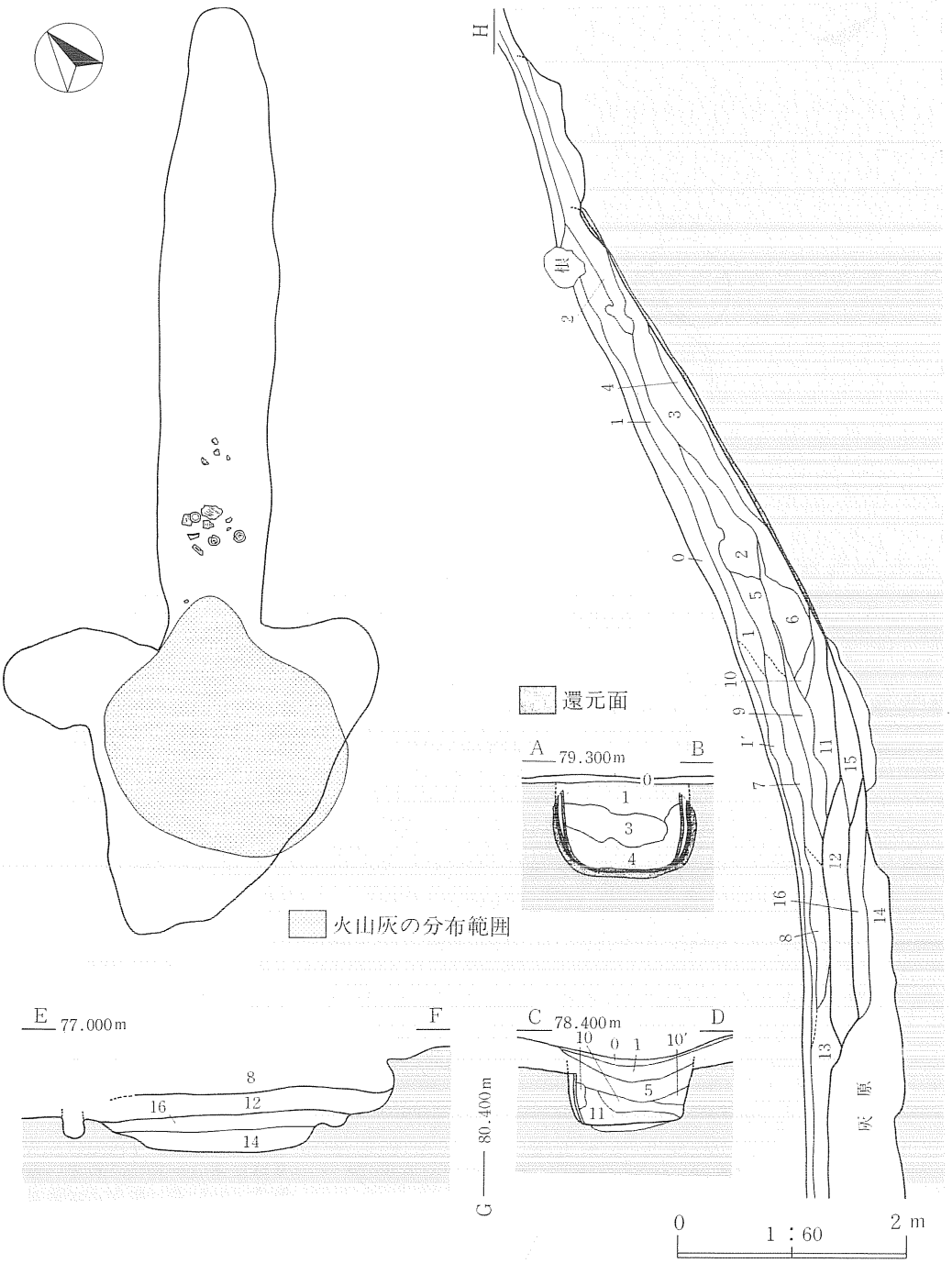
窯内の遺物は、埋土中には比較的多く（重量で約15kg）含まれていたが、床面出土の遺物－須恵器－は非常に少なく、燃焼部とここに舟底状に掘られている土坑内で少量確認されているにすぎない。個体数では、坏類で23（ヘラ切り11、糸切り10、不明１、双耳坏１）である。

前庭部前面には東西約11m、南北約９mの炭化物と土器が多く目につく黒褐色～黒色の灰原が広がっている。形成された灰原の最大厚は80cmである。本灰原は、前述のように東側斜面上方に位置するＳＪ101前面の灰原（径約７m）と重複しており、両者の新旧関係を明らかにできなかった。

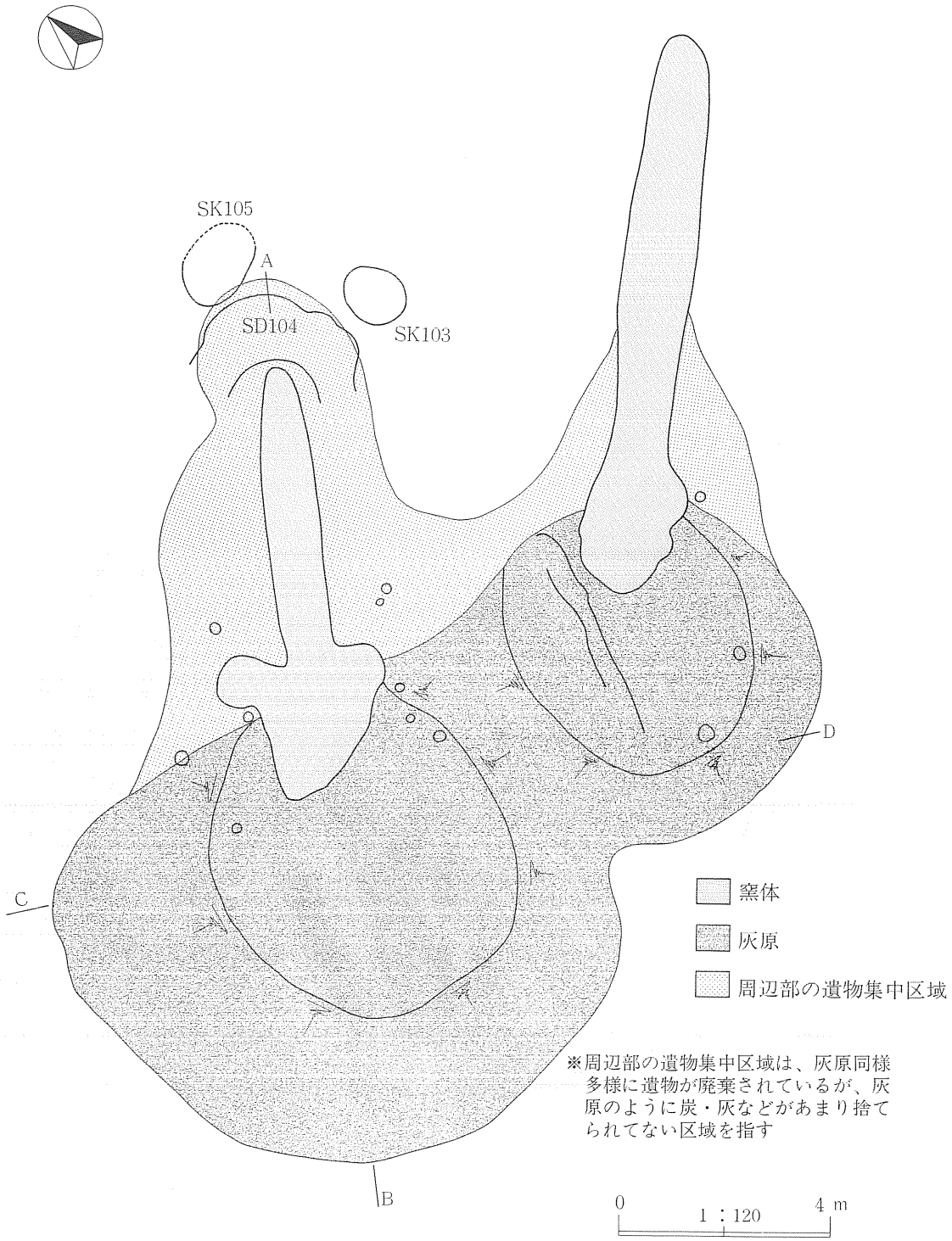
低い丘状を呈する灰原は、土層観察用のベルトを設け、機械的に５～６cmを１層（レベル１＝Ｌ１）として１m四方の小グリッド単位で遺物を取り上げている。最終的にはＬ１～Ｌ16を数えた。土層観察によって灰原はその層境は明確ではないものの、３層（第47図２～４層）に分けられた。それぞれの層は、灰原２層がＬ１～Ｌ４に、同３層がＬ５～Ｌ13に、同４層がＬ14



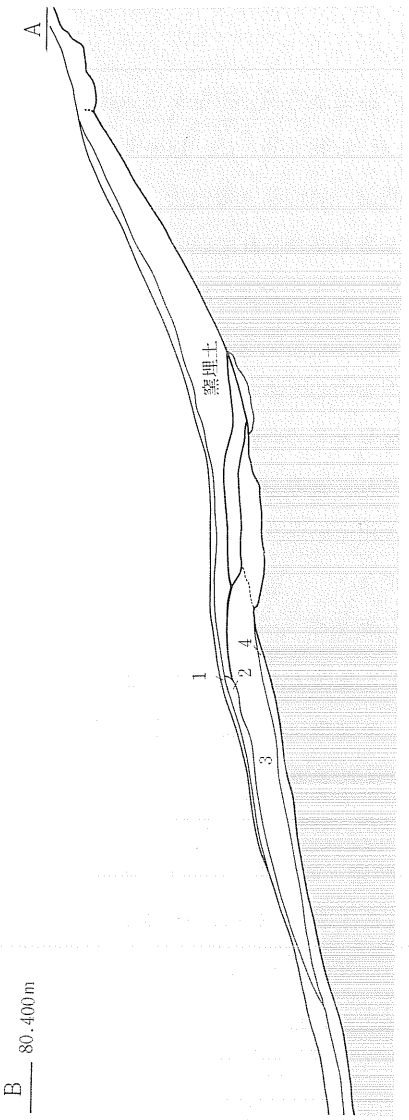
第46図　ＳＪ102須恵器窯跡周辺地形図（調査後）



第47図　ＳＪ102須恵器窯跡土層断面図



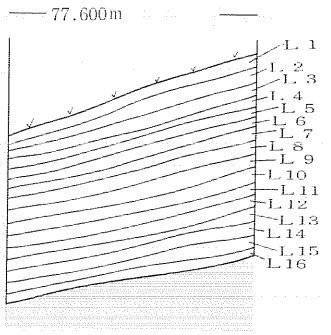
第48図　ＳＪ101・102灰原および周辺部平面図

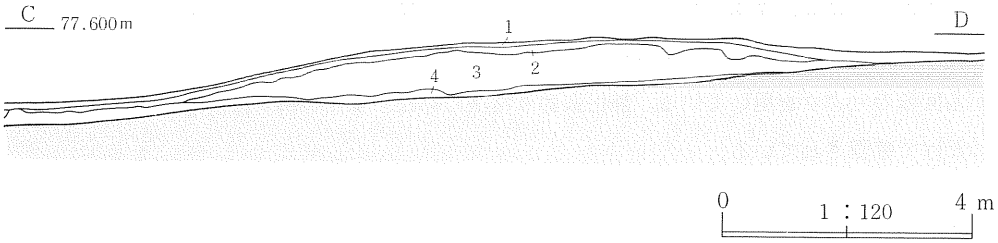


SJ102
0　表土
1　暗褐色(10YR3/4)壁材など含まず、細かい焼土を多く含む。しまりややあり、下位ほど混入物少なくなり、1'では焼土殆ど含まず。
2　黄褐色(10YR5/6)、にぶい黄橙色(10YR6/3)小ブロック状の還元した壁・地山などを主体とする。
3　褐色(7.5YR4/6)焼土を主体とし、2・4層に含まれる壁材などはあまり認められない。
4　2層とほぼ同じ
5　褐色(10YR4/6)土質は1層に類する。細かい焼土・地山粒子を比較的多く含んでいる。
6　赤褐色(5YR4/6)焼土ブロックを主とする。しまりあるが、ボソボソしている。
7　褐色(10YR4/4)地山粒子・炭化物を斑状にやや多く含む。
8　黒褐色(10YR2/2)炭化物を主体とする。
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)焼土・炭化物を多く含む。　　R　YR
10　褐色(10YR4/4)7層と同質
11　にぶい黄褐色(10YR4/3)焼土・炭化物は9層より多く含む。
12　明黄褐色(10YR6/6～6/8)火山灰を主とする。同層上面は平坦で堅く締まる、第3次床面か。
13　褐色(10YR4/6)地山土と焼土の混合土
14　黒褐色(10YR2/2)いわゆる灰原層、炭化物・焼土・土器などを多く含む。
15　黄褐色(10YR5/6)炭化物・焼土少量含む。
16　明褐色(7.5YR5/6)～褐色(7.5YR4/6)壁材・焼土・炭化物の混合土、堅く締まり第2次の床面か

SJ102灰原
1　表土
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)～褐色(10YR4/4)灰原1層。
3　黒褐色(10YR2/2)灰原2層、土器・焼土・炭化物を最も多く含む。
4　暗褐色(10YR3/4)灰原3層。

灰原層位模式図





第49図　SJ101・102灰原土層断面図

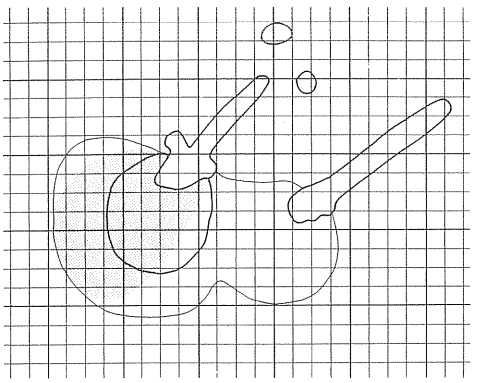
～L16にほぼ対比でき、2枚の床面との係わりでは、第1次床面に対応する灰原は3～4層（L5～L16）、第2次床面に対応する灰原は2層（L1～L4）となる。

灰原及び周辺部での遺物の出土状況は一律ではなく、1m四方の器種別重量分布をレベル毎に整理して見ると、甕類ではL16～7では主に灰原中央から西側（13L08・09・13・14グリッド）に廃棄されているのに対し、L6より上位では、灰原より窯両脇の周辺部（炭化物・灰などが余り捨てられていない部分、13L10・04グリッドなど）により多く廃棄されている。また坏類は、L16～12では灰原中央から南側（13L09・08グリッドなど）に多く廃棄されているのに対し、L11～8では灰原でも焚口に近い部分（13L09・14グリッドなど）に多く捨てられるようになり、L7より上位では窯周辺部、特に13L10・15グリッドを中心とする部分に多く廃棄されていることが分かった。いずれにしても、窯出しに際して製品としての価値を有しなかった土器は、操業当初は、炭・灰・壁材などと共に窯前面に廃棄され、灰原を形成していくのであるが、時間が経つにつれ、炭・灰などは全面の灰原部分に掻き出すのに、土器は窯周辺の手短な場所により多く捨てていくようになる、と読み取ることができよう（第50図参照）。

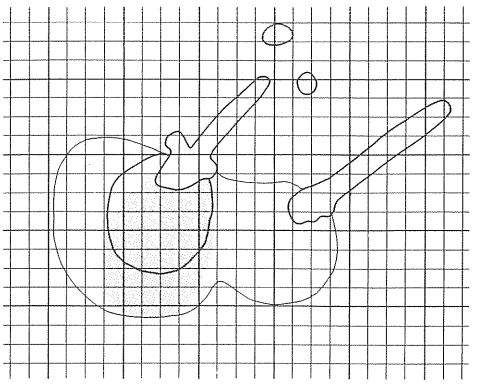
また煙出部上方には、SD104とした溝状遺構が位置している。確認面での幅0.8～1.2m、窯を囲むように逆U字形を呈している。その配置から、窯に付属した施設と考えられる。溝底面は幅30cm前後で平坦、堅く踏み締められている。このことから、本遺構は窯構築・改築などに伴う作業のための足場としての機能を果たしていたと考えることもできる。

灰原及び周辺出土の遺物は、重量にして約1889kgの土器が得られた。器種では、坏類（坏、高台付坏、双耳坏、鉢）、蓋類（坏蓋、壺蓋）、壺類（長頸壺、短頸壺、広口壺、小壺）、甕類（大甕、中甕、小甕）、横瓶及び手づくね土器などがある。重量でみた比率は、甕類45％（約851kg）、坏類41.3％（約780kg）、壺類12.1％（約228kg）、蓋類1.6％（約30kg）となる。仮に生産の歩留まりが各器種同一であるとすれば、重量すなわち使用した粘土の重量から見て本窯で焼成された器種の主体をなすのは、明らかに甕類と坏類と判断できよう。また個体数では、坏類2466個体、蓋類223個体、甕類101個体、壺類119個体となる（含む窯内）。また双耳坏は63点（個体）確認している。坏類の内、底部の切り離しは、ヘラ切り2093個体、回転糸切り370個体、静止糸切り3個体である。坏類の85％はヘラ切りである。器種別・レベル別の重量は、第2表に集計してある。また回転糸切り痕から判断される使用のロクロ回転方向は、2～3例を除いた全てが右回転のロクロを用いている。静止糸切り技法の坏は、少ない例ではあるが本遺跡群ではここだけで確認されている。

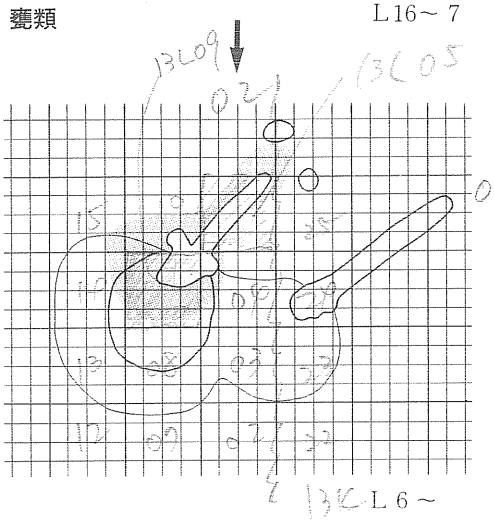
第114図の土師器は、基本的には須恵器工人により製品としての土師器が窯場に持ち込まれ、遺棄されたと解している。ただ591は、土師器として製作された土器が何らかの原因で須恵器窯で焼成され還元化した資料である。

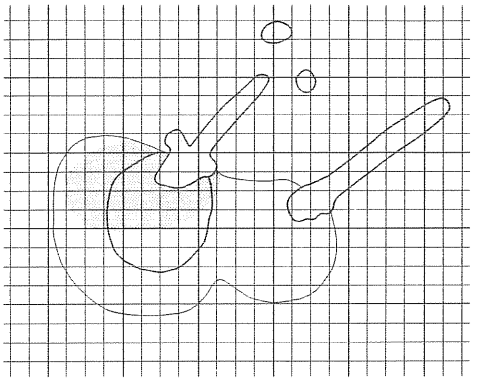


甕類　　L16～ 7



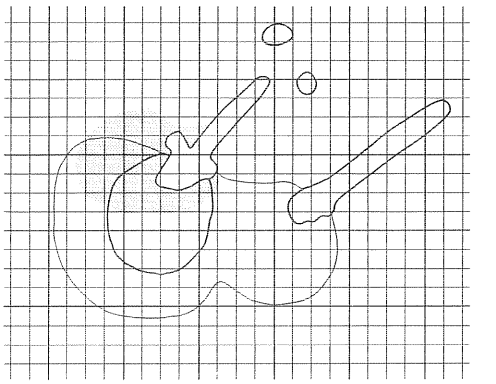
坏類　　L16～12





L11～ 8

特に遺物の集中する範囲

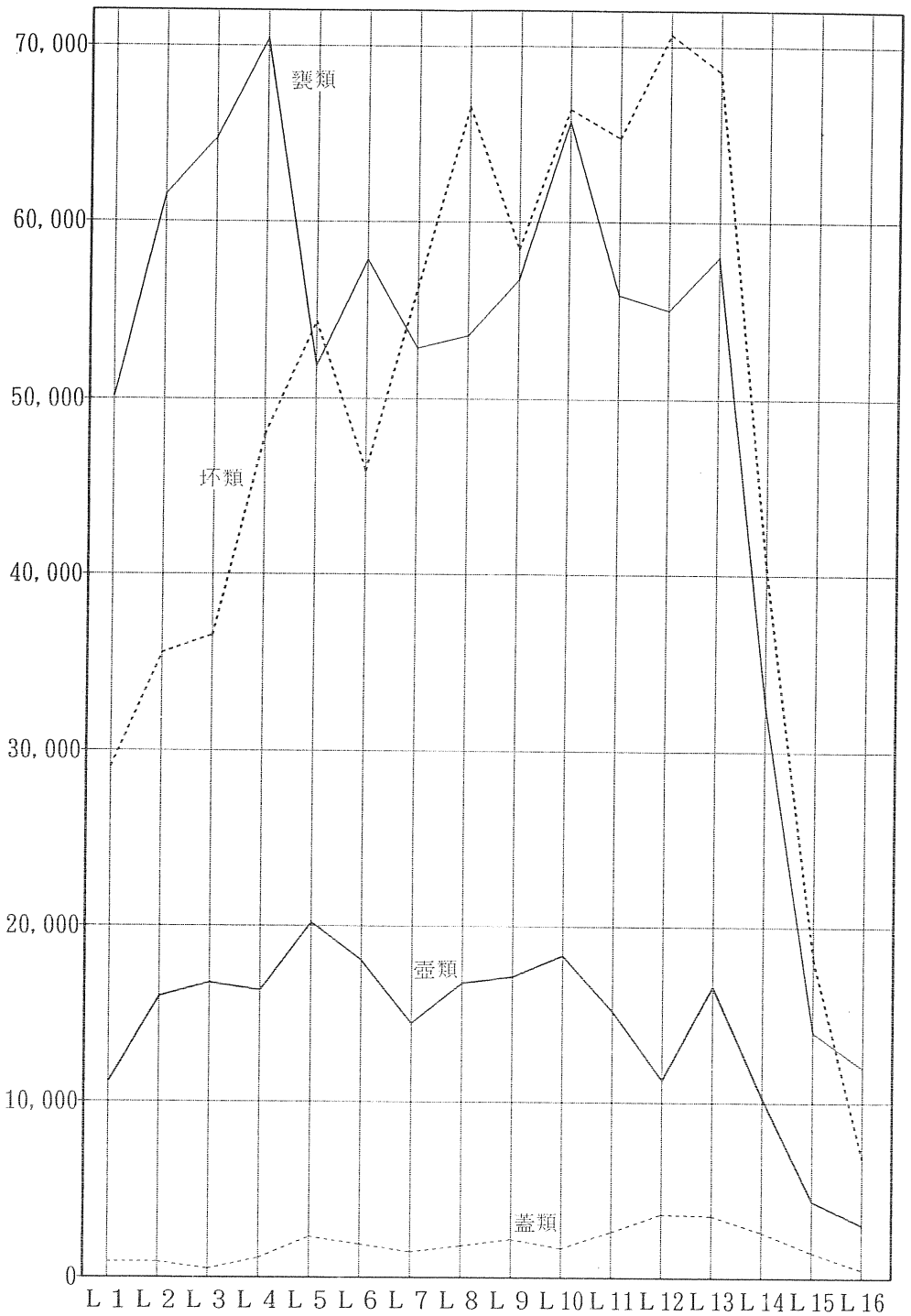


L 7 ～

第50図　灰原・周辺部における器種別廃棄区域の変遷（概念図）

（単位：g）

第3表　器種・レベル別重量分布



なお、各実測図下の観察表には「出土位置・層位」を記しているが、出土量の多い13Ｌグリッドについては、これを省略して記している。例えば“13Ｌ01”出土であればただ“01”と略している。

（２）土坑

ＳＫ１０３土坑（第53図、図版32）

ＳＪ102煙出部北側、13Ｋ25グリッド地山面で検出した。規模は長さ1.2m、幅１mの円形を呈し、確認面からの深さは0.48mである。埋土は基本的には地山の二次堆積土であり、窯上方のＳＤ104溝と同質である。土坑中央には須恵器大甕１個体（第55図22）が潰れているが正立の状態で出土した。

ＳＫ１０５土坑（第53図、図版32）

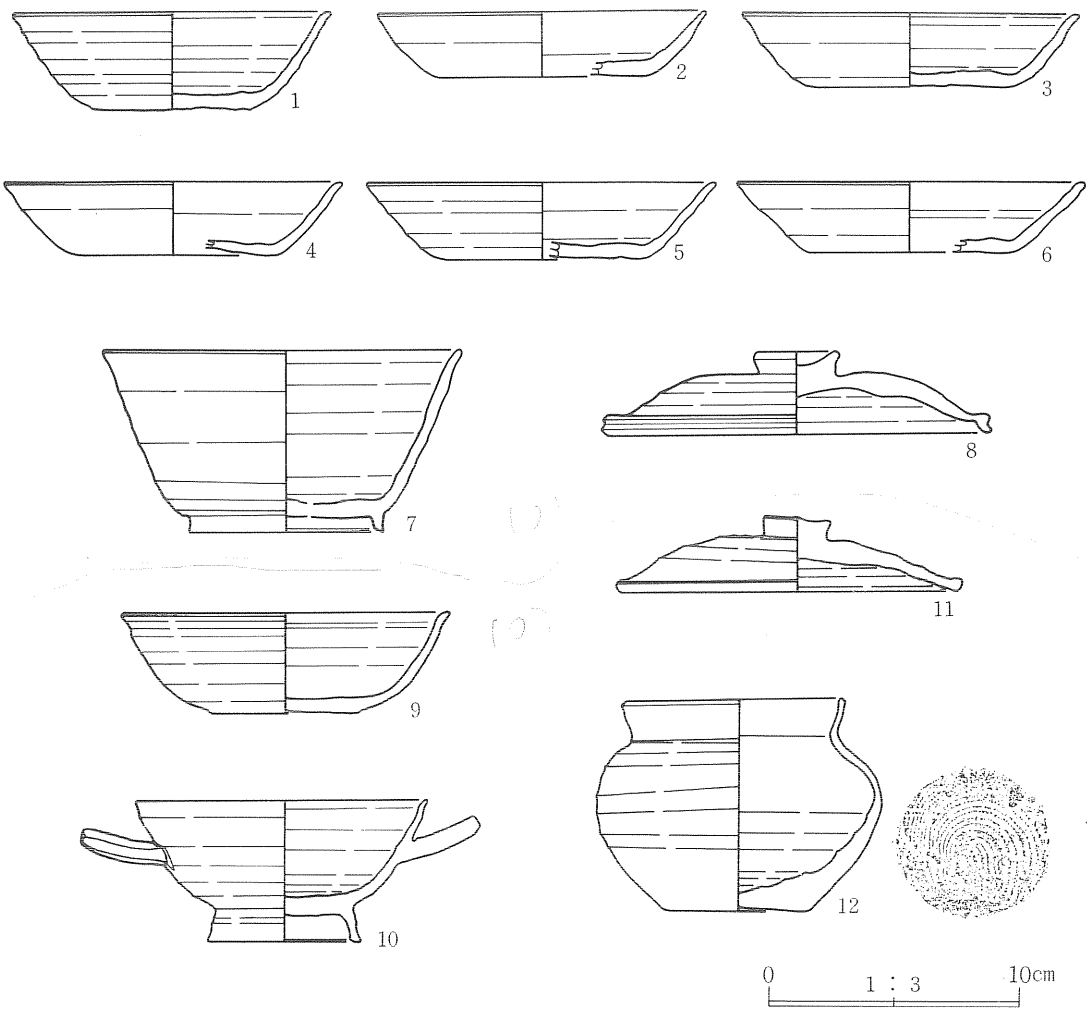
ＳＪ102煙出部北側、14Ｌ01、14Ｋ21グリッド地山面で検出した。規模は、範囲確認時のトレンチで一部失われているが、長さ1.65m、幅1.1mの東西に長い楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.45mである。埋土２・３層はＳＫ103、ＳＤ104と同質である。

坑内より須恵器長頸壺（第55図23）が出土している。

２　遺構外出土の遺物

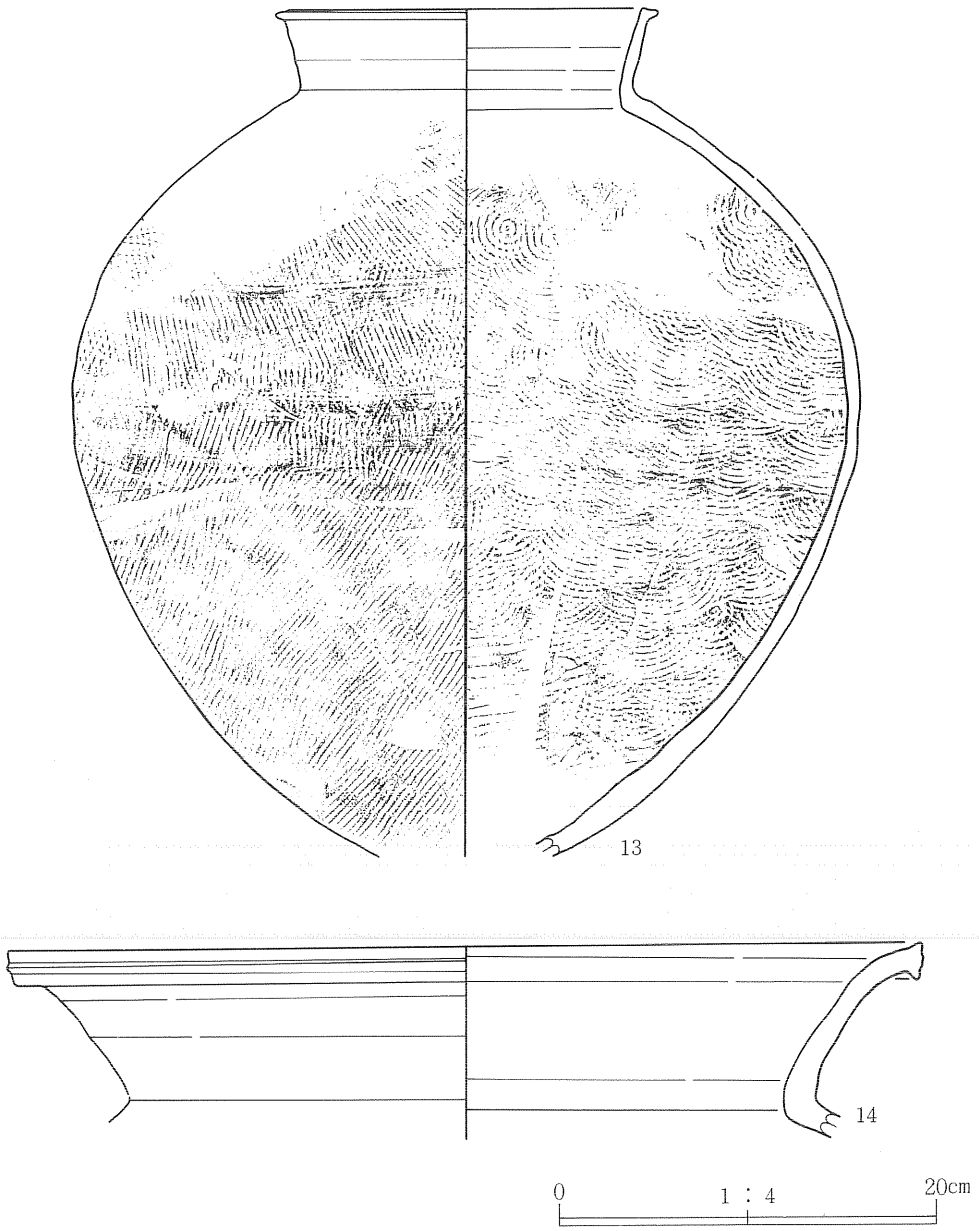
富ヶ沢Ｂ窯跡出土の遺物は、２基の窯跡内及びその灰原でほぼ占められており、遺構外出土の遺物は、ごく少量である。しかもその大半を占める須恵器は、遺構の配置を考えれば、窯に起因する遺物と想定できる。

窯が営まれた平安時代以外の時期の遺物は、灰原内に紛れ込んだ縄文土器片１点、剥片２点、及び寛永通宝１点が遺跡東部から出土しているだけである。



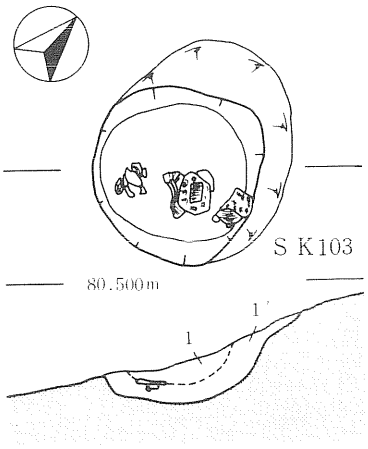
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
1	須・坏A 0	S J 101	12.4	6.2	3.9	5
2	須・坏A 0	S J 101 R P 8	12.9	8.6	2.6	1
3	須・坏A 0	S J 101 R P48	13.1	8.2	2.9	6
4	須・坏A 0	S J 101 R P 7・26	13.3	8.4	2.9	3
5	須・坏A 0	S J 101 R P54	13.7	8.4	3.1	4
6	須・坏A 0	S J 101	13.7	8.4	2.8	2
7	須・高台付坏A 1	S J 101、08- L11	14.0	7.6	7.2	7
8	須・坏蓋D	S J 101、03- L 9 、04- L 8	15.3	—	3.3	つまみ径 3.2　「写」223
9	須・坏B 0	S J 102	12.8	5.7	4.0	—
10	須・双耳坏2	S J 102　R P12、10- L 6・5	11.5	5.9	5.6	「写」 18
11	須・坏蓋B	S J 102、09- L 5 、10- L10・5・3・2	13.4	—	3.0	つまみ径 2.6　「写」 62
12	須・小壺	S J 102 R P 7	8.5	5.9	8.4	最大径 11.3、回転糸切り　「写」 11

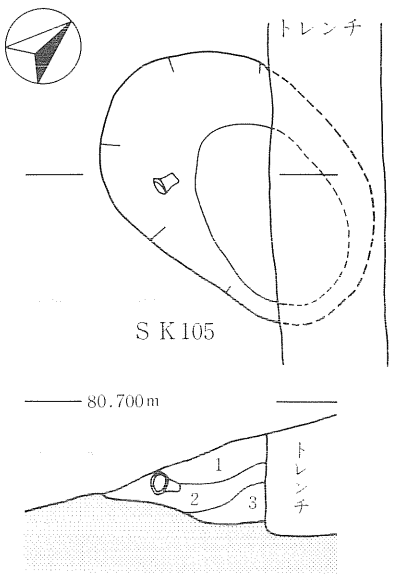
第51図　遺構内出土土器(1)



番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
13	須・中甕Ａ	ＳＪ101、15-Ｌ５・４	18.6	丸底	41.8	(45.0)	22
14	須・大甕	ＳＪ102、15-Ｌ３、14Ｌ01-Ｌ１	48.4	－	－	(10.2)	13

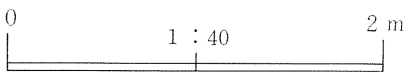
第52図　遺構内出土土器(2)



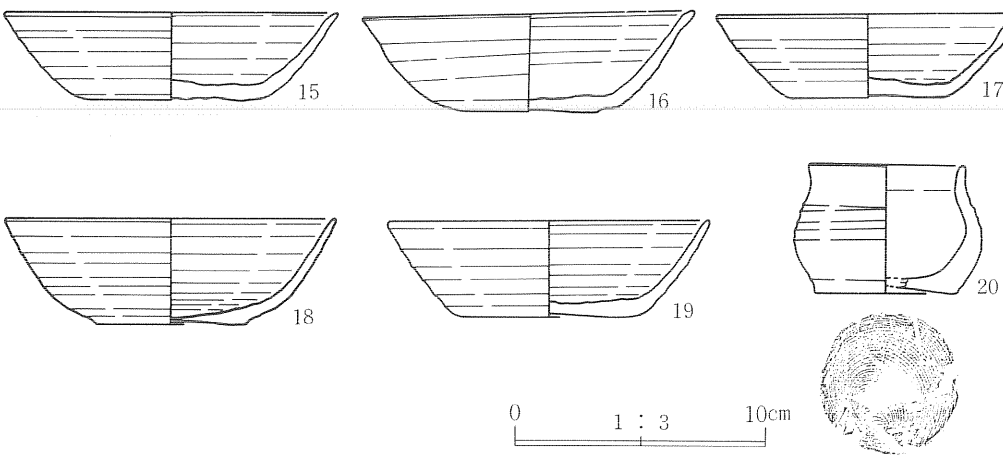


SK103
1　黄褐色(10YR5/8)地山の二次堆積土、黄橙色の(10YR7/8)砂質土(火山灰)をブロック状、焼土を斑状に多く、炭化物を少量含む。1'は火山灰、焼土を含まない。

SK105
1　褐色(10YR4/6)しまりやや弱
2　黄褐色(10YR5/6)砂質粘土、しまりあり、炭化物少量含む
3　明褐色(7.5YR5/6)地山の二次堆積土か、炭化物少量含む

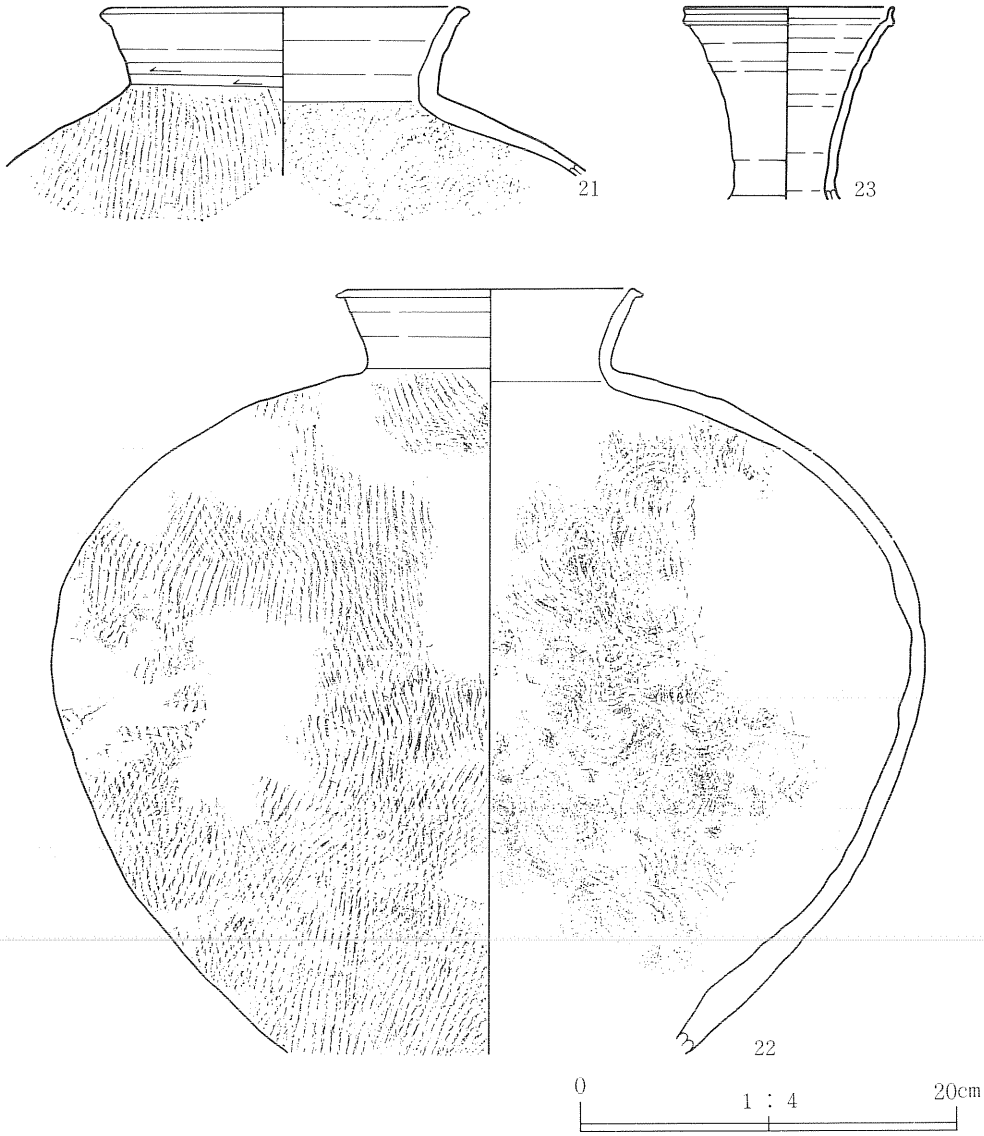


第53図　SK103・105土坑



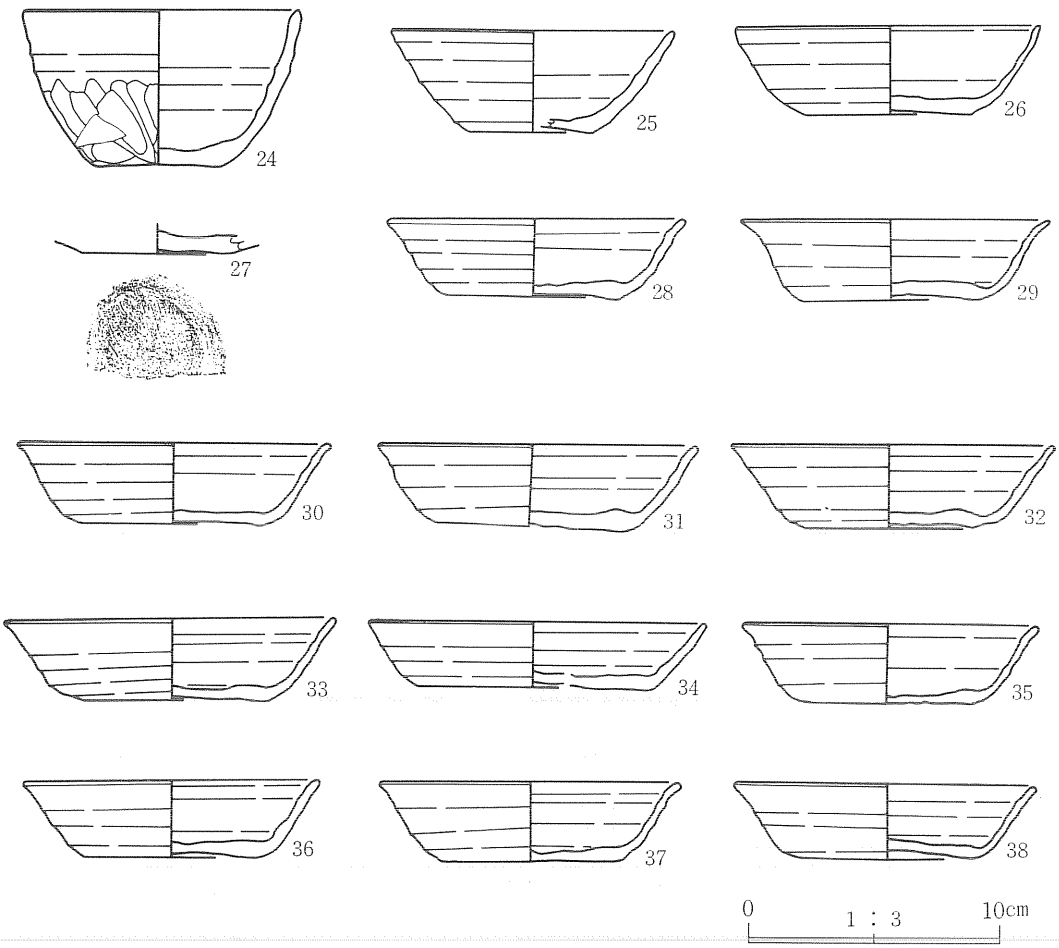
番号	器種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備考
15	須・坏A0	SK103	13.1	6.8	3.5	1
16	須・坏B0	SK103	13.0	5.4	3.9	「写」2
17	須・坏A0	SD104	12.0	6.4	3.3	3
18	須・坏B0	SD104、14-L13	12.9	5.8	4.2	4
19	須・坏A0	SD104・SK105	12.6	7.5	3.9	5
20	須・小壺	SK105、13K25-L1	6.1	5.6	5.1	最大径 7.4、回転糸切り (2)

第54図　遺構内出土土器(3)



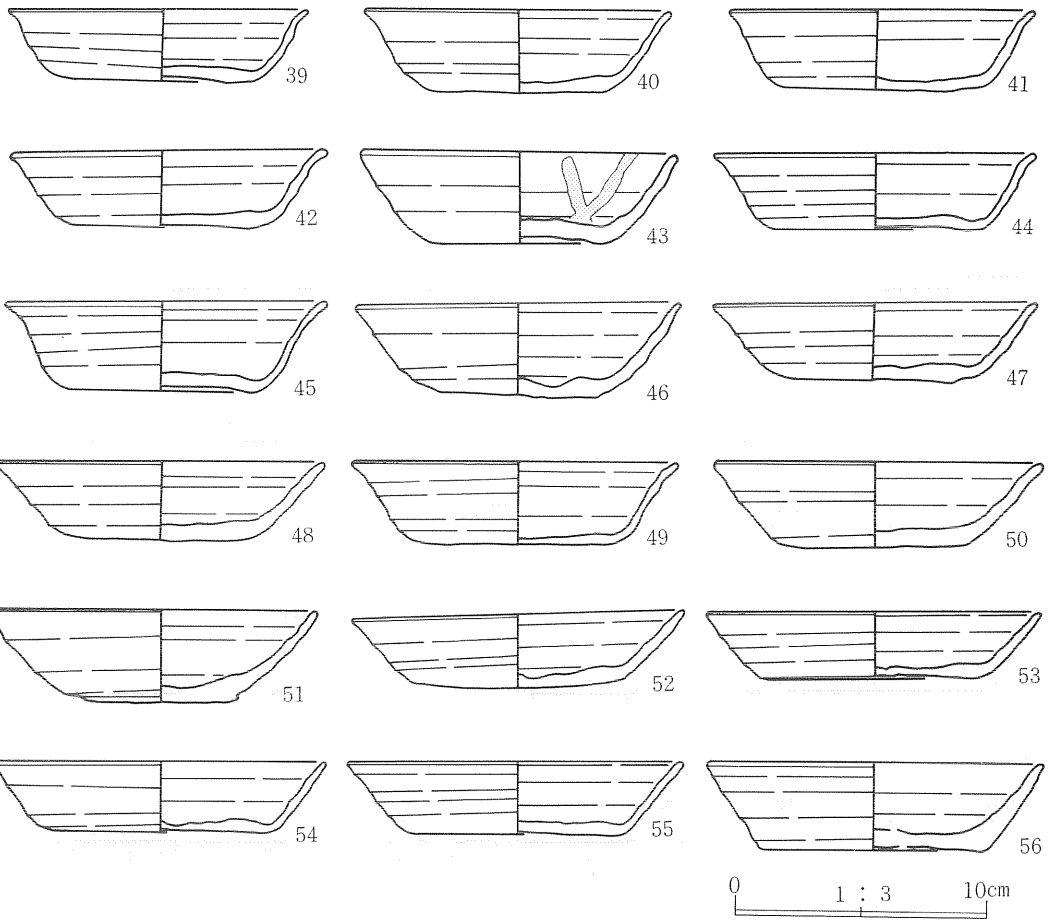
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
21	須・中甕	S K103、13K25-L10	18.4	—	—	(8.9)	32
22	須・中甕A	S K103、13K25-L10、13L20、14L01-L16	15.2	—	46.4	(40.5)	16
23	須・長頸壺	S K105	11.0	—	—	(10.3)	22

第55図　遺構内出土土器(4)



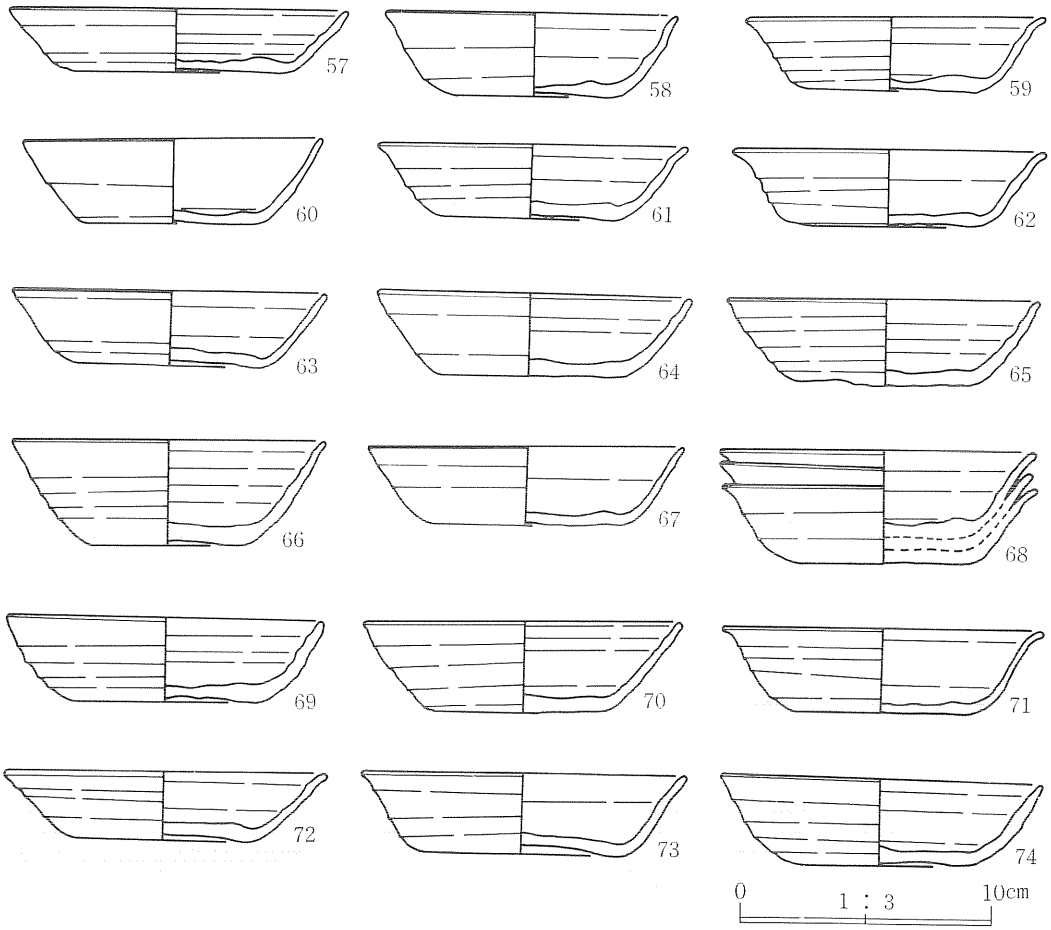
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
24	須・坏D 1	10-L 5、13-L10、L 8	10.8	5.0	6.2	「写」 103
25	須・坏B 2	15-L 4	11.0	4.8	4.0	104
26	須・坏A 3	10-L 4	11.9	6.6	3.5	3009
27	須・坏A 3	10-L 5	－	6.1	(0.9)	114
28	須・坏A 0	09-L16	11.5	6.8	3.1	3386
29	須・坏A 0	08-L16･15	12.1	7.0	3.2	3388
30	須・坏A 0	08-L15･14、09-L16、14L11	12.2	7.0	3.2	3378
31	須・坏A 0	08-L16･15	12.4	7.2	3.3	3336
32	須・坏A 0	14L06-L16	12.6	6.5	3.3	3389
33	須・坏A 0	10-L16、14L01-L16･10、14L06-L16	12.9	7.0	3.2	3377
34	須・坏A 0	09-L16･15	13.2	9.0	2.7	「写」 3381
35	須・坏A 0	04-L12、08-L15･14、09-L11	11.5	6.8	3.2	3347
36	須・坏A 0	08-L15	11.5	6.8	3.1	3367
37	須・坏A 0	08-L15、09-L11	11.6	7.0	3.2	「写」 3340
38	須・坏A 0	08-L15･5、L10	11.7	6.8	3.0	3335

第56図　ＳＪ101・102灰原出土土器(1)



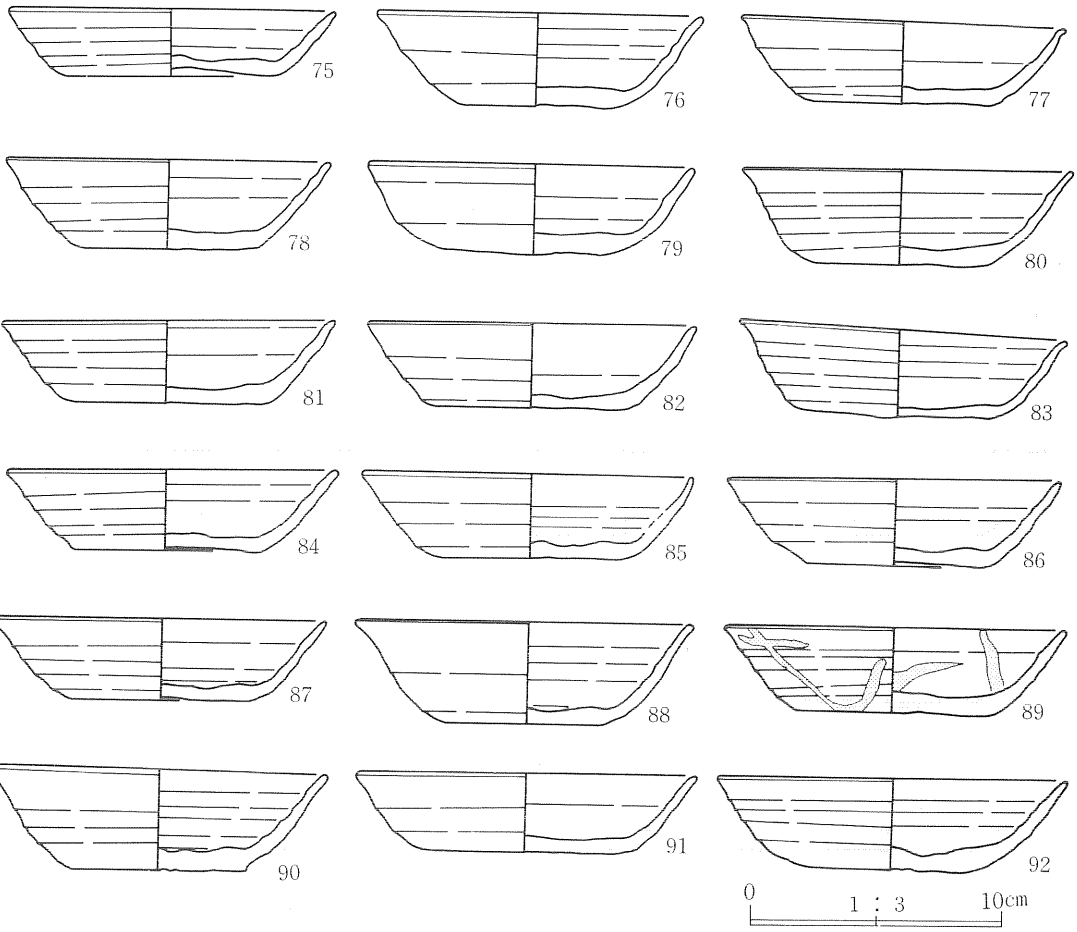
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
39	須・坏A 0	08-L15	11.7	7.1	2.9	3370
40	須・坏A 0	08-L15	11.8	7.0	3.3	3343
41	須・坏A 0	08-L15、09-L15・11、L12	11.9	7.2	3.2	「写」3365
42	須・坏A 0	08-L15・14	12.2	6.8	3.0	3371
43	須・坏A 0	14-L15・11・10	12.3	7.0	3.6	火襷あり　「写」3358
44	須・坏A 0	08-L15・13、09-L14	12.5	8.0	3.1	3373
45	須・坏A 0	08-L15、09-L11	12.5	7.3	3.6	3368
46	須・坏A 0	14-L15	12.6	6.1	3.6	「写」3341
47	須・坏A 0	09-L15	12.7	6.6	3.1	3360
48	須・坏A 0	08-L15	12.7	7.0	3.2	3339
49	須・坏A 0	08-L15・14	12.7	7.8	3.3	「写」3375
50	須・坏A 0	08-L15	12.7	7.0	3.4	3348
51	須・坏A 0	14-L15・14	12.8	6.2	3.7	3342
52	須・坏A 0	08-L15、09-L15	13.0	8.4	2.9	3338
53	須・坏A 0	09-L15	13.1	8.2	2.7	3361
54	須・坏A 0	L15	13.1	8.7	2.8	3355
55	須・坏A 0	L15	13.1	8.6	2.9	3345
56	須・坏A 0	14-L15～12	13.2	8.6	3.5	3363

第57図　ＳＪ101・102灰原出土土器(2)



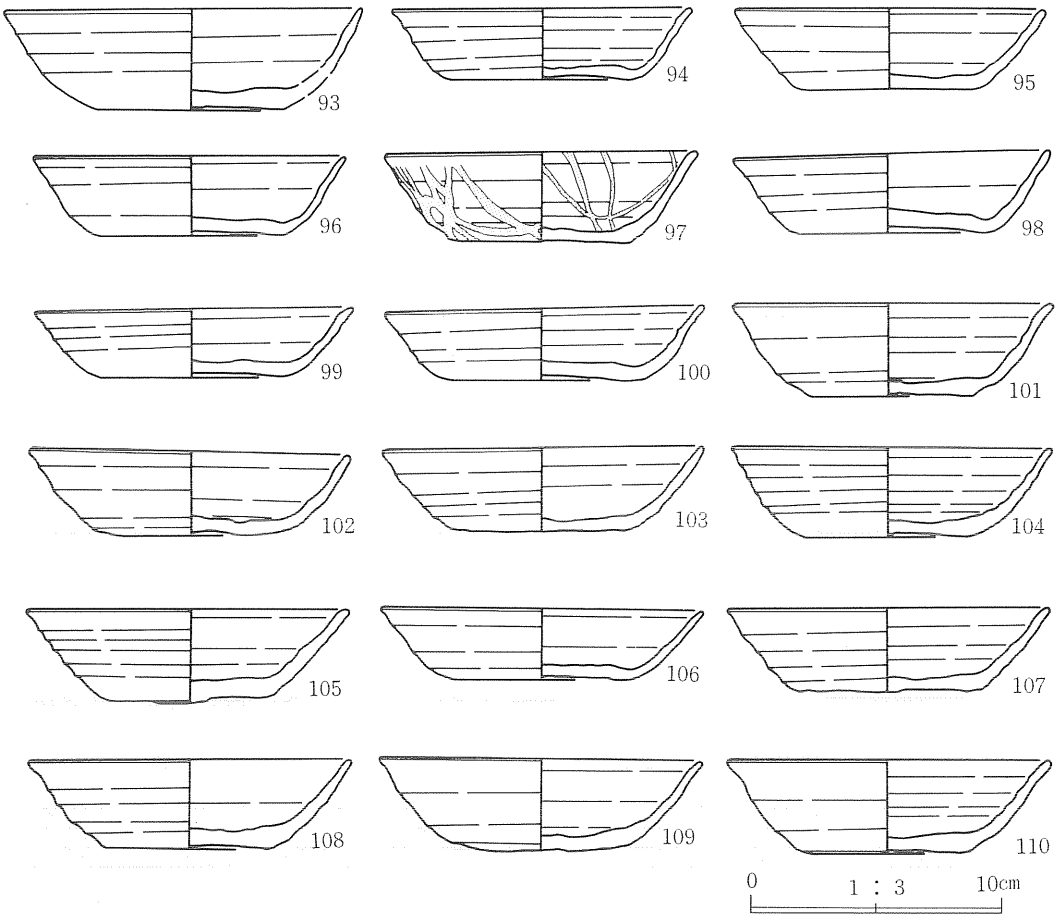
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
57	須・坏A 0	L15	13.3	8.4	2.5	3357
58	須・坏A 0	08-L14・13	11.3	6.6	3.3	3326
59	須・坏A 0	08-L14、09-L13・12	11.6	6.4	2.9	3392
60	須・坏A 0	09-L14	11.8	6.9	3.4	3309
61	須・坏A 0	08-L14	11.9	6.6	3.0	3303
62	須・坏A 0	09-L13～11・7、L14	12.2	7.3	3.0	3376
63	須・坏A 0	08-L14～12	12.2	7.4	3.0	3321
64	須・坏A 0	14-L14	12.2	7.3	3.3	3325
65	須・坏A 0	14-L14・13	12.2	7.4	3.5	「写」3332
66	須・坏A 0	14-L8、L14・11	12.2	6.0	4.2	3393
67	須・坏A 0	08-L14・13・6	12.3	7.9	3.1	3323
68	須・坏A 0	09-L14、14、L12	12.3	6.6	3.1	3個体　「写」3316
			12.2	—	—	
			12.3	—	—	
69	須・坏A 0	14-L14・10・7	12.3	7.2	3.4	「写」3318
70	須・坏A 0	14-L14	12.4	7.0	3.6	3306
71	須・坏A 0	08-L13、09-L14～10、14-L10	12.5	6.9	3.4	3310
72	須・坏A 0	08-L14・13	12.6	7.6	2.7	3329
73	須・坏A 0	08-L14、09-L14・12	12.6	7.4	3.2	「写」3284
74	須・坏A 0	03-L6、L14	12.6	6.7	3.5	「写」3331

第58図　ＳＪ101・102灰原出土土器(3)



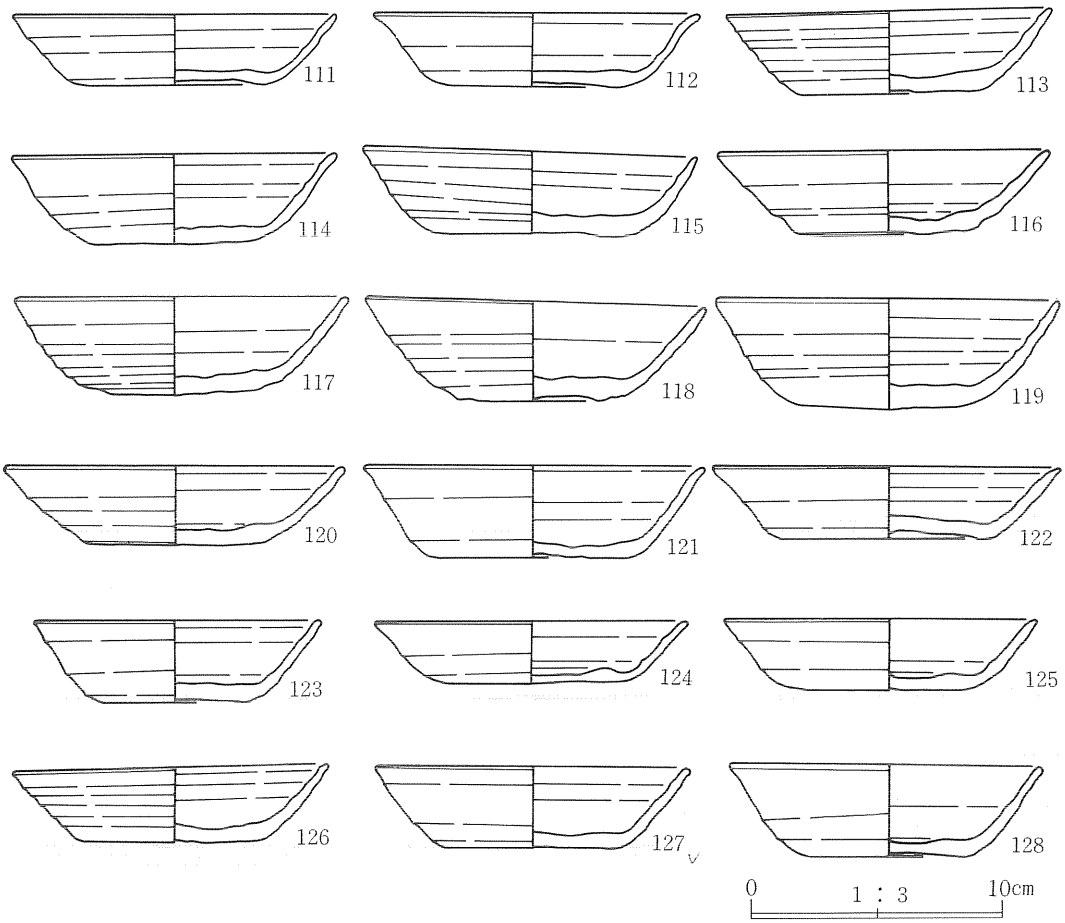
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考	
75	須・坏A0	L14	12.7	8.2	2.7		3296
76	須・坏A0	14-L14	12.7	6.2	3.7		3328
77	須・坏A0	08-L14・13、L11	12.8	7.5	3.2		3312
78	須・坏A0	14-L14	12.8	7.5	3.6		3320
79	須・坏A0	09-L14	12.8	6.2	3.6	「写」	3281
80	須・坏A0	14-L14・13	12.8	6.0	3.8		3288
81	須・坏A0	14-14・12	12.9	7.4	3.3	「写」	3280
82	須・坏A0	09-L14	12.9	7.8	3.4	「写」	3285
83	須・坏A0	08-L14、09-L12・11	12.9	7.8	3.5		3322
84	須・坏A0	14-L14・13	13.0	7.2	3.2		3311
85	須・坏A0	09-L14	13.0	7.1	3.4		3278
86	須・坏A0	08-L12、L14	13.0	6.8	3.5		3282
87	須・坏A0	L14	13.1	7.1	3.3		3313
88	須・坏A0	09-L14	13.1	6.3	4.1		3324
89	須・坏A0	09-L14、14-L9	13.2	7.5	3.4	火襷あり	3294
80	須・坏A0	14-L14	13.3	7.0	4.0		3290
91	須・坏A0	09-L14、13-L13	13.4	8.6	3.2		3308
92	須・坏A0	14-L14・13	13.6	6.2	3.7		3287

第59図　SJ101・102灰原出土土器(4)



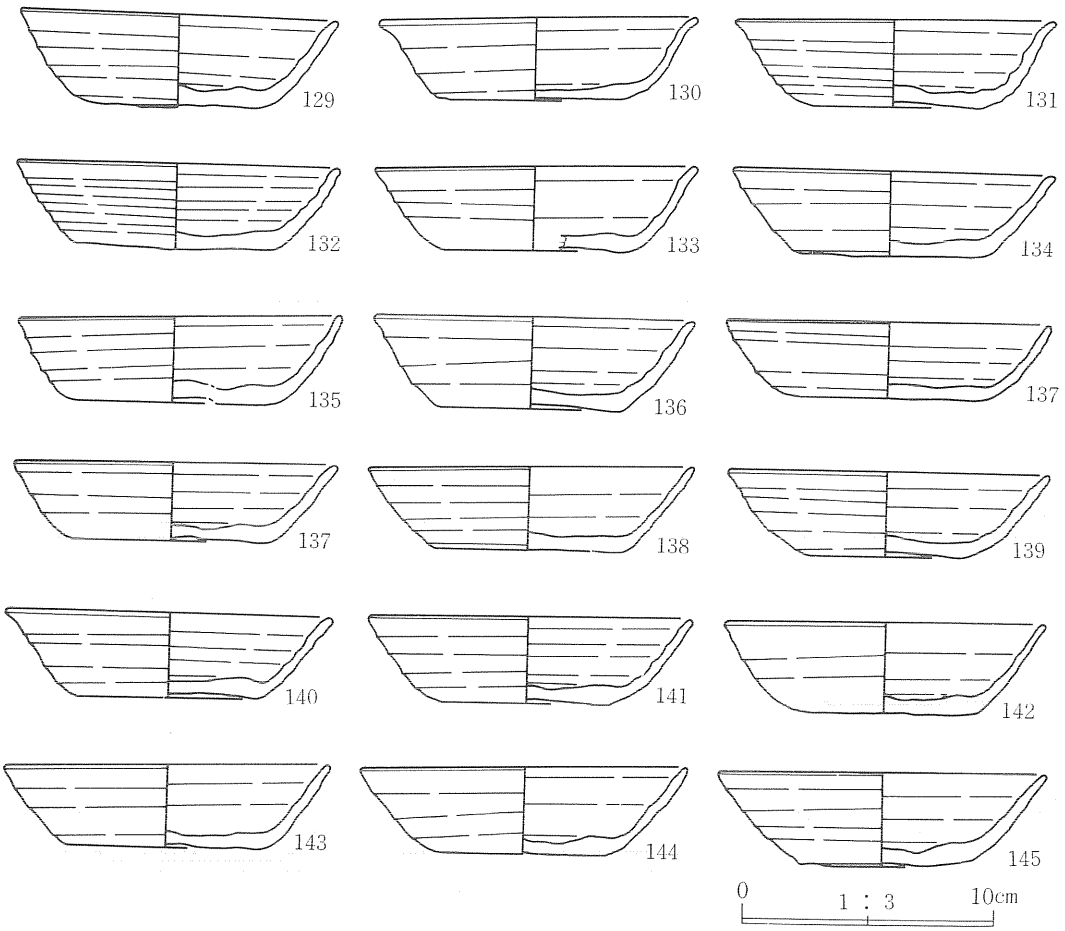
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
93	須・坏Ａ０	09-Ｌ14、Ｌ12	14.0	7.4	4.0	3297
94	須・坏Ａ０	09-Ｌ13・11、14-Ｌ12・8	11.6	7.6	2.9	3210
95	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.2	7.0	3.2	3211
96	須・坏Ａ０	03-Ｌ13～11、08-Ｌ11	12.2	7.4	3.2	3241
97	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.2	7.2	3.5	火襷あり　「写」3262
98	須・坏Ａ０	08-Ｌ13	12.3	7.0	3.2	「写」3258
99	須・坏Ａ０	08-Ｌ13	12.4	7.1	2.7	「写」3259
100	須・坏Ａ０	13-Ｌ13	12.4	7.0	2.9	「写」3261
101	須・坏Ａ０	Ｌ13	12.4	6.6	3.7	3226
102	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.5	7.4	3.3	「写」3249
103	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.5	6.8	3.3	「写」3248
104	須・坏Ａ０	13-Ｌ13	12.5	6.6	3.6	3236
105	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.5	6.2	3.8	3266
106	須・坏Ａ０	08-Ｌ13	12.6	6.2	2.8	3218
107	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.6	7.2	3.4	3220
108	須・坏Ａ０	09-Ｌ13	12.6	6.6	3.5	3216
109	須・坏Ａ０	09-Ｌ13	12.6	6.6	3.7	3240
110	須・坏Ａ０	Ｌ13	12.6	6.6	3.7	3243

第60図　ＳＪ101・102灰原出土土器(5)



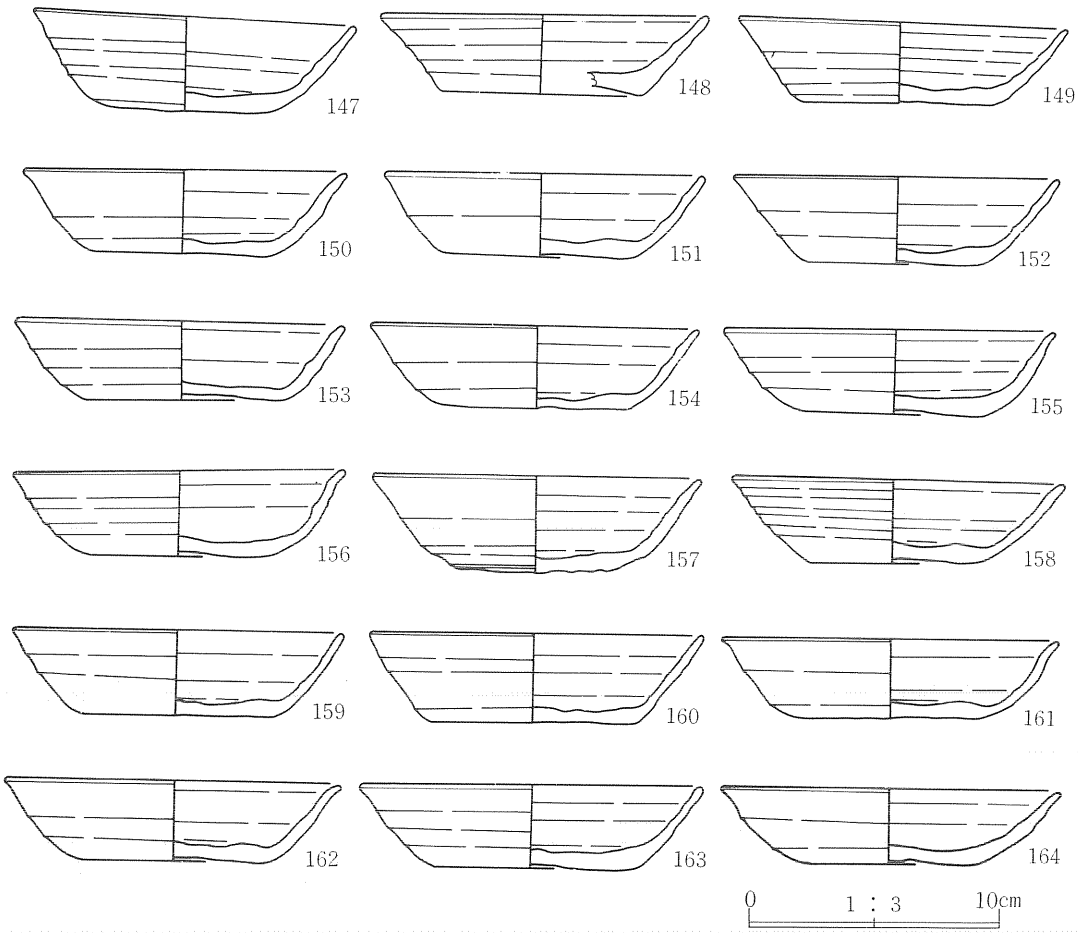
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
111	須・坏Ａ０	04-Ｌ12、08-Ｌ13	12.7	7.4	2.8	3222
112	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.7	6.5	2.9	「写」3209
113	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	12.8	6.8	3.3	3251
114	須・坏Ａ０	09-Ｌ13	12.8	6.4	3.6	3235
115	須・坏Ａ０	09-Ｌ13	13.0	7.0	3.3	「写」3250
116	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	13.0	7.0	3.3	3219
117	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	13.0	6.6	3.9	3237
118	須・坏Ａ０	09-Ｌ13	13.3	6.0	3.9	3215
119	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	13.3	6.6	4.4	3260
120	須・坏Ａ０	Ｌ13	13.4	7.2	3.2	3263
121	須・坏Ａ０	09-Ｌ13	13.4	8.0	3.7	3227
122	須・坏Ａ０	14-Ｌ13	13.6	8.4	2.9	「写」3269
123	須・坏Ａ０	08-Ｌ12、13-Ｌ10	11.3	6.1	3.3	3153
124	須・坏Ａ０	04-Ｌ12	12.2	7.8	2.6	3175
125	須・坏Ａ０	09-Ｌ12	12.2	6.0	2.8	3158
126	須・坏Ａ０	13-Ｌ12・11	12.3	7.2	3.0	「写」3186
127	須・坏Ａ０	14-Ｌ12	12.3	6.8	3.2	3185
128	須・坏Ａ０	13-Ｌ12・11	12.3	6.8	3.7	3163

第61図　ＳＪ101・102灰原出土土器(6)



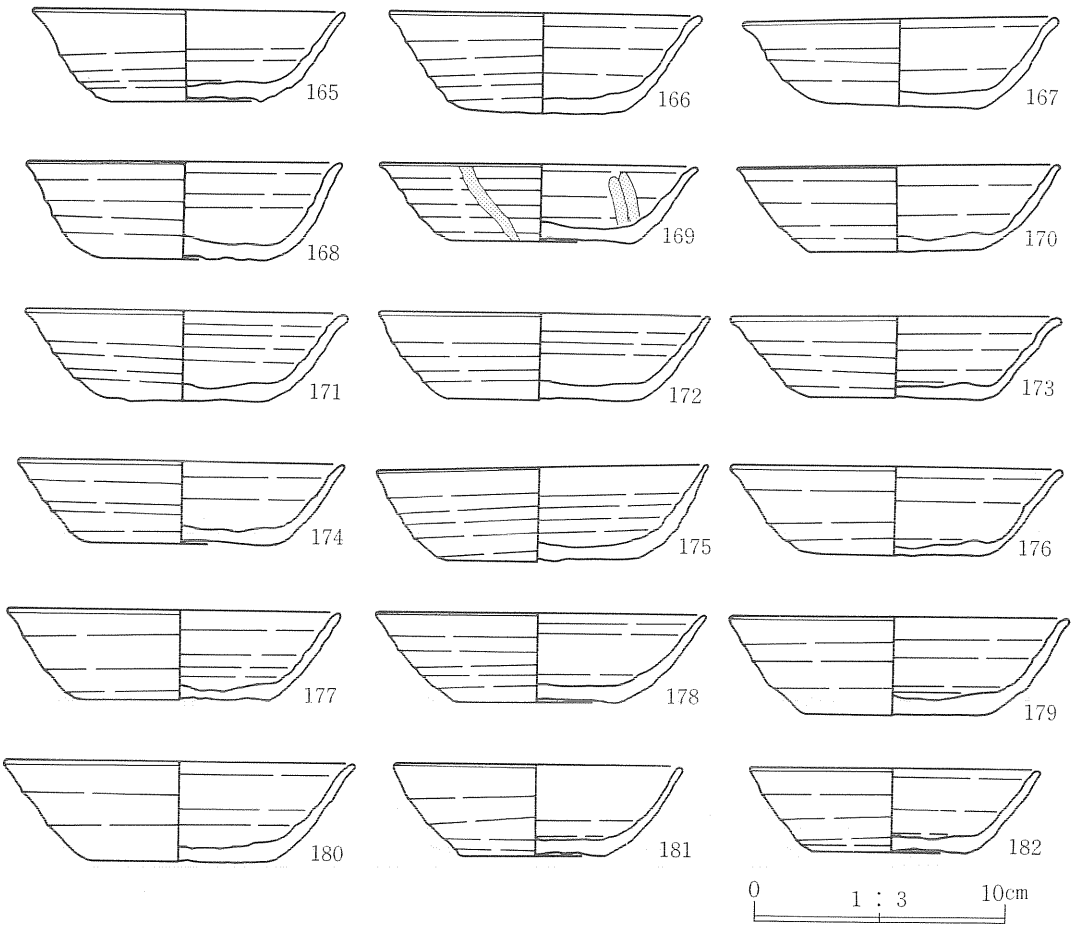
番品	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
129	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.3	6.3	3.7	3181
130	須・坏Ａ０	14-Ｌ12、13-Ｌ11	12.4	6.6	3.3	3146
131	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.4	6.7	3.5	「写」3193
132	須・坏Ａ０	14-Ｌ12	12.5	7.4	3.4	「写」3190
133	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.5	7.0	3.4	3144
134	須・坏Ａ０	14-Ｌ12	12.5	7.4	3.4	3168
135	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.5	7.4	3.5	3180
136	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.5	7.1	3.6	「写」3170
137	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.6	7.6	3.1	3155
138	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.6	7.6	3.1	3191
139	須・坏Ａ０	14-Ｌ12	12.6	7.2	3.3	3203
130	須・坏Ａ０	Ｌ12	12.6	6.0	3.4	3200
141	須・坏Ａ０	03-Ｌ10、08-Ｌ12、09-Ｌ6、10-Ｌ8	12.6	7.0	3.4	3145
142	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.6	6.5	3.5	3179
143	須・坏Ａ０	08-Ｌ12・11	12.6	7.2	3.6	3177
144	須・坏Ａ０	13-Ｌ11、14-Ｌ12	12.7	7.6	3.3	3189
145	須・坏Ａ０	08-Ｌ12	12.7	6.5	3.5	3188
146	須・坏Ａ０	09-Ｌ12・11	12.7	6.7	3.7	3198

第62図　ＳＪ101・102灰原出土土器(7)



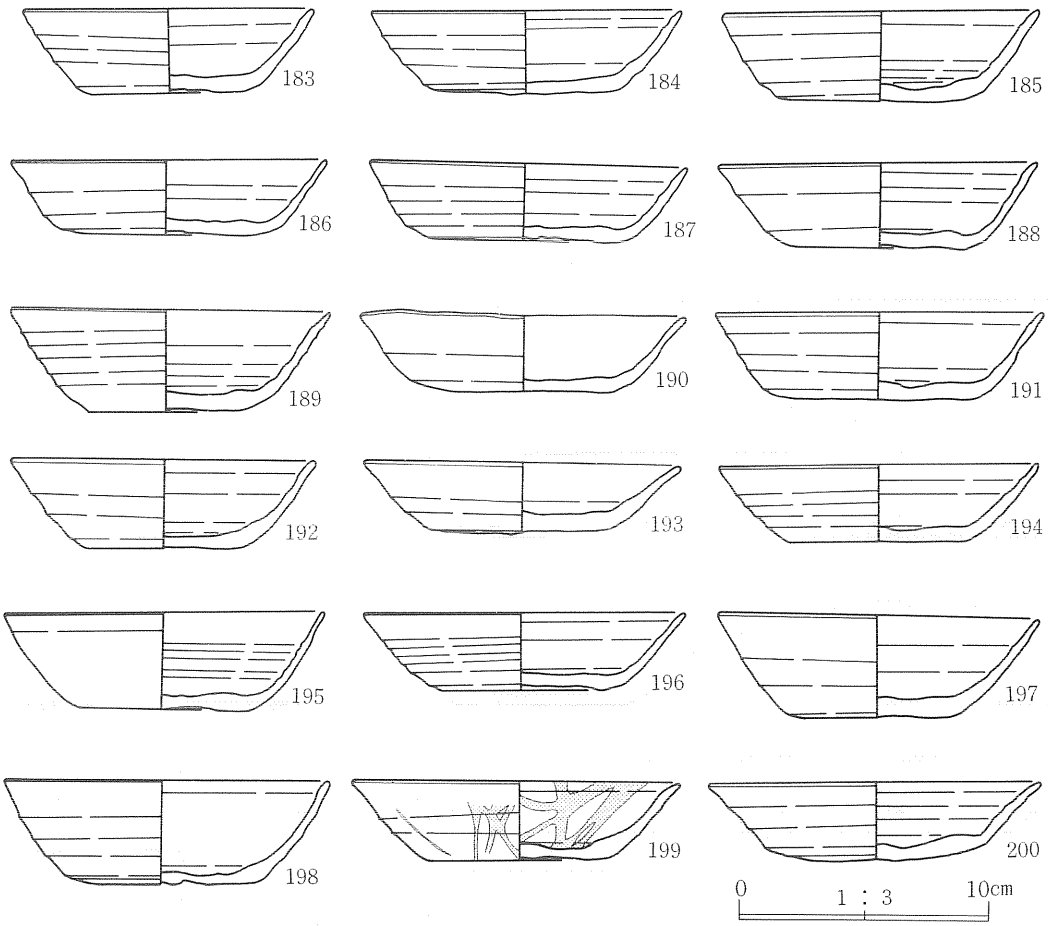
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
147	須・坏A0	14-L12・11	12.7	5.6	3.8	3159
148	須・坏A0	13-L7、14-L12・10	12.8	7.8	3.1	3160
149	須・坏A0	14-L12・11	12.8	7.4	3.2	3197
150	須・坏A0	08-L12・11・9	12.8	7.0	3.4	3204
151	須・坏A0	13-L12、14-L12	12.8	7.8	3.5	3173
152	須・坏A0	08-L12、13-L10	12.8	7.2	3.5	「写」3172
153	須・坏A0	14-L12	12.9	8.0	3.2	3207
154	須・坏A0	08-L12	12.9	7.4	3.3	「写」3178
155	須・坏A0	08-L12	12.9	7.0	3.4	3182
156	須・坏A0	08-L12	12.9	7.0	3.4	3195
157	須・坏A0	L12	12.9	6.4	3.8	3162
158	須・坏A0	08-L12、14-L10	13.0	6.4	3.3	「写」3201
159	須・坏A0	08-L12	13.0	7.7	3.4	3157
160	須・坏A0	14-L12	13.0	8.0	3.5	「写」3206
161	須・坏A0	08-L12・11	13.2	7.0	3.2	3166
162	須・坏A0	08-L12	13.2	7.4	3.2	「写」3174
163	須・坏A0	L12	13.3	7.6	3.3	3208
164	須・坏A0	08-L12	13.4	6.9	3.0	「写」3156

第63図　SJ101・102灰原出土土器(8)



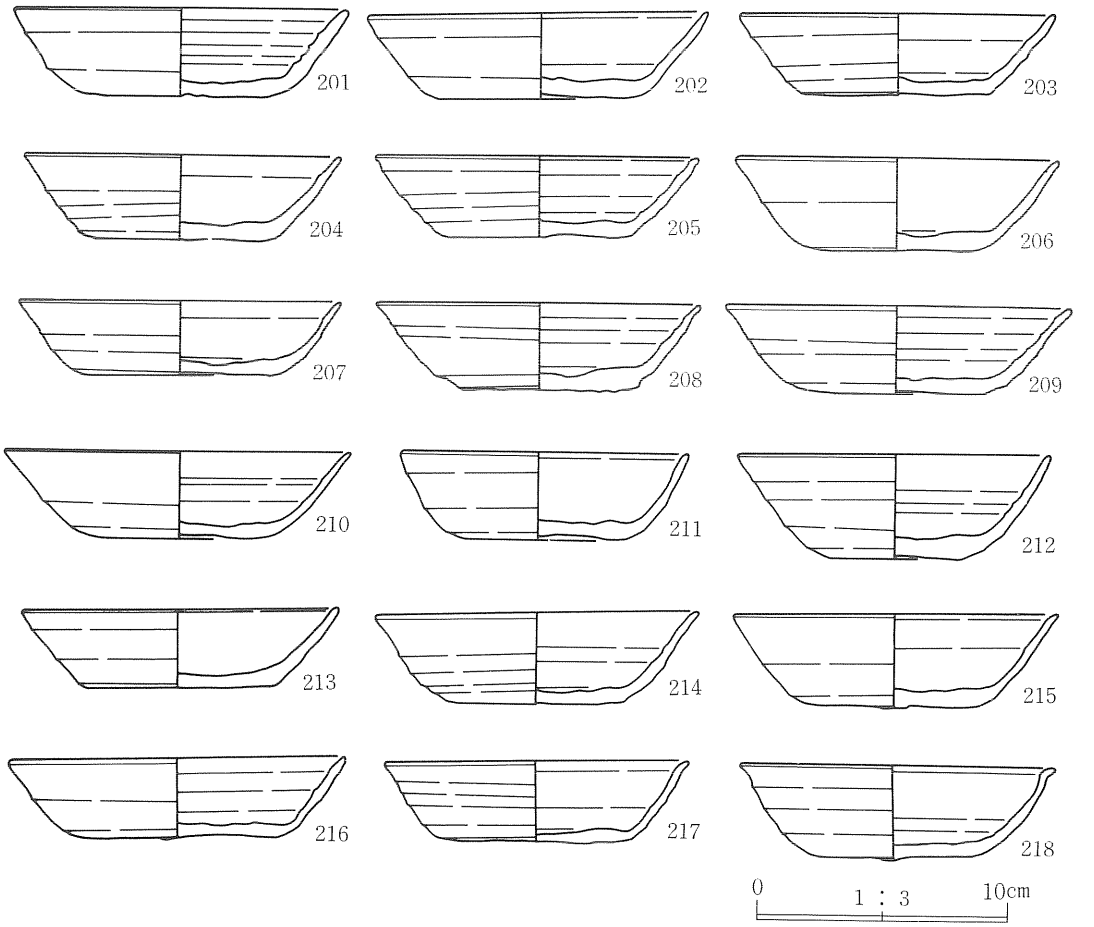
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
165	須・坏Ａ０	13-Ｌ11	12.1	6.0	3.6	「写」3136
166	須・坏Ａ０	14-Ｌ11	12.1	6.2	4.0	「写」3122
167	須・坏Ａ０	13-Ｌ11	12.2	6.5	3.5	「写」3132
168	須・坏Ａ０	13-Ｌ11	12.2	6.5	3.9	3126
169	須・坏Ａ０	14-Ｌ11	12.3	7.0	3.1	火襷あり　3131
170	須・坏Ａ０	08-Ｌ11･9	12.5	6.8	3.5	3137
171	須・坏Ａ０	13-Ｌ11	12.5	6.4	3.6	3125
172	須・坏Ａ０	13-Ｌ11、14-Ｌ10	12.7	7.2	3.4	3140
173	須・坏Ａ０	13-Ｌ11	12.8	6.7	3.3	「写」3130
174	須・坏Ａ０	14-Ｌ11	12.8	7.4	3.3	3139
175	須・坏Ａ０	08-Ｌ11	12.8	7.2	3.7	3123
176	須・坏Ａ０	13-Ｌ11･8･5	12.9	7.0	3.5	3124
177	須・坏Ａ０	08-Ｌ11	12.9	7.2	3.5	3127
178	須・坏Ａ０	14-Ｌ11	12.9	6.3	3.6	3142
179	須・坏Ａ０	14-Ｌ11	13.1	7.0	3.9	3121
180	須・坏Ａ０	14-Ｌ11	13.7	7.2	4.0	3133
181	須・坏Ａ０	08-Ｌ10、14-Ｌ8	11.3	5.6	3.6	3102
182	須・坏Ａ０	14-Ｌ10	11.4	6.3	3.3	3113

第64図　ＳＪ101･102灰原出土土器(9)



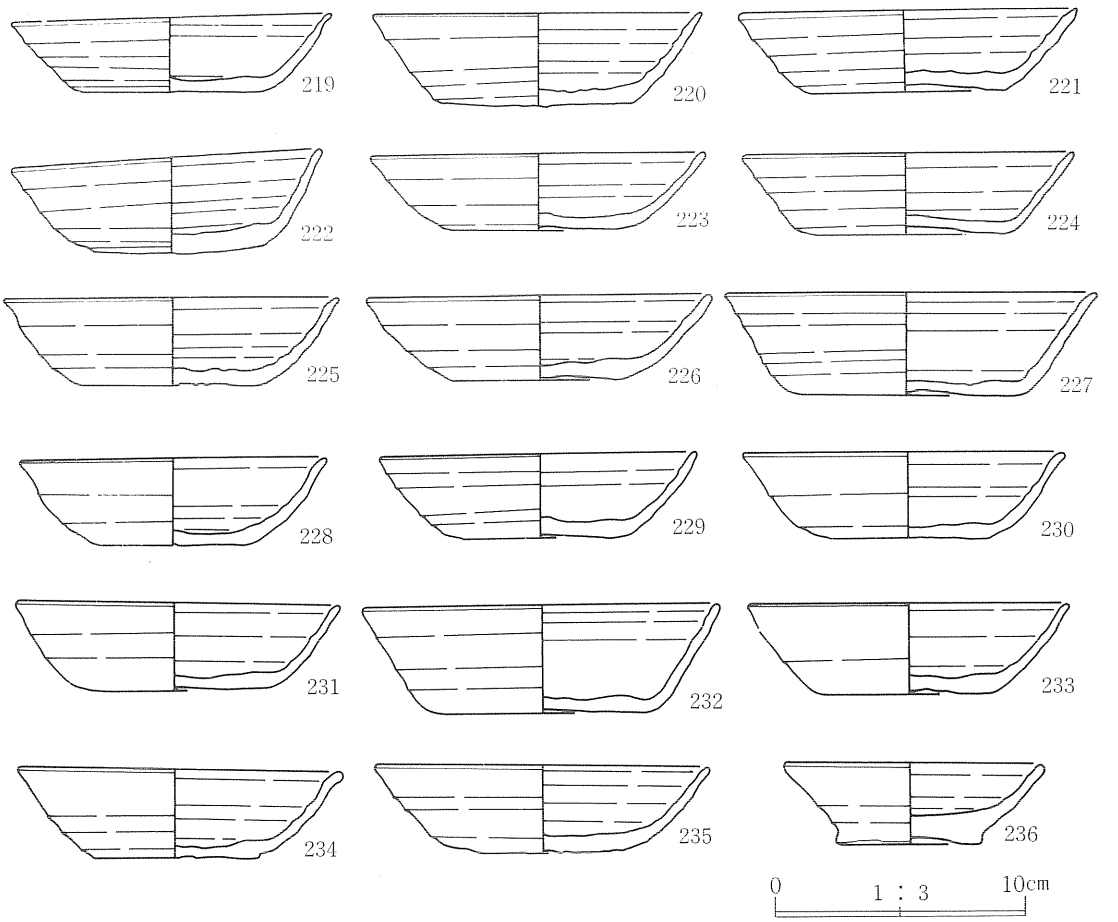
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考	
183	須・坏Ａ０	14-Ｌ10	11.5	6.1	3.3		3114
184	須・坏Ａ０	13-Ｌ７、14-Ｌ10	12.3	7.4	3.3		3092
185	須・坏Ａ０	14-Ｌ10	12.4	6.8	3.5	「写」	3117
186	須・坏Ａ０	08-Ｌ10	12.5	6.7	2.9		3120
187	須・坏Ａ０	14-Ｌ10・9	12.6	7.0	3.1		3108
188	須・坏Ａ０	08-Ｌ10	12.6	6.7	3.3		3096
189	須・坏Ａ０	14-Ｌ10	12.7	6.3	4.0		3107
190	須・坏Ａ０	14Ｌ01-Ｌ10	12.8	7.2	3.0		3109
191	須・坏Ａ０	14-Ｌ10	12.9	7.7	3.5		3105
192	須・坏Ａ０	14-Ｌ9	12.0	6.2	3.5	「写」	3078
193	須・坏Ａ０	14-Ｌ9・8	12.5	7.1	2.8		3070
194	須・坏Ａ０	13-Ｌ8、14-Ｌ9・8	12.6	7.2	3.0		3072
195	須・坏Ａ０	14-Ｌ9・8、15-Ｌ9・8	12.6	6.8	3.8		3065
196	須・坏Ａ０	03-Ｌ9、08-Ｌ9	12.7	6.4	3.1	「写」	3076
197	須・坏Ａ０	14-Ｌ9	12.7	6.0	4.1		3062
198	須・坏Ａ０	14-Ｌ9	12.8	7.6	4.1		3080
199	須・坏Ａ０	09-Ｌ9	12.9	7.4	3.1	火襷あり	3068
200	須・坏Ａ０	14-Ｌ9	13.0	6.9	3.1		3074

第65図　ＳＪ101・102灰原出土土器(10)



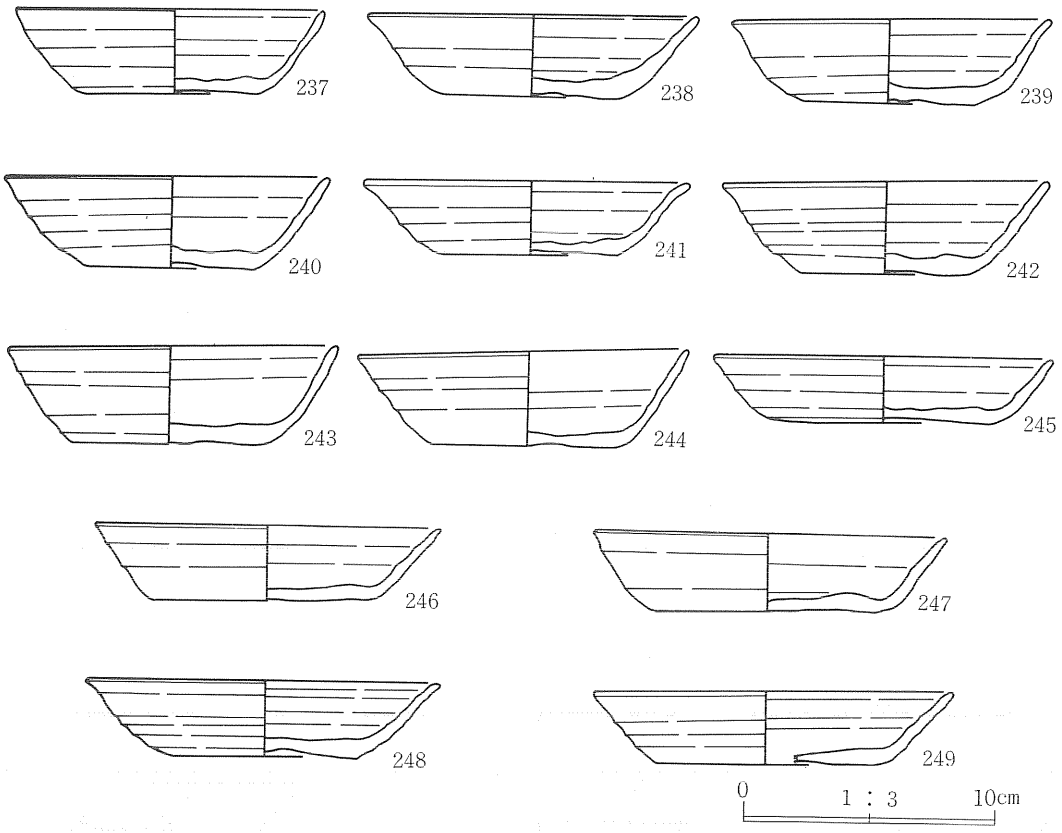
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
201	須・坏Ａ０	09-Ｌ9	13.1	7.5	3.5	3077
202	須・坏Ａ０	03-Ｌ9・8・1	13.3	7.7	3.4	3083
203	須・坏Ａ０	14-Ｌ8	12.4	7.1	3.3	「写」3061
204	須・坏Ａ０	13-Ｌ8	12.4	7.0	3.3	3056
205	須・坏Ａ０	14-Ｌ8・6	12.6	7.2	3.3	「写」3053
206	須・坏Ａ０	03-Ｌ8	12.6	7.0	3.7	「写」3047
207	須・坏Ａ０	08-Ｌ8～6	12.7	7.2	2.9	3044
208	須・坏Ａ０	14-Ｌ8	12.7	7.0	3.4	3055
209	須・坏Ａ０	14-Ｌ8	13.5	7.2	3.5	「写」3048
210	須・坏Ａ０	14-Ｌ8・7、19-Ｌ3	13.6	6.8	3.4	3049
211	須・坏Ａ０	15-Ｌ7	11.3	6.6	3.5	3042
212	須・坏Ａ０	15-Ｌ7	12.2	5.5	4.2	3038
213	須・坏Ａ０	13-Ｌ7	12.4	7.4	3.1	「写」3039
214	須・坏Ａ０	15-Ｌ7～5	12.7	6.9	3.6	「写」3043
215	須・坏Ａ０	15-Ｌ7	12.8	6.9	3.7	3035
216	須・坏Ａ０	10-Ｌ7・3	13.2	7.7	3.2	3036
217	須・坏Ａ０	13-Ｌ6	11.9	6.2	3.2	3029
218	須・坏Ａ０	04-Ｌ6、10-Ｌ5	12.3	6.4	3.8	3028

第66図　ＳＪ101・102灰原出土土器(11)



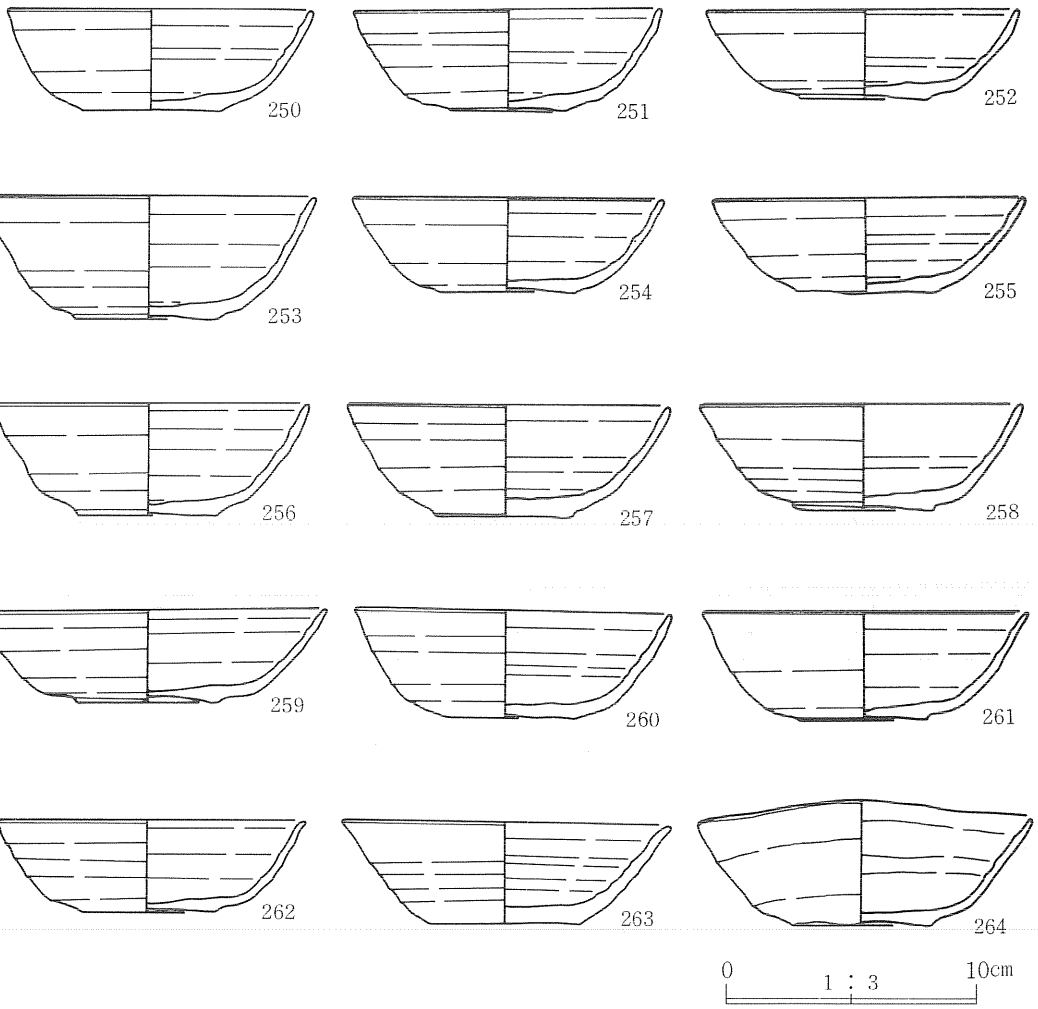
番号	器　種	出土位置	口径	底径	器高	備　考
219	須・坏Ａ０	14-Ｌ6	12.6	7.5	3.0	3033
220	須・坏Ａ０	14-Ｌ6	12.9	7.5	3.7	3034
221	須・坏Ａ０	10-Ｌ6	13.3	7.7	3.3	「写」3031
222	須・坏Ａ０	15-Ｌ5	12.1	6.4	3.8	3018
223	須・坏Ａ０	08-Ｌ5	13.0	6.6	3.0	3022
224	須・坏Ａ０	13-Ｌ5・4	13.0	7.4	3.2	3020
225	須・坏Ａ０	10-Ｌ5～3	13.1	7.2	3.5	3023
226	須・坏Ａ０	15-Ｌ5・4	13.4	6.8	3.3	3015
227	須・坏Ａ０	02-Ｌ4、03-Ｌ5、04-Ｌ4	14.5	9.0	4.0	3021
228	須・坏Ａ０	14-Ｌ4	12.0	6.0	3.5	3014
229	須・坏Ａ０	18-Ｌ4	12.4	6.2	3.4	3005
230	須・坏Ａ０	17-Ｌ4・2、22-Ｌ3・2	12.5	6.2	3.4	「写」3011
231	須・坏Ａ０	14-Ｌ4・3	12.6	7.8	3.5	3006
232	須・坏Ａ０	04-Ｌ4、07-Ｌ4・2・1、12-Ｌ1、13-Ｌ2	13.9	8.8	4.3	3013
233	須・坏Ａ０	19-Ｌ3	12.5	7.0	3.6	3001
234	須・坏Ａ０	13-Ｌ3	12.7	6.4	3.6	3003
235	須・坏Ａ０	10-Ｌ3	13.0	5.2	3.5	3004
236	須・坏Ａ０	17-Ｌ2	10.0	5.6	3.3	「写」2998

第67図　ＳＪ101・102灰原出土土器(12)



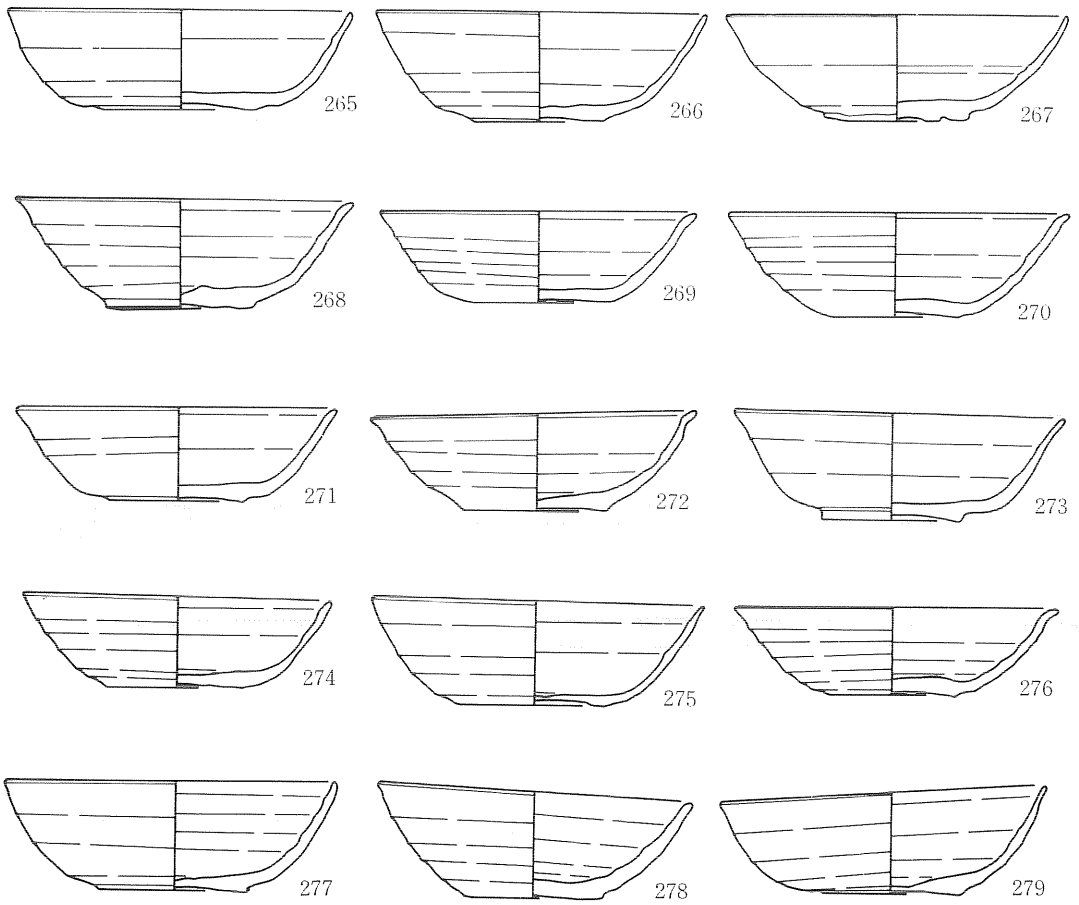
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
237	須・坏A0	17-L2・1	12.1	7.0	3.4	「写」2999
238	須・坏A0	18-L2	12.8	7.4	3.3	3000
239	須・坏A0	14K01	12.5	6.6	3.3	3399
240	須・坏A0	13L	12.6	6.5	3.6	3396
241	須・坏A0	14K01	12.7	7.0	2.9	3405
242	須・坏A0	13L	12.7	6.4	3.7	「写」3407
243	須・坏A0	13L	12.9	7.4	3.9	3410
244	須・坏A0	13L	13.0	7.4	3.7	3406
245	須・坏A0	12K15-I	13.2	8.8	2.7	3404
246	須・坏A0	12K15・20-I	13.6	8.6	3.0	3403
247	須・坏A0	12K15-I	13.7	8.6	3.1	3400
248	須・坏A0	SJ101灰原	13.9	7.3	3.0	3395
249	須・坏A0	12K15・20-I	14.1	8.6	2.9	「写」3408

第68図　SJ101・102灰原出土土器(13)



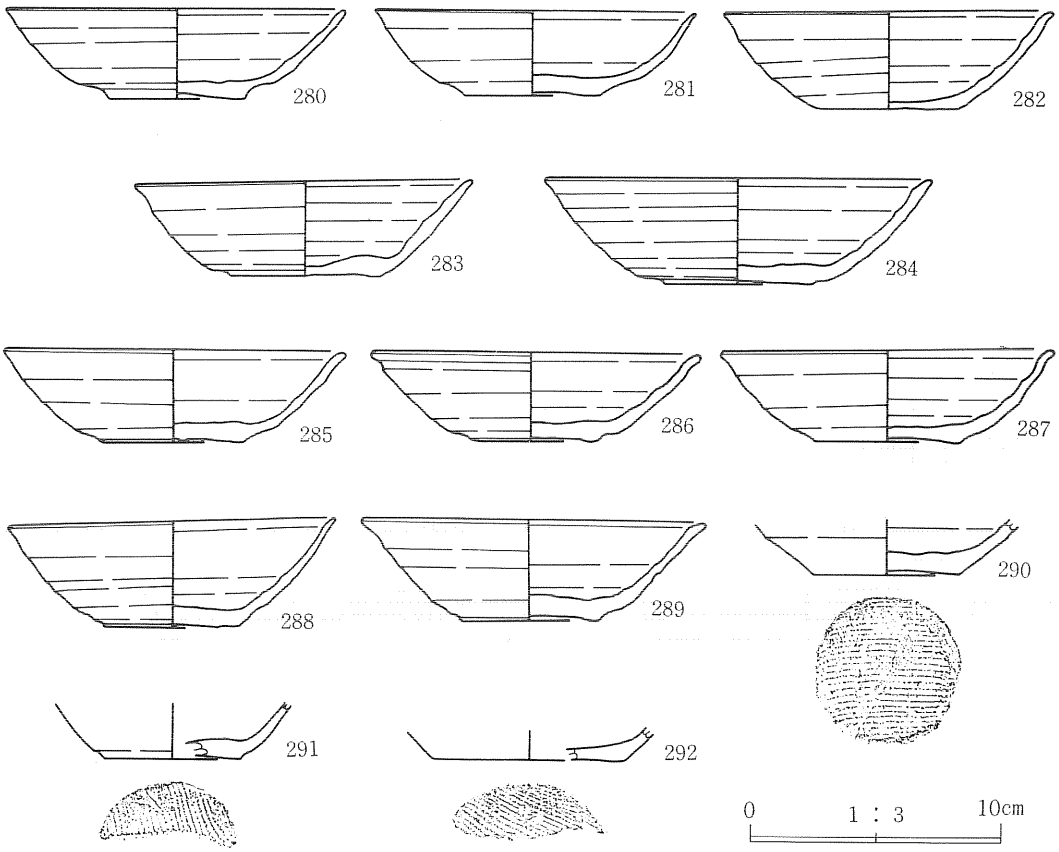
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考	
250	須・坏B 0	08-L15、09-L13	12.0	5.4	4.0		2993
251	須・坏B 0	14-L13、L14、L15	12.1	4.7	4.1	「－」状の痕跡	2991
252	須・坏B 0	08-L15・14	12.2	5.0	3.5	「－」状の痕跡	2994
253	須・坏B 0	08-L15・14	13.1	5.6	4.9		2990
254	須・坏B 0	08-L14、L13	12.2	5.5	3.8		2984
255	須・坏B 0	08-L14・11	12.3	5.4	3.8		2985
256	須・坏B 0	08-L14・13、09-L11、14-L13	12.6	5.4	4.4	「－」状の痕跡	2989
257	須・坏B 0	08-L14・11、09-L14・13	12.6	5.4	4.5	「－」状の痕跡	2988
258	須・坏B 0	08-L14、09-L11	12.7	5.5	4.2		2980
259	須・坏B 0	14-L14・13	13.8	5.6	3.7	「－」状の痕跡	2987
260	須・坏B 0	13-L13・12、14-L13・12	12.5	5.2	4.3		2976
261	須・坏B 0	09-L13	12.8	5.0	4.3	「写」	2975
262	須・坏B 0	09-L11、13-L12	12.2	5.4	3.7	「－」状の痕跡 「写」	2974
263	須・坏B 0	08-L12、13-L11、14-L11	12.9	6.1	4.1		2971
264	須・坏B 0	08-L12	13.1	5.5	4.2	「－」状の痕跡 「写」	2973

第69図　ＳＪ101・102灰原出土土器(14)



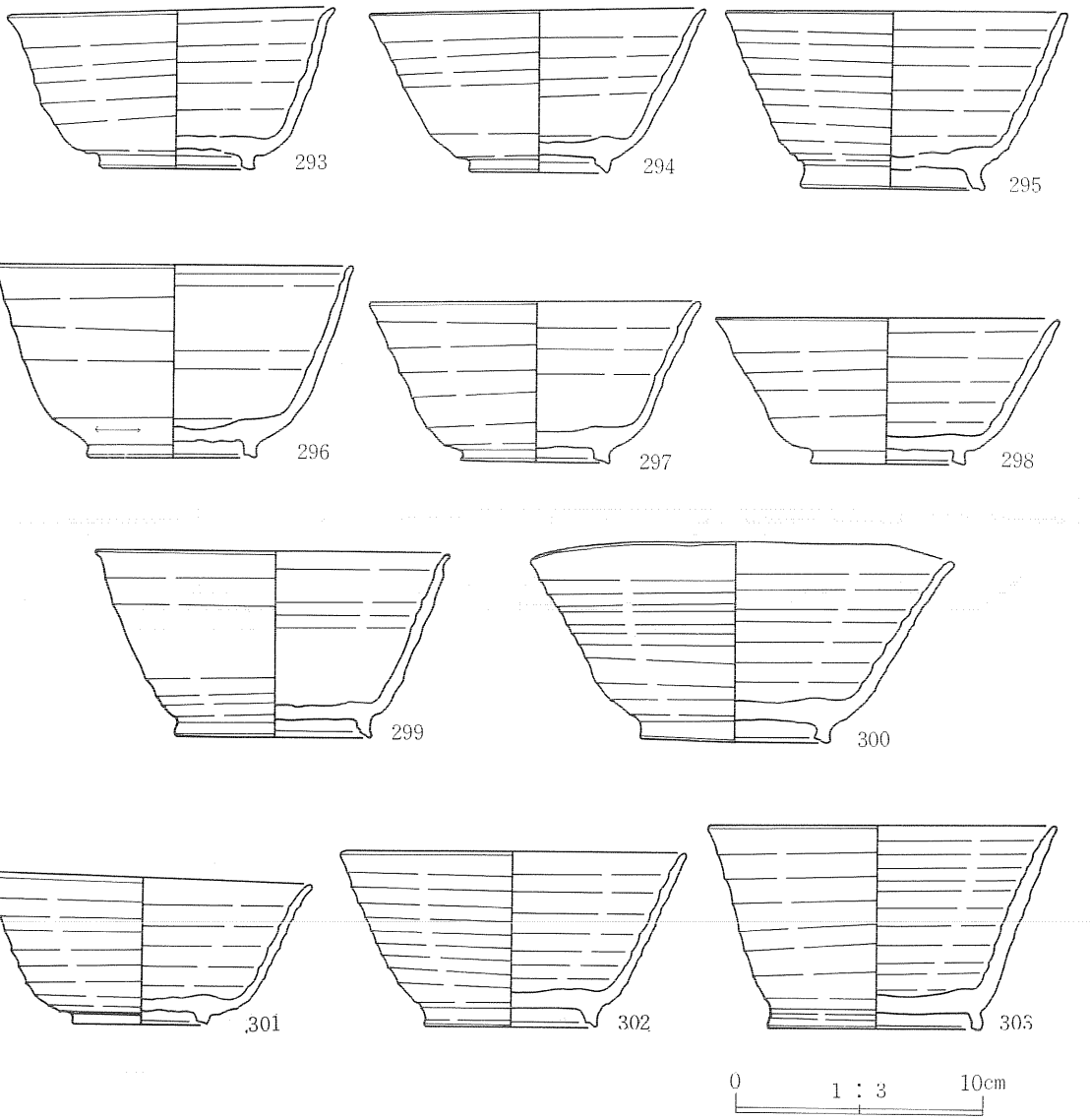
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考	
265	須・坏B 0	14-L12	13.5	6.1	4.0	「－」状の痕跡	「写」 2972
266	須・坏B 0左	08-L11	13.0	5.2	4.3		2968
267	須・坏B 0	10-L9、13-L8、14-L11・10・8、15-L8	13.4	5.8	4.2		2970
268	須・坏B 0	09-L11・10・4～2	13.4	6.0	4.4		2969
269	須・坏B 0	03-L10、04-L6	12.3	5.1	3.6	「－」状の痕跡	2966
270	須・坏B 0	14-L10・8	13.4	4.9	4.1		「写」 2965
271	須・坏B 0	04-L9・8	12.6	5.4	3.7		2959
272	須・坏B 0	08-L9	12.7	5.7	3.8		「写」 2963
273	須・坏B 0	14-L9・8	12.9	5.5	4.3		2960
274	須・坏B 0	10-L8	12.1	5.5	3.6	「－」状の痕跡	2957
275	須・坏B 0	09-L8、10-L8	13.2	5.8	4.1		2956
276	須・坏B 0	18-L7	12.8	5.0	3.5		2955
277	須・坏B 0	09-L4、L7・5	13.1	5.8	4.3	「－」状の痕跡	2954
278	須・坏B 0	04-L4、14-L6	12.3	5.4	4.2		2951
279	須・坏B 0	10-L6～4	12.7	5.5	4.0	「－」状の痕跡	2952

第70図　ＳＪ101・102灰原出土土器(15)



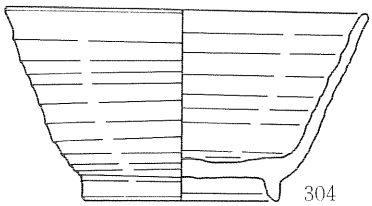
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
280	須・坏Ｂ０	09-Ｌ6･5	13.3	5.3	3.6	「ワ」2950
281	須・坏Ｂ０	Ｌ5	12.6	5.3	3.4	2949
282	須・坏Ｂ０	13-Ｌ4	12.8	5.5	3.9	2948
283	須・坏Ｂ０	18-Ｌ4～2	13.2	5.9	3.8	2947
284	須・坏Ｂ０	18-Ｌ4･3､23-Ｌ3	15.2	5.8	4.2	2946
285	須・坏Ｂ０	09-Ｌ3	13.3	5.6	3.7	2945
286	須・坏Ｂ０	12-Ｌ2･1	12.9	5.1	3.5	2942
287	須・坏Ｂ０	12-Ｌ2	13.0	5.8	3.6	2943
288	須・坏Ｂ０	ＳＪ102窯左Ｐ	12.8	5.4	4.2	2995
289	須・坏Ｂ０	ＳＪ102窯左Ｐ	13.4	5.4	4.0	「ワ」2996
290	須・坏Ｃ０	14-Ｌ8	－	5.9	(2.2)	105
291	須・坏Ｃ０	ＳＪ102灰原	－	5.3	(2.3)	107
292	須・坏Ｃ０	10-Ｌ3	－	7.5	(1.4)	112

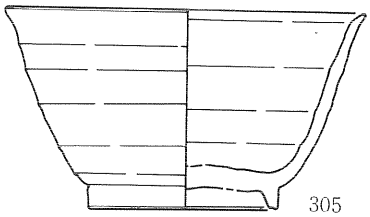
第71図　ＳＪ101･102灰原出土土器(16)

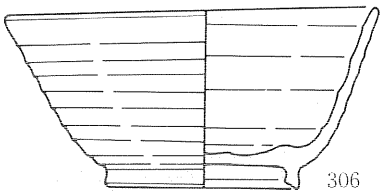


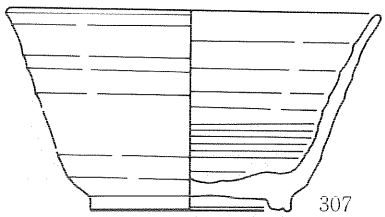
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
293	須・高台付坏A 1	08-L16・15、09-L16	13.0	6.2	6.3	88
294	須・高台付坏A 1	08-L15、09-L16・15	13.5	5.6	6.5	87
295	須・高台付坏A 1	08-L15、09-L16・15・13、13-L11・8、17-L2	13.7	7.2	7.2	「写」89
296	須・高台付坏A 1	08-L16・14、L15	14.1	6.6	7.7	90
297	須・高台付坏A 1	09-L15・12・11	13.2	5.8	6.4	77
298	須・高台付坏A 1	08-L15・14・11、09-L14~12	13.6	6.2	5.9	84
299	須・高台付坏A 1	08-L15・12、10-L13、14L01	14.2	7.9	7.5	「写」85
300	須・高台付坏A 1	08-L15、L14	16.7	7.6	8.1	80
301	須・高台付坏A 1	08-L14・13	13.1	5.4	5.9	63
302	須・高台付坏A 1	08-L14・12・11、13-L3	13.6	6.9	7.0	「写」72
303	須・高台付坏A 1	09-L1、SJ102窯左P	13.8	8.4	8.1	69

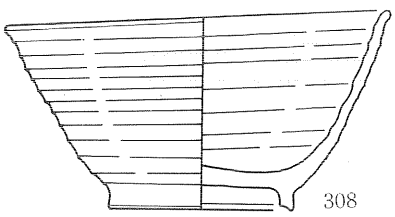
第72図　S101・102灰原出土土器(17)

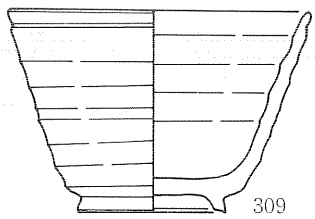


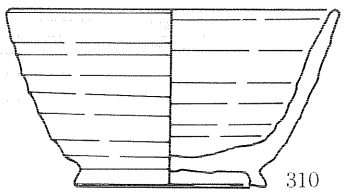


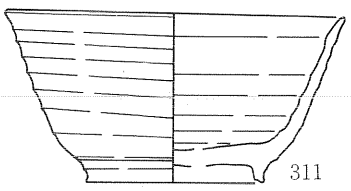


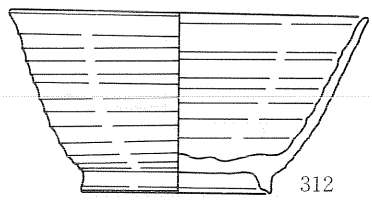








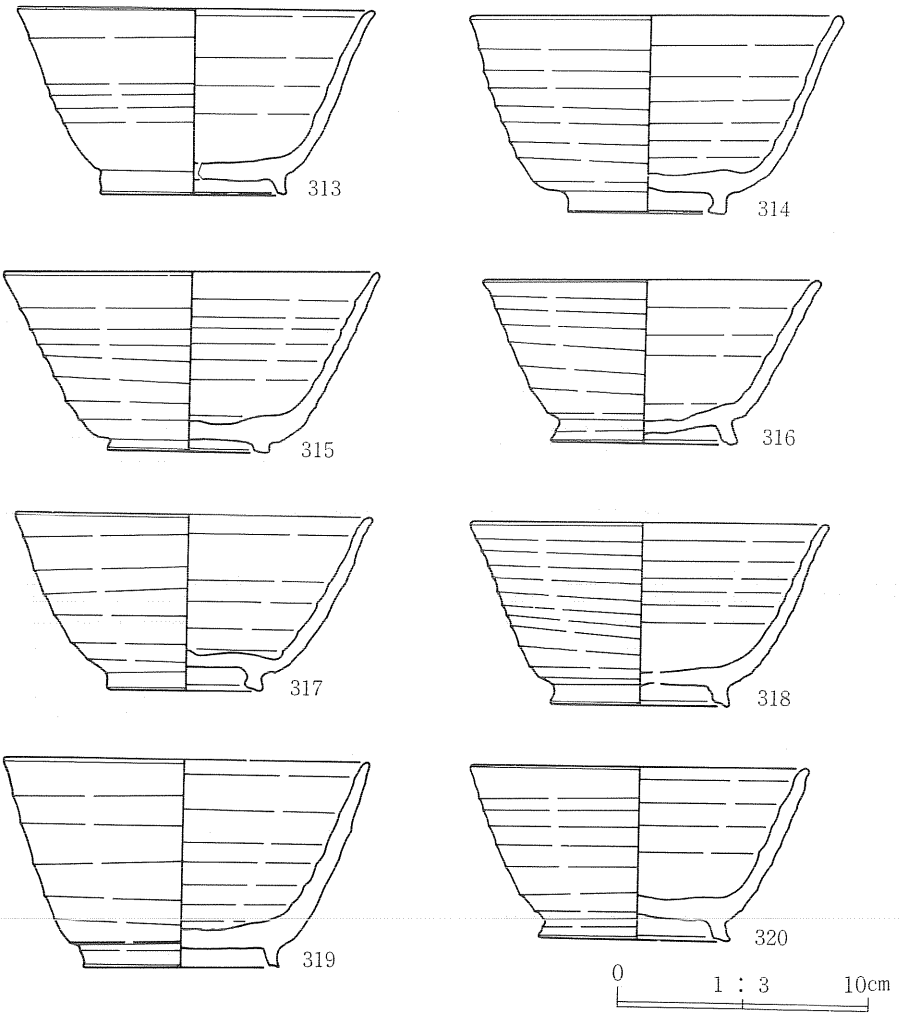




0　1：3　10cm

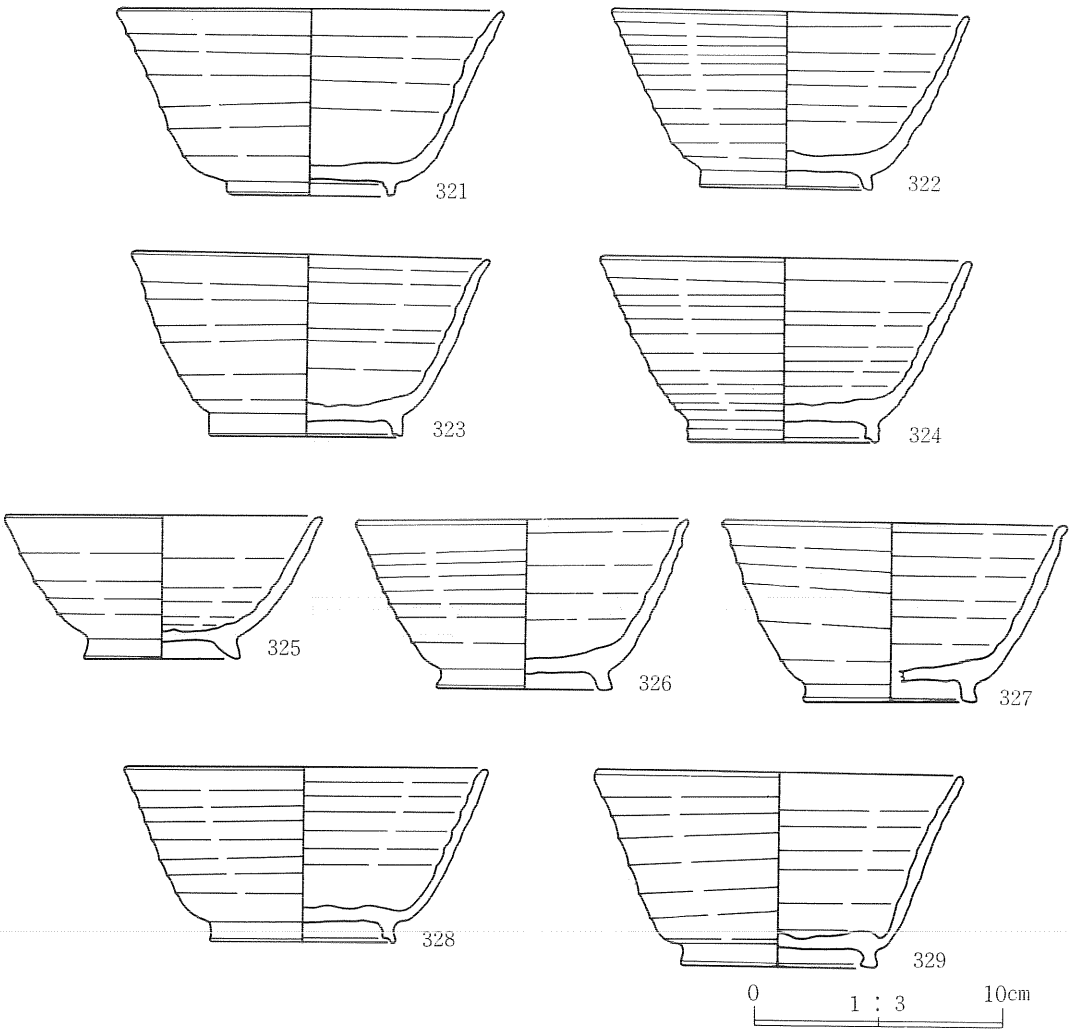
番号	器種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備考
304	須・高台付坏A 1	08-L14・12,09-L14,13-L12,14-L13・12	14.1	7.6	7.5	「写」67
305	須・高台付坏A 1	09-L7,14-L11,L14	14.1	7.4	7.9	32
306	須・高台付坏A 1	08-L14,13-L11,14-L13	14.4	7.5	7.0	64
307	須・高台付坏A 1	03-L14～10・7,08-L14,09-L14,13-L11	14.6	7.7	7.9	73
308	須・高台付坏A 1	08-L13・12,09-L14・12,14-L10,L11	14.9	7.2	7.6	62
309	須・高台付坏A 1	08-L12,09-L13・12,14-L10・9,13L21-I	12.0	5.8	8.0	45
310	須・高台付坏A 1	04-L4・3,10-L4・2,13-L13・10,14-L6	12.9	7.4	7.0	「写」58
311	須・高台付坏A 1	03-L13・12,08-L10	13.4	7.0	6.7	「写」54
312	須・高台付坏A 1	02-L2、14-L13	14.1	7.5	7.1	50

第73図　SJ101・102灰原出土土器(18)



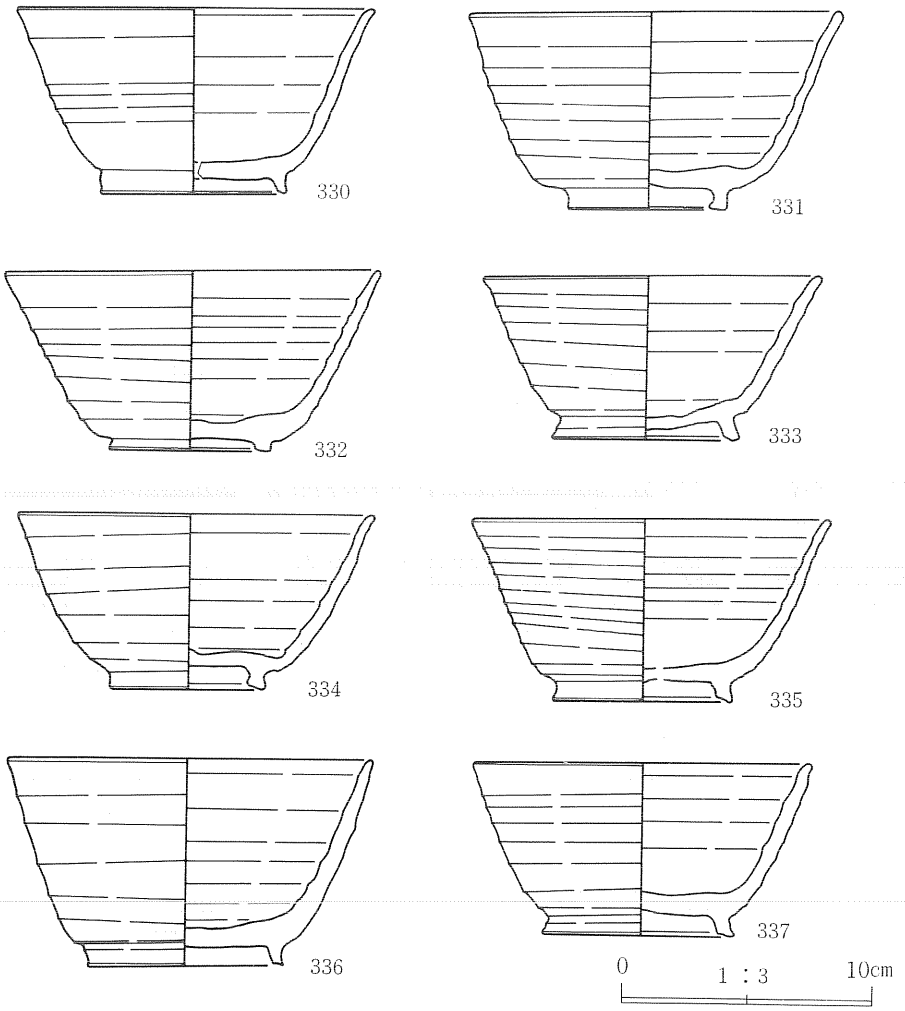
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
313	須・高台付坏A1	10-L8、14-L13	14.3	6.5	7.4	「写」61
314	須・高台付坏A1	08-L13、09-L13・12、13-L12・11、13M13	14.5	8.2	7.7	48
315	須・高台付坏A1	14-L13	15.2	6.4	6.5	「写」55
316	須・高台付坏A1	13-L7、14-L13～11	15.3	8.8	6.9	46
317	須・高台付坏A1	03-L12・11、08-L12、13-L1	13.7	7.0	6.6	「写」35
318	須・高台付坏A1	08-L12・10、13-L10、14-L10	14.2	7.1	7.7	43
319	須・高台付坏A1	09-L12・11、10-L7、13L01-I	14.6	7.8	7.5	37
320	須・高台付坏A1	04-L10、08-L12、09-L11・8、14-L11	14.6	6.8	7.9	36

第74図　SJ101・102灰原出土土器(19)



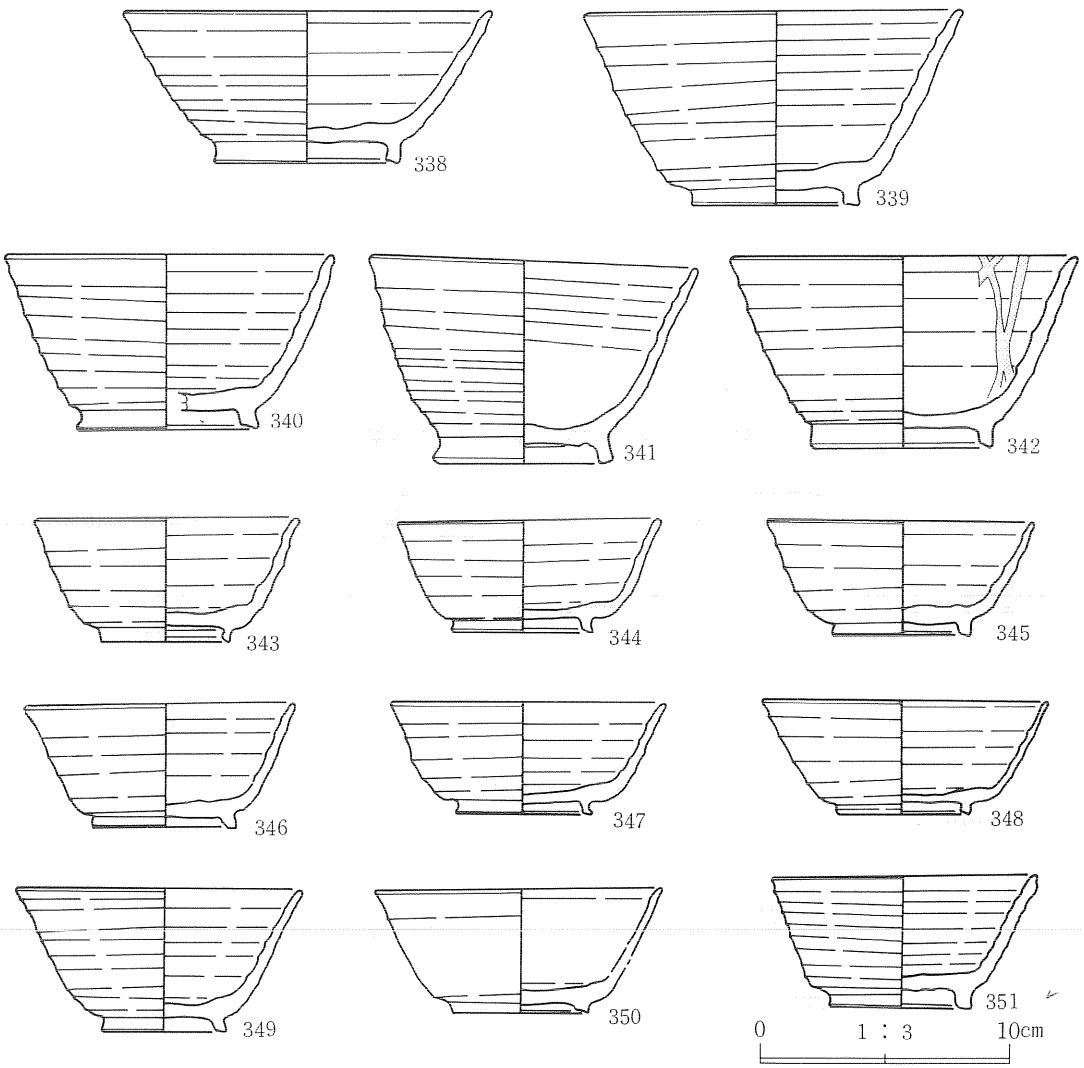
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
321	須・高台付坏Ａ１	04-Ｌ10、14-Ｌ8・7・6	15.3	6.6	7.4	「写」40
322	須・高台付坏Ａ１	09-Ｌ11・7	14.1	6.9	7.0	28
323	須・高台付坏Ａ１	14-Ｌ11、15-Ｌ7	14.1	7.6	7.2	33
324	須・高台付坏Ａ１	09-Ｌ11、18-Ｌ4・3	14.7	7.3	7.3	34
325	須・高台付坏Ａ１	08-Ｌ10	12.4	6.2	5.7	21
326	須・高台付坏Ａ１	03-Ｌ10、10-Ｌ5～2、14-Ｌ8	13.1	6.9	6.7	「写」24
327	須・高台付坏Ａ１	04-Ｌ4・2、08-Ｌ8、10-Ｌ5、14-Ｌ10・9	13.5	6.8	7.1	25
328	須・高台付坏Ａ１	13-Ｌ9～7、14-Ｌ10	14.2	7.2	7.0	22
329	須・高台付坏Ａ１	13Ｋ25-Ｌ10、13Ｌ02-Ｉ	14.3	7.7	7.7	26

第75図　Ｓ101・102灰原出土土器(20)



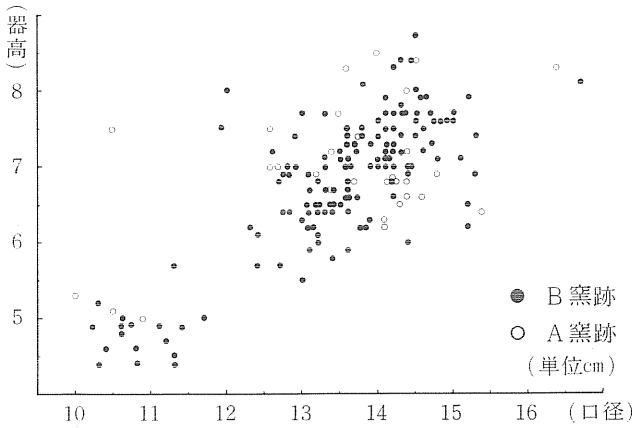
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考
330	須・高台付坏A1	14-L9~7	14.0	7.3	7.4	18
331	須・高台付坏A1	13-L9~7、14-L9	14.3	6.2	7.8	16
332	須・高台付坏A1	14-L9~7	14.8	6.3	7.1	17
333	須・高台付坏A1	04-L3・2、14L06	13.1	7.4	6.5	14
334	須・高台付坏A1	14-L8・4、16-L1	13.9	6.0	7.0	「写」13
335	須・高台付坏A1	10-L7・5	13.9	7.0	7.3	「写」 7
336	須・高台付坏A1	15-L7・6	14.2	7.6	8.3	「写」 8
337	須・高台付坏A1	10-L5・4	13.1	7.3	6.9	5

第76図　SJ101・102灰原出土土器(21)

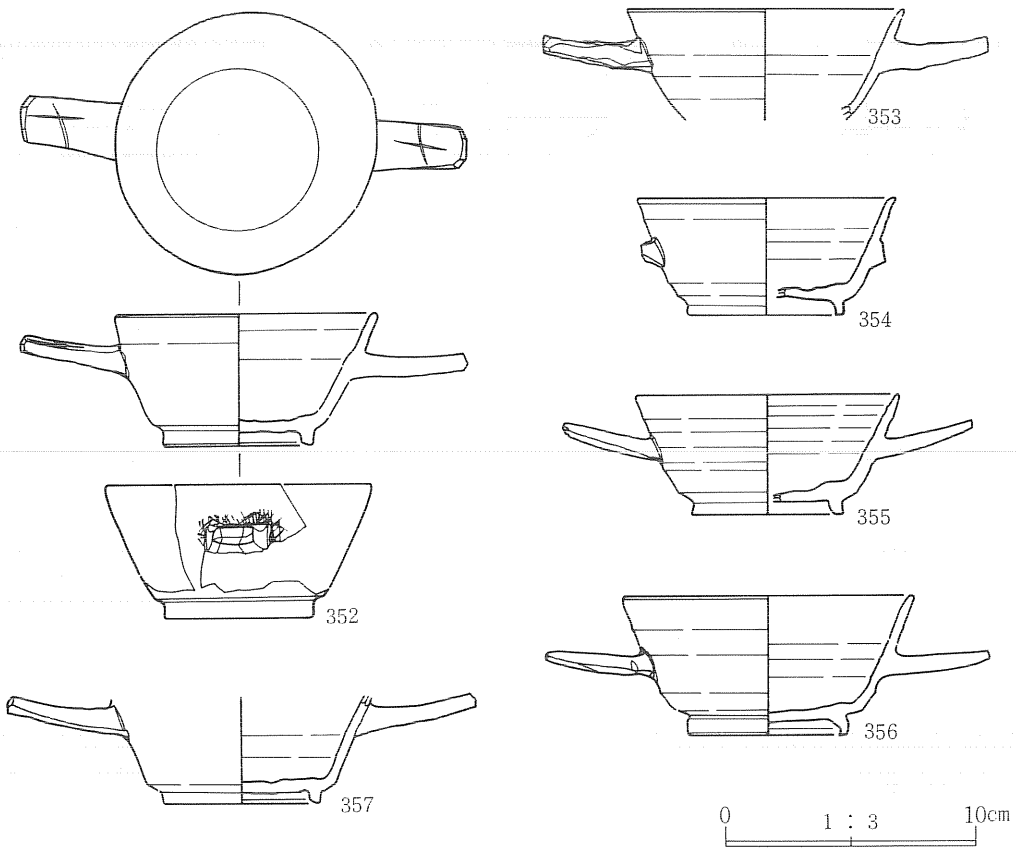


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　考	
338	須・高台付坏Ａ１	05-Ｌ２、10-Ｌ５・３、14Ｋ17	14.4	7.2	6.0		4
339	須・高台付坏Ａ１	10-Ｌ５~３	14.7	6.6	7.7		3
340	須・高台付坏Ａ１	07-Ｌ３、08-Ｌ２、10-Ｌ３、15-Ｌ４、13Ｌ04	12.8	7.1	7.0	「写」	1
341	須・高台付坏Ａ２	08-Ｌ５・４、13Ｌ20-Ｉ	12.8	7.1	8.0		239
342	須・高台付坏Ａ２	10-Ｌ２、・１、14-Ｌ８、13Ｌ06-Ｉ	13.6	7.0	7.6	火襷あり	240
343	須・高台付坏Ｂ１	08-Ｌ15・９、09-Ｌ14	10.2	5.0	4.9		76
344	須・高台付坏Ｂ１	08-Ｌ15	10.3	5.6	4.4		81
345	須・高台付坏Ｂ１	09-Ｌ14・11	10.4	5.4	4.6		66
346	須・高台付坏Ｂ１	09-Ｌ14・13、14-Ｌ13	10.6	5.7	4.9	「写」	68
347	須・高台付坏Ｂ１	09-Ｌ13・11、14Ｌ11	10.8	5.3	4.4		49
348	須・高台付坏Ｂ１	09-Ｌ13・12	11.3	5.3	4.5		53
349	須・高台付坏Ｂ１	14-Ｌ13	11.3	5.0	5.7		51
350	須・高台付坏Ｂ１	14-Ｌ13・10	11.4	5.4	4.9		56
351	須・高台付坏Ｂ１	02-Ｌ４、Ｌ８	10.3	5.6	5.2		12

第77図　ＳＪ101・102灰原出土土器(22)

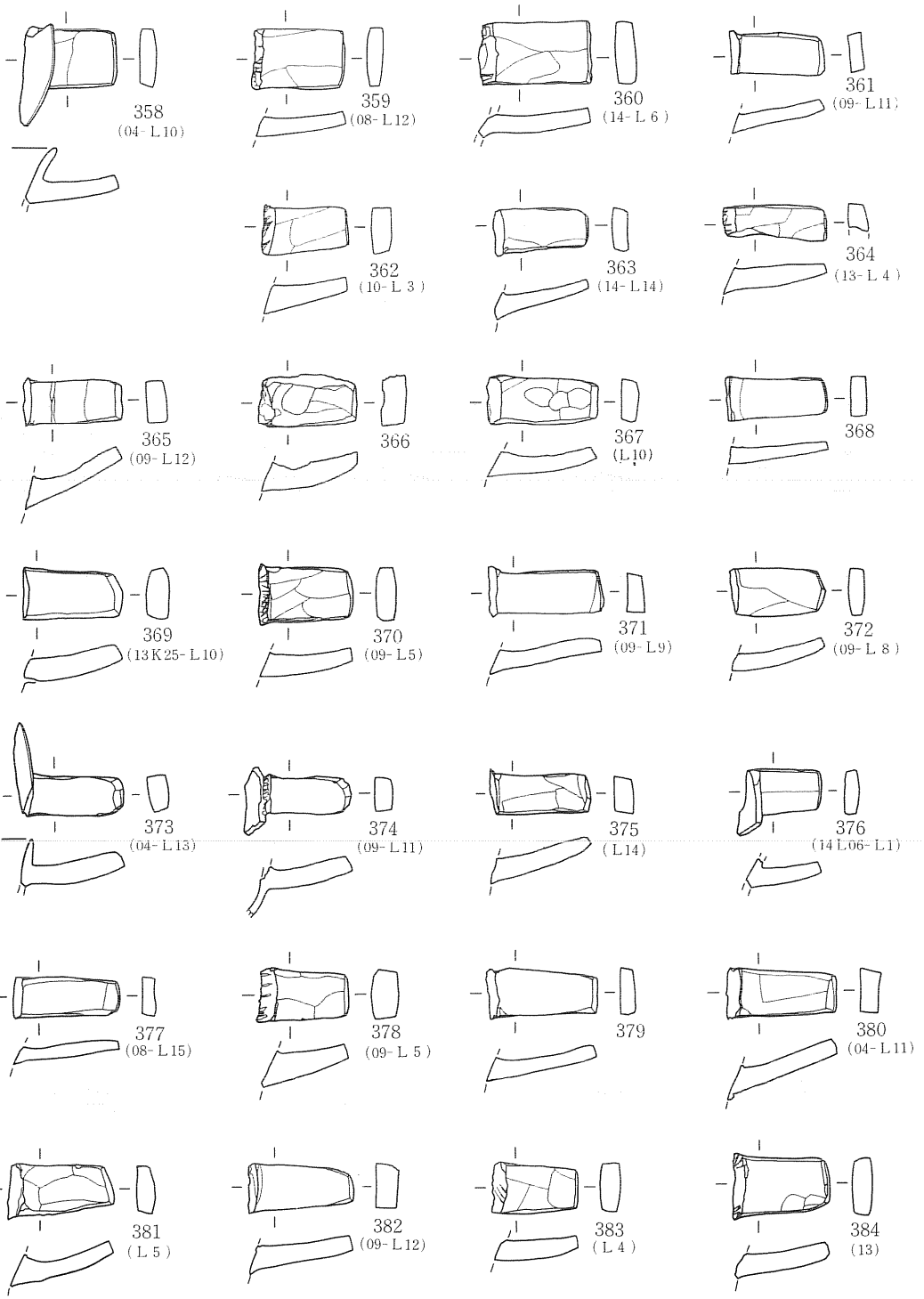


第78図　高台付坏法量分布（ヘラ切り）

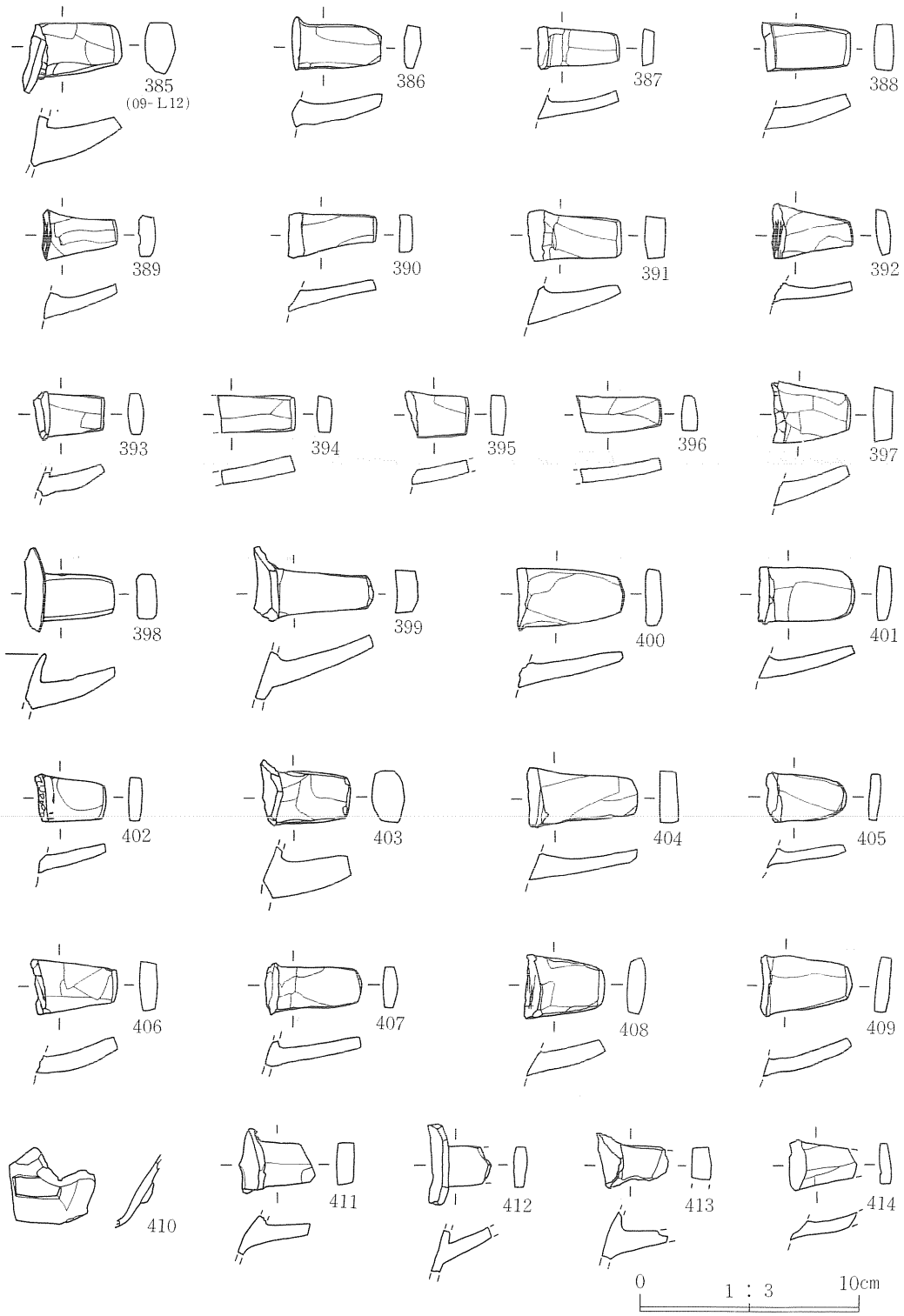


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
352	須・双耳坏B1	09-L10、10-L5、13-L4、14L06-L16・2	10.2	5.7	5.3	耳部に「＋」状の篦書あり「写」252
353	須・双耳坏B	03-L14、14-L8	10.8	—	(4.4)	「写」 257
354	須・双耳坏B1	04-L8	10.1	6.1	4.7	256
355	須・双耳坏B1	04-L7、L2	10.3	5.9	4.8	「写」 255
356	須・双耳坏B1	08-L6	11.3	6.2	5.5	254
357	須・双耳坏1	10-L5・2	—	6.1	(4.3)	253

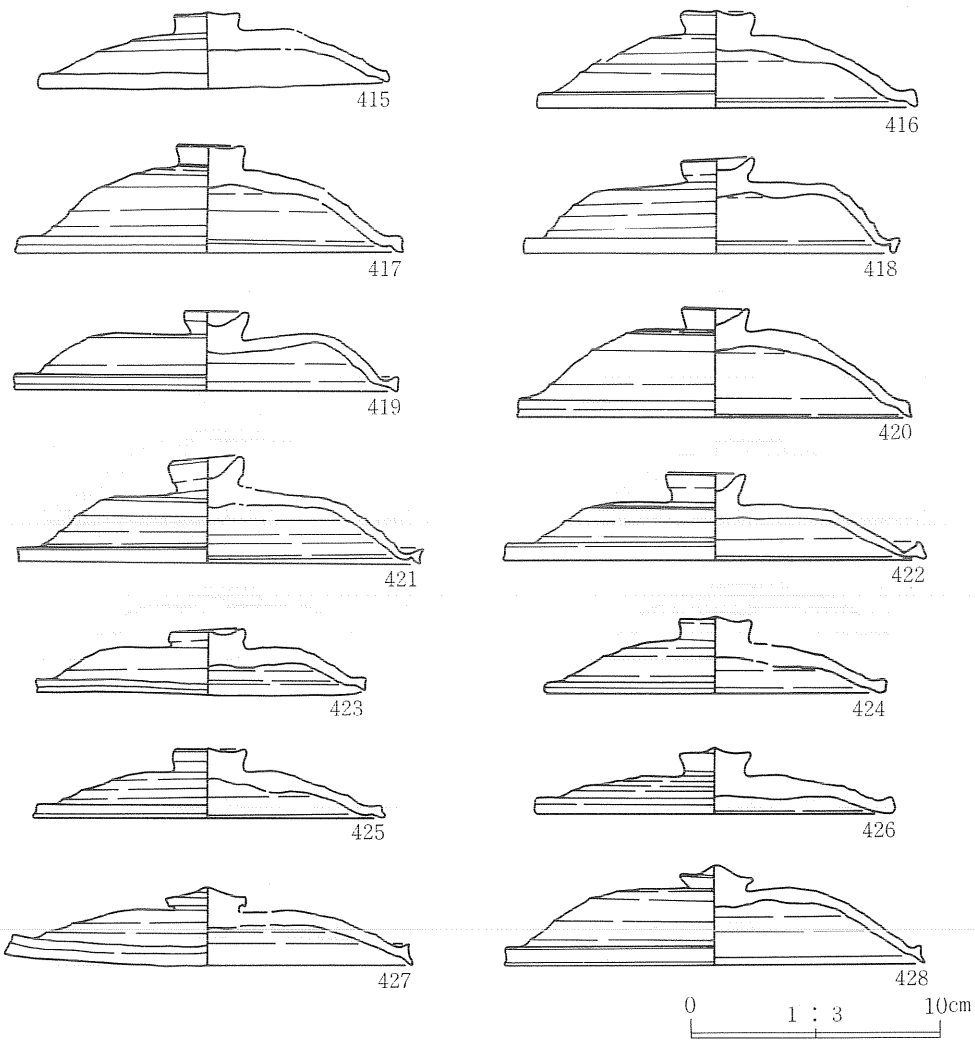
第79図　ＳＪ101・102灰原出土土器(23)



第80図　ＳＪ101・102灰原出土土器(24)

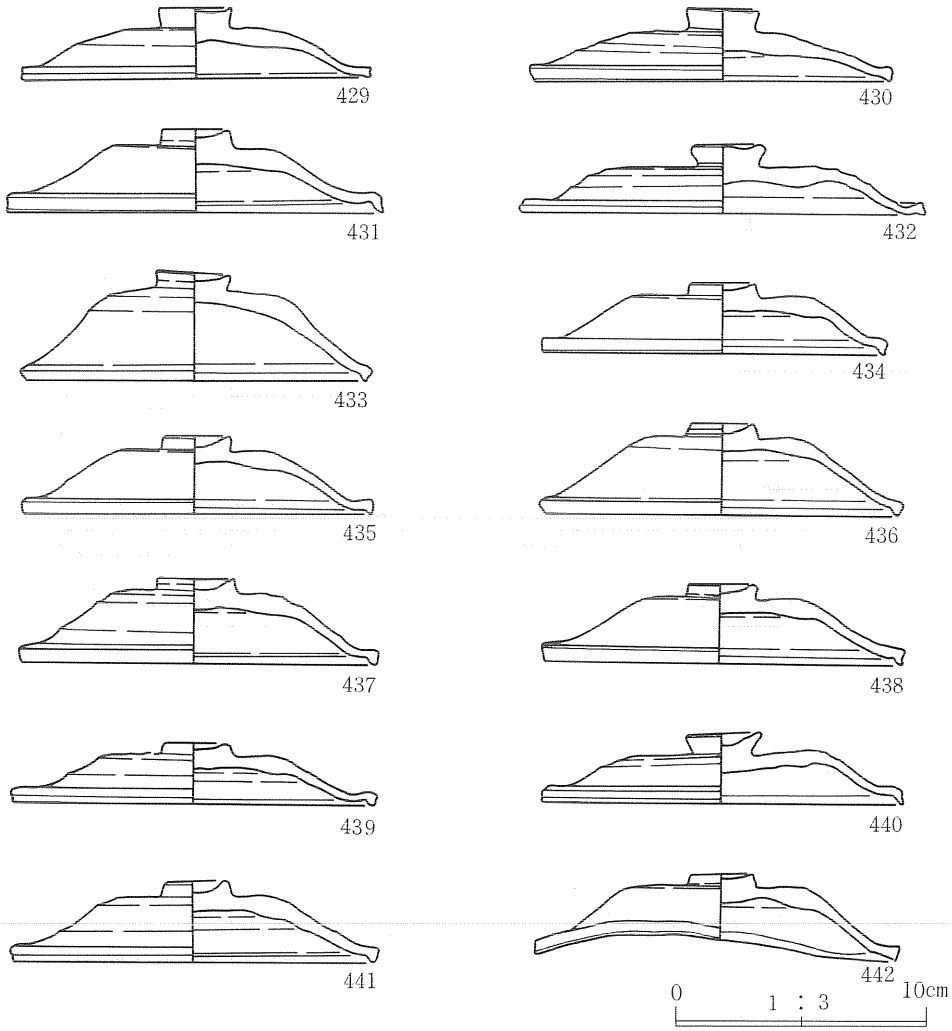


第81図　SJ101・102灰原出土土器(25)



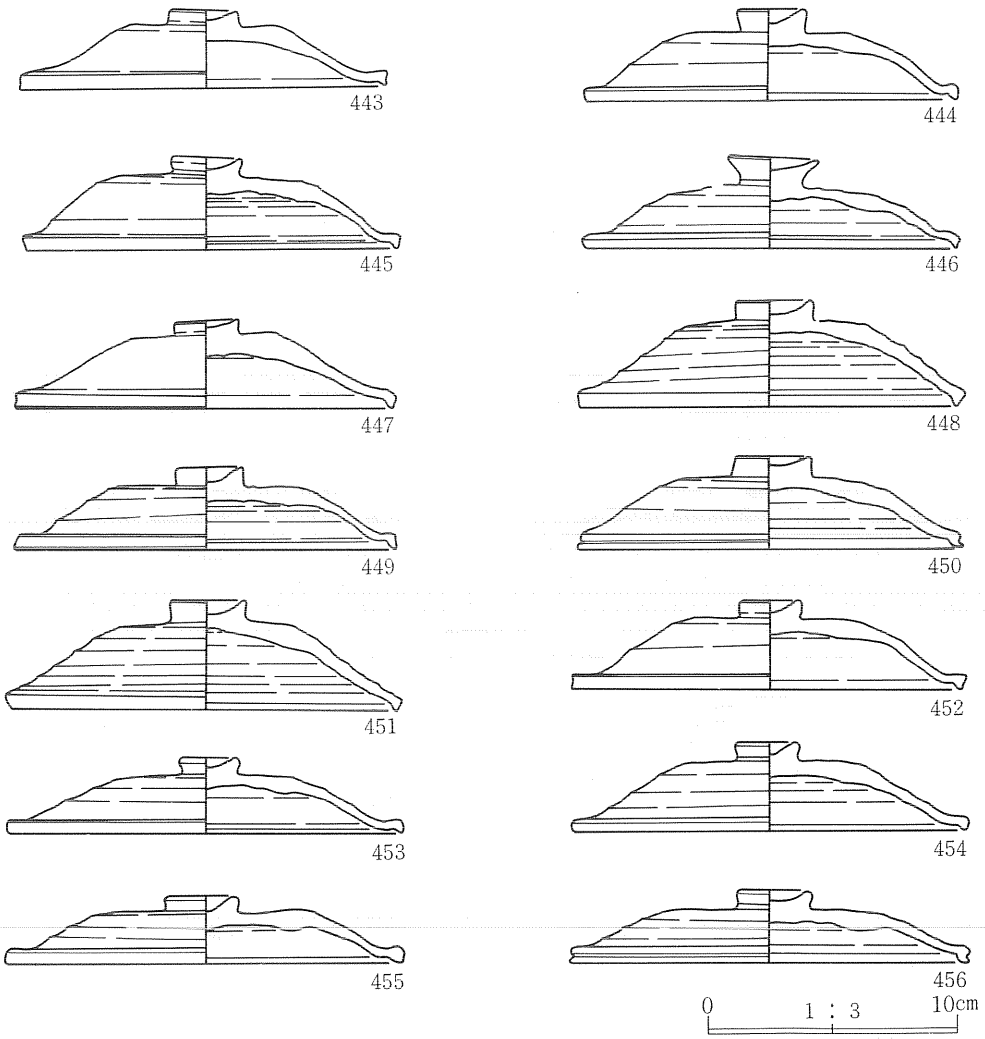
番号	器　種	出土位置・層位	口径	器高	つまみ径	備　考
415	須・坏蓋B	09-L4・3、10-L5・3・2、13-L10、14-L7・6	13.7	3.0	2.5	44
416	須・坏蓋B	08-L13、09-L16・13・9、14L11	15.0	3.9	2.7	7
417	須・坏蓋C	09-L14・13・11、14-L14・11	15.3	4.2	2.7	60
418	須・坏蓋D	08 L14・13、09-L10・9	14.6	3.8	2.7	28
419	須・坏蓋D	03-L13・11、08-L15・13・12	15.1	3.2	2.4	31
420	須・坏蓋D	15-L8	15.6	4.4	2.6	33
421	須・坏蓋D	09-L13・10、14-L13・12	15.9	4.1	2.7	56
422	須・坏蓋D	08-L13、09-L15	16.6	3.5	3.0	「写」30
423	須・坏蓋B	L11	13.0	2.6	2.9	40
424	須・坏蓋B	03-L2、04-L5・4・1、09-L6、14-8	13.3	3.1	2.9	48
425	須・坏蓋C	04-L3、10-L5～1、15-L3、14L06	13.7	2.8	2.8	「写」37
426	須・坏蓋B	03-L9、08-L7、09-L10・6・4、13-L7、14-L6、18-L7	14.0	2.7	2.8	45
427	須・坏蓋A	09-L14～12・12・10・4、10-L8・7・4、12-L1、14-L8、SJ102窯左P	16.1	3.1	3.1	「写」63
428	須・坏蓋A	08-L16・15	16.6	3.9	2.9	「写」19

第82図　SJ101・102灰原出土土器(26)



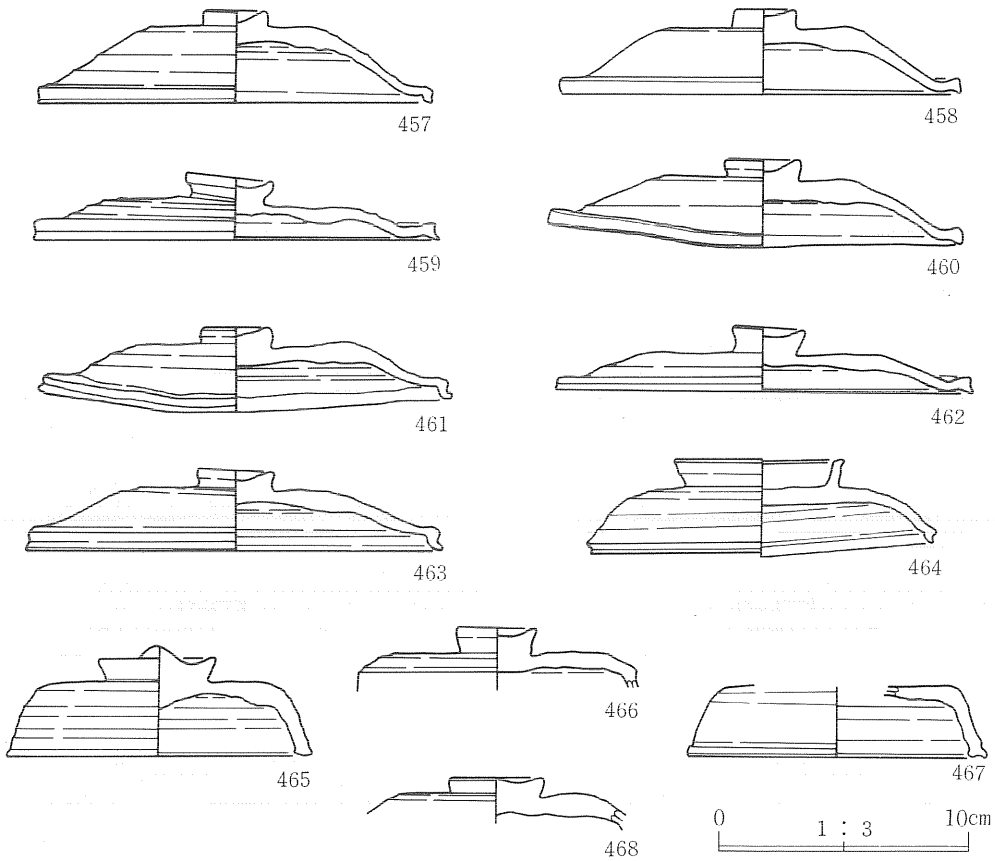
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	つまみ径	備　　考
429	須・坏蓋Ｃ	09-Ｌ5､10-Ｌ5･4･2	13.7	2.8	2.8	61
430	須・坏蓋Ｅ	04-Ｌ6～4	14.0	2.9	2.8	「写」65
431	須・坏蓋Ｄ	08-Ｌ15､09-Ｌ14	14.8	3.3	2.7	「写」23
432	須・坏蓋Ｃ	09-Ｌ4､14-Ｌ9､15-Ｌ10･7･3	15.9	2.7	2.5	13
433	須・坏蓋Ｄ	09-Ｌ14･12､14-Ｌ13	13.3	4.3	2.8	「写」24
434	須・坏蓋Ｄ	09-Ｌ12･11	13.4	2.8	2.5	47
435	須・坏蓋Ｄ	09-Ｌ12	13.7	3.1	2.6	53
436	須・坏蓋Ｄ	08-Ｌ15･13･2	13.8	3.6	2.4	58
437	須・坏蓋Ｄ	09-Ｌ16	13.9	3.4	3.0	38
438	須・坏蓋Ｄ	08-Ｌ15､09-Ｌ16･15､14Ｌ11	14.1	3.2	2.5	41
439	須・坏蓋Ｄ	08-Ｌ14･12	14.2	2.4	2.6	8
440	須・坏蓋Ｄ	04-Ｌ8	14.2	2.8	2.9	17
441	須・坏蓋Ｄ	09-Ｌ15･12	14.2	3.2	2.5	50
442	須・坏蓋Ｄ	04-Ｌ8､08-Ｌ3､09-Ｌ13～11	14.2	3.3	2.5	57

第83図　ＳＪ101･102灰原出土土器(27)



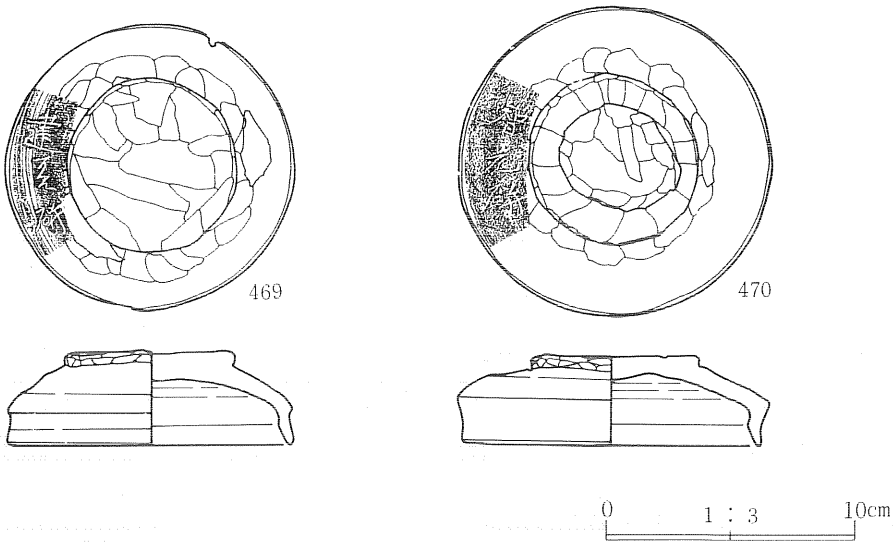
番号	器　種	出土位置・層位	口径	器高	つまみ径	備　　考
443	須・坏蓋D	09-L15・14・12・11	14.5	3.1	2.6	42
444	須・坏蓋D	11-L1、12-L1、15-L1、13N05	14.6	3.6	2.6	4
445	須・坏蓋D	08-L13、09-L15、14-L13・12、14L01-L10	14.6	3.7	2.5	36
446	須・坏蓋D	09-L13・12	14.7	3.6	3.6	「写」14
447	須・坏蓋D	08-L12	14.8	3.5	2.4	32
448	須・坏蓋D	08-L12	14.9	4.2	3.1	「写」22
449	須・坏蓋D	08-L12・11、13-L13・10	15.0	3.3	2.5	55
440	須・坏蓋D	13K18-Ⅰ、13K22-L1	15.1	3.7	2.9	「写」3
451	須・坏蓋D	13-L13	15.2	4.4	2.9	「写」29
452	須・坏蓋D	10-L5・4	15.4	3.5	2.2	43
453	須・坏蓋D	09-L10、10-L6・5・2、14-L11	15.5	3.0	2.1	9
454	須・坏蓋D	09-L9	15.5	3.5	2.4	5
455	須・坏蓋D	03-L9、08-L15・14・12・11、09-L13～10、10-L8、13-L4、14-L13	15.6	2.7	2.7	2
456	須・坏蓋D	12-L2・1	15.6	2.9	2.8	16

第84図　SJ101・102灰原出土土器(28)



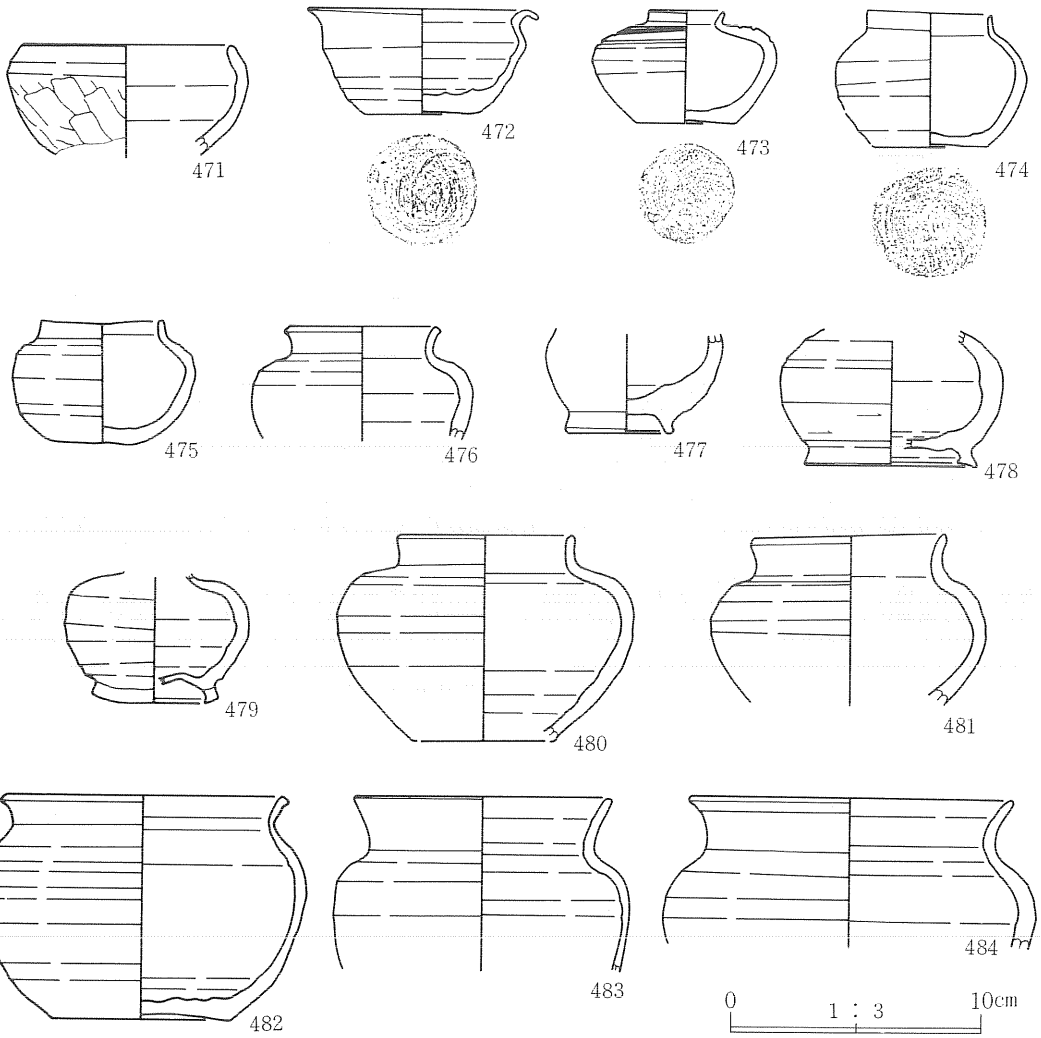
番号	器　種	出土位置・層位	口径	器高	つまみ径	備　考
457	須・坏蓋D	10-L 8・6・5、	15.6	3.7	2.3	49
458	須・坏蓋D	03-L10・9・7・6、08-L 8	15.7	3.3	2.4	「写」 21
459	須・坏蓋D	09-L10・8・7、14-L 8、08-L 7、15-L 6	16.0	2.5	3.4	35
460	須・坏蓋D	09-L15、L14	16.2	3.5	2.7	「写」 64
461	須・坏蓋D	03-L 9	16.3	3.3	2.6	26
462	須・坏蓋D	04-L11・5・4、13K24	16.4	2.6	2.8	12
463	須・坏蓋D	03-13~11、07-L 4・2、08-L12、10-L 5	16.5	3.2	3.0	46
464	須・坏蓋F	11-L 3~1、12L15-L 1	13.5	3.9	6.6	「写」215
465	須・壺蓋A	09-L13・11	11.7	4.6	4.5	「写」217
466	須・壺蓋B	08-L10・7、09-L 3、13L16-I	—	(2.5)	3.2	222
467	須・壺蓋	09-L11・10、10-L 5、14-L 8	11.6	(2.8)	—	—
468	須・壺蓋A	09-L13	—	(1.8)	3.6	219

第85図　ＳＪ101・102灰原出土土器(29)



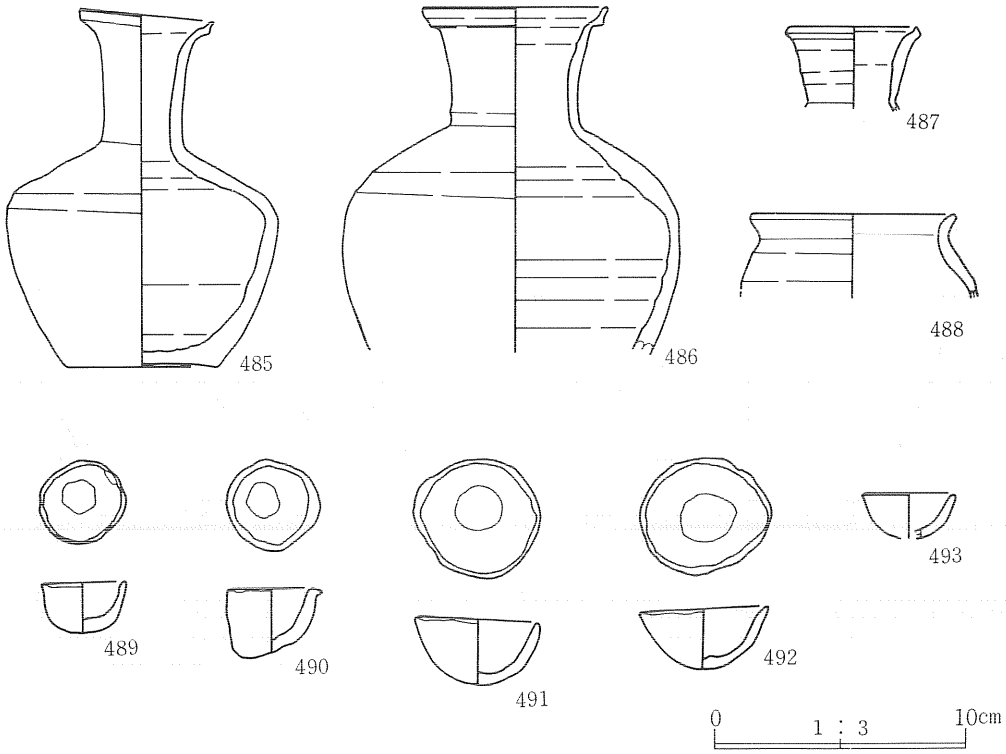
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	つまみ径	備　　考
469	須・壺蓋C	08-L14・11・10、09-L5、14-L13、13L21-I	11.1	3.7	6.8	箆書「建万呂研」「写」221
470	須・壺蓋C	09-L14	11.7	3.5	6.7	箆書「智光研」「写」220

第86図　ＳＪ101・102灰原出土土器(30)



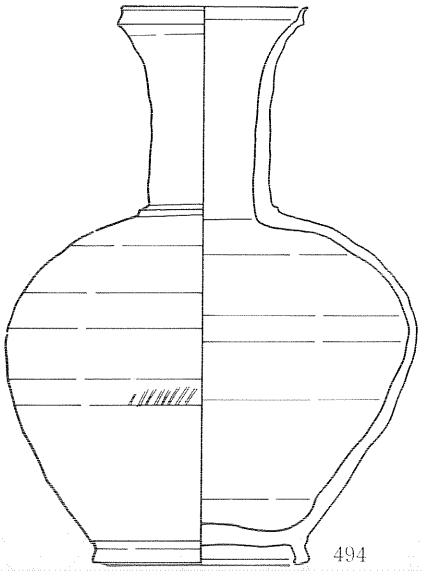
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
471	須・鉢	04-L10、08-L10	8.2	—	9.6	(4.4)	体部手持ちケズリ　「写」(4)
472	須・鉢	04-L4、13K25	9.1	4.5	9.1	4.2	回転糸切り　「写」(12)
473	須・小壺	14L15-I	2.8	3.9	7.2	4.5	回転糸切り、刻書　「写」10
474	須・小壺	14L15-I	4.7	4.5	7.5	5.3	回転糸切り　「写」(13)
475	須・小壺	14L03-I	4.8	4.3	7.2	4.7	ヘラ切り　「写」(14)
476	須・小壺	14L03-I	5.8	—	8.8	(4.4)	(5)
477	須・小壺	14L16-I	—	4.0	—	(3.9)	(17)
478	須・小壺	L15	—	6.7	8.9	(5.4)	体下半部ロクロケズリ　(1)
479	須・小壺	17-L3・2	—	4.5	7.3	(5.1)	(7)
480	須・小壺	09-L10・6、15-L7	6.8	5.6	11.7	8.2	18
481	須・小壺	10-L7・5	7.6	—	10.9	(6.7)	(3)
482	須・小壺	10-L8・7・5、15L08	11.0	7.1	13.0	8.9	ヘラ切り　(6)
483	須・小壺	13M09、13N	10.0	—	—	(6.9)	(15)
484	須・小壺	13L、14L01-L16	12.7	—	—	(5.8)	(16)

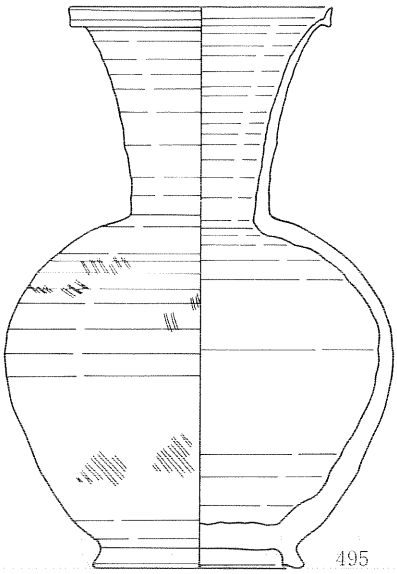
第87図　ＳＪ101・102灰原出土土器(31)

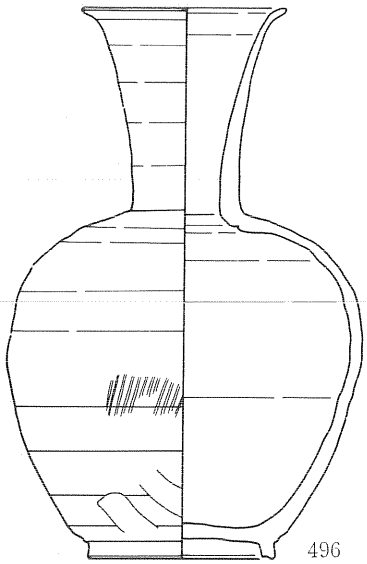


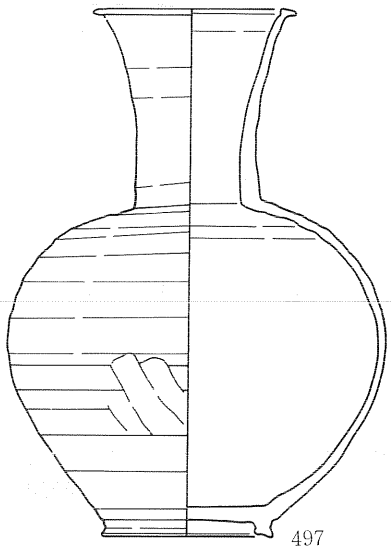
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
485	須・長頸壺Ａ０ａ	03-Ｌ２、04-Ｌ10・９・３、05-Ｌ16・６、13-Ｌ４	5.3	6.6	10.7	13.9	「写」(19)
486	須・長頸壺Ａａ	10-Ｌ５・４、13Ｌ20-Ｉ、14-Ｌ９・７	7.2	—	13.3	(13.6)	(20)
487	須・長頸壺	06-Ｌ６、10-Ｌ７	5.0	—	—	(3.2)	(8)
488	須・鉢	10-Ｌ５・１、13Ｋ06	8.0	—	—	(3.3)	(9)
489	須・手づくね土器	10-Ｌ３	3.2	—	—	2.0	(21)
490	須・手づくね土器	10-Ｌ３	3.7	—	—	2.6	(24)
491	須・手づくね土器	10-Ｌ５・４・２	4.9	—	—	2.6	(22)
492	須・手づくね土器	10-Ｌ５	5.2	—	—	2.4	(23)
493	須・手づくね土器	10-Ｌ４	3.7	—	—	(1.8)	(25)

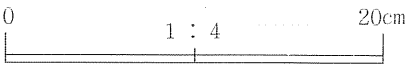
第88図　ＳＪ101・102灰原出土土器(32)





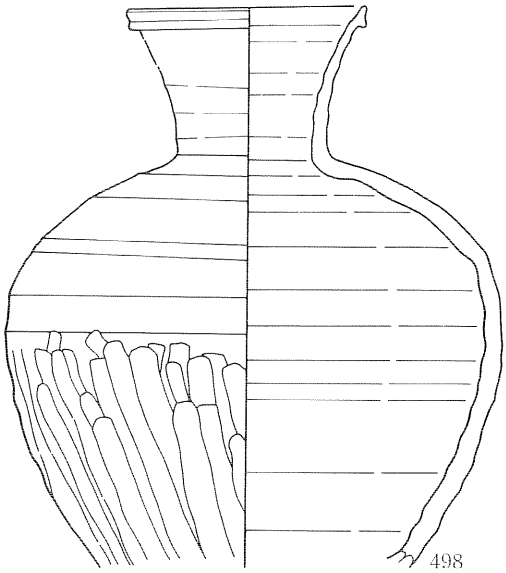


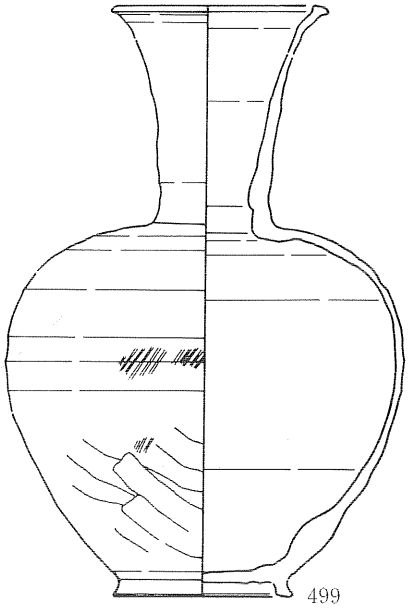


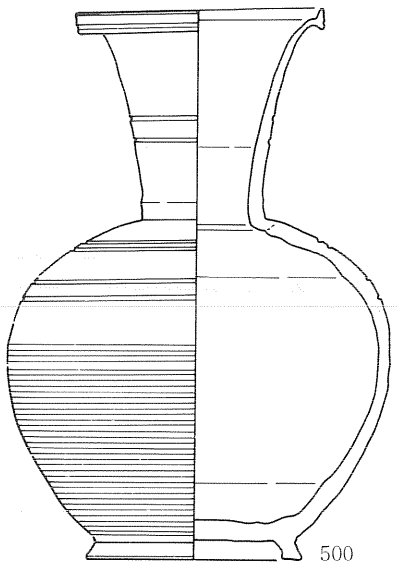


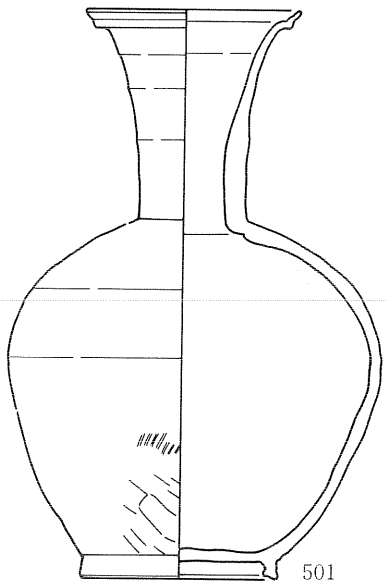
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
494	須・長頸壺B1a	09- L16・14~12・10~8、10- L7	9.7	11.4	21.8	29.8	34
495	須・長頸壺B1a	08- L15~12、09- L16・13・10、10- L5、13・14- L6、13N、14L11、14M11	13.8	11.2	20.5	29.8	「写」87
496	須・長頸壺B1b	08- L11、10- L7・5~1、13- L4、14- L11・10・8・7、19- L3・2、14L06- L16・2	10.8	9.8	18.9	29.5	「写」95
497	須・長頸壺B1b	04- L16・11~4、08、13- L8・2、14- L9、15- L13、22- L2、13K23- L4・2	9.2	9.0	20.0	28.1	「写」36

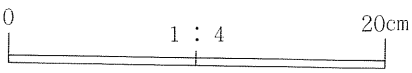
第89図　SJ101・102灰原出土土器(33)





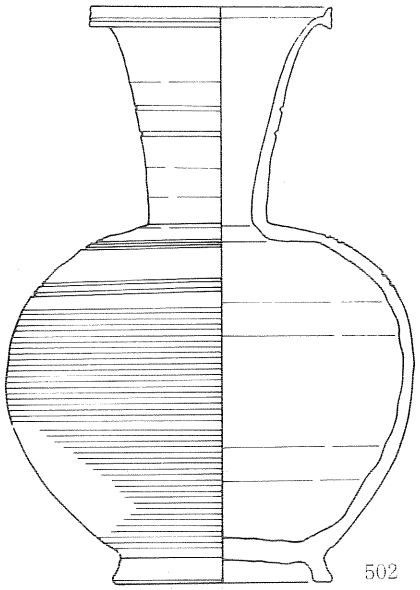


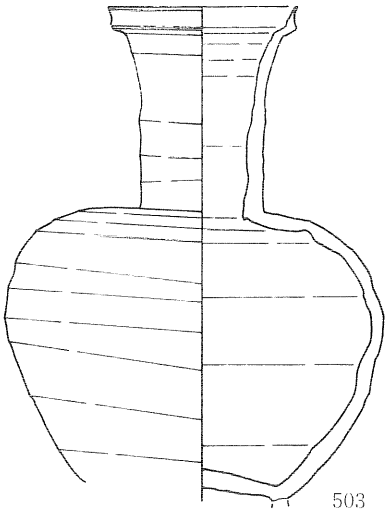


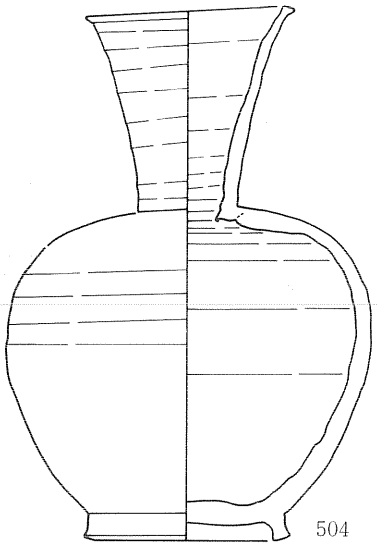


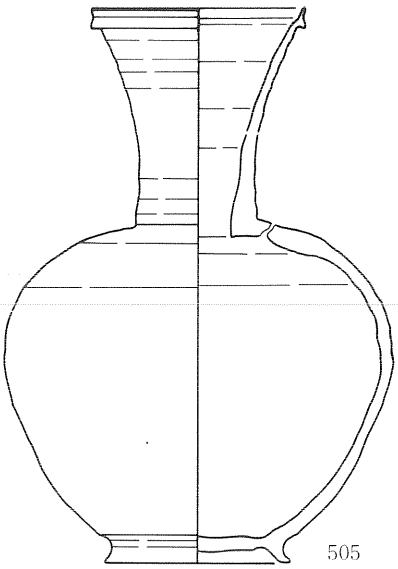
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
498	須・長頸壺Bb	09-L13、14-L13~9	12.5	－	26.3	(29.9)	「写」37
499	須・長頸壺B1b	03-L5,04-L12・9・8・5,08-L14・12,09-L15・12・9・7,14-L14・13,13L16	9.9	9.4	21.1	31.5	80
500	須・長頸壺B1a	06-L1,07-L3,08-L12,09-L13・11・9・3,10-L9~3,13-L5,14-L10,13K06-I、13L01-I、13L06-I、13L11-I	13.1	11.4	20.3	29.3	78
501	須・長頸壺B1b	04-L11~9、08-L13、10-L7~1	11.3	10.2	19.8	30.4	44

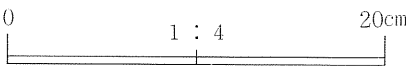
第90図　SJ 101・102灰原出土土器(34)





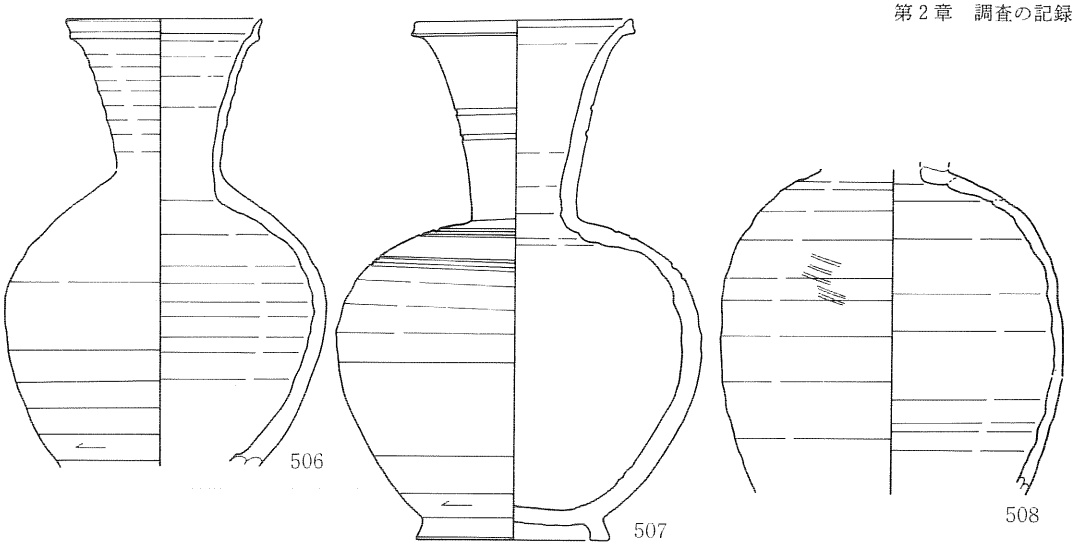


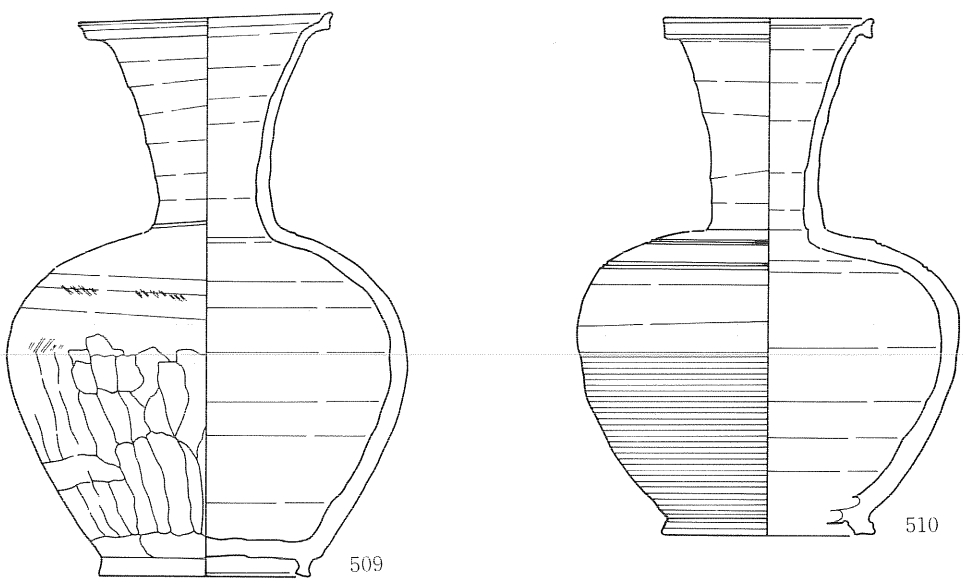


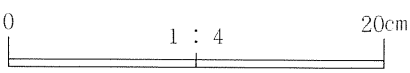


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
502	須・長頸壺B1b	03-L10,04-L2,06-L1,08-L8-L8・6,09-L12-10,13-L11・8・4-2、14-L6・4・3,17-L3-1,13L01・06・11・21-I	12.7	11.6	21.6	30.7	84
503	須・長頸壺B1a	04-L10-8・5,09-L13・12・10・9・7・6・3,10-L6・5	10.1	－	20.0	(26.3)	42
504	須・長頸壺B1a	10-L5-3・114-L11・10・8・7,15-L5	10.3	10.9	19.3	28.3	92
505	須・長頸壺B1a	08-111-9,09-L10・7・5・4,13-L1,14-L6・4,12M-I,14M08-I	11.2	9.8	20.5	29.7	32

第91図　SJ101・102灰原出土土器(35)

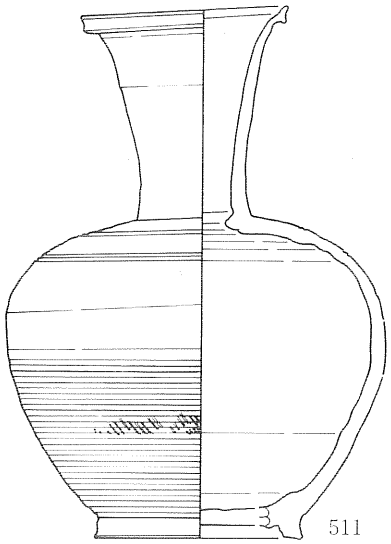


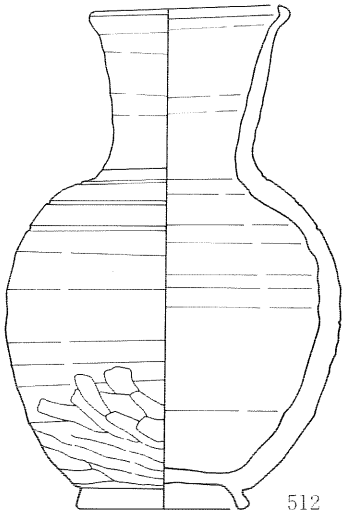


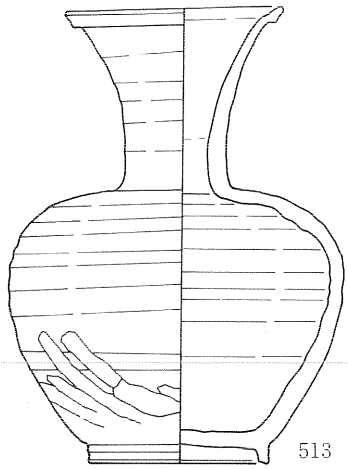


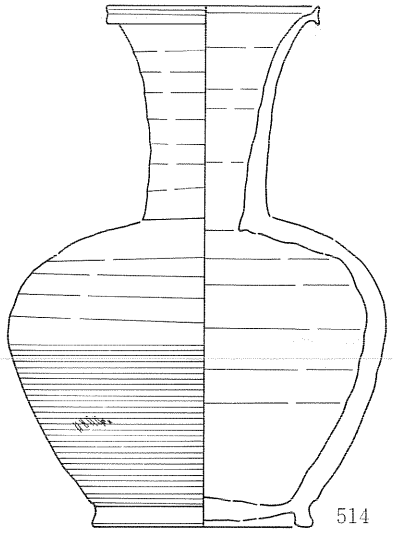
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
506	須・長頸壺Ba	03·08-L9,05-L2,09-L8,10-L4,13-L11·9,14-L9·7·6,15-L3,13L06-I	10.3	－	17.0	(24.0)	「写」46
507	須・長頸壺B1a	08-L10,13-L6·2,16-L2,17-L2·1,18-L3·2	11.3	10.2	19.3	27.6	「写」41
508	須・長頸壺Ba	03-L10,08·13-L6,09-L9·4,10-L8·4-2,14-L8·7·3,14L06-L3	－	－	18.2	(16.9)	98
509	須・長頸壺B1b	04-L10·9,05-L10,12-L4·3,SJ101灰原	13.3	11.2	21.1	29.8	「写」39
510	須・長頸壺B1a	03-L9·6,08-L9·6·5,09·10-L6·4,13-L9·4,14-L10·9·2,15-L5,14L06	11.2	11.5	20.3	27.5	43

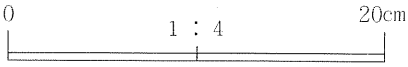
第92図　SJ101・102灰原出土土器(36)





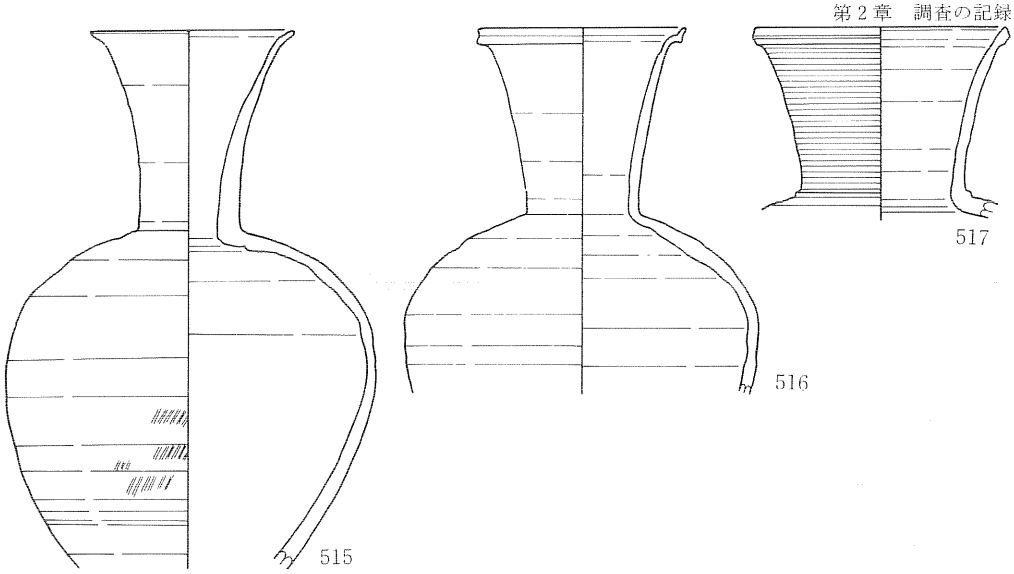


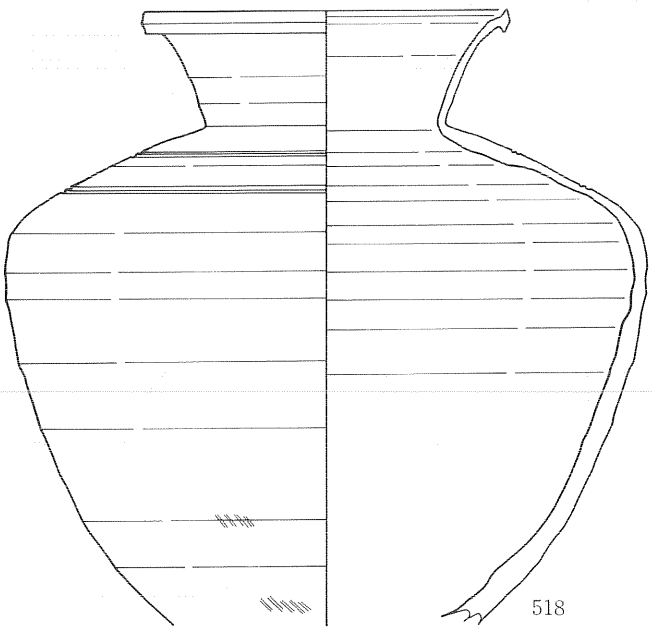


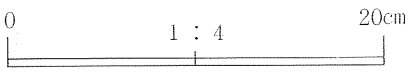


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
511	須・長頸壺Bla	03-L3,04-L6･5,07-L4~2,08-L9･3･2,10-L5	10.9	10.8	20.2	28.2	40
512	須・長頸壺Blb	09-L7,10-L8･5,15-L8･7･5,20-L2	9.6	9.1	17.7	26.7	45
513	須・長頸壺Blb	08-L1,09-L8,13-L8~5･2,13L16,SJ102灰原	11.3	9.4	17.7	24.3	「写」38
514	須・長頸壺Ia	04-L2,08-L7~4,10-L5~2,13-L7,14-L6,15-L3	11.2	11.4	20.0	27.7	79

第93図　SJ 101・102灰原出土土器(37)

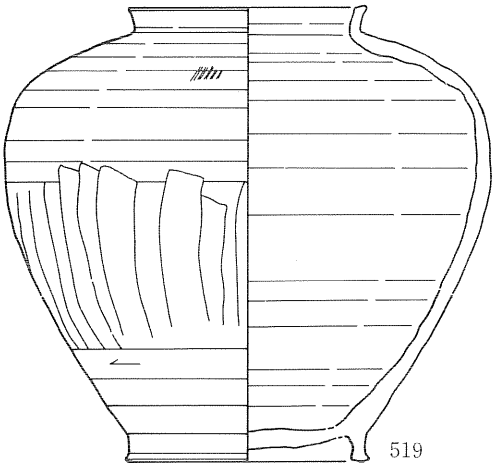


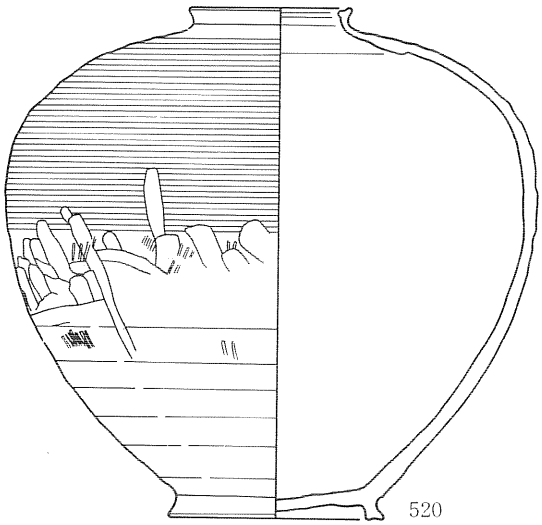


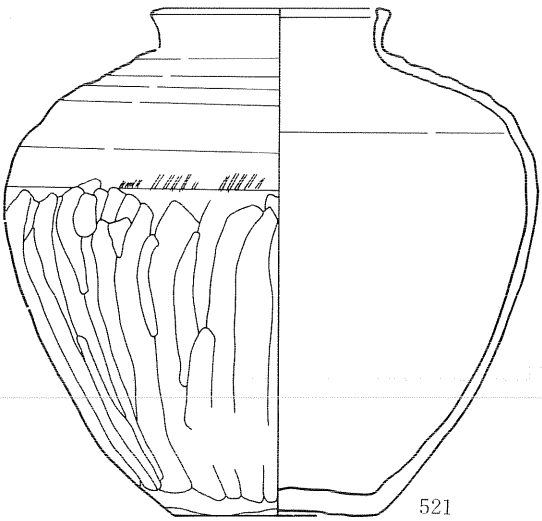


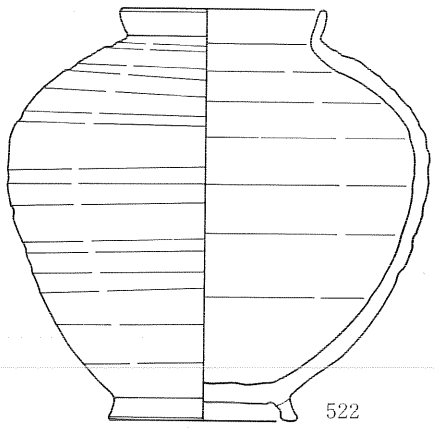
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
515	須・長頸壺Ba	10-L7~1,14-L7・4,15-L2・1,18-L1,24-L7,14L06	10.8	－	19.6	(28.6)	「写」35
516	須・長頸壺Ba	02-L3・2,13L09,SJ102灰原	10.9	－	18.8	(19.5)	72
517	須・長頸壺B	08-L6,10-L5~2	13.2	－	－	(10.3)	33
518	須・広口壺	03-L9,04-L10・8,08-L7,14-L11,16-L1	19.2	－	34.0	(32.6)	30

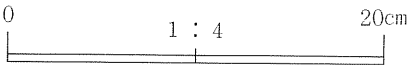
第94図　SJ 101・102灰原出土土器(38)


519


520

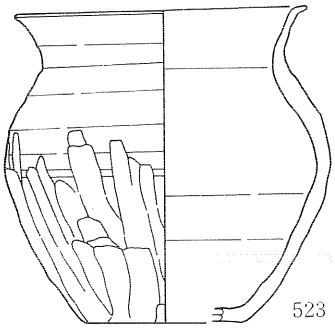

521

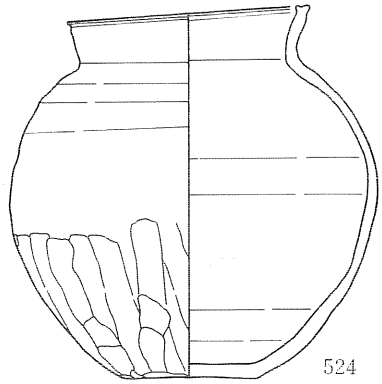

522

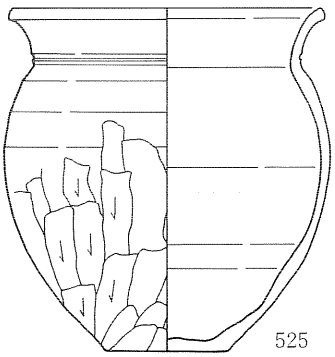


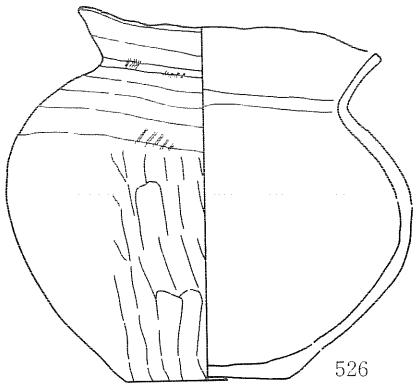
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
519	須・短頸壺1a	04-L10、08-L13~11、09-L12、15-L3	12.5	12.6	25.8	24.2	81
520	須・短頸壺1b	13-L11・8・6、14-L9~6	8.4	11.3	28.3	26.9	「写」 48
521	須・短頸壺0b	03-L15~12、08-L15~12、14L06	11.2	10.5	28.2	27.0	1
522	須・短頸壺1a	07-L3~1、14-L9~7・4・3、13K23-L7	10.5	9.8	22.4	21.8	「写」 49

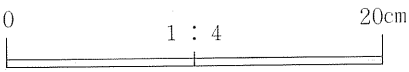
第95図　SJ101・102灰原出土土器(39)





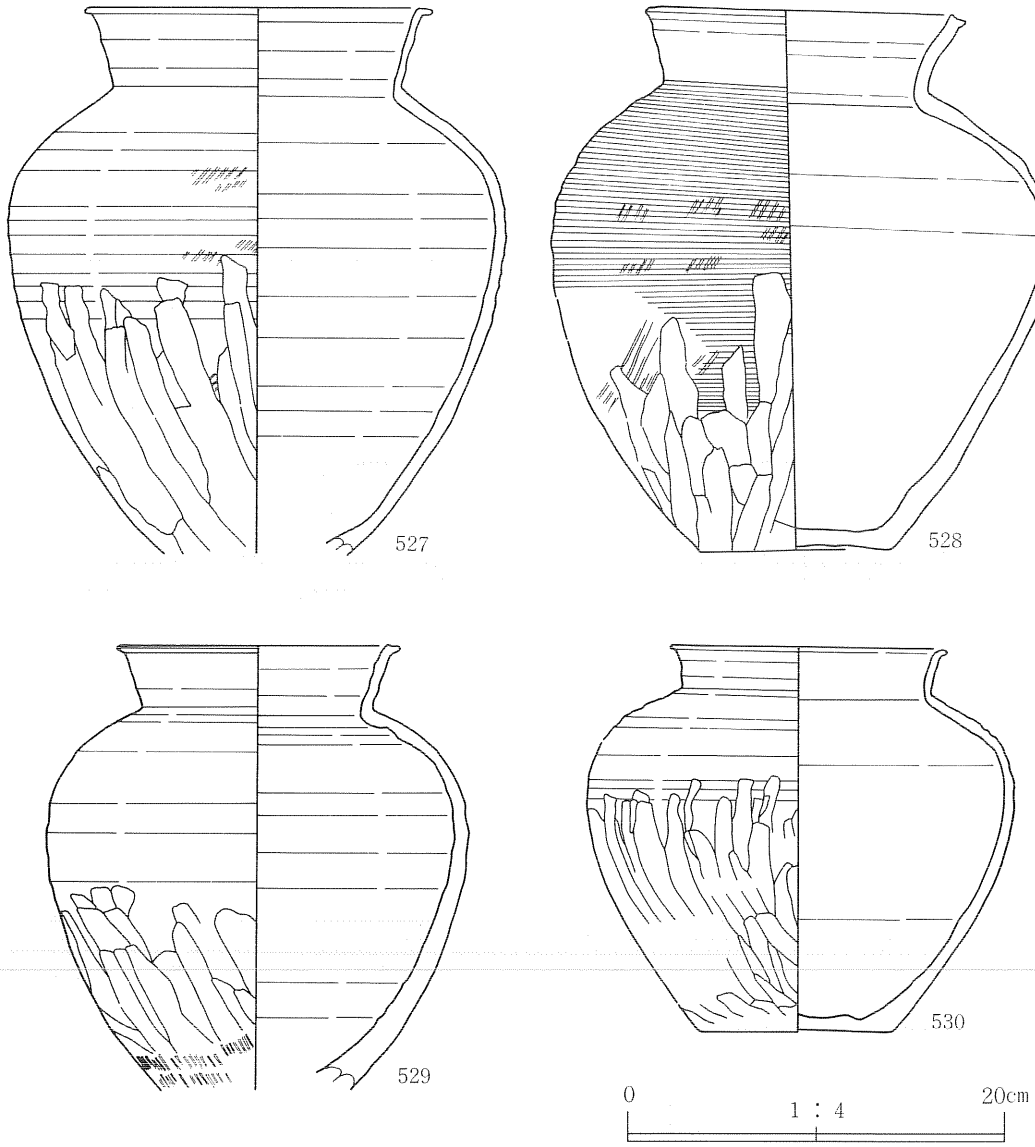






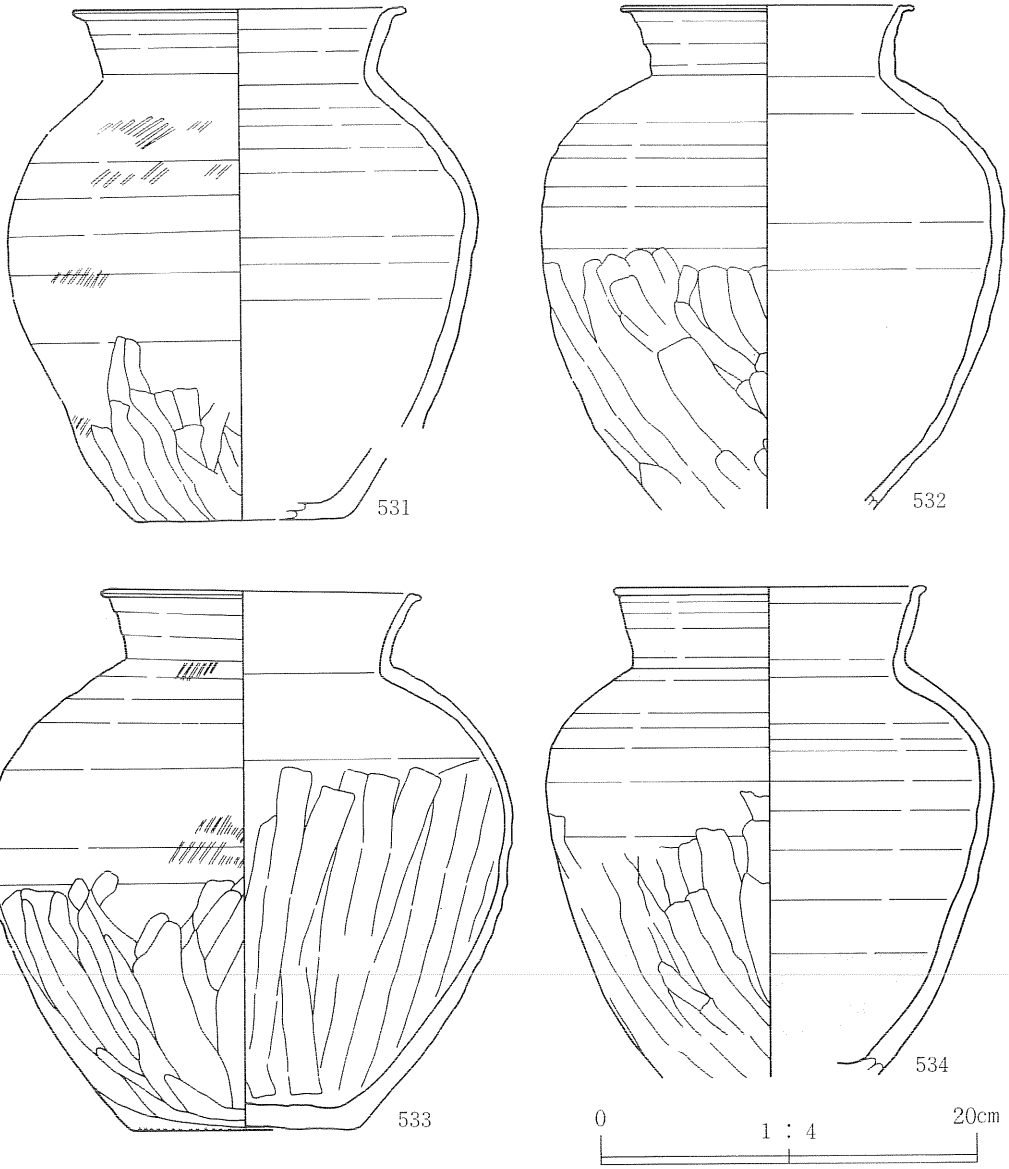
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
523	須・小甕Ab	03-L11~9、08-L15・13、10-L6、14-L7・6	15.4	8.8	17.4	16.6	「写」25
524	須・小甕Ab	09-L14・13、14-L13	12.9	7.2	19.5	19.3	47
525	須・小甕Ab	02-L4、03-L11・9・3・1、04-L9・6・4・2・1、08-L9・8・3、13-L9・6、14-L10・8	16.3	6.4	17.4	18.2	「写」26
526	須・小甕Ab	13M09-I、13M14-I	15.8	8.7	21.6	18.8	「写」3

第96図　SJ101・102灰原出土土器(40)



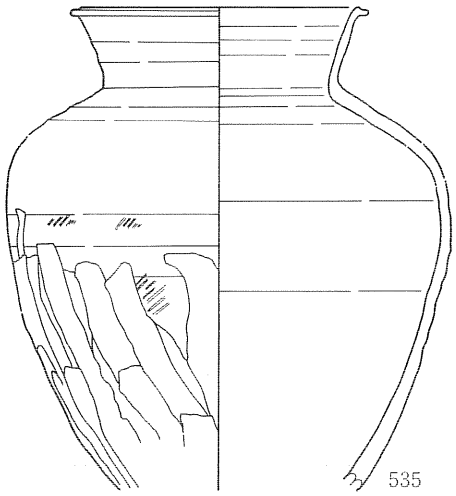
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
527	須・中甕Bb	10-L5・2・1、15-L1、12L14-Ⅰ、13K04-Ⅰ、13K06、14K06、14L06-L16・2・1、14L10-L10	18.0	－	26.4	(28.9)	5
528	須・中甕Bb	04-L15、09-L13・12・10・9・7、10-L9~5・3、14L06-L16	15.4	10.1	26.7	28.7	「写」 54
529	須・小甕Ab	09-L16、15-L2、24-L3、14L06-L16・9・2・1、14LL11-L3-1、14L15-I	14.8	－	22.5	(23.5)	31
530	須・小甕Ab	03-L12・6・3・2、04-L4、08-L14・12・11・7・3、09-L11・9~4、10-L8~5・3、13-L5、14-L13~11・3	14.6	10.0	22.6	20.6	「写」 120

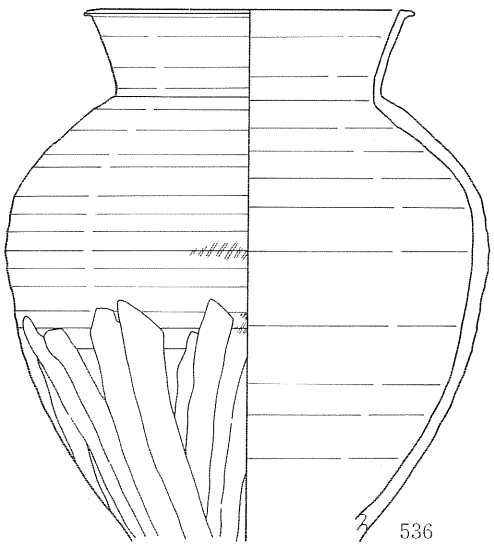
第97図　SJ101・102灰原出土土器(41)

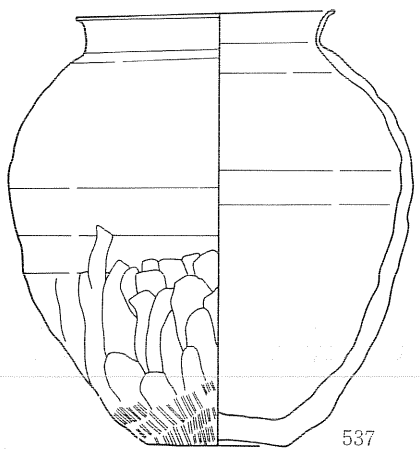


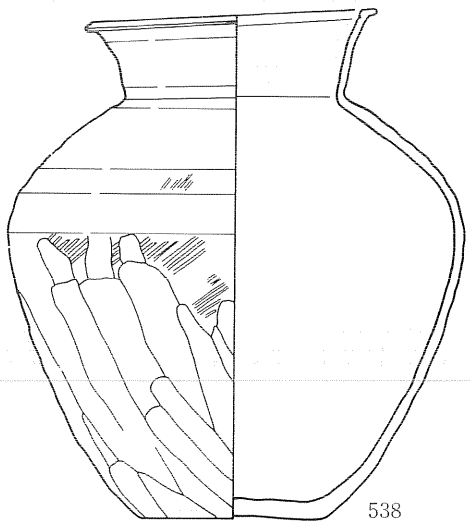
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
531	須・中甕Bb	02-L4,03-L8･3,04-L7,08-L12･10･8･7･4,09-L7･4,10-L11･6･1,13-L5,14-L11･9･4,15-L1,19-L4･3,12L15-I,13M11,14L06	17.1	－	25.0	(27.0)	「写」 74
532	須・中甕Bb	08-L4、13-L12･8~3、14-L10	15.2	－	24.5	(26.8)	「写」 29
533	須・中甕Bb	09-L9･7,13-L8･6･4･2,14-L7･6,15-L1,13L19,14L11-L2,14L15-I	15.8	12.0	27.8	28.8	「写」 4
534	須・中甕Bb	10-L8･6、14-L4~2、15-L4~1、17-L2、19-L2	15.7	－	23.8	(25.9)	70

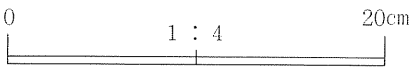
第98図　SJ101・102灰原出土土器(42)





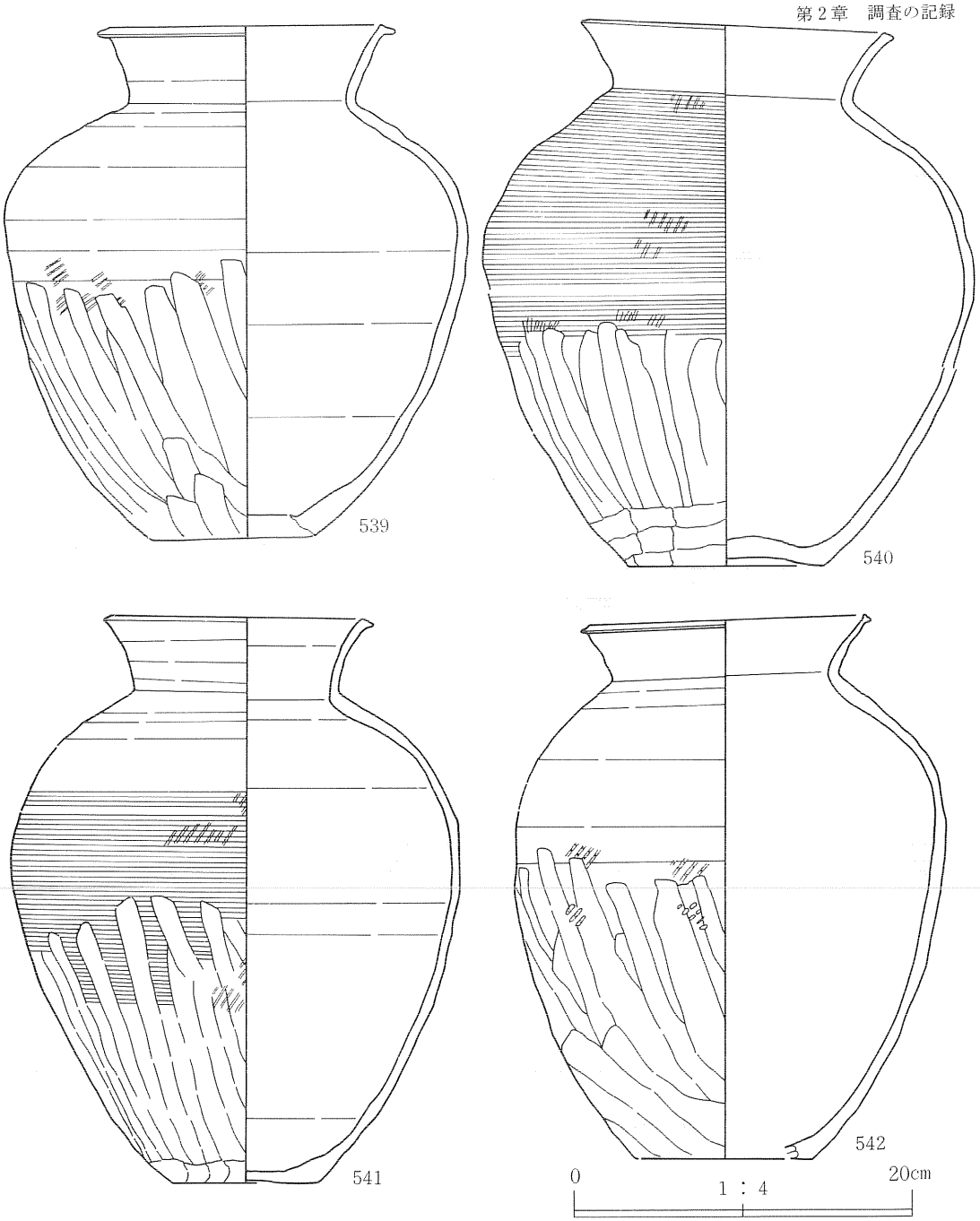






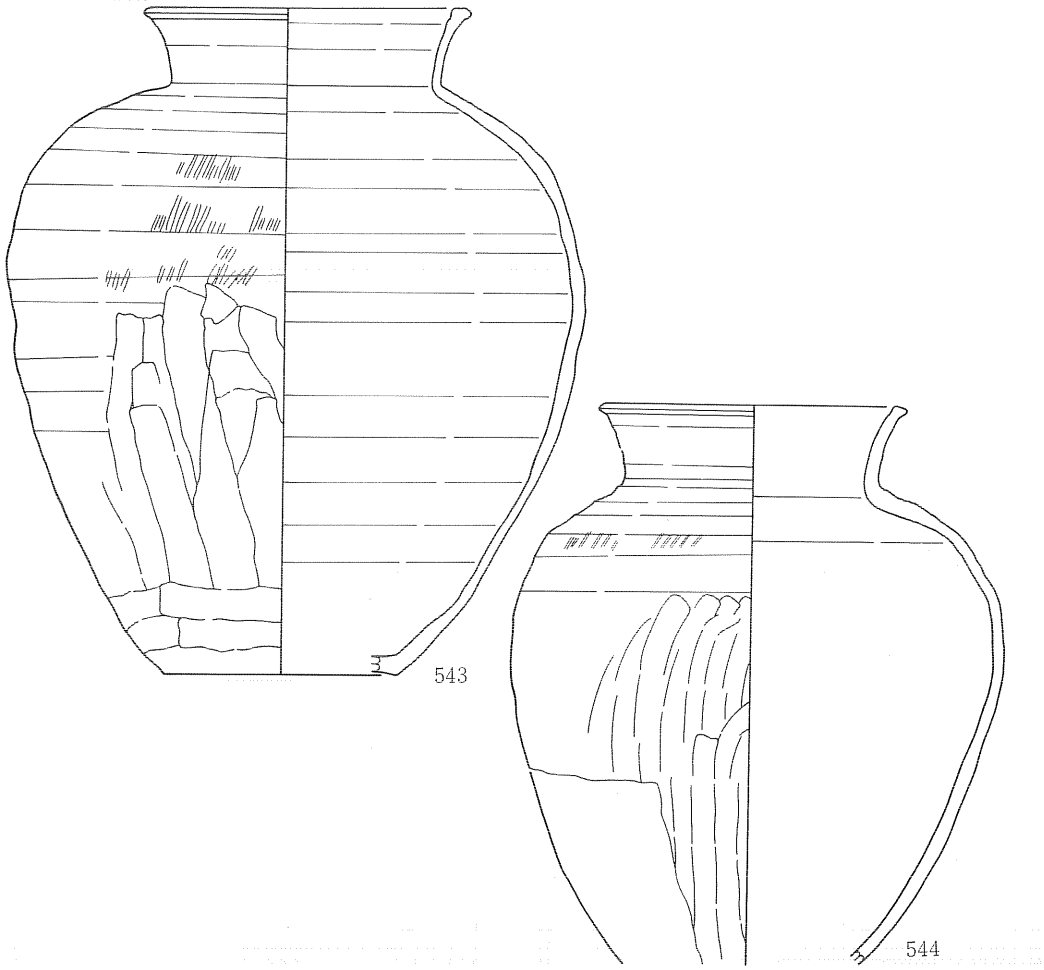
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
535	須・中甕Bb	10-L5・3・1,15-L2,12L01-I,13K06,14K06,14L02,14L06-L1	14.5	－	23.4	(25.6)	「写」 2
536	須・中甕Bb	09-L4,10-L5~3・1,14L06,SJ102灰原	16.2	－	25.6	(28.4)	6
537	須・小甕Ab	09-L2,13-L3,14-L4~2,19-L3・2,13K23-L4,SJ102灰原	13.5	7.2	21.4	23.1	23
538	須・中甕Bb	10-L3~1,14K06,14L06	14.9	9.8	24.2	26.8	28

第99図　SJ101・102灰原出土土器(43)



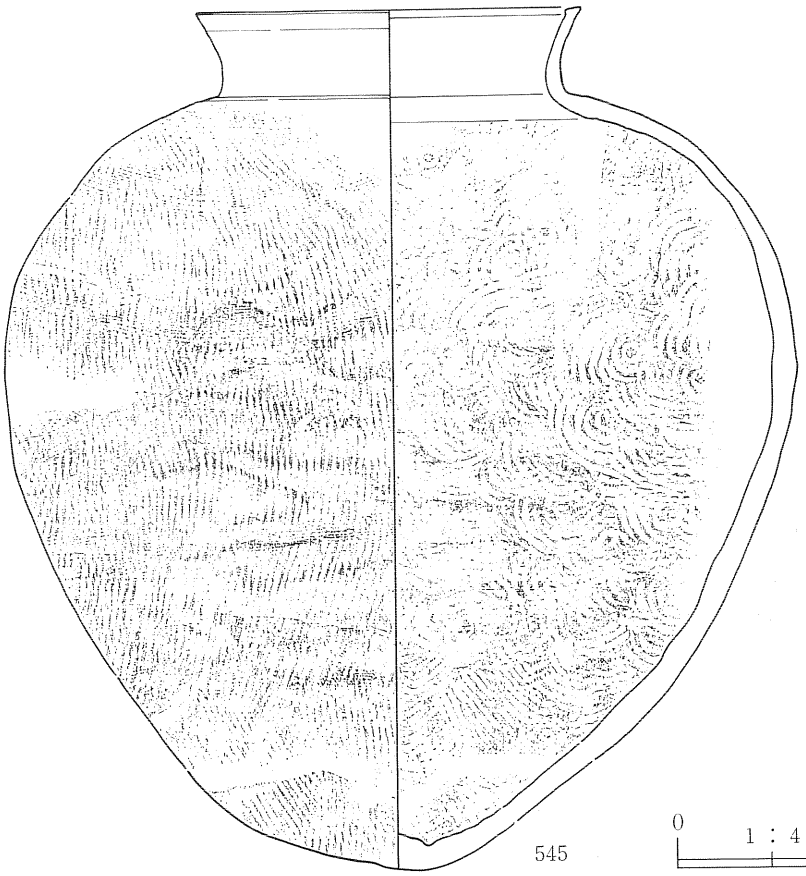
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
539	須・中甕Bb	09-L5･4,10-L5-1,14-Ⅱ,23-Ⅱ,24-L3,14K06,14L06-L16･1	16.0	－	27.2	30.4	「写」27
540	須・中甕Bb	03-L11･9･8･6,04-L11-8･5･1,05-L16･10,13-L11,13K22-L2,備考へ続く	17.3	11.6	28.9	32.2	13K24-L2･1,13L02-Ⅰ　24
541	須・中甕Bb	04-L2,08-L14,09-L15･9･6,10-L9･7･5･4,13-L10、備考へ続く	14.9	8.4	26.4	33.6	14-L15･14･7･5･3,15-L6,竈左P「写」－
542	須・中甕Bb	03-L13,04-L11･10･4,08-L14-10,09-L10･7･4･1,10-L7-4,備考へ続く	16.3	－	25.5	32.2	14-L12-10,18-L3,14L01　22

第100図　SJ101・102灰原出土土器(44)

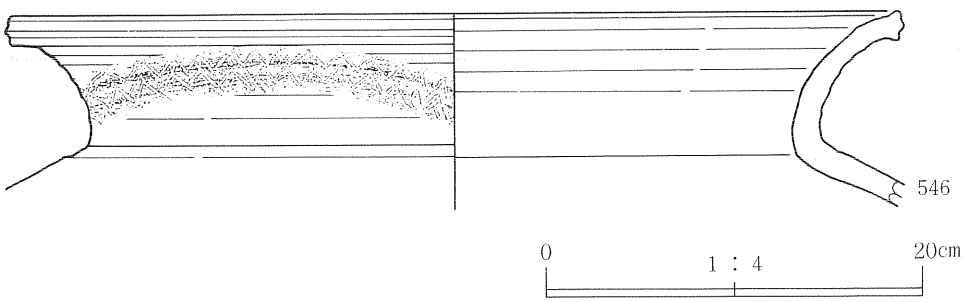


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
543	須・中甕Bb	08-L14・12・10~5、03-L14~6・4・1	16.6	12.2	30.7	35.4	71
544	須・中甕Bb	02-L4・1、03-L6、04・13-L10、08-L10・5・4、09-L5、10-L6~3、14-L9、15-L7・5・4、13K23-L4、窯左P	15.2	－	26.1	(29.6)	8

第101図　SJ101・102灰原出土土器(45)

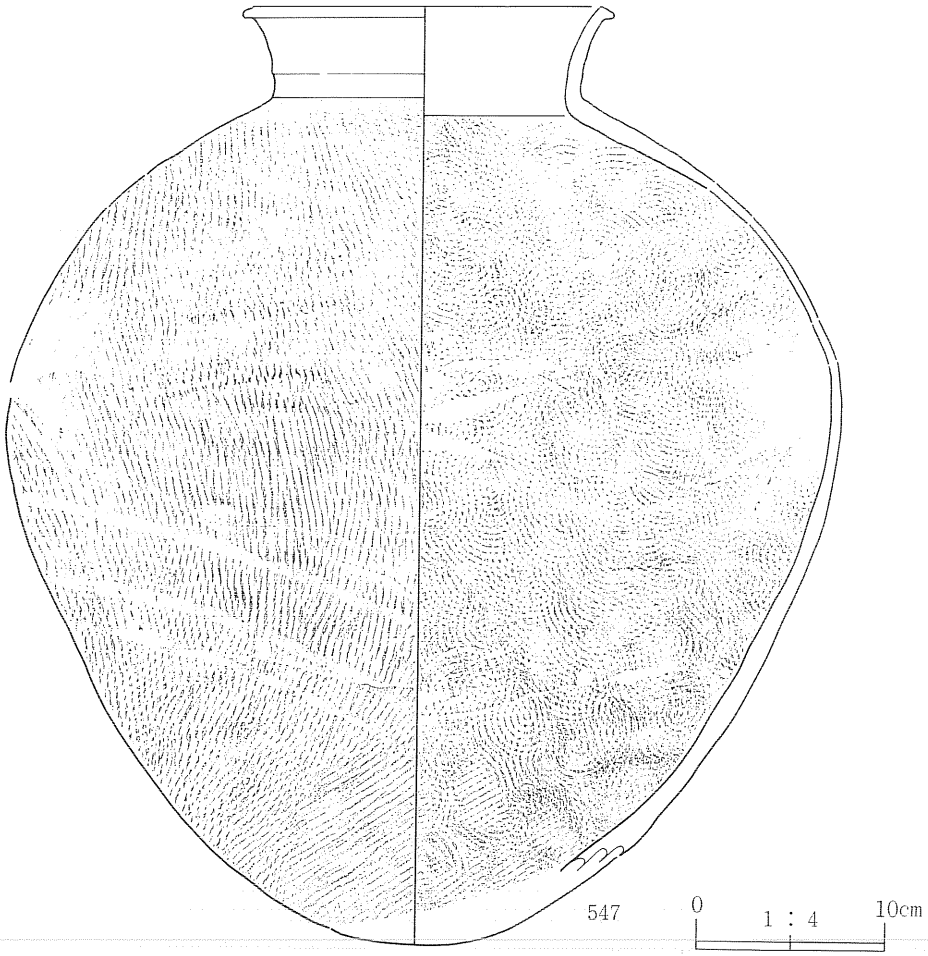


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
545	須・中甕A	08-L12~10,09-L13,13 L9・7,14 L14~10,15-L8	20.4	丸底	41.9	45.7	83

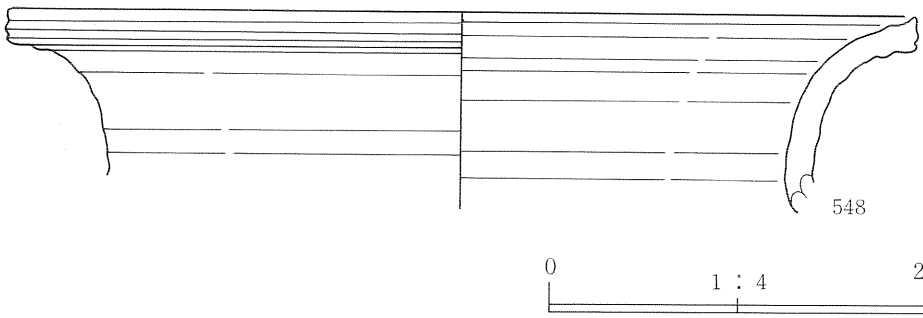


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
546	須・大甕	13K02-I	47.0	－	－	(9.4)	117

第102図　SJ101・102灰原出土土器(46)

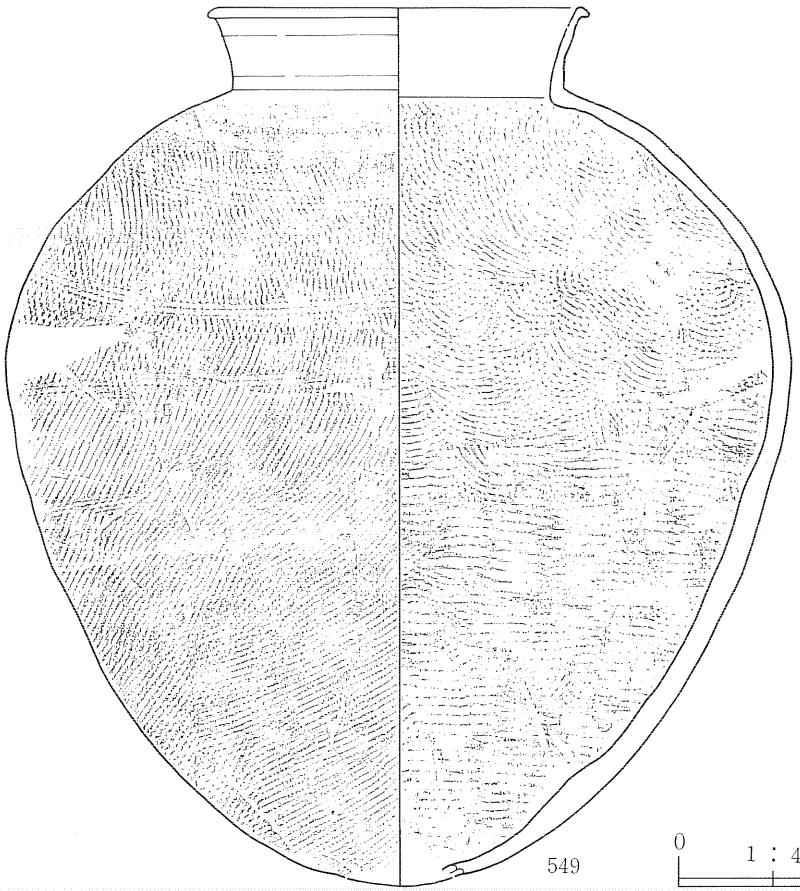


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
547	須・中甕A	13-L12~8	18.4	丸底	44.4	(49.0)	9

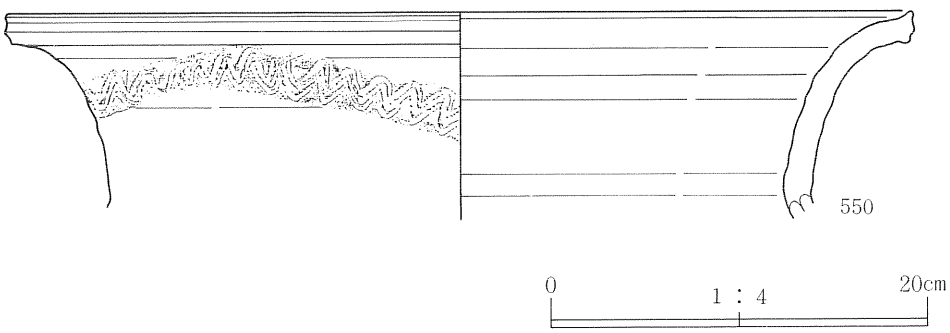


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
548	須・大甕	13K04-Ⅰ、14K20-L1	48.0	－	－	(10.4)	122

第103図　SJ101・102灰原出土土器(47)

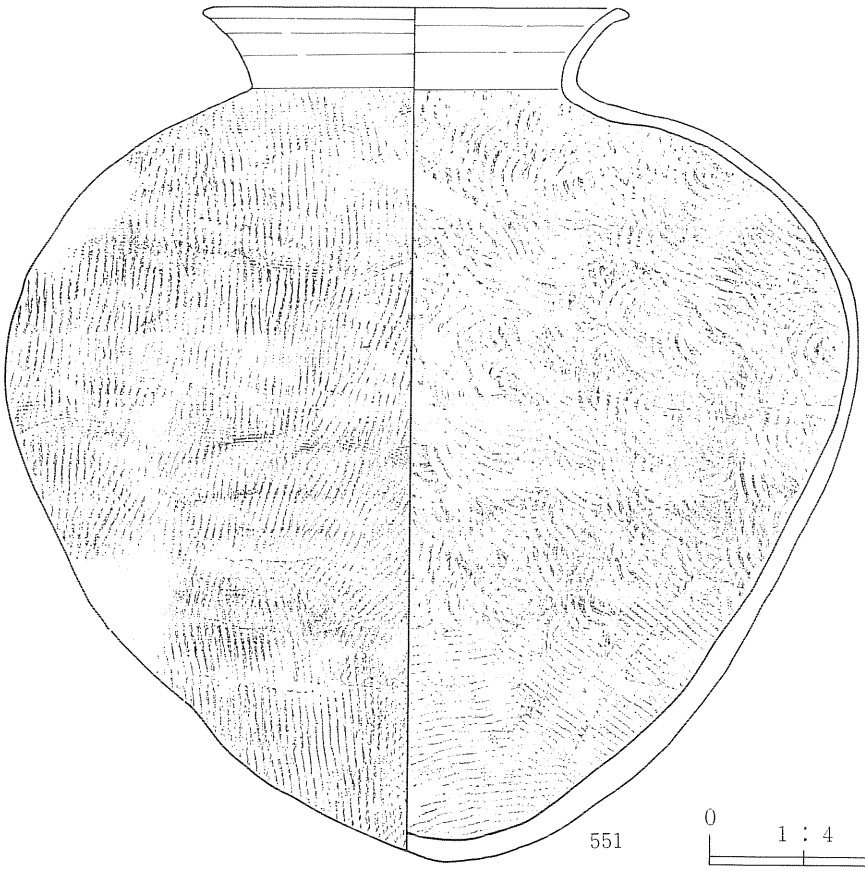


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
549	須・中甕A	10-L5、14-L6、15-L7~4、16-L6	19.2	丸底	41.8	(46.4)	「写」12

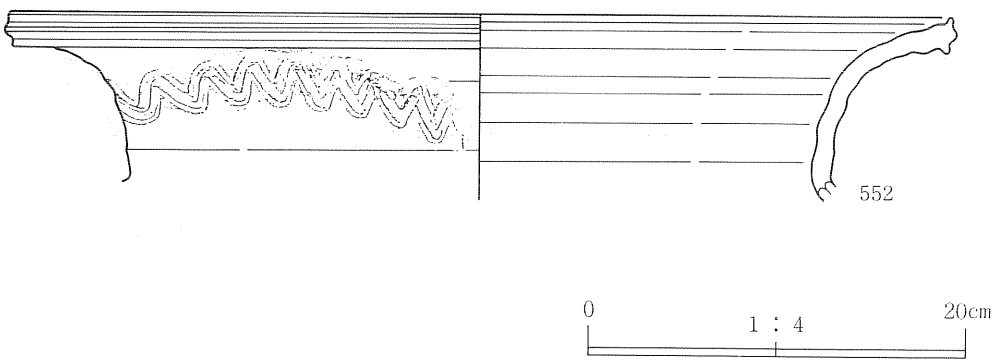


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
550	須・大甕	13K	48.0	－	－	(11.0)	119

第104図　SJ101・102灰原出土土器(48)

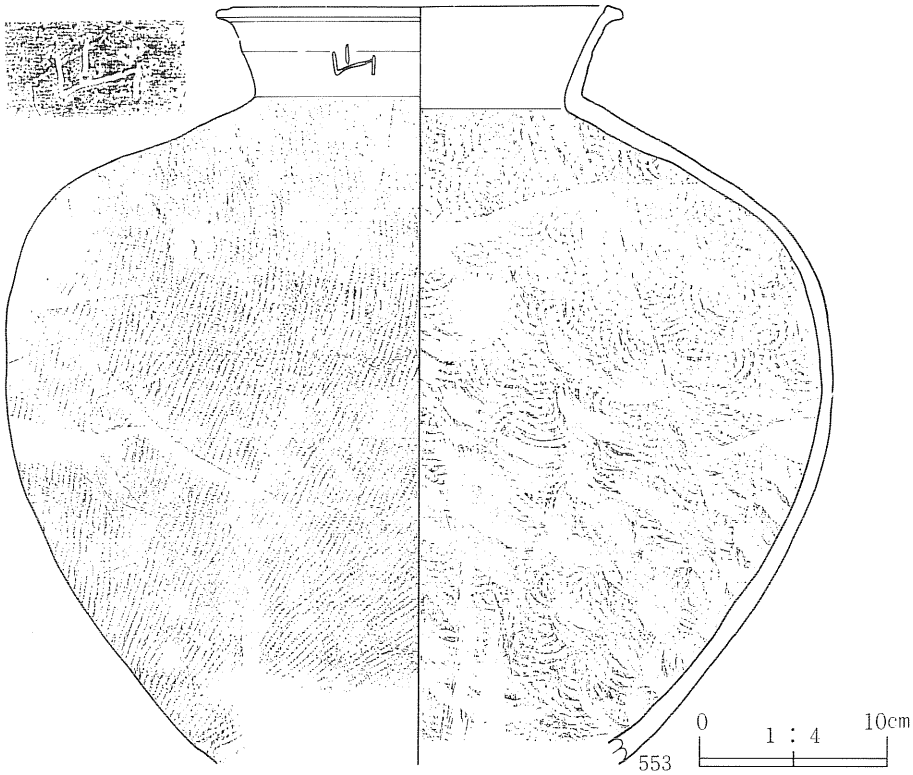


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
551	須・中甕A	13K02-Ⅰ、13K10-Ⅰ、13K13-Ⅰ	21.5	丸底	45.3	44.6	「写」11

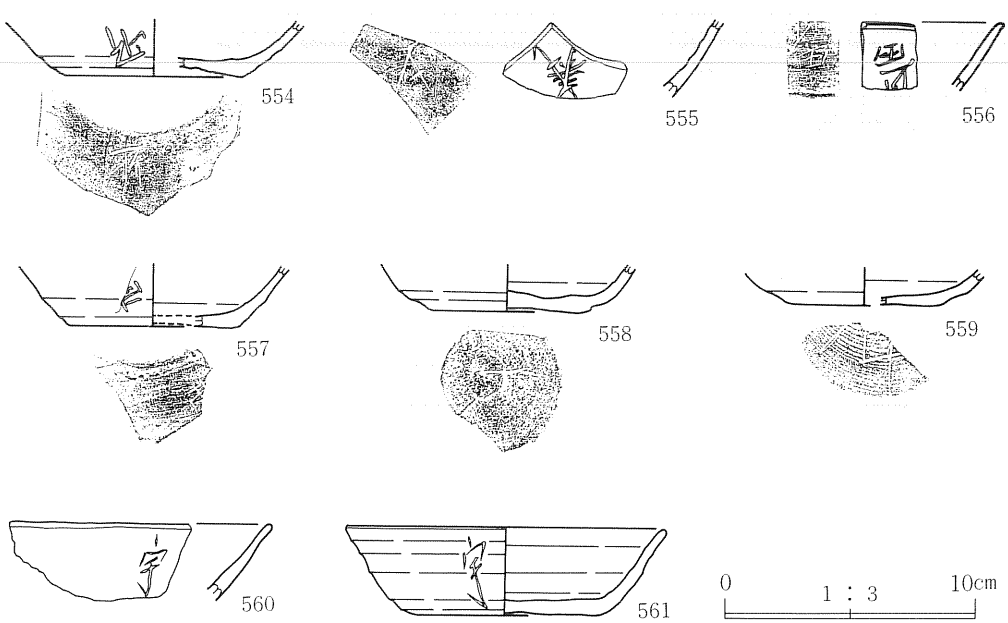


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
552	須・大甕	03-L4,09-L11･10,14-L12,13K02-Ⅰ、13K15-Ⅰ、13K23-L2	50.0	－	－	(9.0)	123

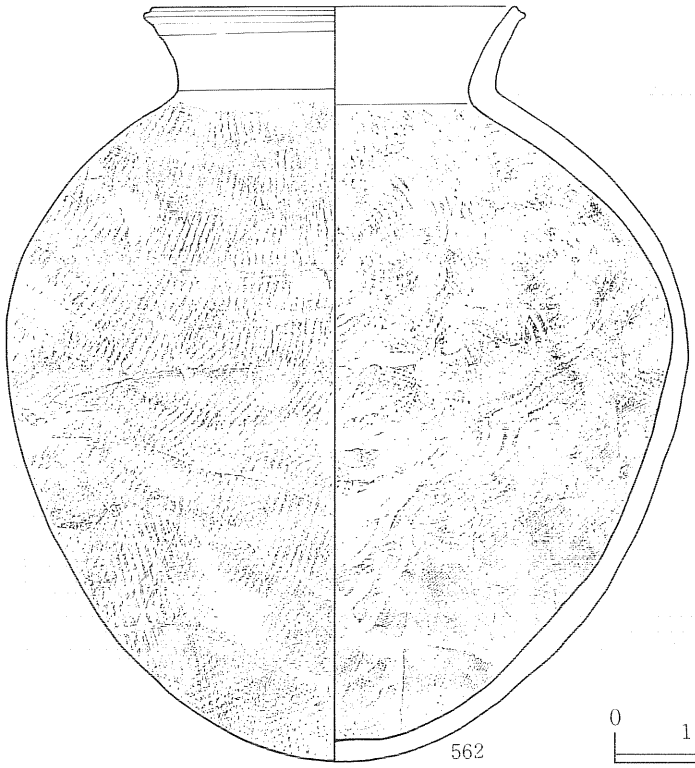
第105図　SJ101・102灰原出土器(49)



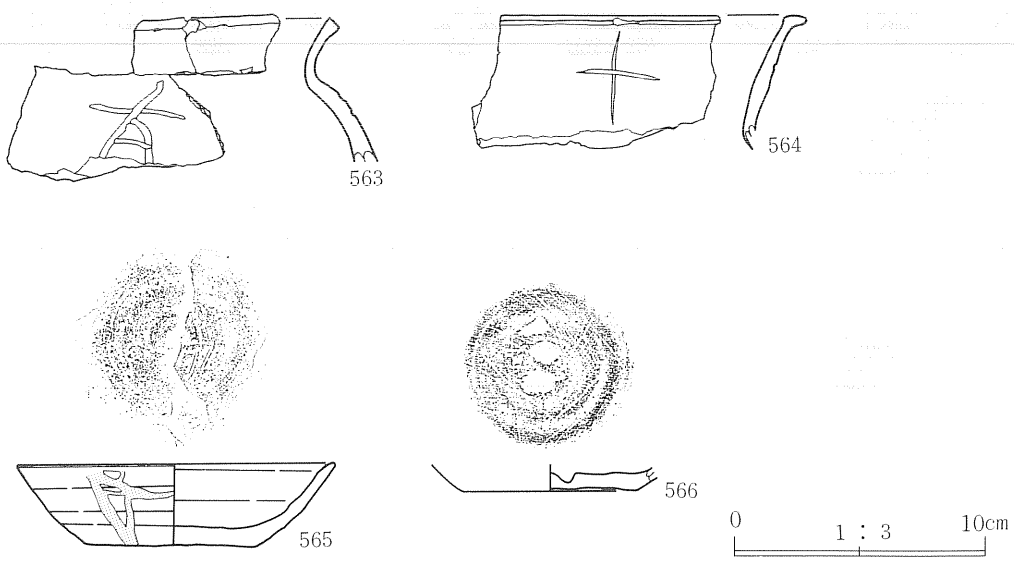
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
553	須・中甕A	04-L6,10-L8･6･5,14-L6･4･2,13K09-L5-3,13K23-L4	20.0	—	44.0	(39.9)	箆書土器「山」(口縁部)　15



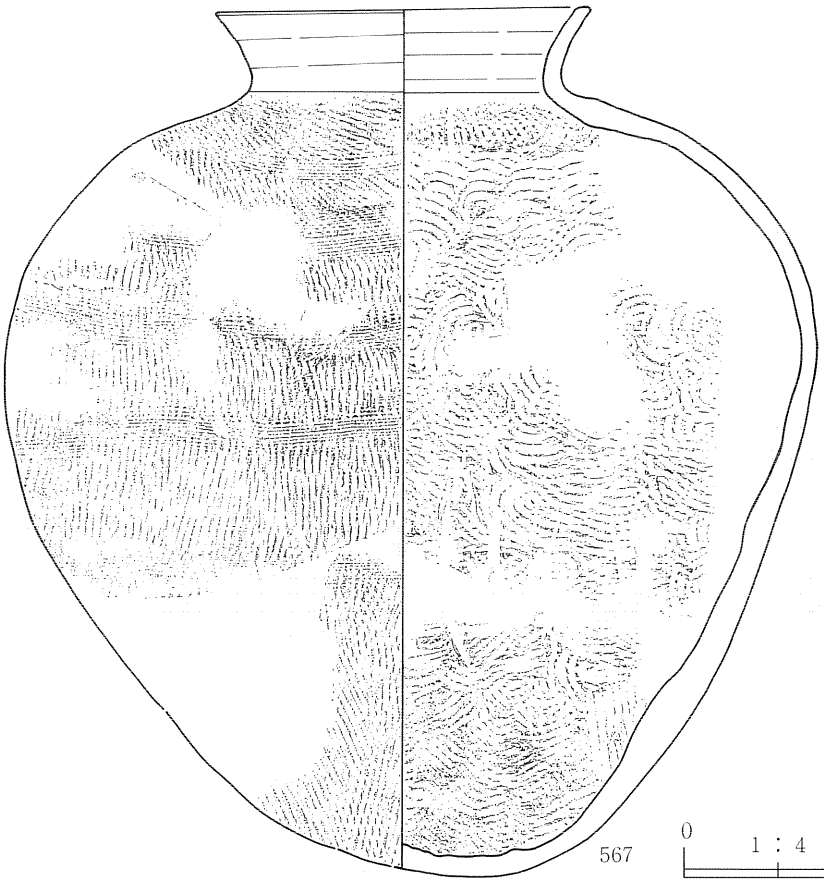
第106図　SJ101・102灰原出土土器(50)



番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
562	甕・中甕A	14K12-Ⅰ、14K13、14K17	19.1	丸底	36.3	40.0	7



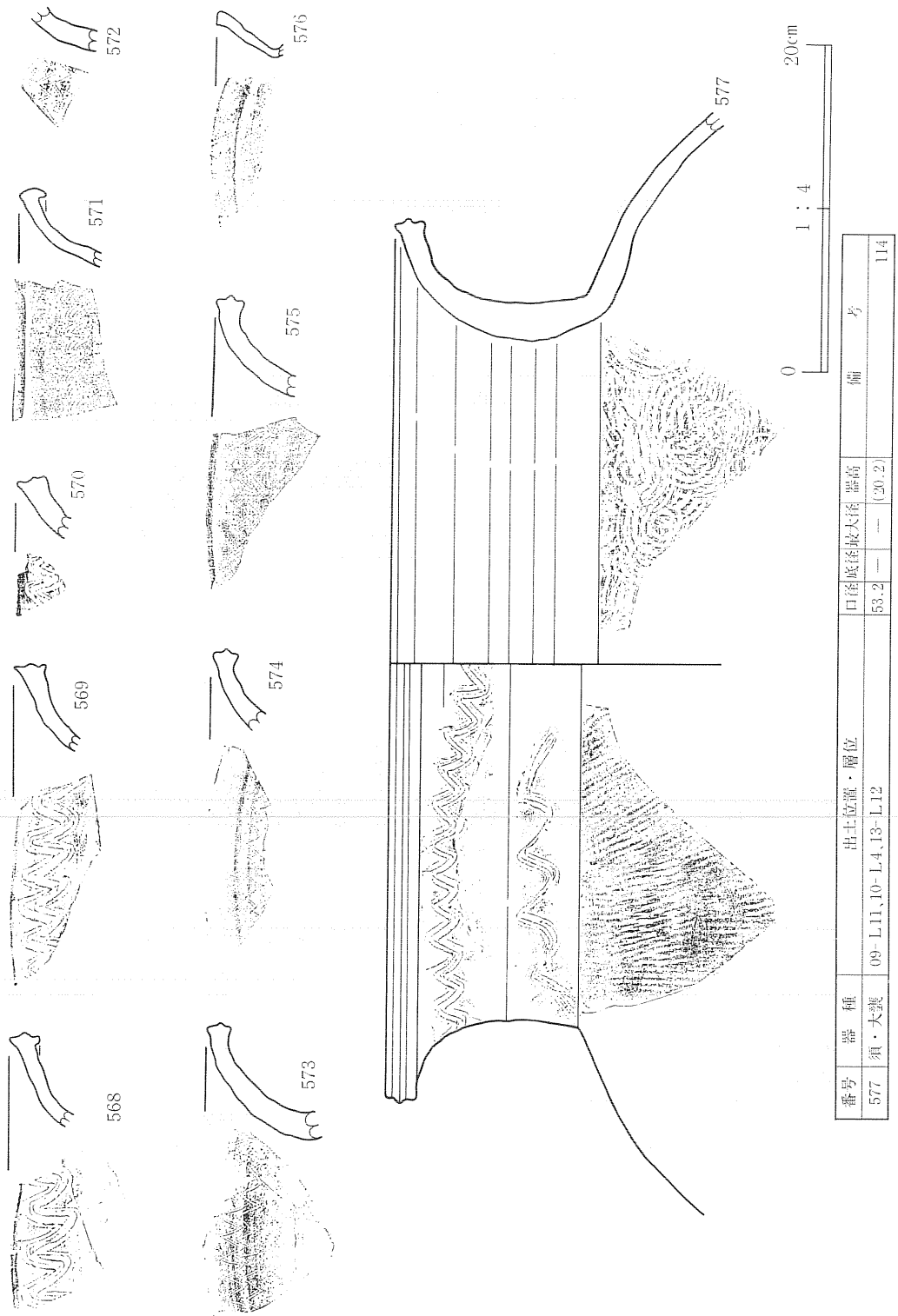
第107図　SJ101・102灰原出土土器(51)



番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
567	須・中甕A	09-L10、14-L14～10	19.8	丸底	43.0	45.7	99

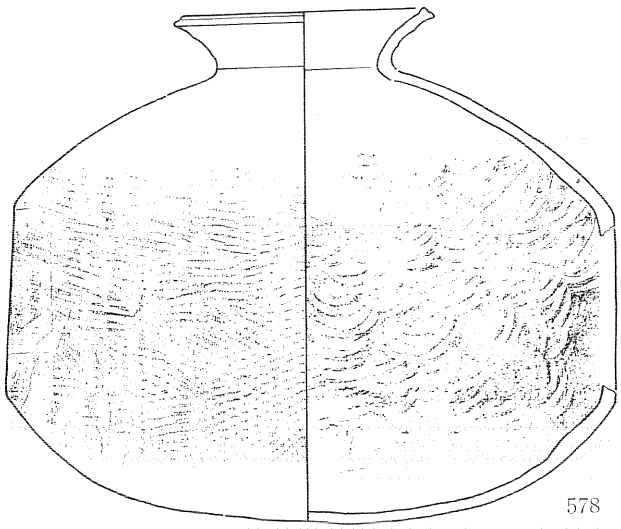
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	備　　考
554	須・坏A 0	09-L7	－	7.0	(2.3)	箆書土器「所」(体部倒位)　「写」 106
555	須・坏	08-L13	－	－	－	箆書土器「美」(体部倒位)　「写」 120
556	須・坏	18-L3	－	－	－	箆書土器「□田」(体部倒位)「写」 116
557	須・坏A 0	18-L4	－	6.9	(2.5)	箆書土器(体部倒位)　113
558	須・坏A 0	13-L4	－	6.2	(1.9)	箆書土器「一」(底部)　108
559	須・坏B 0	範囲確認調査時トレンチ	－	6.3	(1.5)	箆書土器(底部)　111
560	須・坏	10-L5	－	－	－	刻書土器「宇」(体部正位)　「写」 115
561	須・坏A 0	09-L13	12.7	7.6	3.5	刻書土器「宇」(体部正位)　「写」 102
563	須・甕	09-L16	－	－	－	箆書土器「真」カ(体部正位)　121
564	須・甕	03-L7	－	－	－	箆書土器「十」(口縁部正位)　118
565	須・坏A 0	14-L14・13・10	12.4	6.9	3.2	箆書土器(底部内面)火襷あり「写」101
566	須・坏A	04-L11	－	6.9	(0.9)	底部内面に不定方向の線刻　110

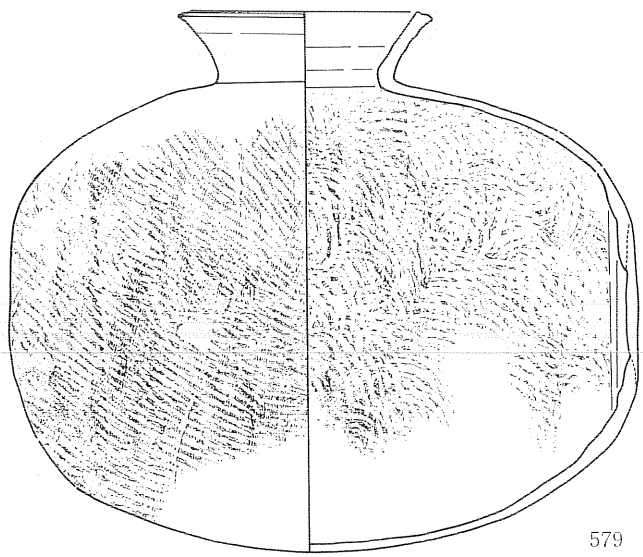
第108図　SJ101・102灰原出土土器(52)

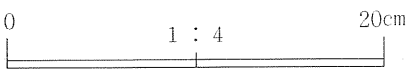


番号	器種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備考
577	須・大甕	09-L11,10-L4,13-L12	53.2	—	—	(30.2)	114

第109図　SJ101・102灰原出土土器(53)

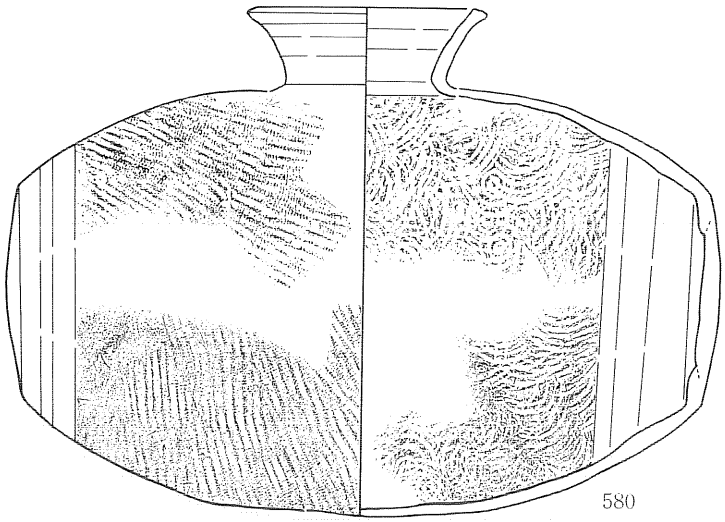


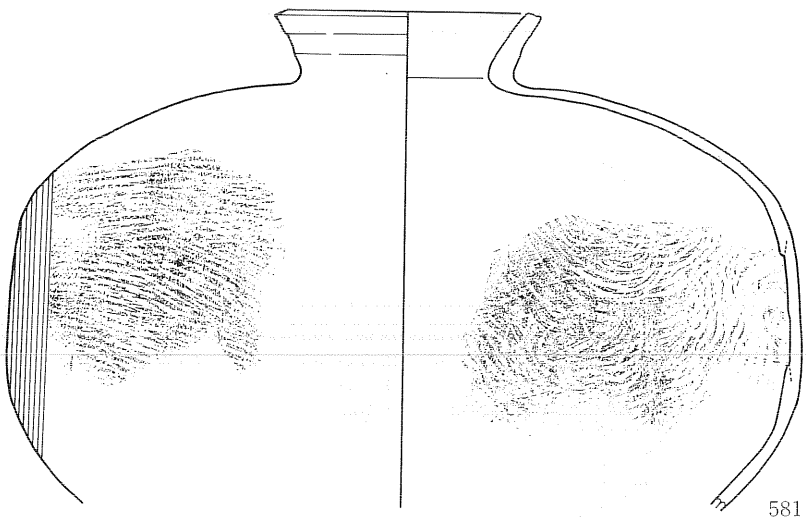




番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
578	須・横瓶	08 L15･14､09-L16~13､14-L14､13L08	12.7	—	32.3	27.0	77
579	須・横瓶	09-L16~12･10､14K06-Ⅰ､SJ102灰原	11.9	—	33.5	28.7	「写」76

第110図　SJ101・102灰原出土土器(54)

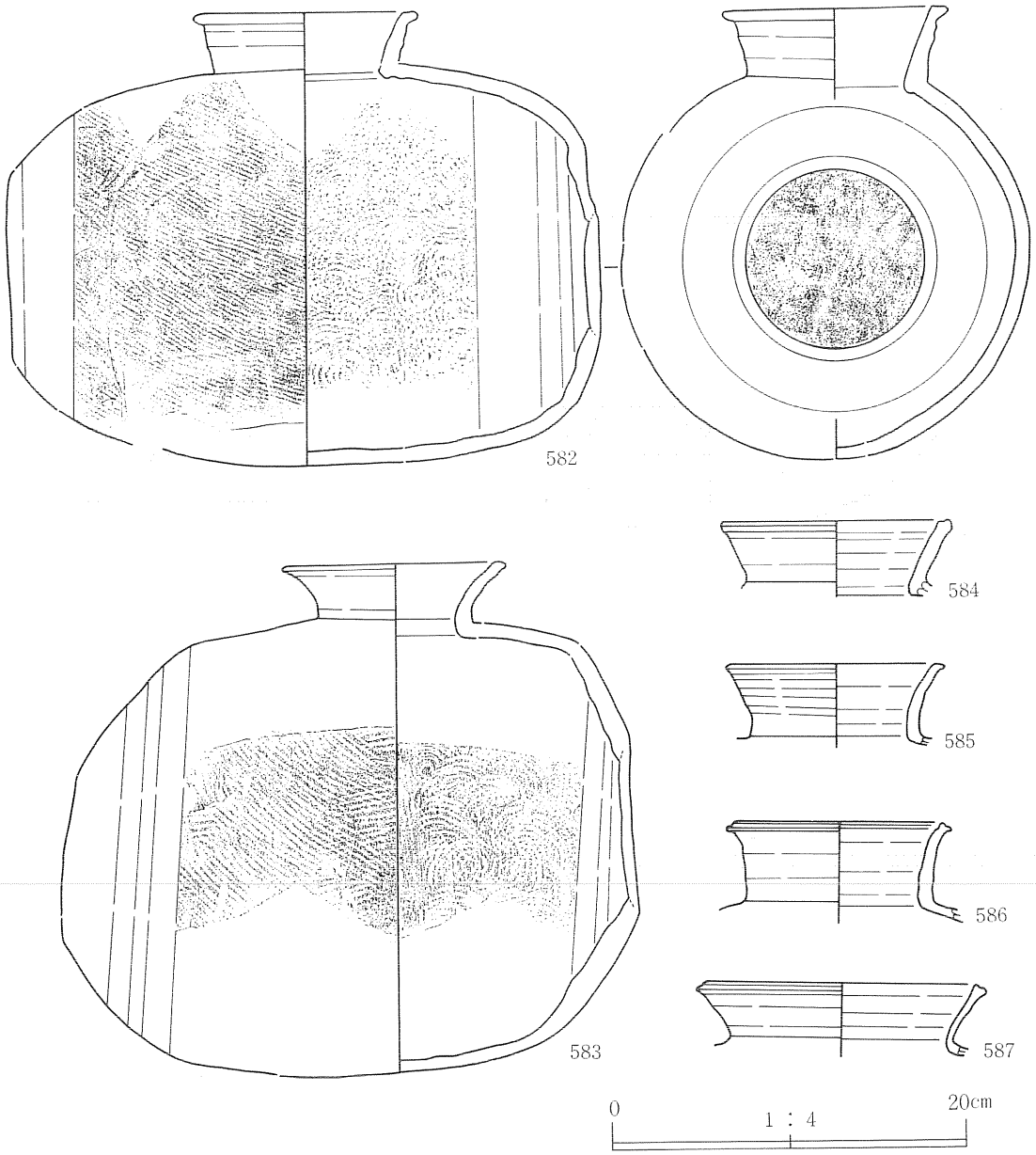




0　1：4　20cm

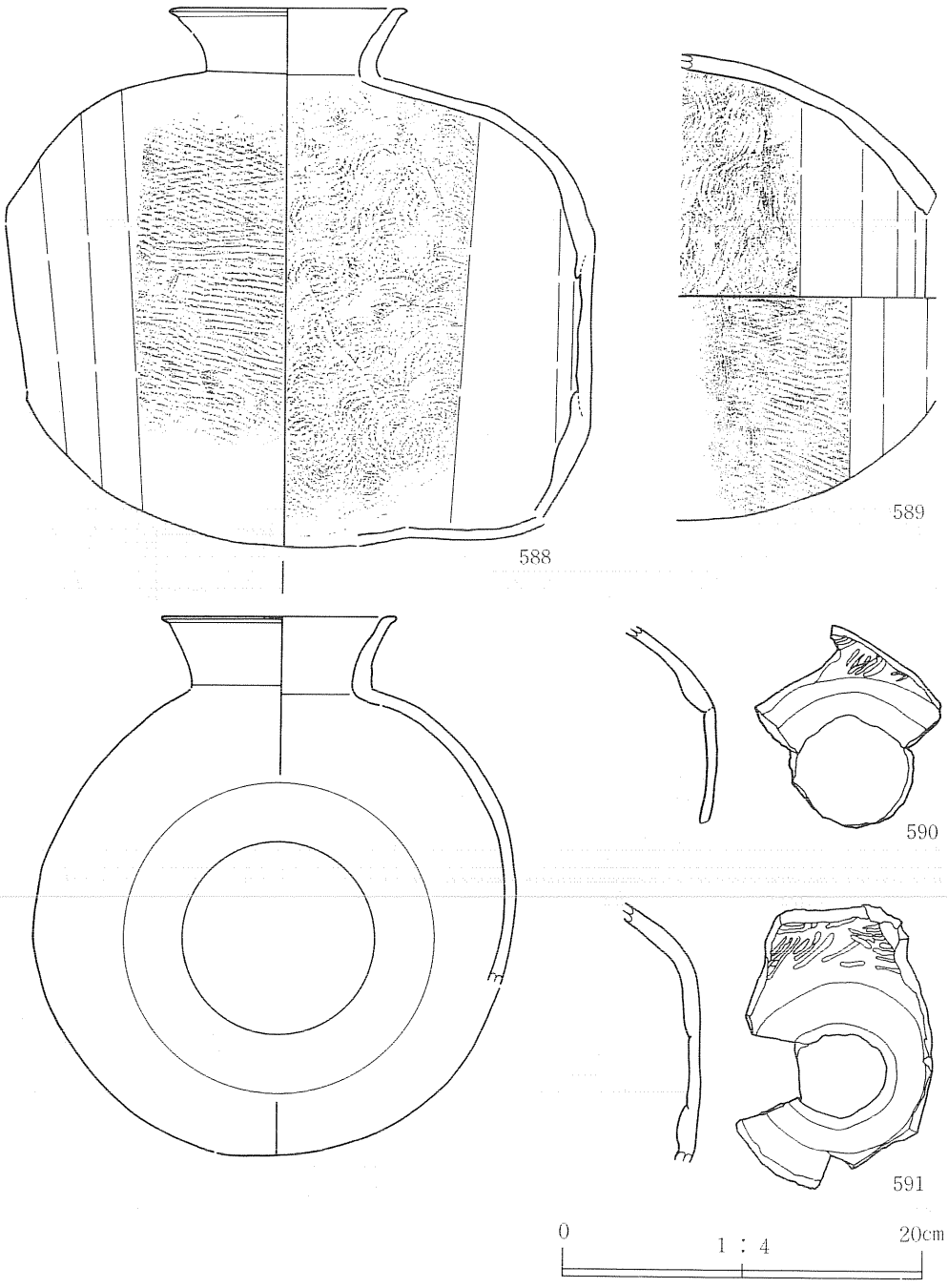
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
580	須・横瓶	08-L14･12、09-L13、10-L7、14-L13･12	11.4	—	38.0	26.9	86
581	須・横瓶	03-L11~9･6、08-L14~12、10-L4	12.6	—	42.1	(26.3)	85

第111図　SJ101・102灰原出土土器(55)



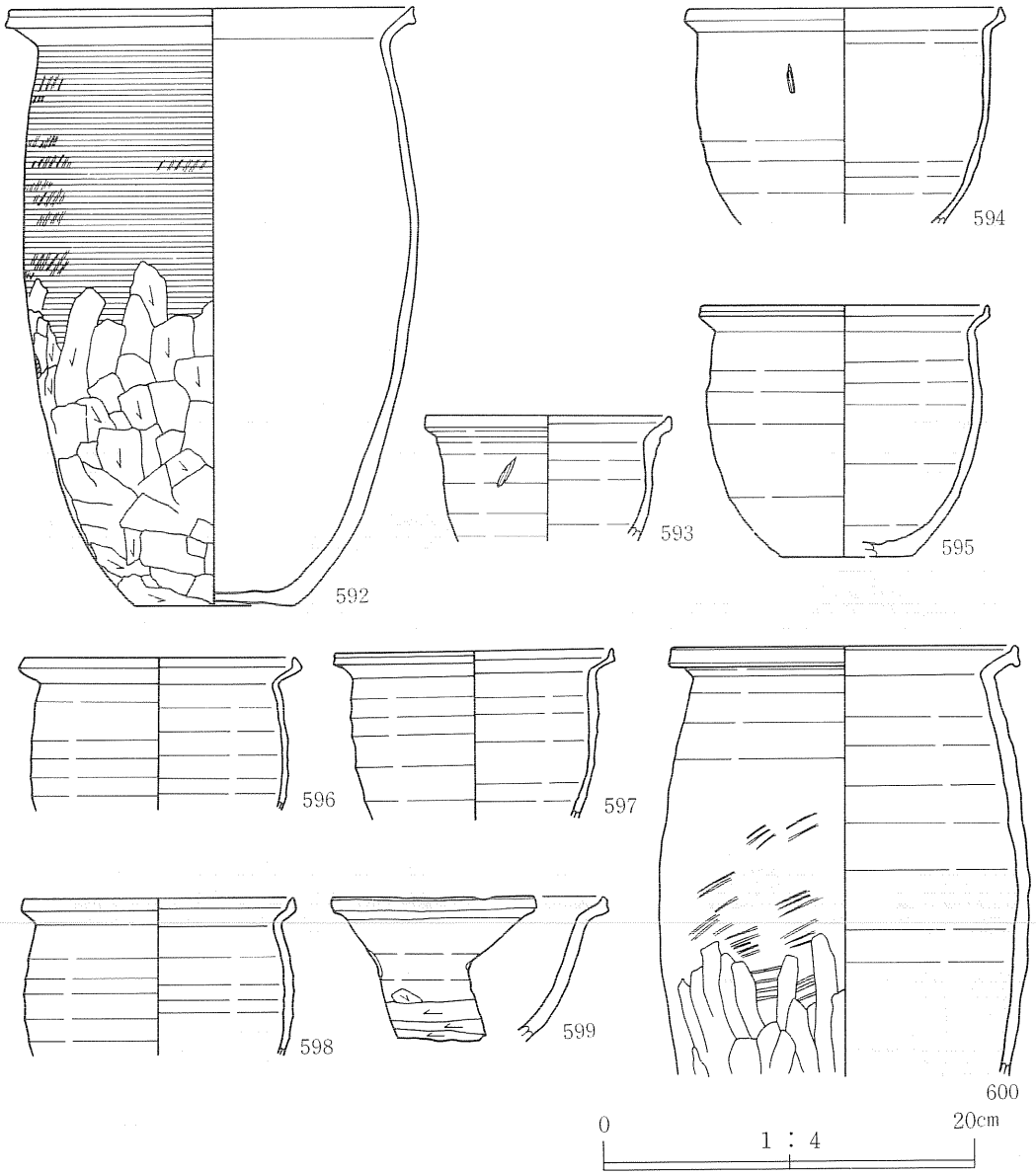
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考
582	須・横瓶	03-L11~7、04-L9·6·5、09-L10、13-L4	10.9	—	33.5	25.5	「写」10
583	須・横瓶	03-L11、09-L6、13-L8、14-L9~5	11.6	—	32.7	28.7	75
584	須・横瓶	10-L5	12.7	—	—	(4.3)	88
585	須・横瓶	13-L7·6	11.4	—	—	(4.7)	89
586	須・横瓶	03-L11、09-L6	11.8	—	—	(5.7)	90
587	須・横瓶	08-L15	15.2	—	—	(4.0)	91

第112図　ＳＪ101・102灰原出土土器(56)



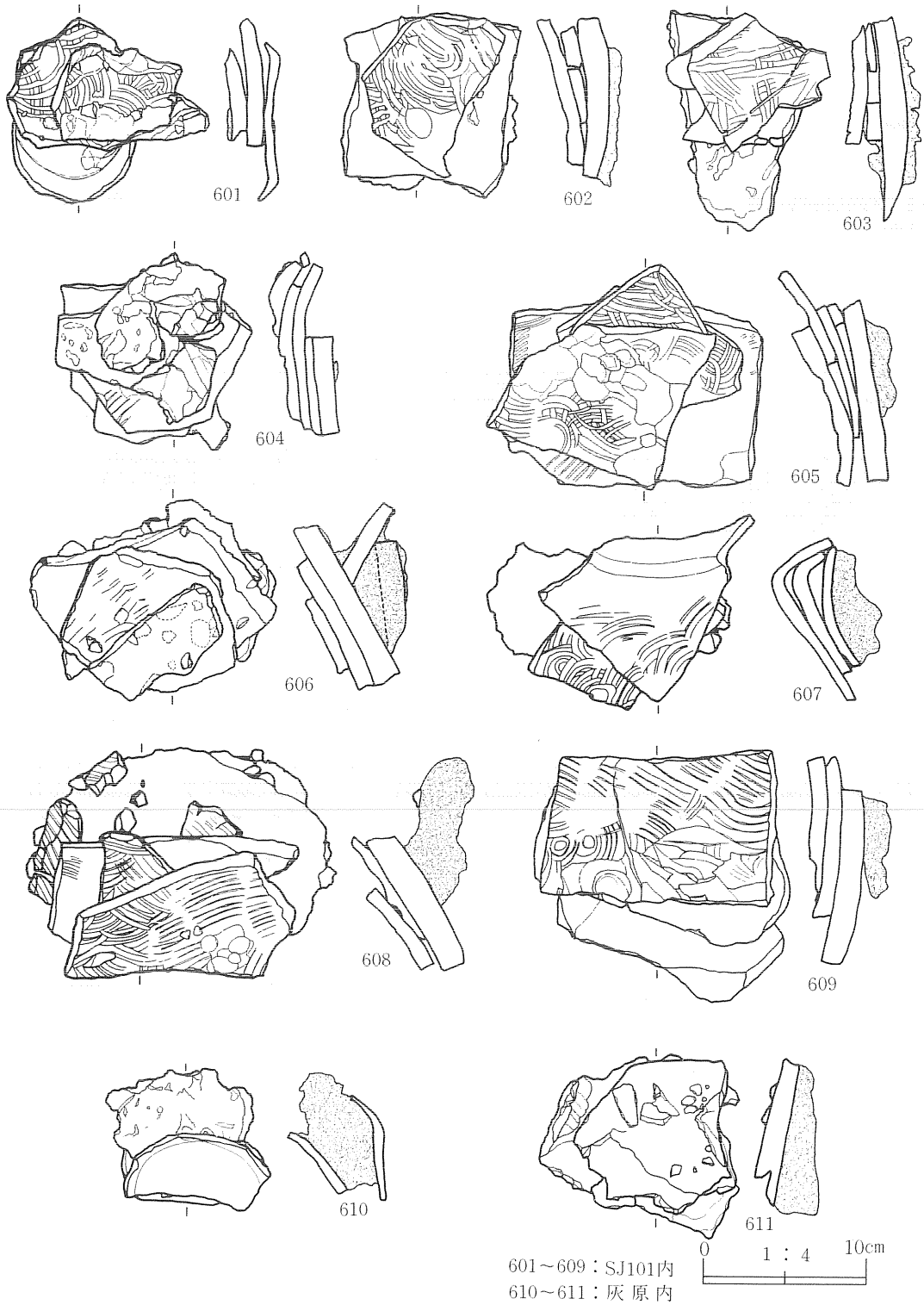
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　　考
588	須・横瓶	08-L7、14-L13・11~8、15-L6・5	12.7	—	32.8	29.9	「写」 73
589	須・横瓶	14-L10・8・7	—	—	—	—	93
590	須・横瓶	14-L11、15-L8	—	—	—	—	94
591	須・横瓶	02-L2・1、15-L2、12L14-I、13K23-L7	—	—	—	—	97

第113図　SJ101・102灰原出土土器(57)

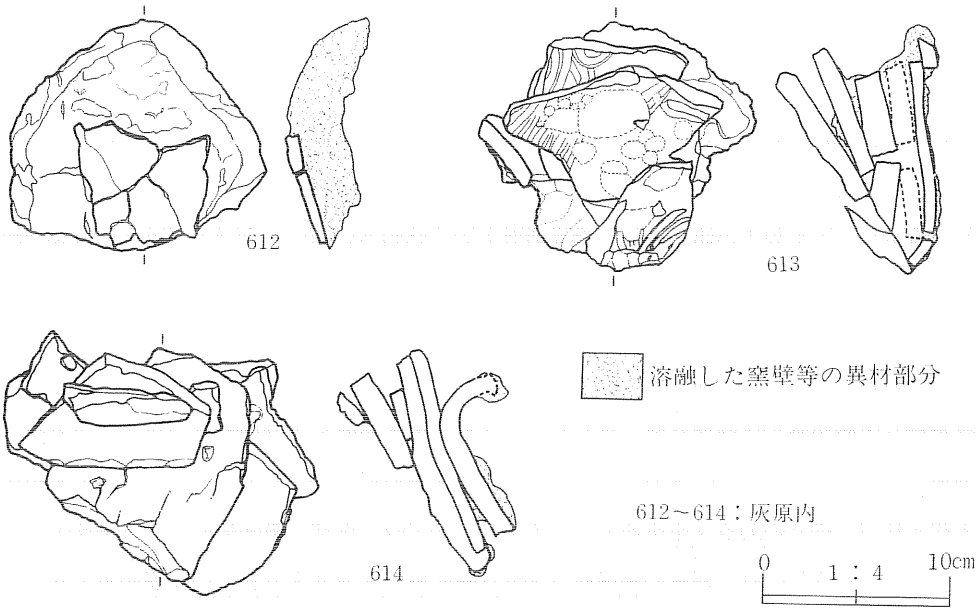


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	備　考	
592	土・甕	08-L12、13-L13、14-L14・13	21.6	8.4	21.9	32.2	「写」	50
593	土・甕	SJ101灰原	13.1	—	13.2	(6.8)		51
594	土・甕	13-L13・5	16.8	—	17.3	(11.6)		54
595	土・甕	13-L15・12	15.4	7.1	15.7	13.6		56
596	土・甕	08-L13、L14	14.6	—	15.2	(8.3)		52
597	土・甕	13-L13	14.7	—	15.1	(9.1)		57
598	土・甕	08-L12	14.5	—	14.7	(8.5)		53
599	土・鍋	13-L3	—	—	—	—		116
600	須・中甕Bb	08-L12・10・9	18.4	—	19.9	(23.3)	土師器の還元化	115

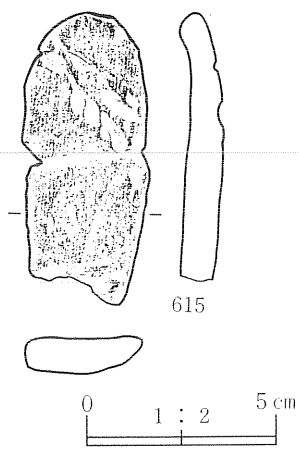
第114図　SJ101・102灰原出土土器(58)



第115図　SJ101・102窯内・灰原出土焼台(1)



第116図　SJ 101・102 窯内・灰原出土焼台(2)



第117図615は、灰原内13Ｌ04グリッドＬ４出土の土師質の土製品である。図示面の下端を欠損しているが、両端が丸みをもつ板状の形態を示す。現存長7.8cm、幅3.3cm、厚さ0.9cmである。色調は暗褐色を呈す。表面には、稲穂の圧痕が認められる。

第117図　SJ 101・102 灰原出土土製品

第３章　小　　結

富ヶ沢Ｂ窯跡で検出された遺構は、須恵器窯跡２基及び土坑２基、溝状遺構・柱穴状ピットである。遺構の配置から、特に溝状遺構、柱穴状ピットは窯に付属する施設と考えている。また土坑についても埋土の観察から、須恵器窯と同一時期の廃棄が想定でき、両者の密接な関係が窺える。

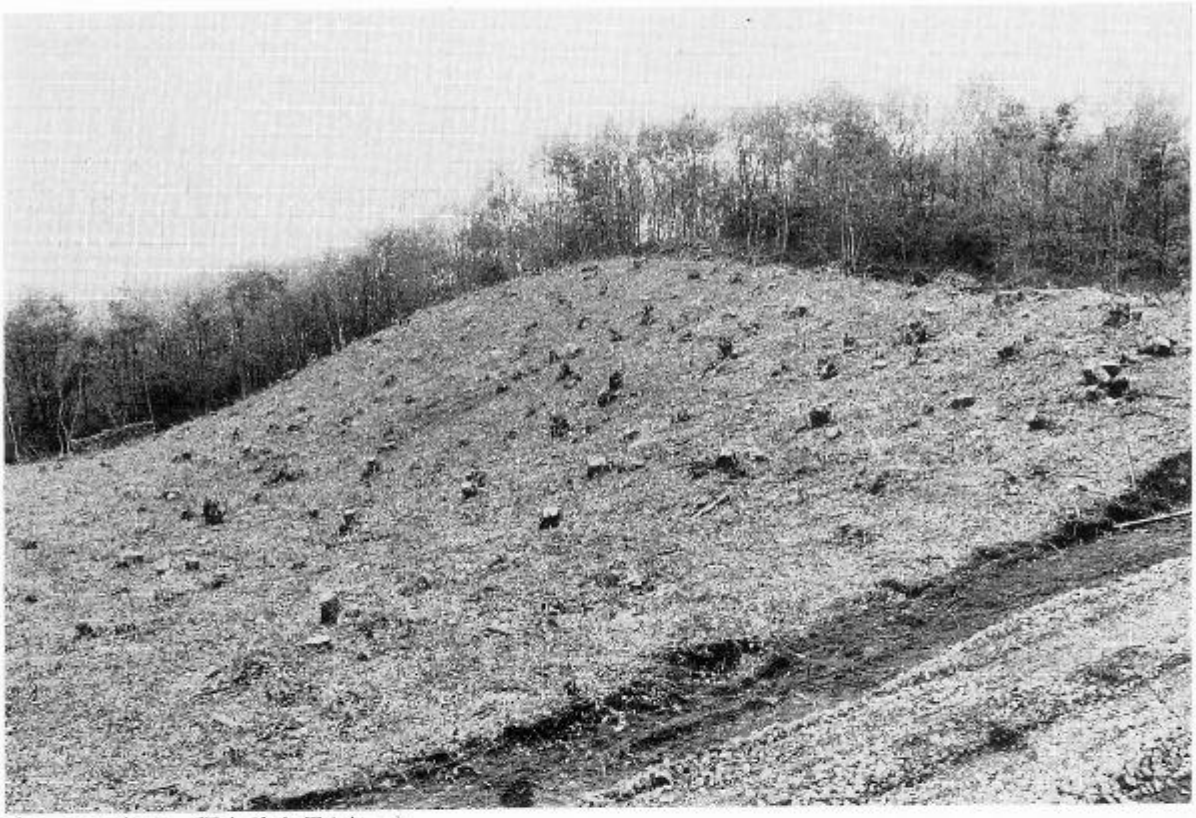
２基の窯は、重複する灰原での土層観察によってもその新旧は明確にできず、逆にこの点からある時期には併存していた可能性が高い証左なのかもしれない。操業時期は、ＳＪ102では、廃棄後－土層観察では廃棄直後と思われる－に富ヶ沢Ａ窯跡ＳＪ01同様灰白色火山灰が流入・堆積していることから、従来の年代観に従えば、下限時期は10世紀前半になる。ただ須恵器の年代と比べた場合の開きはややあり、この点については、考察で若干触れることとする。

２基の須恵器窯跡は、側壁の架構材（小穴・炭化材）とスサ入り粘土の確認から半地下式の窯と判断できる。架構材・小穴は富ヶ沢Ａ窯跡ＳＪ01でも確認されており、窯体上部の構造は同一であったと思われる。しかも両者は、焚口～前庭部に窯体を覆うような上屋があったことが想定できる柱穴状ピット、窯上部でこれを取り巻くような溝状遺構（ＳＪ102のＳＤ104、ＳＪ01のＳＤ06・09・35）の存在という共通点を有す。さらに前庭部の掘り込みの形状は、両者、特にＳＪ102とＳＪ01とも逆三角形を呈し、規模の違いを除いて非常に良く似ている。前庭部の形状は、富ヶ沢Ａ窯跡に近接する郷土館窯跡のそれ－報告では「野球のホームベースのようなプラン」[(註)]－にも類する。

遺物は、窯内及び灰原、その周辺に多量の須恵器等が遺棄されていた。出土量は、秋田ふるさと村地内の４つの生産遺跡のうち飛び抜けて多く、全体量の約64％を占めている。

窯で生産されていた器種には、坏類（坏、高台付坏、双耳坏、鉢）、蓋類（坏蓋、壺蓋）、壺類（長頸壺、短頸壺、広口壺、小壺）、甕類（大甕、中甕、小甕）、横瓶及び手づくね土器などがあり、実に多器種に亙る。各器種毎の重量比率から、本窯では、中甕を主とする甕類と無台の坏を主とする坏類を多く生産していたと想定できる。

（註）横手市教育委員会『郷土館窯跡』　1976（昭和51年）ｐ２

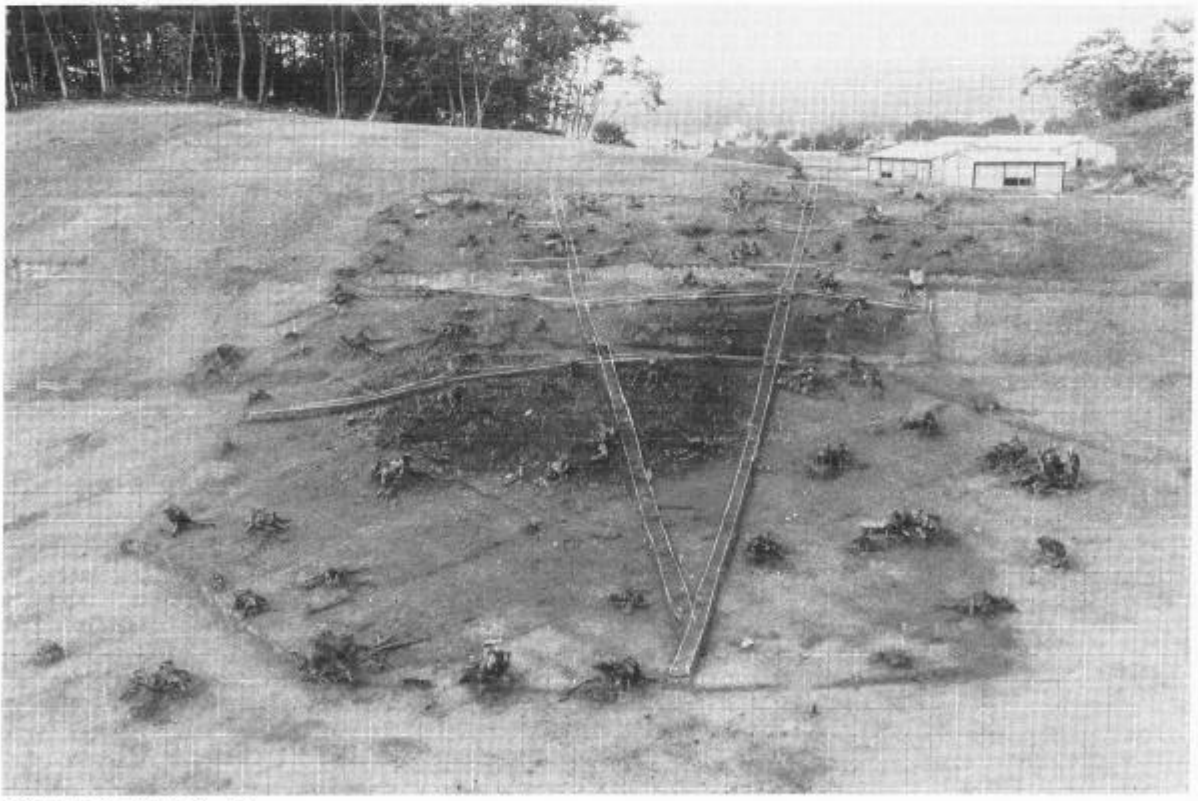


富ヶ沢B窯跡　調査前全景(南→)

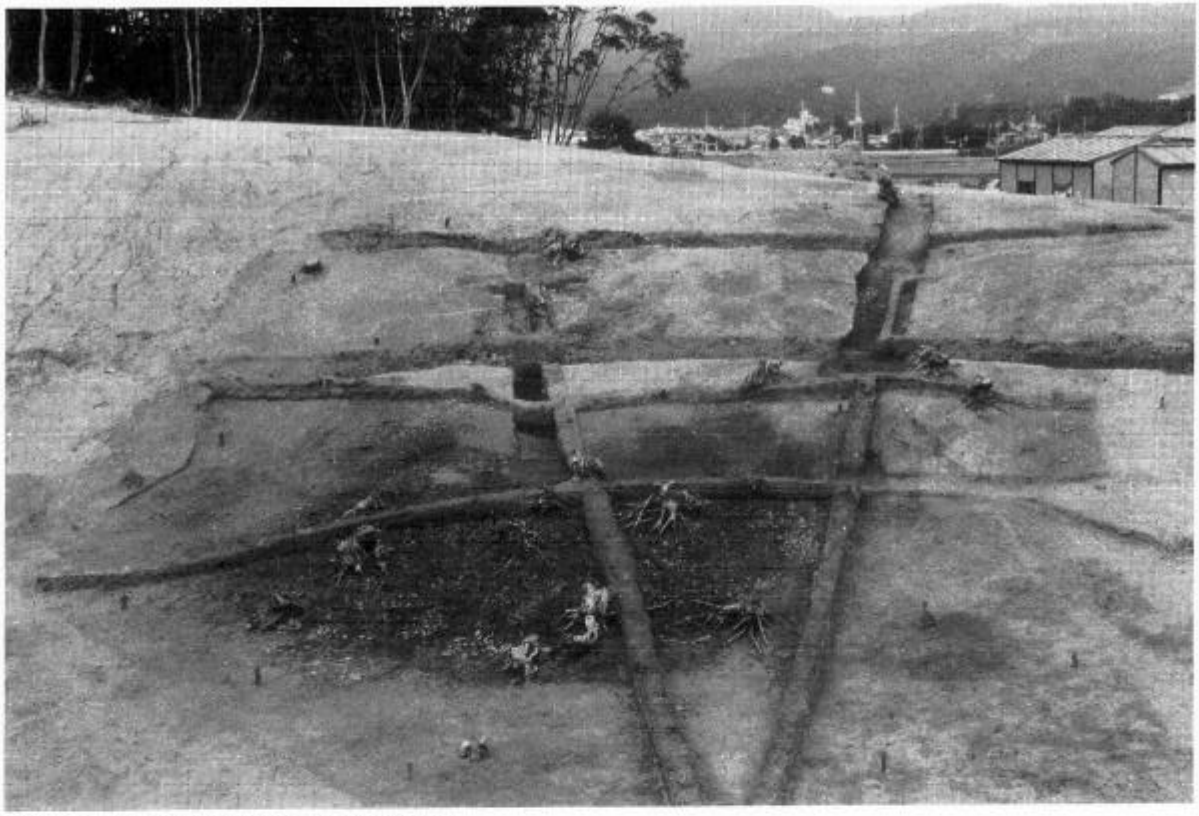
富ヶ沢B窯跡　調査後全景(南→)

図版20

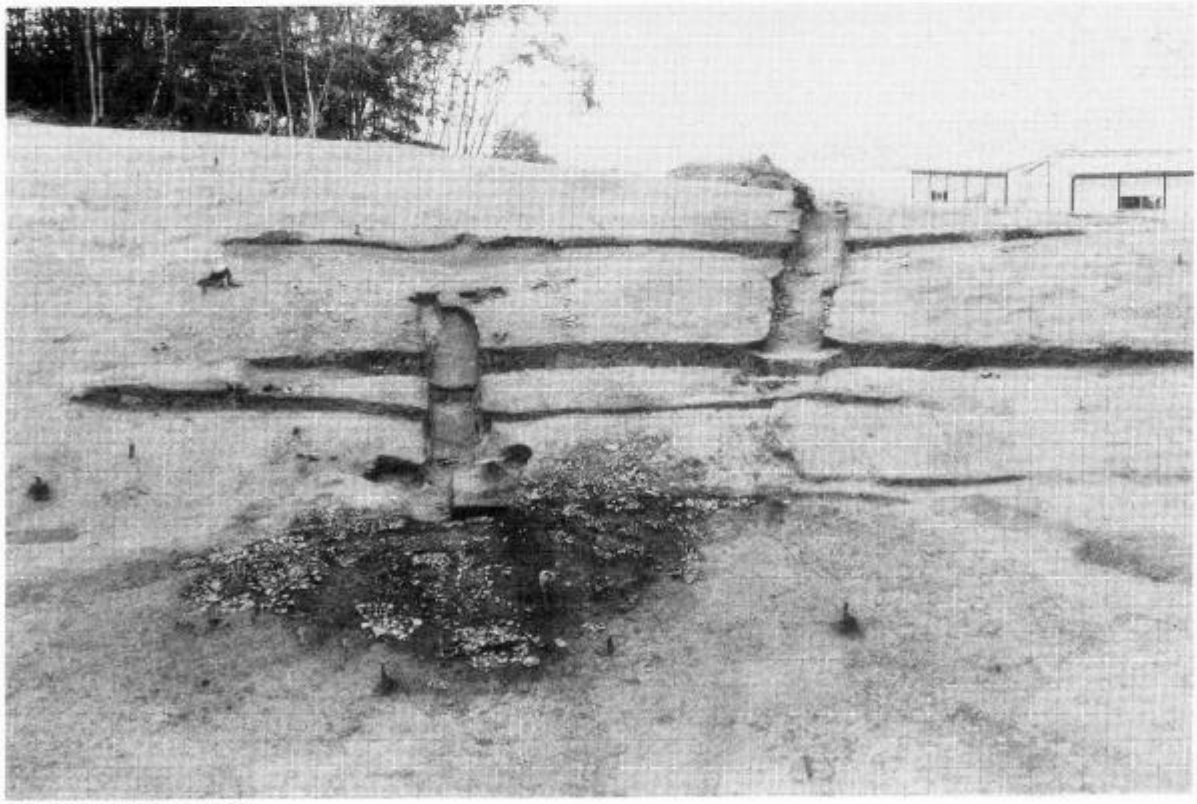
SJ101・102灰原（Ｌ１面）（南→）



同上（Ｌ４面）（南→）



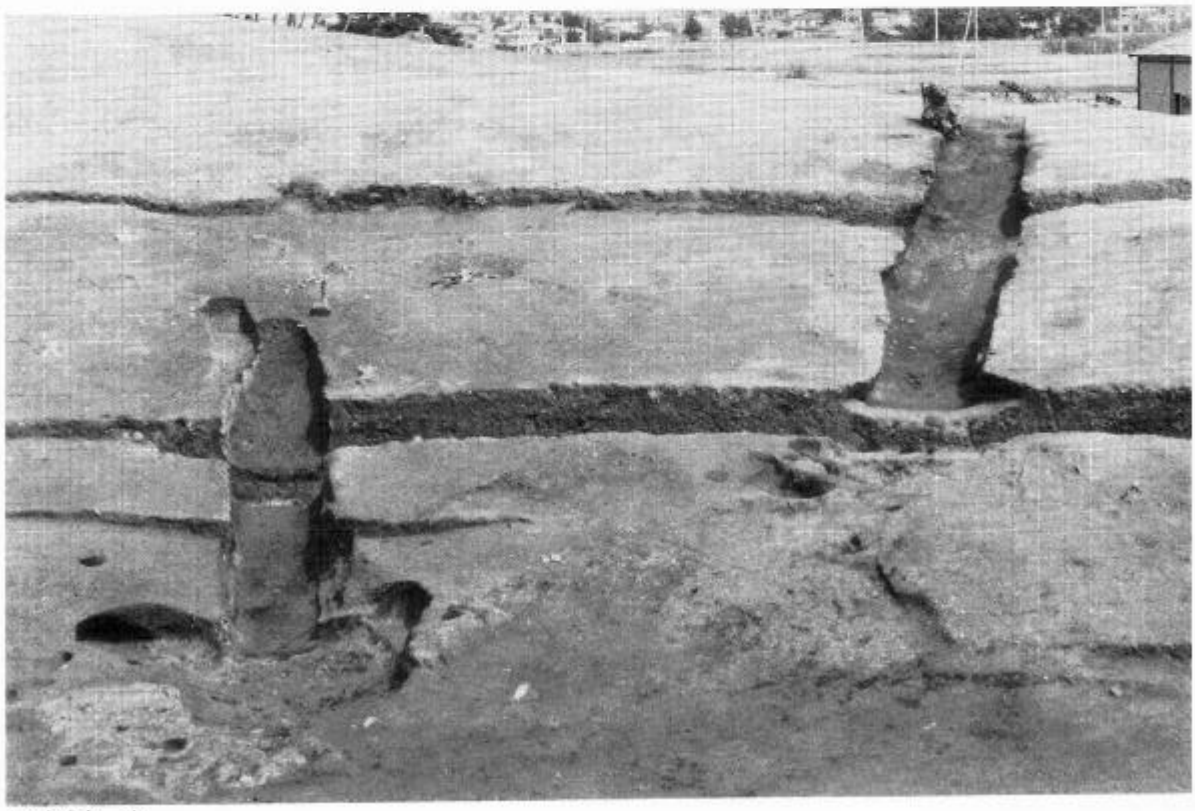
SJ101・102窯体、灰原（Ｌ７面）（南→）



同上（Ｌ10面）（南→）

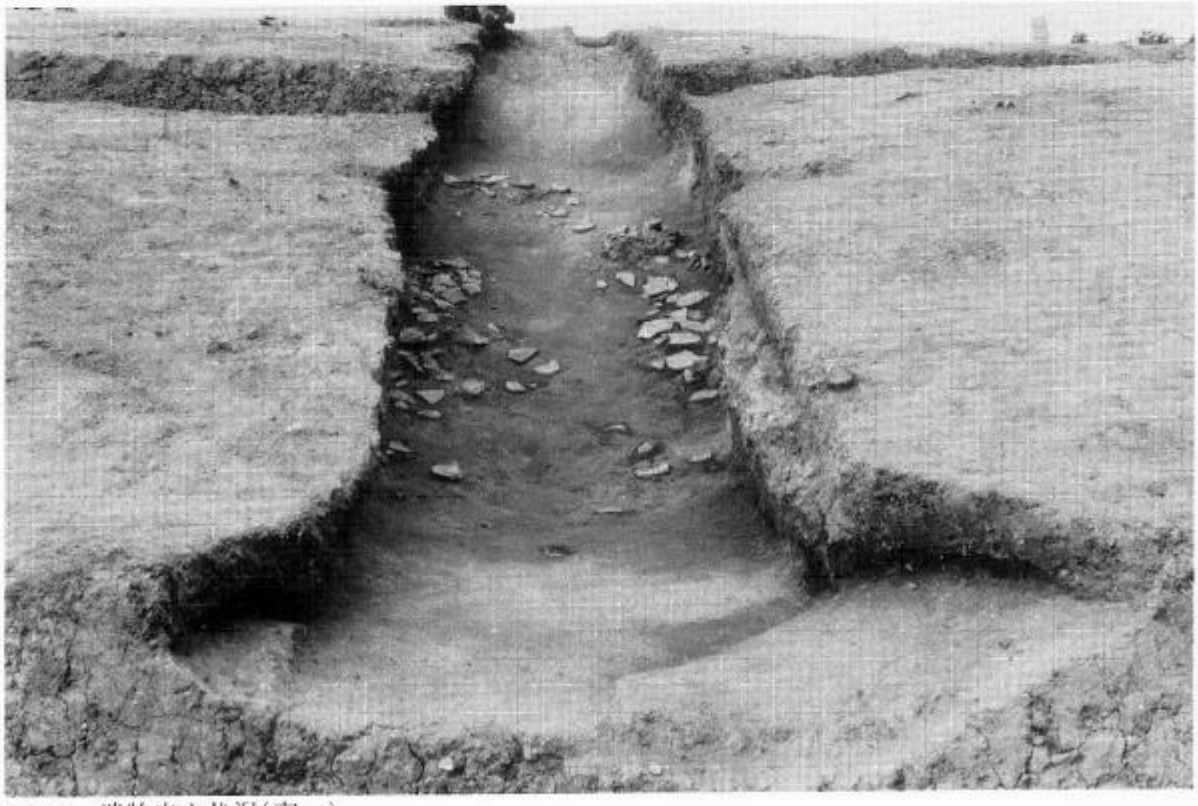
図版22

SJ101・102　完掘(南→)



同上(南→)

SJ101　土層(南→)



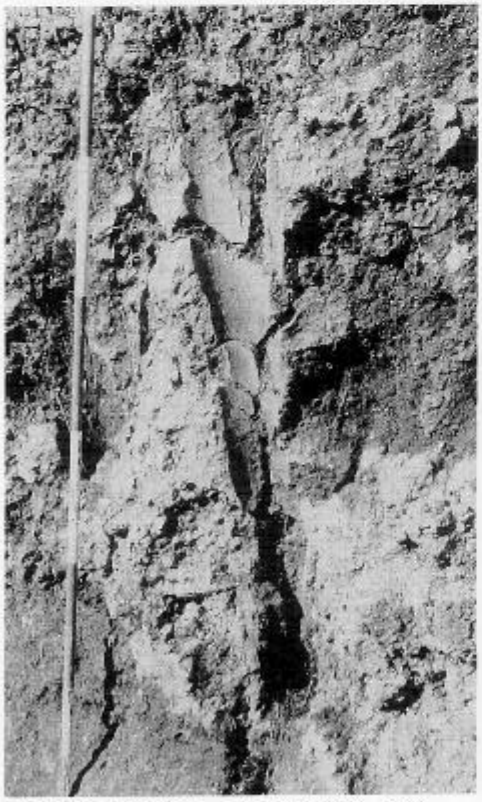
SJ101　遺物出土状況(南→)

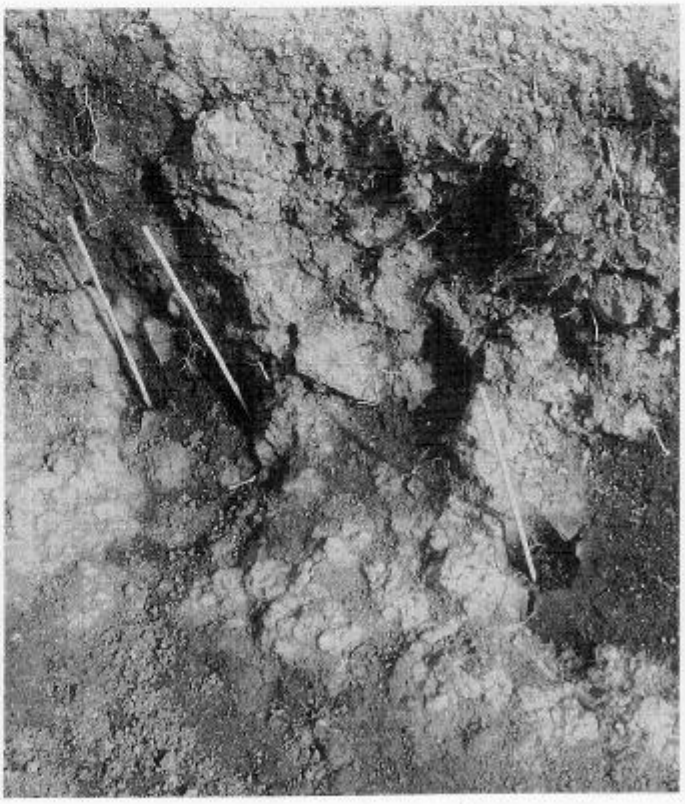
図版24

SJ101　遺物出土状況(南→)

同上(南→)

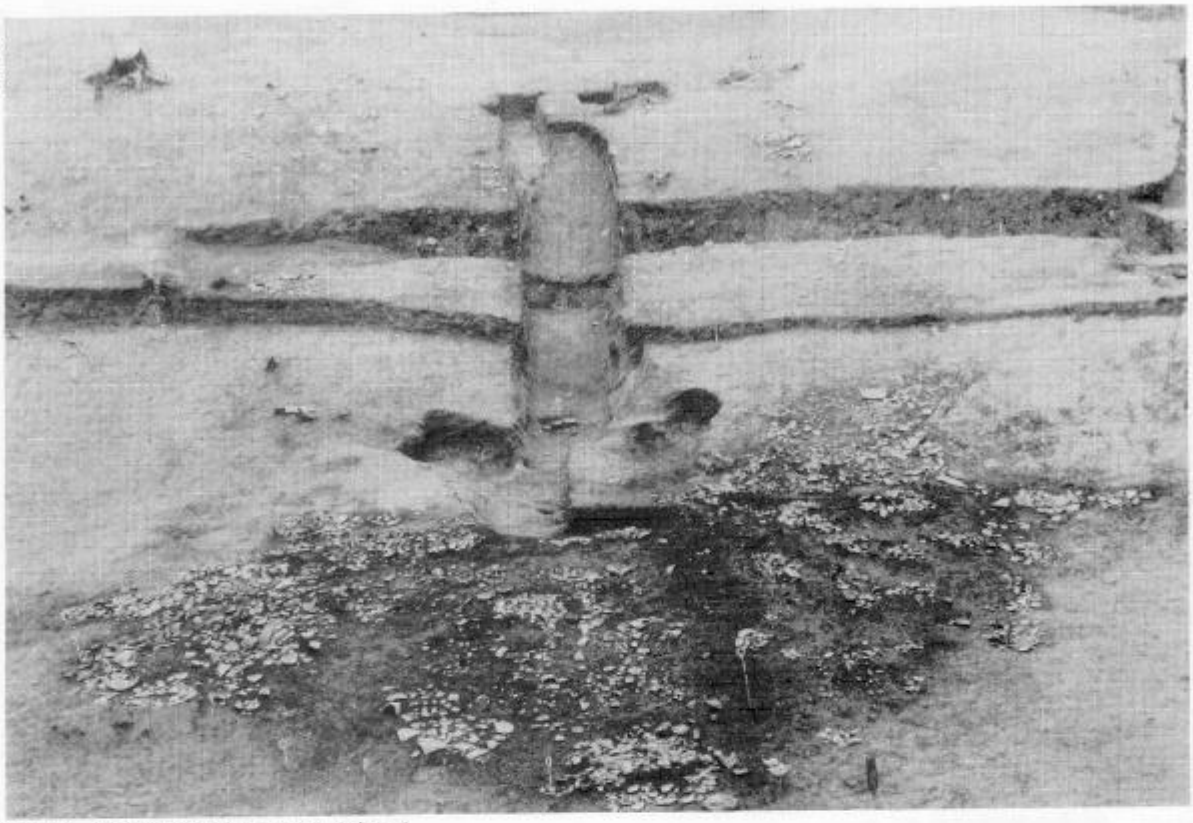
SJ101　側壁の架構材痕跡(南→)



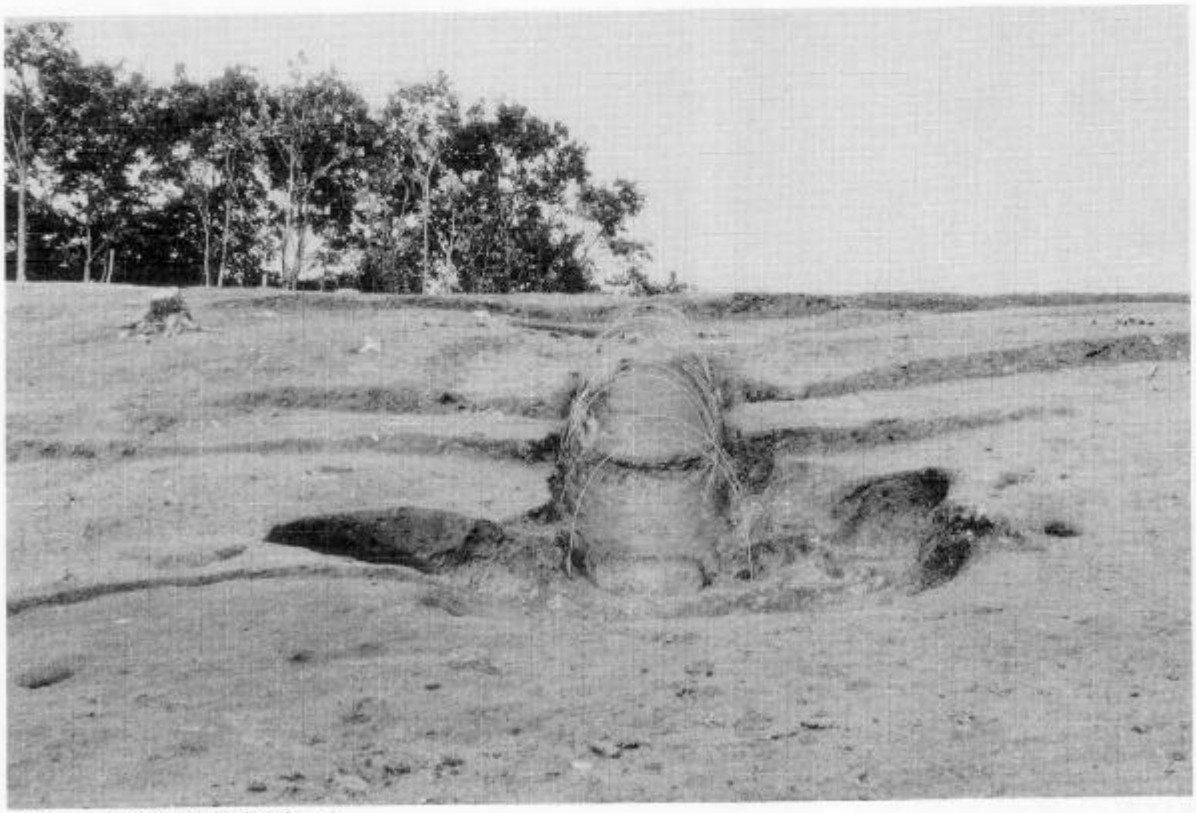


同上(左：左壁１、右：右壁36～38)

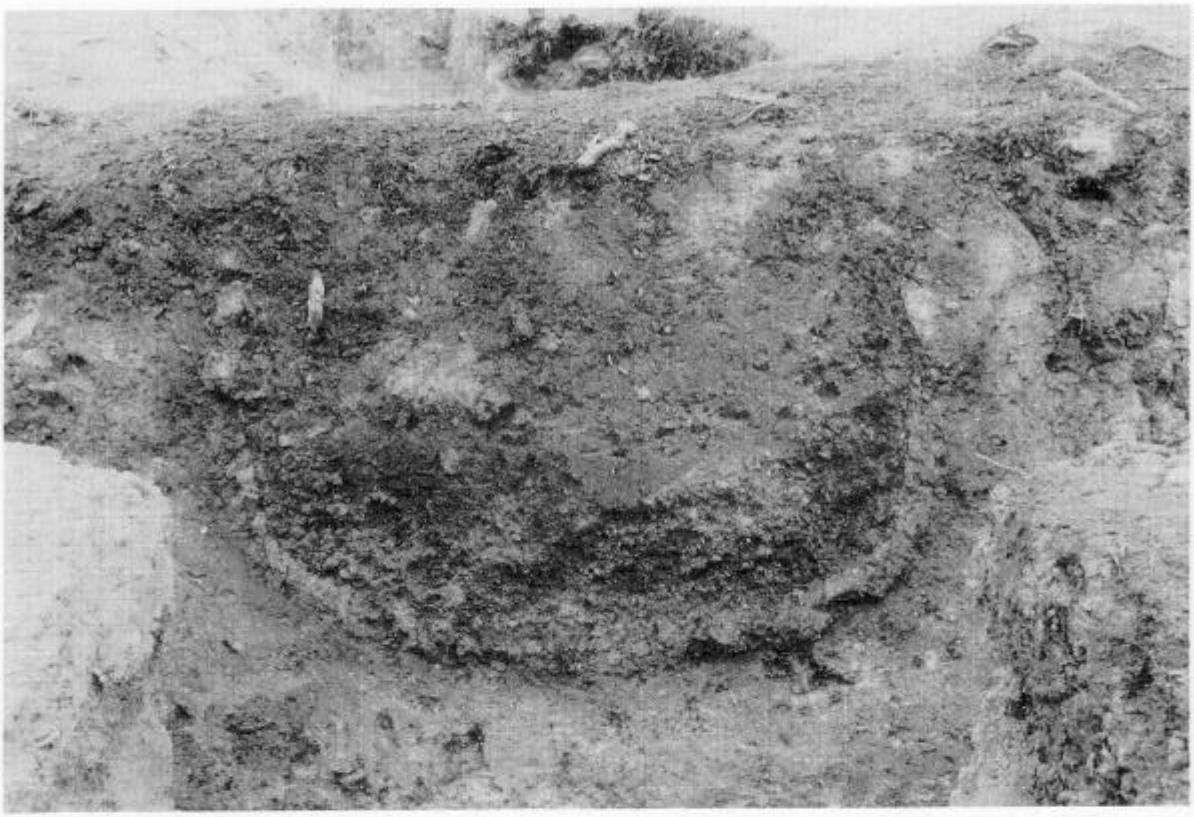
図版26



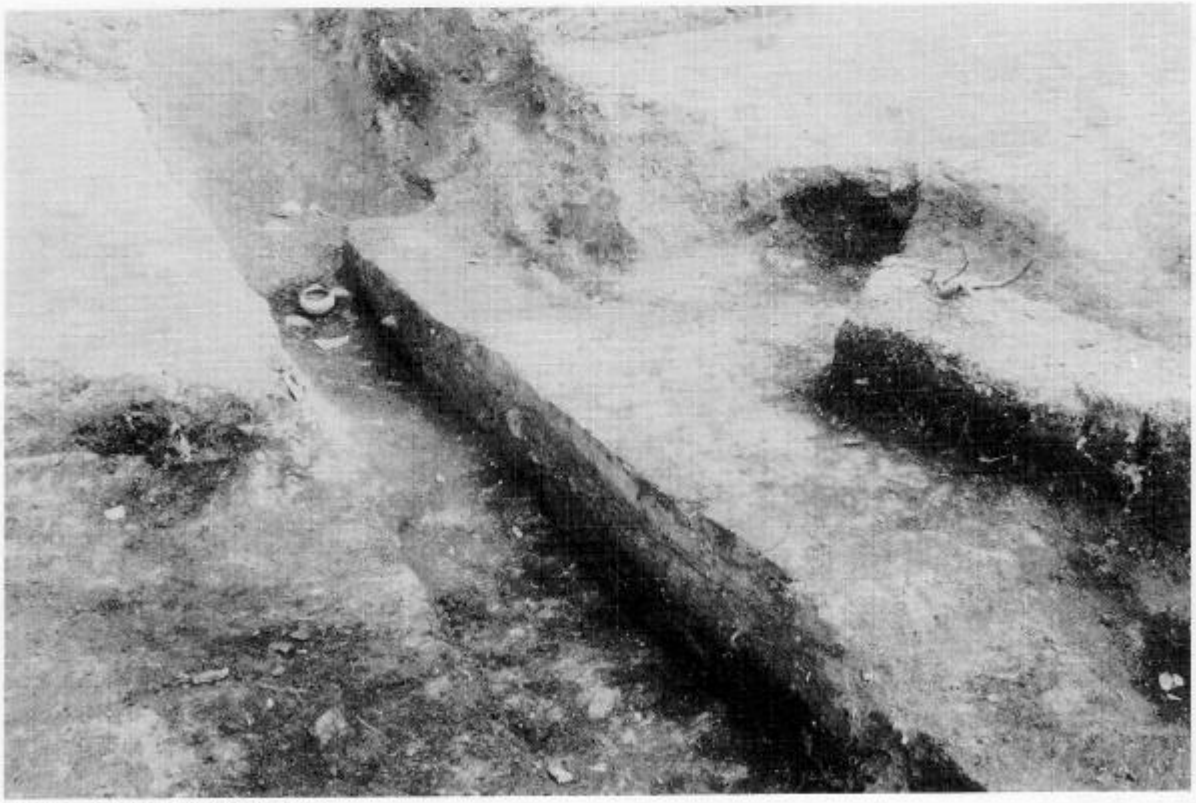
SJ102　窯体、灰原（L10面）（南→）



SJ102　壁体架構想定（南→）

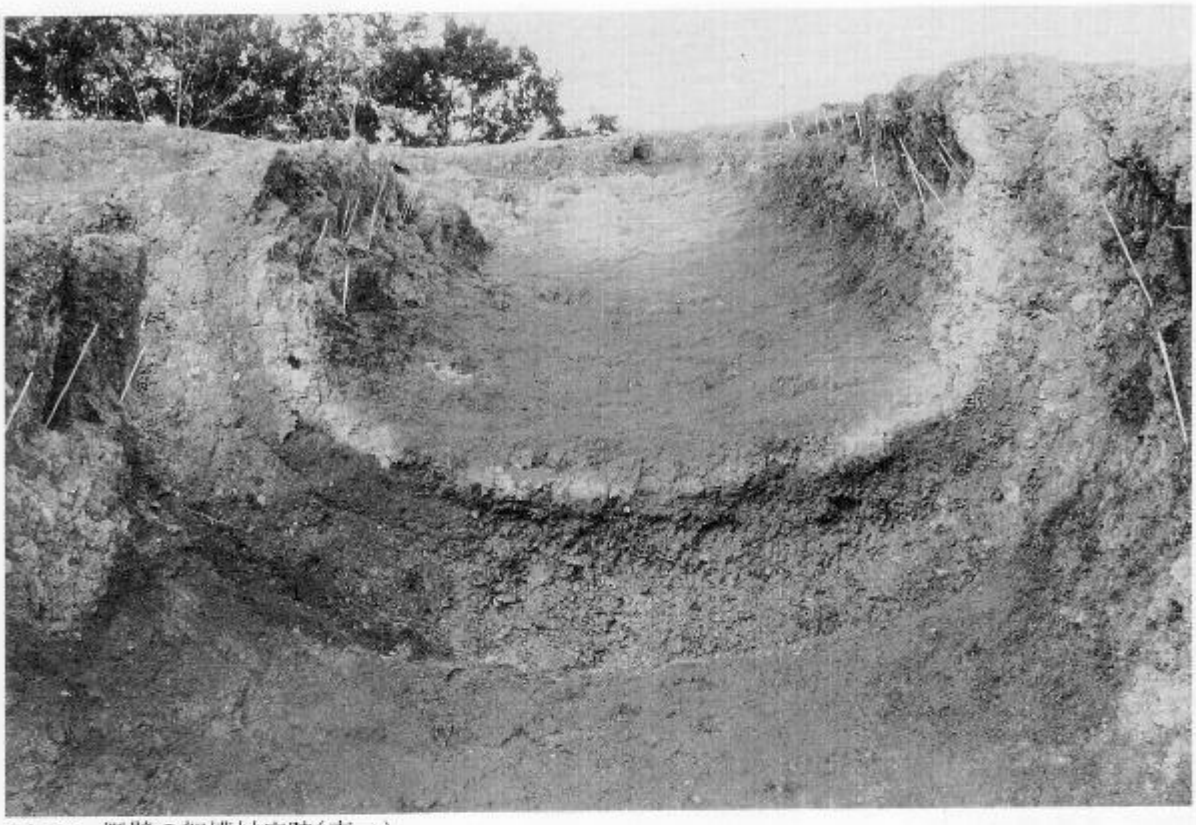


SJ102　土層(南→)

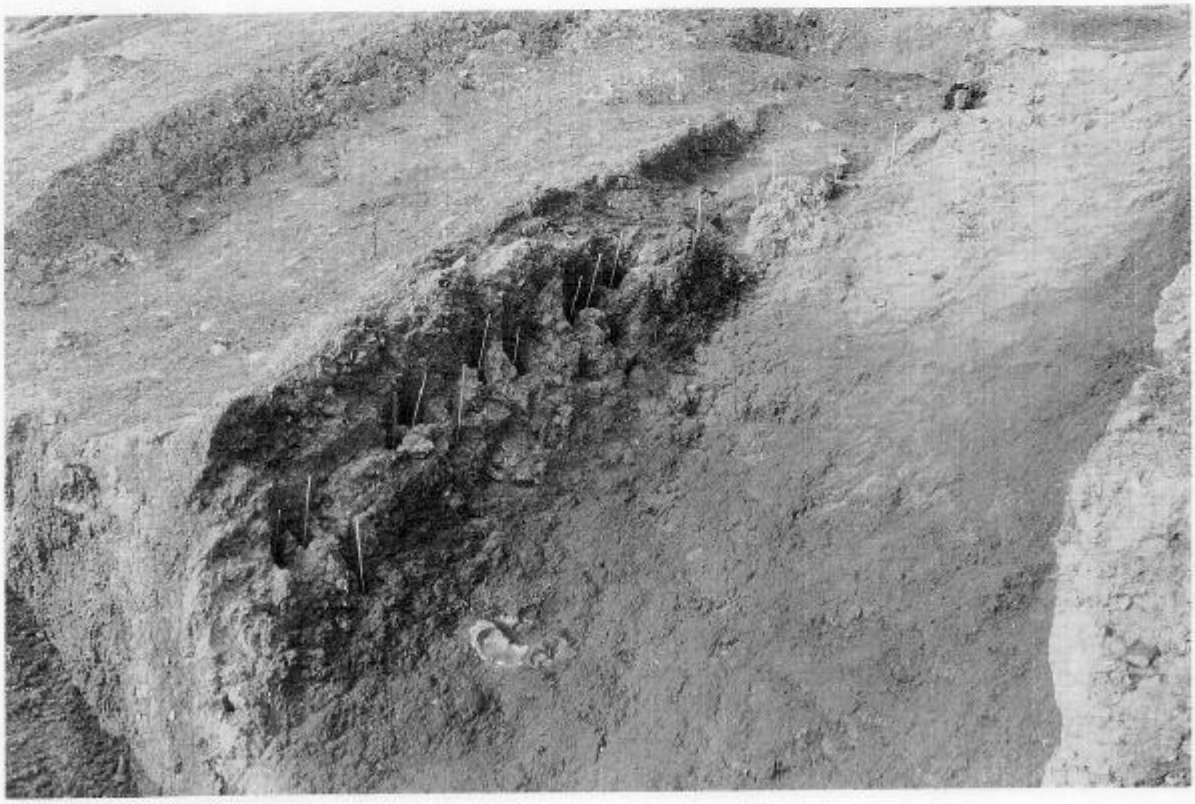


SJ102　前庭部土層(南西→)

図版28



SJ102　側壁の架構材痕跡（南→）



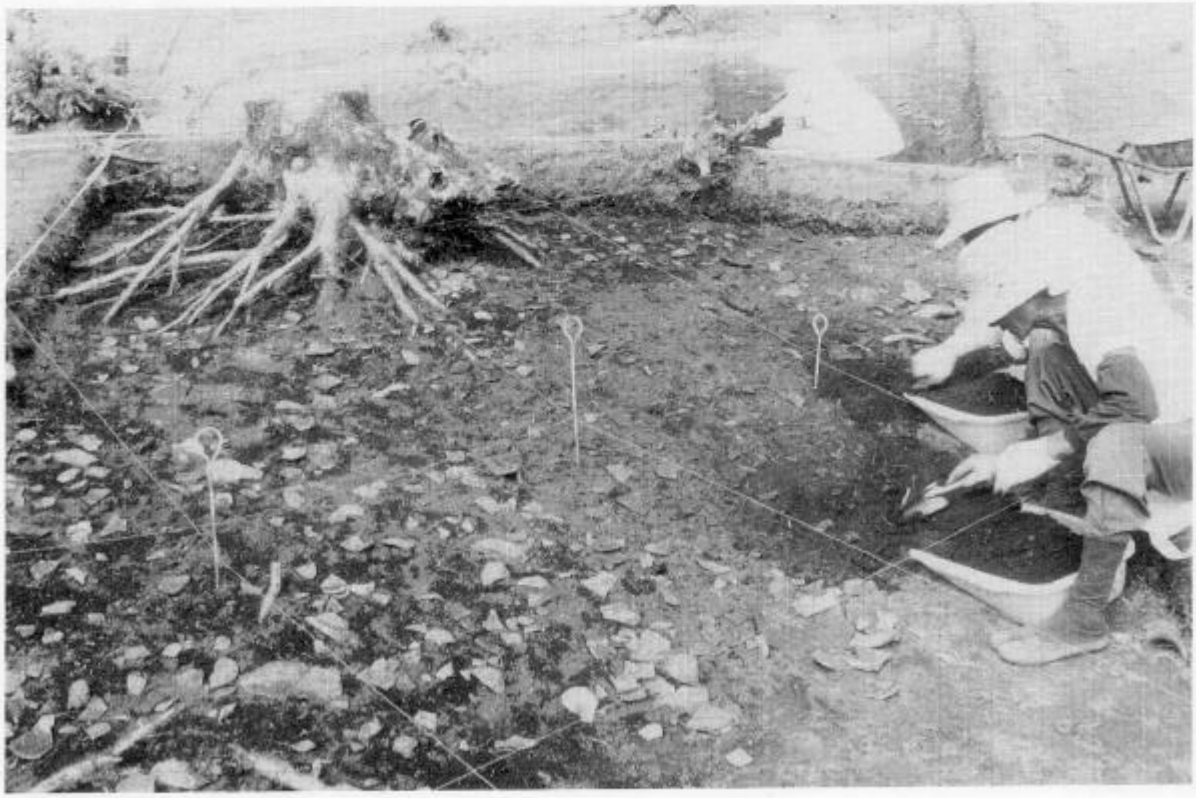
同上（南東→）

灰原遺物出土状況(13L14、L8面)(南西→)

同上(南→)

図版30

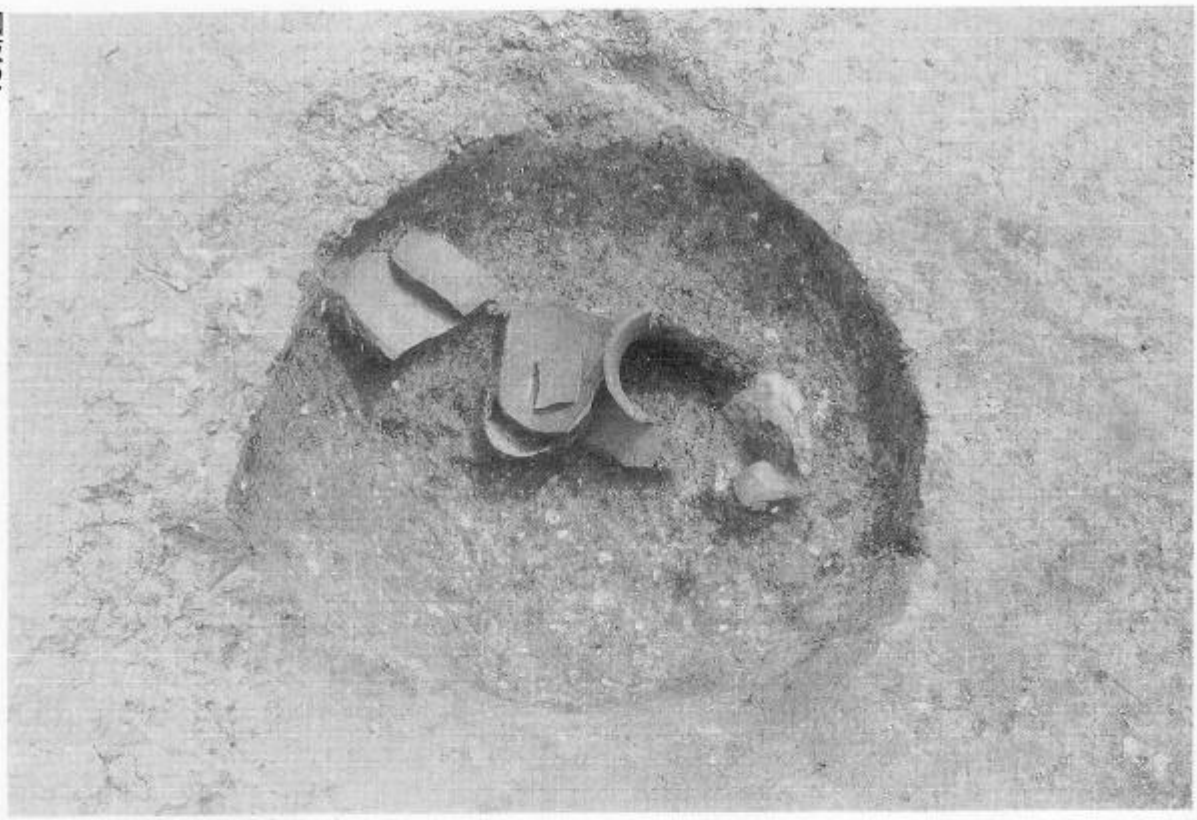
灰原遺物出土状況(13L10、L13面)(南西→)



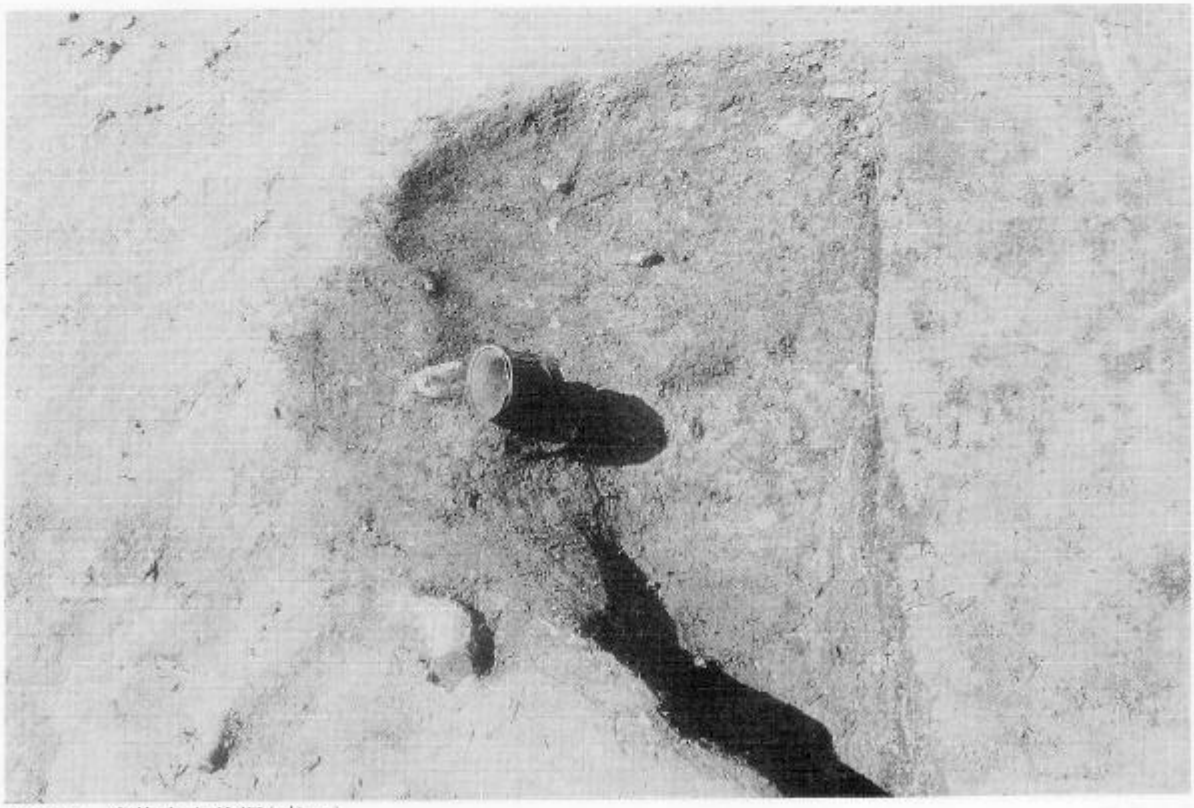
調査風景

調査風景

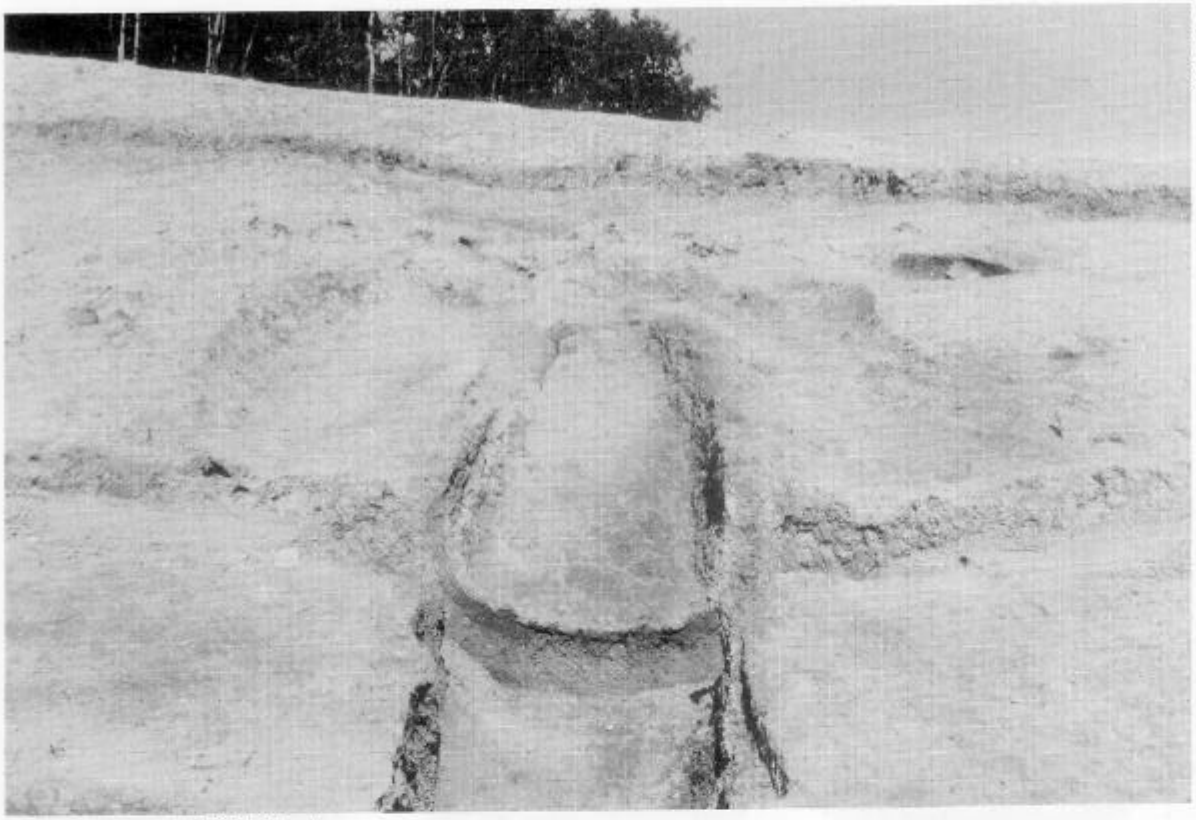
調査風景



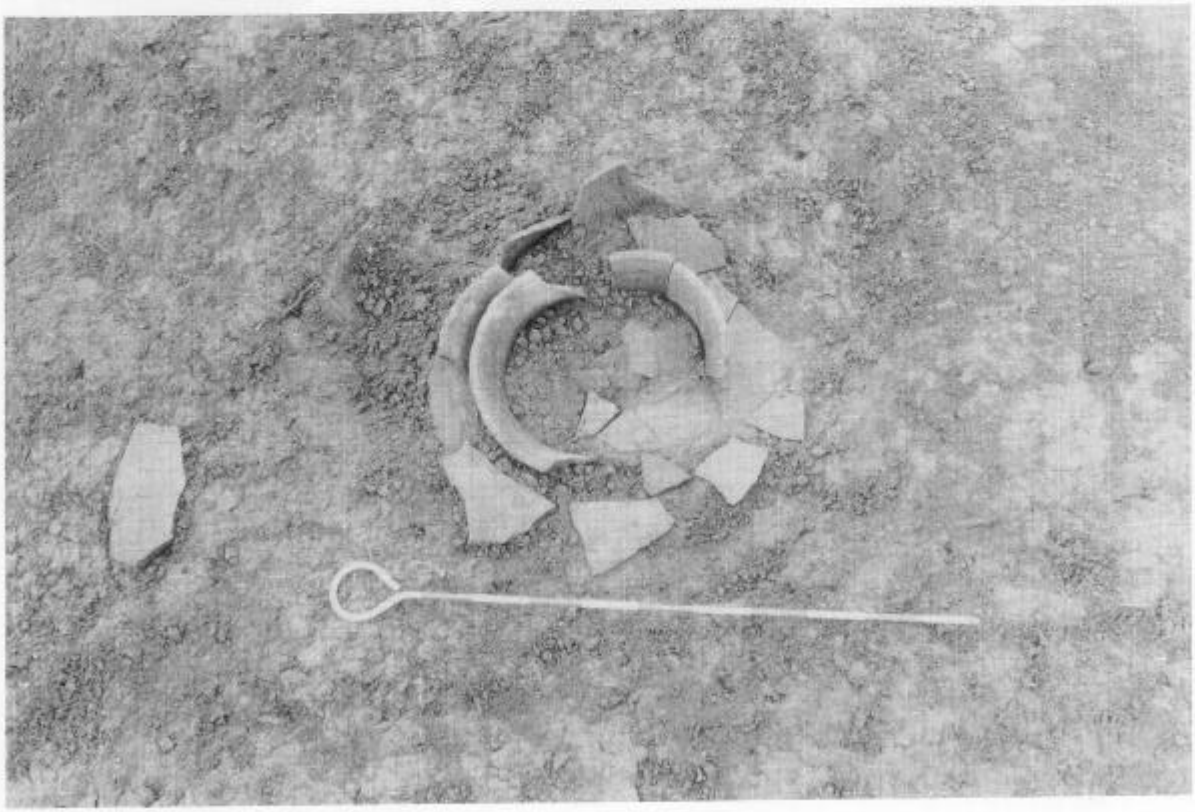
SK103　遺物出土状況(西→)



SK105　遺物出土状況(東→)

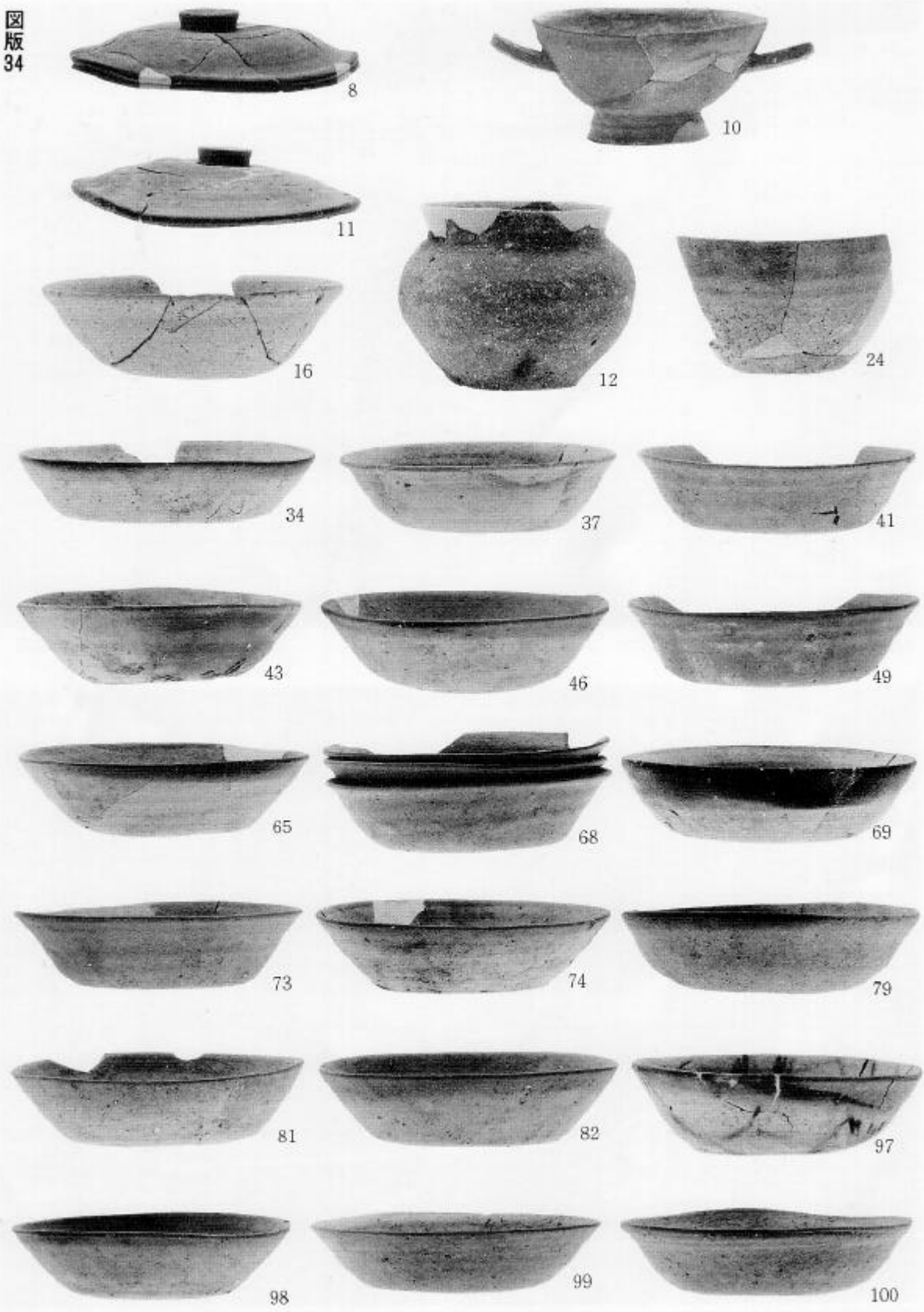


SJ102、SD104　完掘(南→)

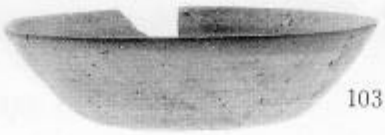


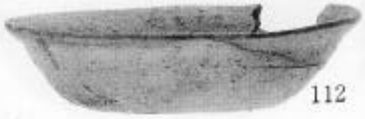
遺物出土状況(13K09)(東→)

図版34



102


103


112

115

122

126

131

132

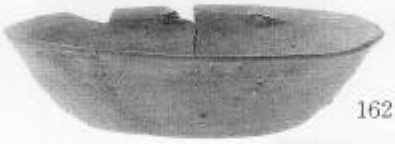
136

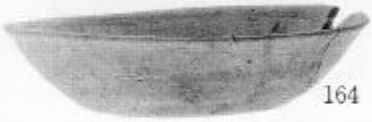
152

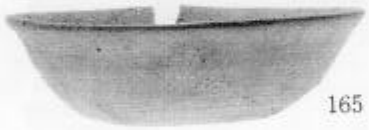
154

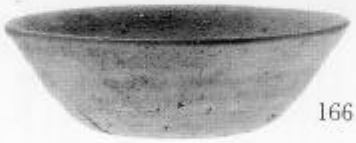
158

160


162

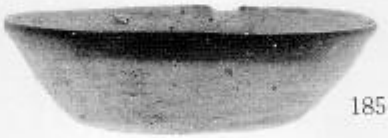

164


165


166

167

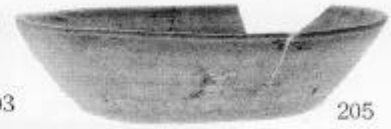
173

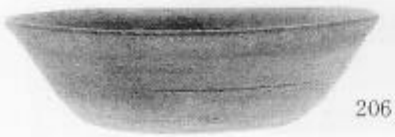

185

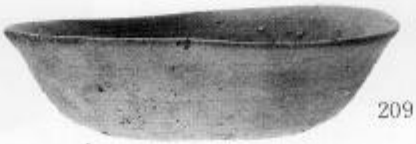
192

196

203

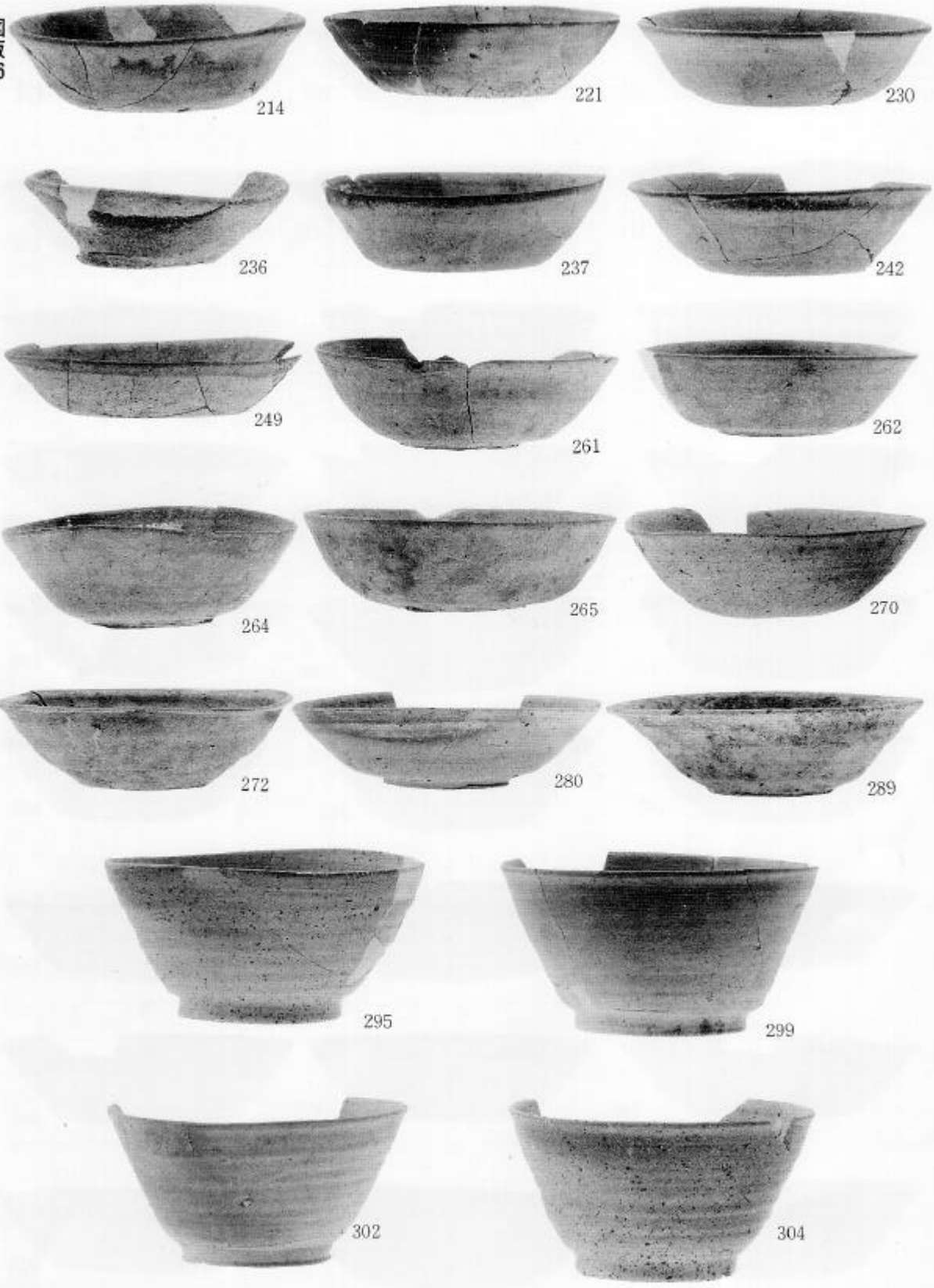

205


206


209

213

図版36


214
221
230
236
237
242
249
261
262
264
265
270
272
280
289
295
299
302
304

310

311

313

315

317

321

326

334

335

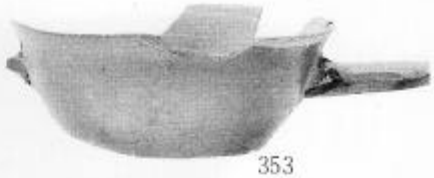
336

340

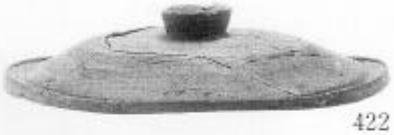
346

図版38

352


353

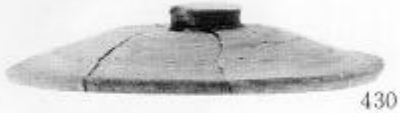
355


422

425

427

428


430

431

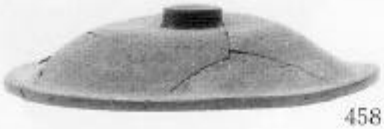
433

446

448

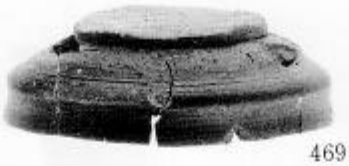
450

451


458

460

464


469

469

470

465

470

554

555

565

556

560

561

471

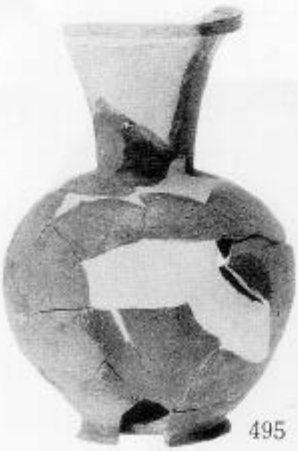
472

473

474

475

485


495

496

497

図版40

498

506

507

509

513

515

520

522

523

525

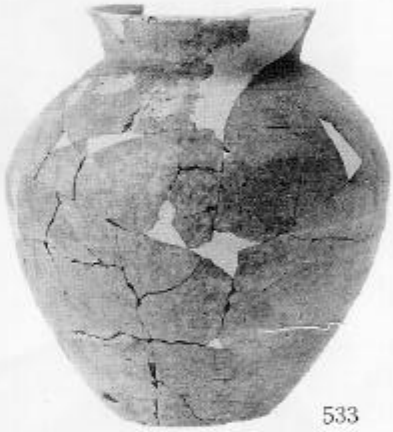
528

526

530

531

532


533

535

539

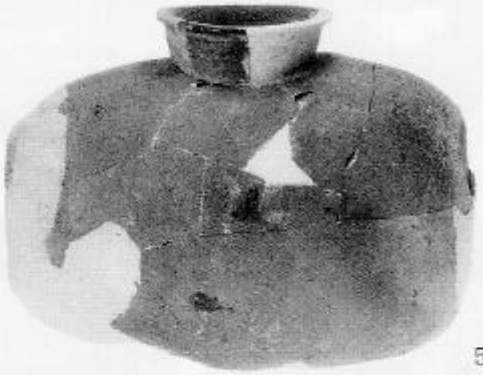
541

図版42

549

551

579



582

588

592

秋田県文化財調査報告書第220集

秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

－富ケ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡　田久保下遺跡　富ケ沢１号～４号塚－
（第二分冊）

1992・3

秋田県教育委員会

秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

－富ケ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡 田久保下遺跡 富ケ沢１号～４号塚－
（第二分冊）

１９９２・３

秋田県教育委員会

例　言

1　本報告書は、秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る富ヶ沢Ａ窯跡、富ヶ沢Ｂ窯跡、富ヶ沢Ｃ窯跡、田久保下遺跡、富ヶ沢１号塚、富ヶ沢２号塚、富ヶ沢３号塚、富ヶ沢４号塚の８遺跡の報告書であり、本書は２分冊のうちの第２分冊である。

2　本報告書に先立って、調査成果の一部を公表しているが、本報告書の内容がそれらに優先する。

3　第２分冊Ⅶ考察第１章自然科学的分析は、次の方、機関に依頼した。（依頼順、敬称略）

火山灰分析・材同定……パリノ・サーヴェイ株式会社

残存脂肪の分析……株式会社ズコーシャ総合科学研究所

鉄製品の分析……新日本製鉄株式会社八幡製鉄所ＴＡＣセンター

同社中央研究本部八幡技術研究部　大澤正己

須恵器の産地同定……奈良教育大学　三辻利一

黒曜石遺物の石材産地同定……京都大学原子炉実験所　藁科哲男

考古地磁気……秋田大学鉱山学部　西谷忠師

4　富ヶ沢Ｂ窯跡で出土した文字資料については、国立歴史民俗博物館教授平川南氏に釈文をお願いした。

5　田久保下遺跡出土の陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏に鑑定をお願いした。

6　田久保下遺跡出土の柄付刀子のＸ線写真は、後藤内科医院（仙北町）のご協力による。

7　本報告書で使用している土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠している。

8　本報告書で使用した遺跡位置図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1及び25,000分の1地形図、横手市発行の1,000分の1都市計画図である。

9　調査ならびに本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・助言を賜った。（敬称略）

石橋孝夫　上野秀一　宇部則保　大島秀俊　大谷敏三　大沼忠春　菊池徹夫　越田賢一郎
後藤眞暎　小林義孝　小松正夫　斎藤實　澤谷敬　鈴木俊男　高橋與右衛門　武末純一
千代肇　中村浩　長沼孝　野村崇　長谷部一弘　日野久　平川善祥　冨加見泰彦
藤丸詔八郎　船木義勝　三木弘　右代啓視　宮宏明　村田健二（50音順）

10　本報告書の執筆は、桜田隆、柴田陽一郎、小畑巌、高橋学があたり、各分担ついては目次の項に明示してある。編集は、桜田、高橋があたり、石川真一、小山内透の協力を得た。

11　調査に係わる全ての資料は、秋田県埋蔵文化財センターが現在保管している。

凡　例

1　本報告書に掲載してある遺構実測図に付した方位は、磁北を示す。

2　遺構実測図の縮尺は、1／40、1／50、1／60を原則とし、遺構配置図は、田久保下遺跡1／300、その他は1／600であり、それぞれスケールを付している。

3　遺物実測図は基本的に1／3であるが、大型の甕・壺類などは1／4としている。遺物の写真は縮尺不同である。

4　個々の遺物実測図は、各遺跡毎に種別・器種を問わず一連の番号を付し、写真図版の番号とも対応する。

5　土層註記は、基本層位にローマ数字を用い、遺構堆積土（埋土）にはアラビア数字を用いた。

6　遺構番号は、富ヶ沢A窯跡：01～、富ヶ沢B窯跡：101～、富ヶ沢C窯跡：201～、田久保下遺跡：301～を用い、それぞれ検出順に連番としたが、精査過程において欠番となったものもある。

7　出土した土器には、稀に文字等の認められる資料がある。いわゆる墨書土器を除けば、器面に篦状あるいは釘状工具を用いて刻している。土器を観察すると焼成以前に刻されたものと、焼成後に刻されたものが存在する。本書ではこれを区別するために、次のように定義しておきたい。

篦書土器：土器の焼成前に篦状あるいは釘状工具を用い文字・記号等を器面に刻した土器

刻書土器：土器の焼成後に釘状工具等を用い文字・記号等を器面に刻した土器

8　遺構の種別を表す略号は下記の通りである。

ＳＢ……掘立柱建物跡　　ＳＤ……溝状遺構

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＪ……窯跡（須恵器窯、平窯、炭窯）

ＳＫ……土壙墓、土坑　　ＳＫＦ……フラスコ状土坑

ＳＮ……焼土遺構

9　挿図中に使用したスクリーントーンは、次の通りである。

10　遺物重量計測及び個体数算出について

須恵器窯跡及び灰原出土の遺物は、その出土全量を対象に次の要領で重量計測及び個体数の算出を行った。これは、富ヶ沢A～C窯跡では窯と灰原の全域を調査できたことを受け、

その窯で焼成された土器の器種組成やその数量を推定するための１手段とすべく実施したものである。

重量計測に際して、その器種を、坏類、蓋類、壺類、甕類に大別した。坏類には、坏、高台付坏が、蓋類には、坏蓋、壺蓋などが含まれる。壺類と甕類は、破片では特にその識別は困難である場合が多いので、胴部資料については、外面に最終調整としての叩き目を残す破片を甕類、ロクロあるいはケズリ調整の破片を壺類として分け、計測した。従って壺類の中には、叩き目を有しない小・中型の甕が含まれることになる。また甕類には叩き目を持つ横瓶が含まれる。以下報告において、重量についての項目では、上のような分類基準であることをお含みおきいただきたい。

個体数は、坏類、壺類は、底部が1／2以上残存している個体、蓋類はつまみの個数、甕類は口縁部がおおよそ1／2以上残存しているものをそれぞれ１個体として数えている。

11　遺物実測図と観察表について

本報告書には、出土した遺物をできるだけ多く掲載したいと考え、個々の遺物の説明は、原則的には行っていない。代わりに器種別に分類基準を設け、その記号と、法量を実測図下の観察表でまとめた。分類基準は、Ⅶ考察の節（ｐ495～497）で示してある。

観察表中における口径あるいは器高の項の〔　〕は推定値、（　）は現状値であることを示す。また備考欄の「写」は掲載図が写真図版にもあることを示し、右隅の番号は、遺物計測・実測時の整理番号であり、収蔵用の番号でもある。

遺物実測の基準は、特殊な個体等は例外として、富ヶ沢Ｂ窯跡では、個体のおよそ2／3以上残存しているもの、その他の窯跡（遺跡）では1／2以上残存の個体を選別し、割り当て紙数、遺構、層位を加味して実測、掲載することとした。Ｂ窯跡以外はその残存率を、完形、2／3、1／2、破片（蓋はつまみ）の大ざっぱに類別して記載してある。

総　目　次

（第１分冊）

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

Ⅰ　序論

第１章　はじめに……1

第２章　遺跡群の立地と環境……4

第３章　発掘調査の概要……12

Ⅱ　富ヶ沢Ａ窯跡

第１章　発掘調査の概要……21

第２章　調査の記録……24

第３章　小結……66

Ⅲ　富ヶ沢Ｂ窯跡

第１章　発掘調査の概要……87

第２章　調査の記録……90

第３章　小結……168

（第２分冊）

例言

凡例

目次

Ⅳ　富ヶ沢Ｃ窯跡

第１章　発掘調査の概要……207

第２章　調査の記録……210

第３章　小結 …… 236

Ⅴ　田久保下遺跡

第１章　発掘調査の概要 …… 253

第２章　調査の記録 …… 256

第３章　小結 …… 345

Ⅵ　富ヶ沢１号～４号塚

第１章　発掘調査の概要 …… 389

第２章　調査の記録 …… 391

第３章　小結 …… 402

Ⅶ　考　察

第１章　自然科学的分析調査 …… 417

第２章　考古学的分析調査 …… 487

第３章　まとめ …… 503

第２分冊目次

Ⅳ　富ヶ沢Ｃ窯跡

第１章　発掘調査の概要 …… （桜田） ……207

第１節　遺跡の概観 …… 207

第２節　調査の方法と経過 …… 207

第２章　調査の記録 …… （高橋） ……210

第１節　検出遺構と遺物 …… 210

１　平安時代の遺構と遺物 …… 210

（１）　須恵器窯跡 …… 210

（２）　竪穴住居跡 …… 215

（３）　土坑 …… 217

（４）　炭化物（材）集積遺構 …… 218

（５）　柱穴群 …… 220

第２節　遺構外出土の遺物 …… 235
1　縄文時代の遺物 …… 235
2　平安時代の遺物 …… 235
第３章　小結 …… （高橋） ……236
図版43～56

Ⅴ　田久保下遺跡
第１章　発掘調査の概要 …… （桜田） ……253
第１節　遺跡の概観 …… 253
第２節　調査の方法と経過 …… 253
第２章　調査の記録 …… 256
第１節　検出遺構と遺物 …… 256
1　古墳時代の遺構と遺物 …… （高橋） ……256
（１）　土壙墓 …… 256
2　平安時代の遺構と遺物 …… 275
（１）　須恵器窯跡 …… （桜田・小畑・高橋） ……275
（２）　平窯跡 …… （高橋） ……286
（３）　炭窯跡 …… （高橋） ……291
（４）　竪穴住居跡 …… （桜田・小畑・高橋） ……296
（５）　掘立柱建物跡 …… （桜田・高橋） ……317
（６）　土坑 …… 324
（７）　焼土遺構 …… 325
（８）　粘土採掘坑 …… （桜田） ……336
（９）　柱穴様ピット …… （高橋） ……336
第２節　遺構外出土の遺物 …… 338
1　縄文時代の遺物 …… （高橋） ……338
2　平安時代の遺物 …… 338
3　近・現代の遺物 …… （柴田） ……338
第３章　小結 …… （高橋・柴田） ……345
図版57～96

Ⅵ　富ヶ沢１号～４号塚

第１章　発掘調査の概要 …… （桜田） ……389

　第１節　遺跡の概観 …… 389

　第２節　調査の方法と経過 …… 389

第２章　調査の記録 …… 391

　第１節　富ヶ沢１号塚 …… （柴田） ……391

　第２節　富ヶ沢２号塚 …… （桜田） ……395

　第３節　富ヶ沢３号塚 …… 397

　第４節　富ヶ沢４号塚 …… 397

第３章　小結 …… （桜田・柴田） ……402

図版97～106

Ⅶ　考　察

第１章　自然科学的分析調査 …… 417

　第１節　火山灰分析・材同定調査 …… 417

　第２節　残存脂肪の分析調査 …… 429

　第３節　鉄製品の金属学的調査 …… 443

　第４節　須恵器の理化学的調査 …… 467

　第５節　黒曜石遺物の石材産地分析 …… 473

　第６節　考古地磁気調査 …… 481

第２章　考古学的分析調査 …… （高橋） ……487

　第１節　古墳時代 …… 487

　　１　土壙墓と出土遺物 …… 487

　第２節　平安時代 …… 493

　　１　検出遺構 …… 493

　　２　出土遺物 …… 494

第３章　まとめ …… （高橋） ……503

Ⅳ　富ケ沢C窯跡

第１章　発掘調査の概要

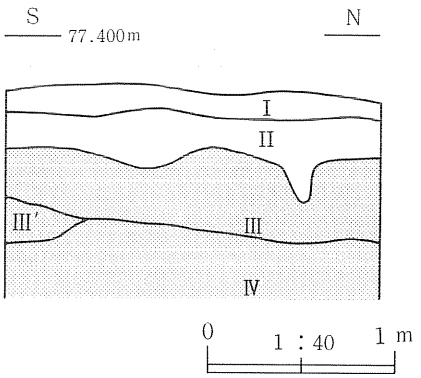
第１節　遺跡の概観

富ヶ沢Ｃ窯跡は、「秋田ふるさと村」建設予定地内に北側から入り込む２本の自然谷のうち、西側に延びる自然谷の東向き斜面に位置し、自然谷を挟んで富ヶ沢Ｂ窯跡の対岸にあたる。

調査区は標高70～83ｍの斜面であるが、70ｍから75ｍまでは緩やかな斜面、75ｍから83ｍまでが急斜面となっている。窯体は急斜面の中腹に構築され、灰原も急斜面に形成されている。

遺跡の基本層位は、ＳＪ201焚口南側14W10グリッド西壁で観察しており、次のようになる。

第Ⅰ層：褐色土（10YR4/4）表土層、第Ⅱ層：暗褐色土（10YR3/4）、第Ⅲ層：明黄褐色土（10YR6/6）粘土層、同層以下が地山、第Ⅲ′層：にぶい黄橙色土（10YR6/4）粘土層、第Ⅳ層：灰白色土（10YR8/2）粘土層。第Ⅲ層は、場所によっては明褐色（7.5YR5/8）の赤みの強い粘土層であったり、褐色（7.5YR4/6）の赤黒い色調の粘土層もあり、一様ではない。また窯跡の位置する斜面では第Ⅱ層を観察できない箇所もあり、表土の下が地山となっている。



第118図　遺跡基本土層図

第２節　調査の方法と経過

ふるさと村建設工事用の杭が20m方眼に打設されているので、調査はこの杭をそのまま大グリッド杭に利用することにした。この20ｍ×20ｍの大グリッドの中に４ｍ×４ｍの中グリッドを設定した。遺物の取り上げは、このグリッドを基準に行うこととした。灰原出土の遺物は、表面から剝土して遺物が面的に出土したところで１点ずつ平面的位置とレベルを記録し収納した。

調査は、須恵器窯体部の構築法を明らかにすることとともに、灰原の広がりとその遺物の出土状況を記録することにより、遺物の時間的な移り変わりをとらえることを目的とした。そこ

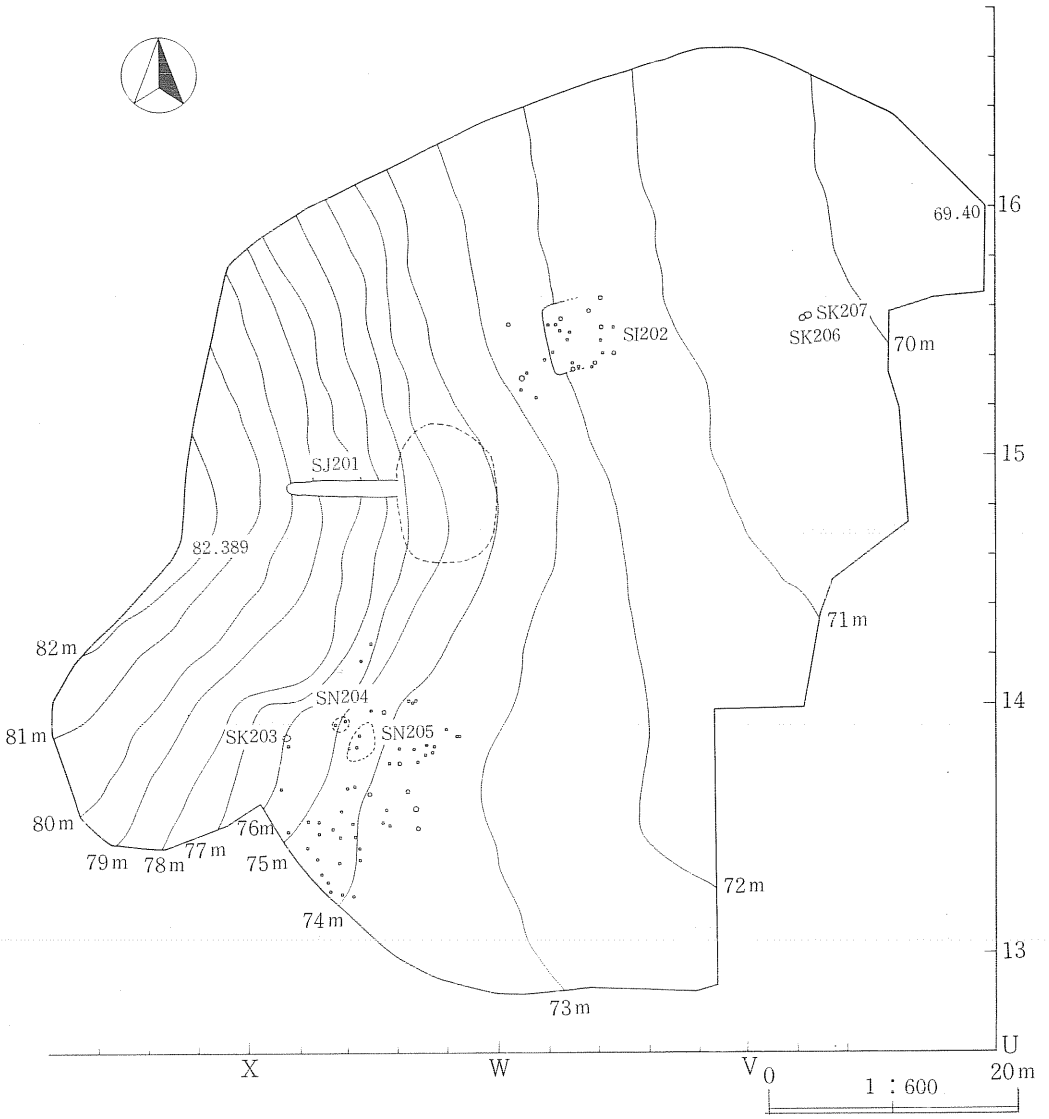
で、窯体部の図上での復元を容易にするため、土層観察用ベルトをなるべく多く設定した。また、半地下式構造の窯の場合、天井部の架構方法に不明な点が多いので、天井部架構材と側壁の構築方法の精査に慎重を期した。

調査の記録は、図面の作成と写真による記録を行った。作成図面の縮尺は、20分の１ないし10分の１としたが、須恵器窯跡の調査前の地形測量図は50分の１で行った。

調査は、概ね以下のような経過で行われた。

５月９日に発掘調査前の遺跡の全景写真を撮影した。発掘用機材を搬入するための道路がないため、15日まで原因者の工事として調査用仮設道路を建設してもらい、その後機材を搬入した。25日から調査予定区内の下草と伐採された枝葉の撤去作業を開始した。28日から建設工事用の杭Ｎｏ.23ラインを基準線として南北に10ｍ間隔で地形測量用の杭を打設した。６月１日にＢＭ５からレベル原点を移動した。４日から斜面下の平坦面にトレンチを設定し掘り下げた。窯跡部分の現況写真撮影のためタワーを建設し、５日に撮影した。６日から範囲確認トレンチを掘り返して窯体の位置を確認した。窯体（ＳＪ201）は、天井部が崩落しているが完全に埋まりきらず溝状に残り、灰原部分は幾らか盛り上がっていた。調査前の現況地形測量（20cm等高線、縮尺1/50）を開始（７日まで）。18日にＳＪ201窯の窯体に土層観察用ベルトを縦断面用１本、横断面用は１ｍ間隔で設定し、粗掘りを開始した。表土層を５cm掘り下げると窯体プランが確認できた。窯体周辺からも遺物が出土した。20日に灰原部の表土除去を終了。22日に窯体確認状況と灰原の遺物出土状況を写真撮影後、窯体内の掘り下げを開始した。25日に窯体と灰原の周辺に４ｍ×４ｍのグリッド杭を打設した。28日から灰原部の遺物の実測と収納を開始した。

７月２日に13W大グリッドを粗掘りし、13W19グリッドで炭化物の広がりを２カ所検出した。３日から調査区全域で粗掘りを行い、15V大グリッドで土坑・柱穴を検出した。６日にＳＪ201窯の窯体と灰原を写真撮影した。この日、秋田大学鉱山学部の西谷忠師助教授が考古地磁気調査の事前打ち合わせのため来跡した。９日から窯体内の精査を開始した。また、ＳＩ202竪穴住居跡の精査も開始した。11日に粗掘りがほぼ終了した。ＳＪ201窯体内の土層断面実測も終了したのでベルトを撤去し、遺物の実測を始めた。14日に秋田大学鉱山学部の西谷忠師助教授らがＳＪ201窯体内の考古地磁気調査試料を採取した。16日にプラン確認でＳＫ203土坑内に「火山灰」が堆積しているのを確認し、分析用の試料を採取した。21日にＳＪ201窯の完掘写真を撮影した。23日にＳＩ202竪穴住居跡の完掘写真を撮影した。24日にＳＪ201窯の窯体断ち割りを行い、床面が１枚で掘り方がないことを確認した。８月１日に調査区全体をＢ窯跡と４号塚から写真撮影し調査を完了した。



第119図　富ヶ沢C窯跡遺構配置図

第２章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

１　平安時代の遺構と遺物

富ヶ沢Ｃ窯跡で検出された遺構は、全て平安時代に帰属すると考えられる。その遺構は、須恵器窯跡１基、竪穴住居跡１軒、土坑３基、炭化物（材）集積遺構２基、及び柱穴群である。

遺構内出土の遺物は、須恵器・土師器があり、窯内と灰原で大多数を占め、竪穴住居跡内で少量の須恵器が出土しているだけである。

（１）須恵器窯跡

ＳＪ２０１須恵器窯跡（第120～126、131～142図、図版43～50、54～56）

遺跡西側斜面、14Wグリッドで検出した。窯跡は昨年の範囲確認調査において、その存在と位置が明らかとなっていたが、現況でも窯体部分が幾分窪んでいた（第120図点線部分）。

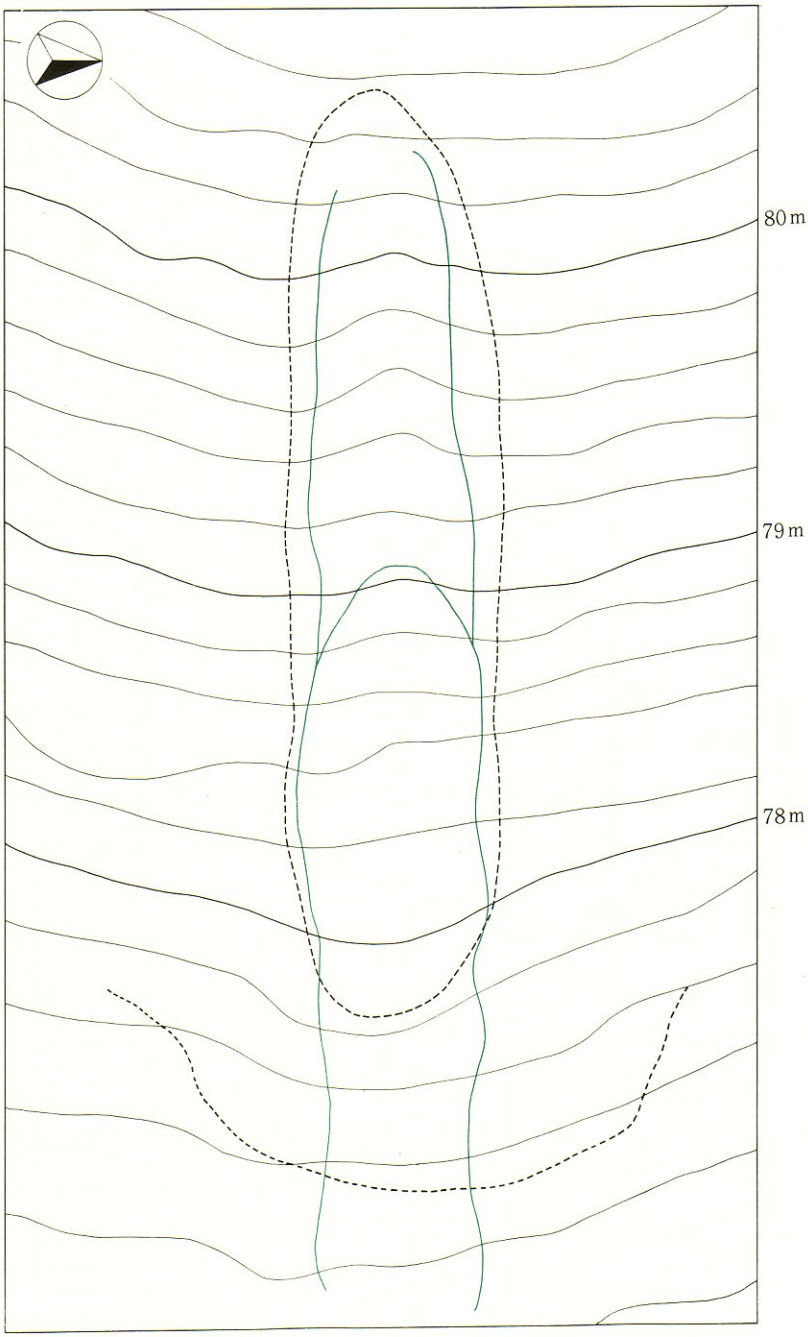
窯体は表土を５～10cm除去すると、すぐに礫混じりの地山が現れ、この面で確認できる。検出した窯体は、水平距離で9.15m、幅1.1～1.3mであるが、床面・側壁の還元状況から判断して、窯体上方部は廃棄後の雨などによる流水で地山が溝状に削られたと考えられ、確実に窯本体と言える部分は長さ5.3m（推定長６m）である。地表面から床面までの深さは焚口近くで0.65m、燃焼部で0.8mである。焚口と煙出しを結ぶ中軸線は、ちょうど東－西方向を示す。

推定される煙出部分の標高は79.1m、焚口部は77.1m、比高差２mである。床面は、焚口から約1.8m奥までは緩やかに立ち上がり、この上方は急激に角度を増し、平均25°の斜度となる。この傾斜角度の変換点が燃焼部と焼成部の境となる。なお、富ヶ沢Ｂ窯跡ＳＪ101・102などで確認しているような、焚口全面の前庭部は明確な形では検出されなかった。

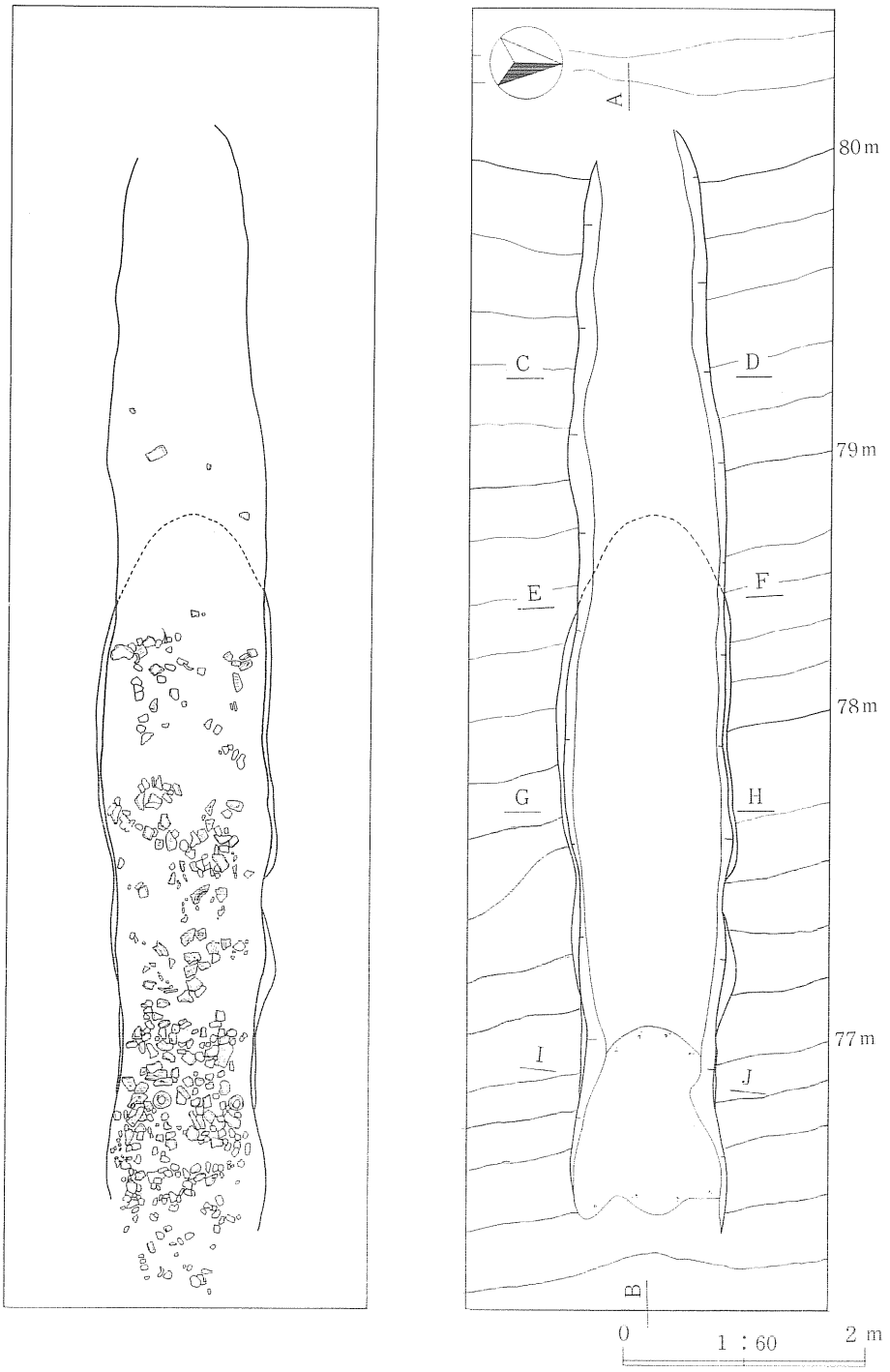
堆積土は12層に分けられる。この内、10～12層は側壁あるいは天井部からの崩落土及び焼土層であろう。これらの土には一部スサが含まれていることから、窯は半地下式の構造と考えられる。窯床面及び10～12層より400点余りの須恵器が出土している。

側壁・床面の断ち割り調査によって、還元した面は１面であることを確認した。本窯が何度火入れされたのかは不明であるが、少なくとも大掛かりな補修作業などは行っていないことになる。

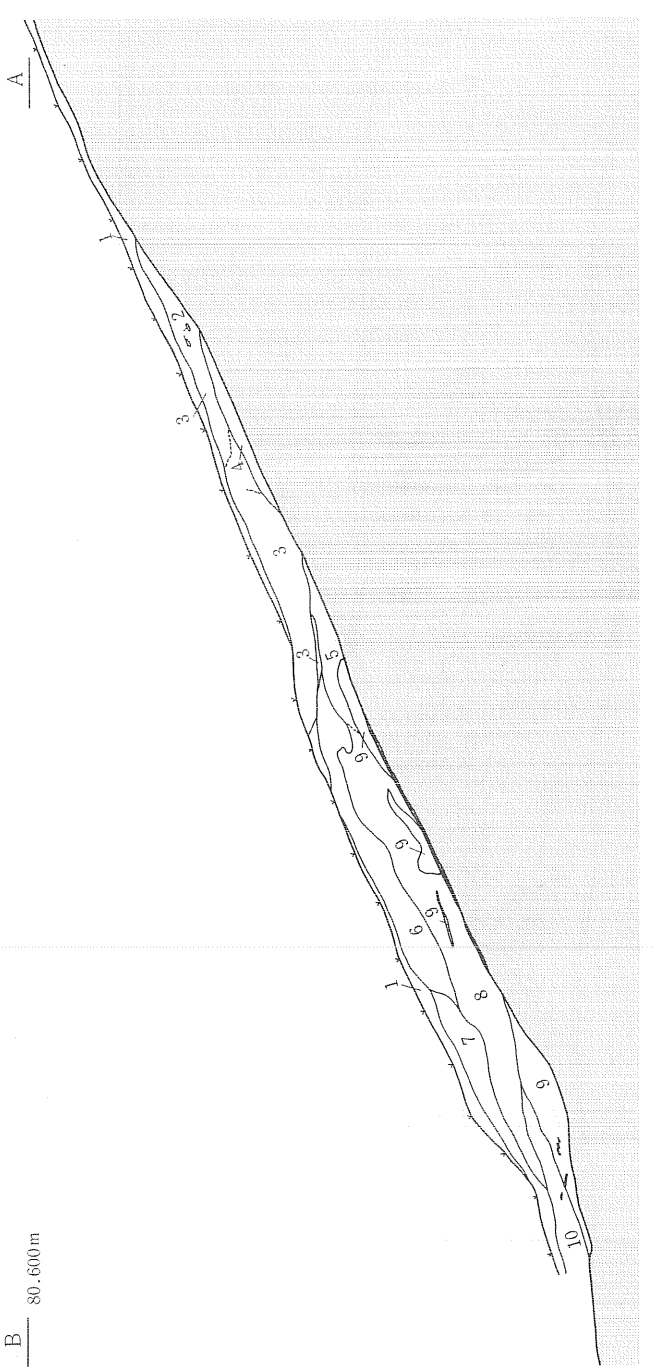
灰原は窯体東側の斜面下方に広がっている。廃棄された土器、焼土、炭化物などの広がりは南北約12m、東西約９mに及ぶ。その厚さは最厚で35cmである。２層とした灰原層下面は基本層位のⅡ層であることから、Ⅱ層上面が灰原形成時の地表面であったことが分かる。本灰原の

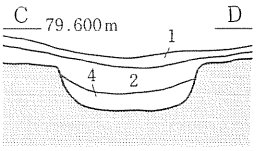


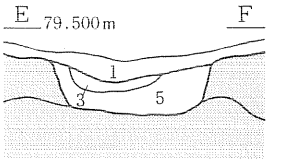
第120図　SJ 201須恵器窯跡周辺地形図（調査前）

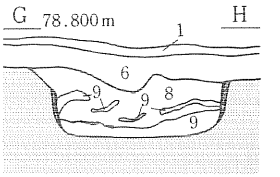


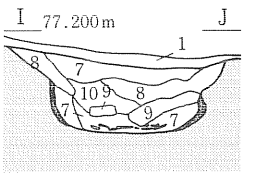
第121図　SJ201須恵器窯跡　遺物出土状況









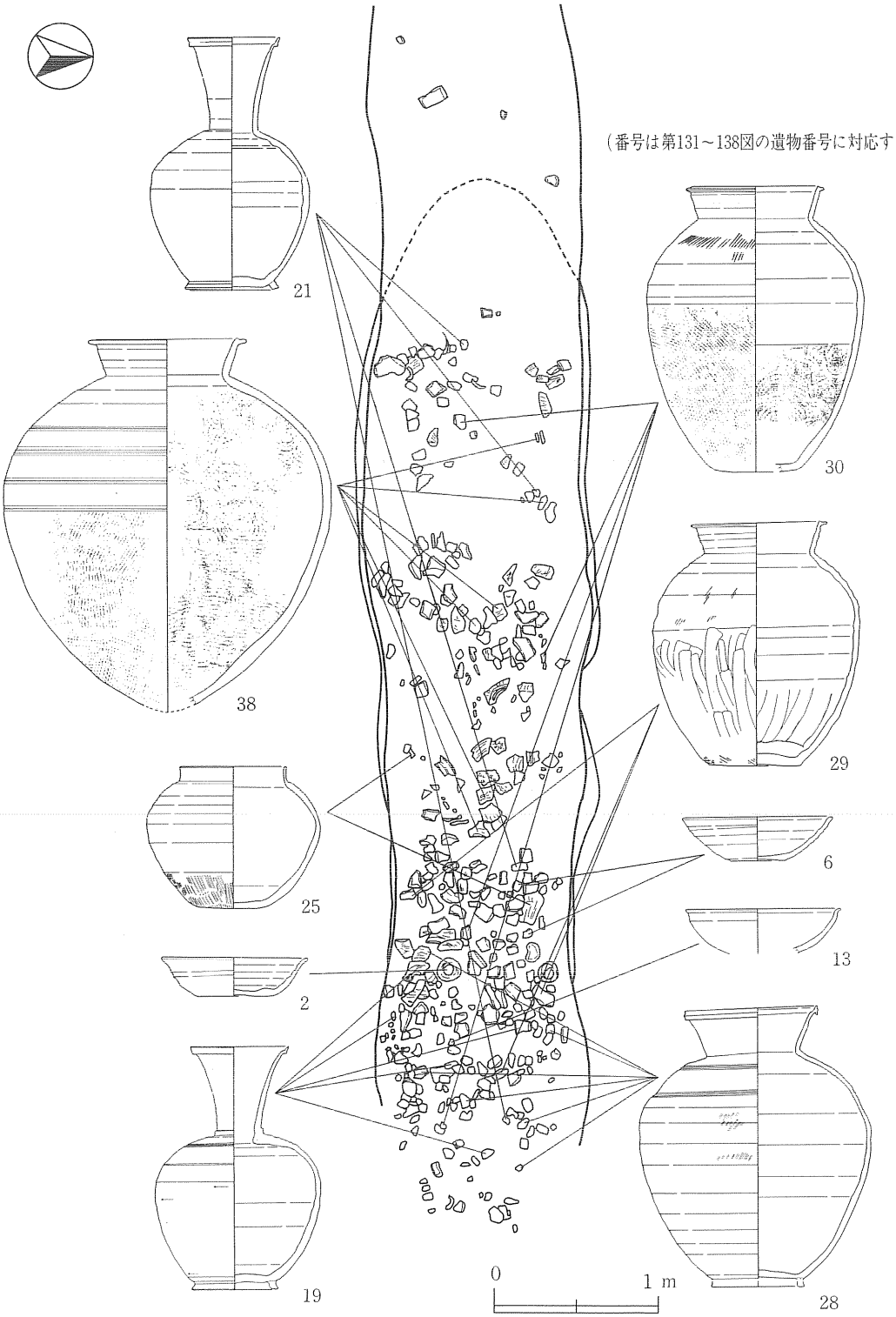


還元面

SJ201
1　表土
2　黒褐色(10YR3/2)焼土などは含まれていないようである
3　黒褐色(10YR2/2)焼土などは含まれていないようである
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)２層と同質、炭化物を含む
5　明褐色(7.5YR5/8)赤みの強い地山の再堆積土
6　黒褐色(10YR3/2)焼土などは含まれていないようである、４層よりボソボソしている
7　黒褐色(10YR2/2)焼土などは含まれていないようである
8　明黄褐色(10YR6/6)しまり、粘性ややや強、炭化物を斑状にやや多く含む
9　褐色(7.5YR4/6)焼土を主体とする層
10　明褐色(7.5YR5/6)焼土を主体とする層

0　1：60　2 m

第122図　ＳＪ201須恵器窯跡土層図



第123図　ＳＪ201須恵器窯跡遺物出土状況・接合関係図

遺物は１点あるいは１個体ずつその出土位置を記録してあり、その数3196点。分布は均一ではなく、灰原南東部分にやや集中する傾向を読み取ることができる。

灰原出土の遺物は、大多数の須恵器とごく少量の土師器である。土師器（17の小壺など）は灰原上面からの出土であり、須恵器生産に係った工人等により他所からもち込まれたと思われる。

窯内で生産され遺棄された須恵器は、その重量で見ると、総重量約185kgになる。この内甕類が全体の76.8％（約142kg）を占め、次いで壺類21.1％、坏類は全体の２％、蓋は僅かに0.1％でしかない。この数字から本窯では甕類を中心とした大型の製品を主に焼成していたと想定できる。

また凡例に示した個体数算出方法による個体数は、甕類25個体、壺類20個体、坏類26個体となり、蓋は15、16に図示した２個体のみである。甕類では、図示したものを含めて口径20cm前後、最大径が40cmを越す類似した規格性をもつ甕が７個体確認できた。坏類の底部切り離しは、ヘラ切り９、糸切り16、不明１であり、糸切りを行っている例が多い。細片を含めて観察した結果では、高台付坏は14に示した１個体のみであり、本窯では坏類に関しては無台の坏を主に生産していたことが窺われる。またＡ・Ｂ窯跡では大甕口縁部に稀に波状文の施される例があるが、本ＳＪ201では確認できなかった。横瓶もないようである。

坏類の焼成・胎土については、共通点がある。坏はその切り離しの相違に係わらず、全体に焼成があまく、灰白色系の色調を呈している。だた口径が10cm未満の猪口状の坏（11、12）と高台付坏は、焼成良好で青灰～灰色を示す。13の丸底に近いような坏は、薄手で重量感に欠け、焼成があまく、器形・胎土から土師器として製作されたものが本窯で焼成されたものかもしれない。

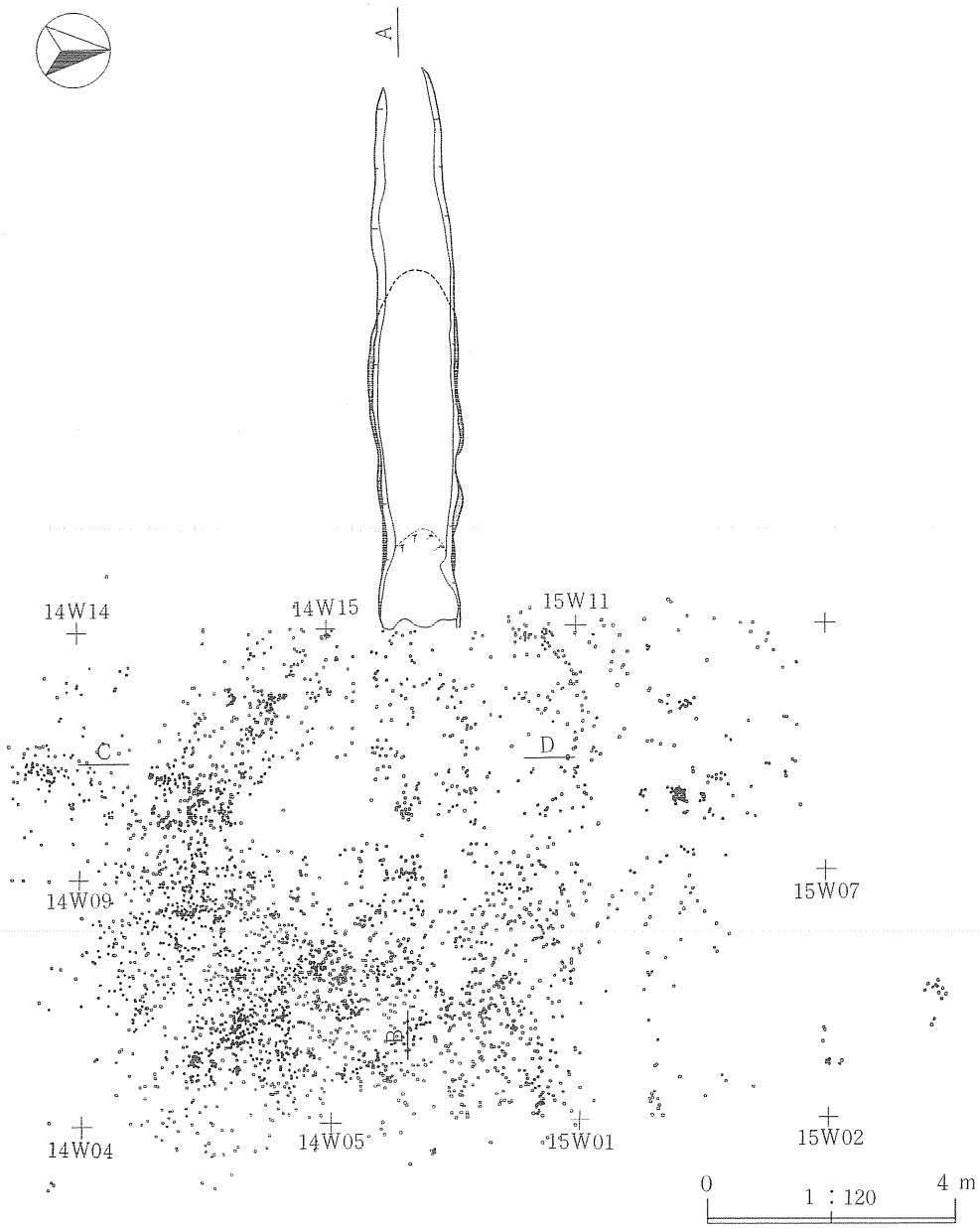
なお、第131～142図に掲載している土器実測図下の「出土位置・層位」欄には、数字とカタカナ文字の両者で示している。前者は窯内出土で、番号は遺物取り上げ時の番号である。カタカナ文字は、灰原出土でその位置を明確にするため４m四方の中グリッドを四分割し、２m四方の枠にア～ワまでの文字を当て、記している。ア～ワの区分図は第126図に示す。

（２）竪穴住居跡

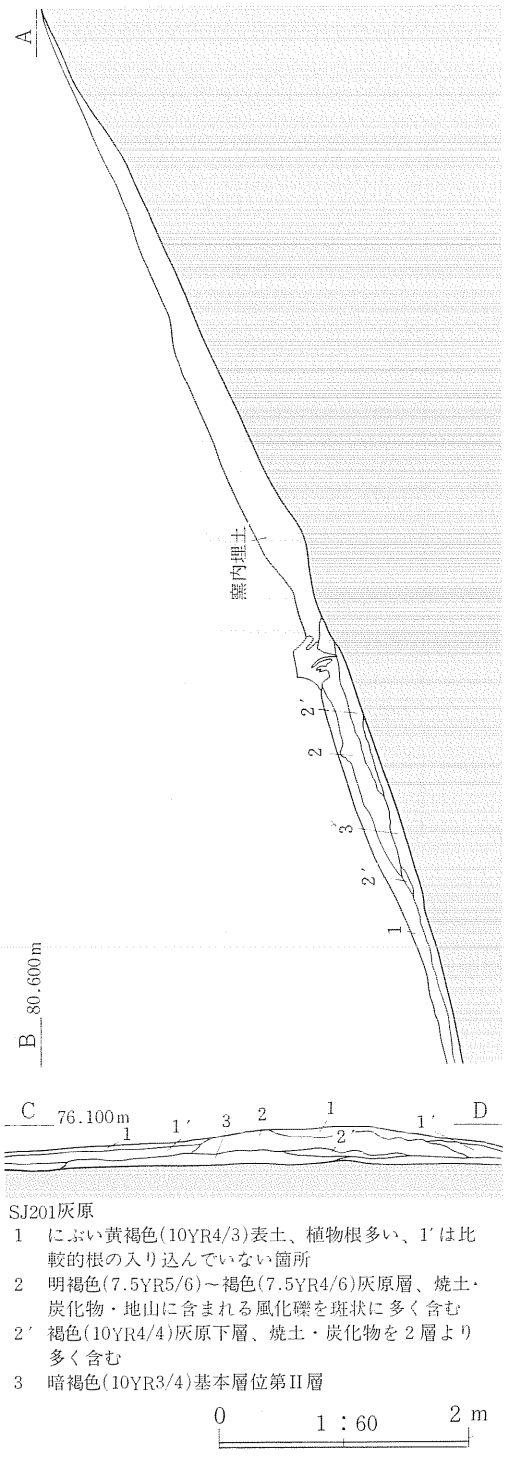
ＳＩ２０２竪穴住居跡（第127図、図版51）

遺跡中央北側、15Ｖグリッド Ⅱ層下面で検出した。ＳＪ201焚口は本住居の南西約16mに位置する。

緩斜面に立地しており、斜面下方（東側）では壁を確認できなかったが、西壁と北・南壁の一部を検出した。壁長は南北で5.6m、壁高は南西隅で0.18mである。住居内外には柱穴状ピットを22本確認しているが、床面からの深さ、配置からＰ１～４の４本が主柱穴と考えている。



第124図　ＳＪ201須恵器窯跡灰原



第125図 ＳＪ201須恵器窯跡灰原土層図

１本あたりの規模は、径30cm前後の円形を基調とし、床面からの深さは41～56cmを測る。柱穴間の距離は、Ｐ１－２間2.3m、Ｐ２－３間4.4m、Ｐ３－４間２m、Ｐ４－１間4.2mであり、南側のＰ３・４は推定される南壁に接するような位置に配されている。なお、柱穴配置から推測できる東西の長さは５m前後になる。

床面は地形に沿って緩やかに傾斜し、それほど堅く締まってはいない。カマド、焼土は確認できなかった。

遺物は埋土中より須恵器の細片が少量出土している。

（３）土坑

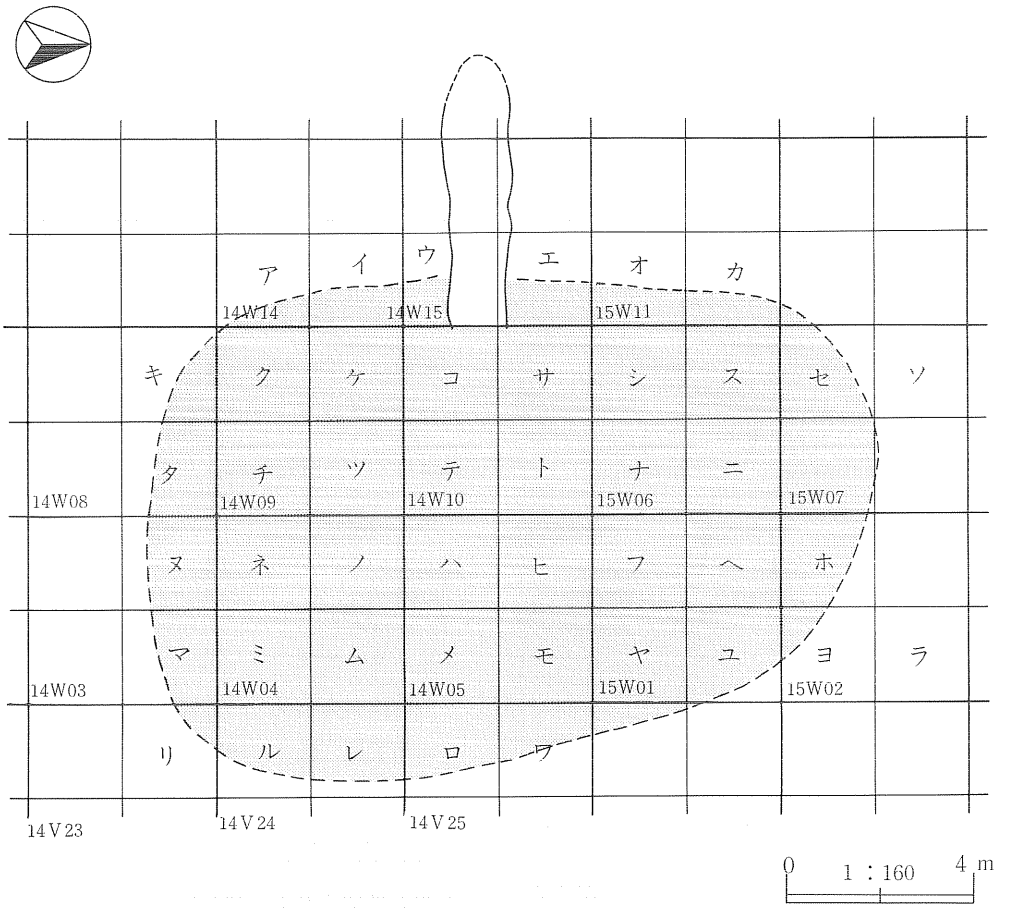
ＳＫ２０３土坑（第128図、図版52）

遺跡南西側斜面、13W25グリッド地山面で検出した。本土坑は範囲確認調査時、トレンチ壁面でその存在を確認している。

規模は長さ53cm、幅40cm前後の隅丸（長）方形と推定される。確認面からの深さは20cmである。埋土は２層に分けられ、１層は灰白色を示す火山灰純層である。最大の厚さは７cmとなる。本遺跡で火山灰が確認できるのはこの土坑のみである。遺物は出土しなかった。

ＳＫ２０６・２０７土坑（第128図、図版52）

遺跡北東側、15U18グリッド地山面で検出した。２基の土坑の重複であり、ＳＫ206がＳＫ207を切っている。ＳＫ206は、長さ60cm、幅55cmの略円形を呈し、確認面からの深さ28cm、ＳＫ207は長さ60cm以上幅58cmの楕円形を示すと思われる。両土坑



第126図　ＳＪ201須恵器窯跡灰原区分図

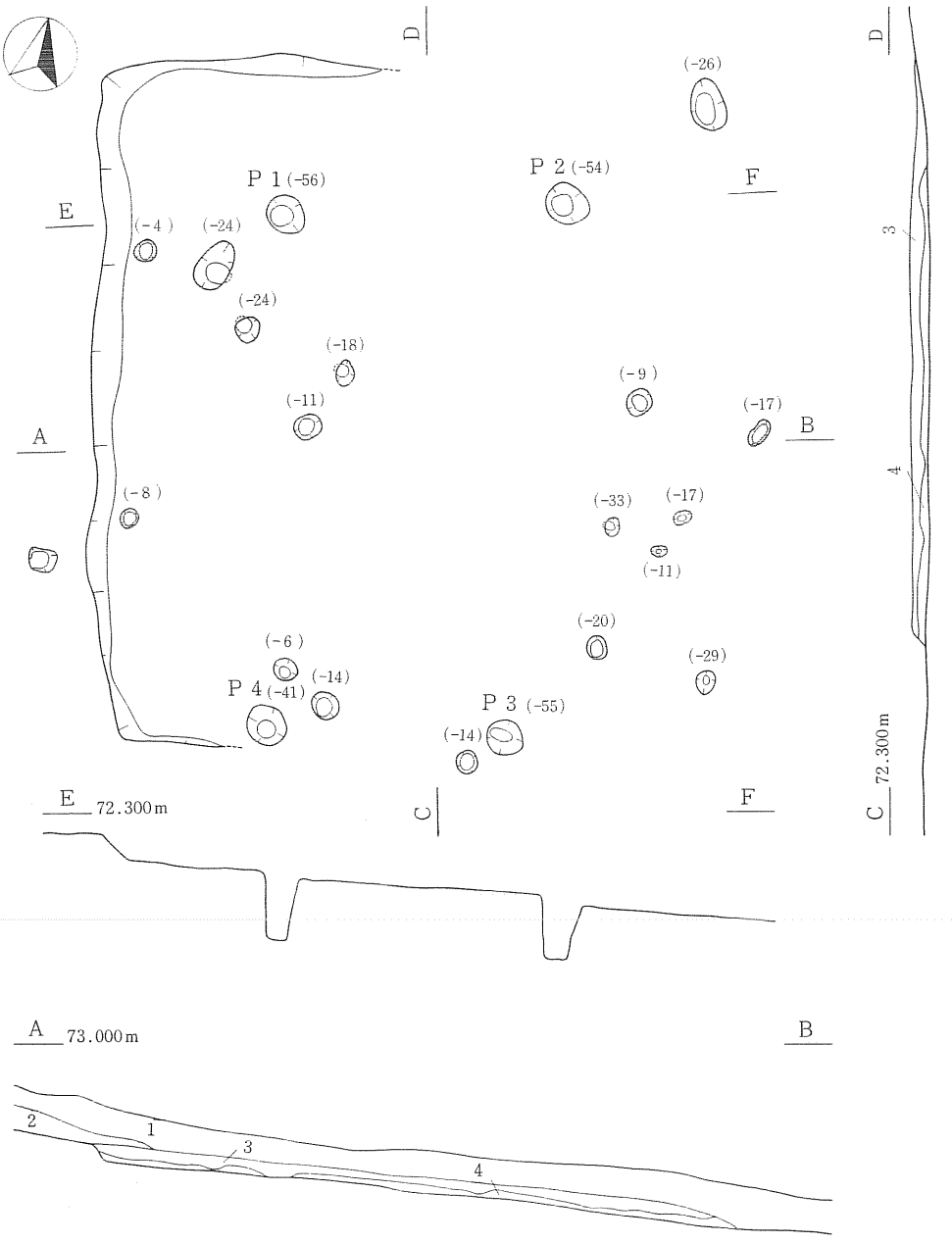
とも埋土が１層であり、一時期に埋められた様を示している。土坑内より遺物は出土しなかった。

（４）炭化物（材）集積遺構

ＳＮ２０４・２０５（第129図、図版53）

遺跡南西側、13W14・15・19・20グリッドⅡ層で検出した。次に述べる柱穴群中の北側に位置し、ＳＫ203の東約４ｍの緩斜面に立地している。

ＳＮ204は、長さ1.4m、幅1.1mの楕円の範囲に炭化物（材）が10～15㎝の厚さで認められる。ＳＮ204の東隣にはＳＮ205とした長さ3.8m、幅2.1mの炭化物（材）の広がりが見られる。集積している炭化物の厚さは最厚で18㎝ある。両者とも土坑様の明確な掘り込みを伴わず、しかも焼土も見られないことから、他所で生み出された炭化物（材）がここの２箇所にまとめて捨てられたと考えることができる。遺物は出土しなかった。



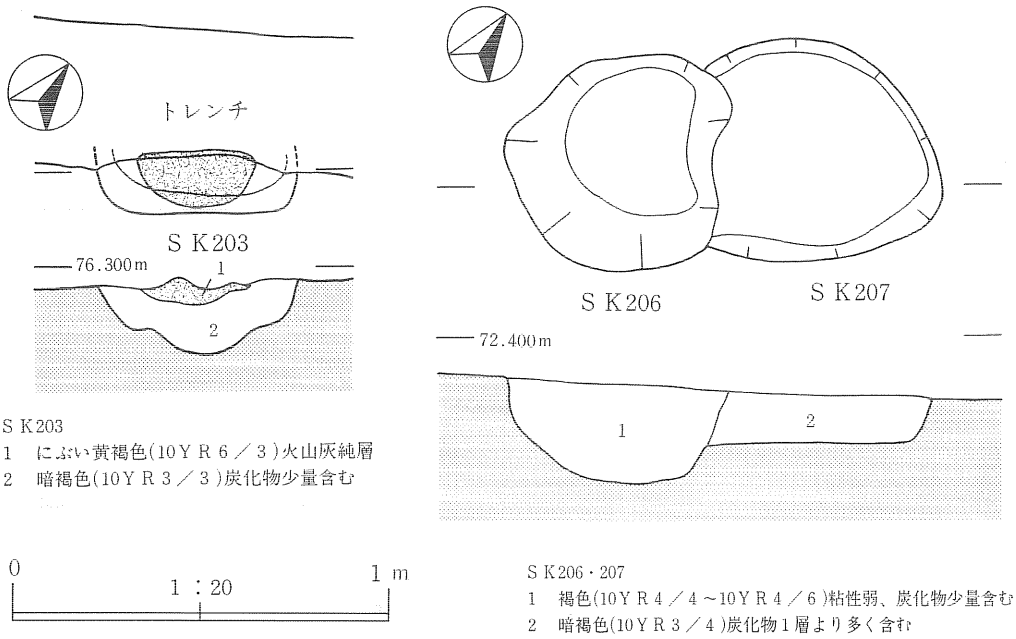
SI202

1　暗褐色(10YR3/4)基本層位第Ⅰ層　　3　黒褐色(10YR2/3)炭化物少量含む

2　暗褐色(10YR3/3)基本層位第Ⅱ層　　4　褐　色(10YR4/6)

0　1：60　2 m

第127図　ＳＩ202竪穴住居跡



S K203
1　にぶい黄褐色(10Y R 6／3)火山灰純層
2　暗褐色(10Y R 3／3)炭化物少量含む

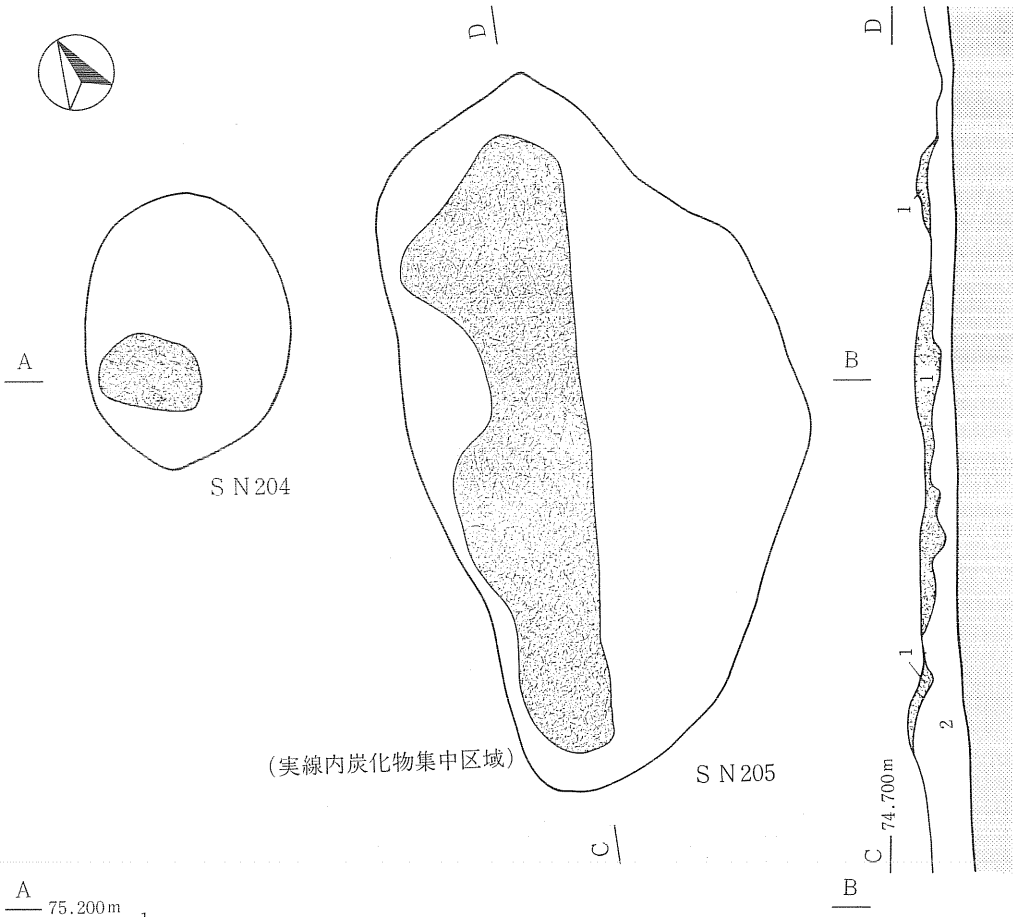
S K206・207
1　褐色(10Y R 4／4～10Y R 4／6)粘性弱、炭化物少量含む
2　暗褐色(10Y R 3／4)炭化物1層より多く含む

第128図　S K203・206・207土坑

（5）柱穴群（第130図、図版53）

遺跡南西側、13Wグリッドを中心とする南北約20m、東西約15mの範囲内の地山面で60本近くの柱穴状ピットを検出した。本遺跡で柱穴状ピットは竪穴住居跡S I 202に伴う柱穴を除けばこの区域でのみ発見されている。この柱穴群中にはS K203、S N204、S N205が存在する。S N204・205と重複する柱穴は、S N204・205除去後の精査でこれを確認している。従ってこの部分では（旧）柱穴群→（新）S N204・205と判断できる。調査現場あるいは室内での整理作業の過程において、掘立柱建物跡あるいは柱列の有無を検討したが明らかにできなかった。

これら柱穴は、径あるいは一辺が15～30cmの円・楕円形を呈しており、確認面からの深さは最浅10cm、最深45cmを測る。柱穴内出土の遺物は認められなかった。



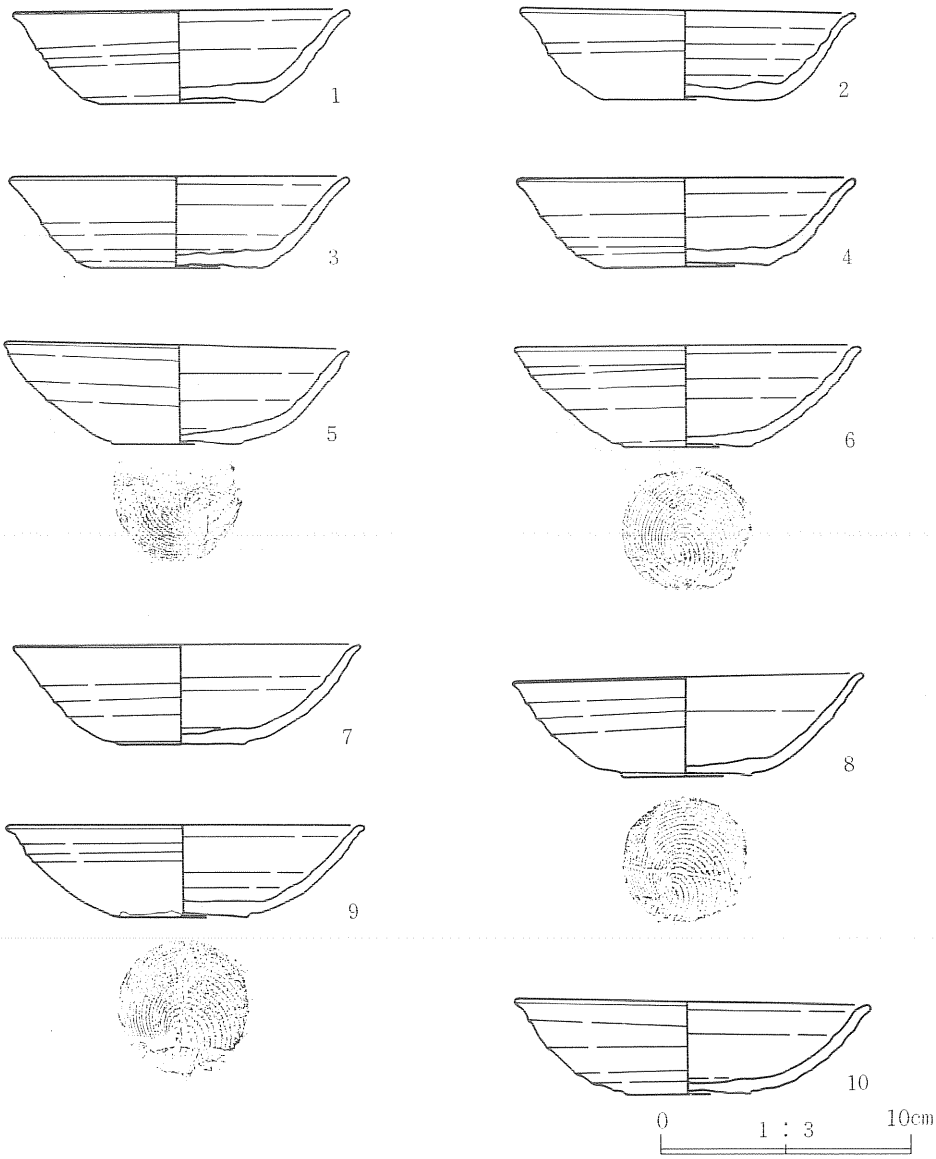
SN204・205
1　黒色(10YR２／２)炭化物層、粘性なく植物根多く入る
2　褐色(10YR４／４)基本層位第Ⅱ層に相当する

0　1：40　2 m

第129図　ＳＮ204・205炭化物(材)集積遺構

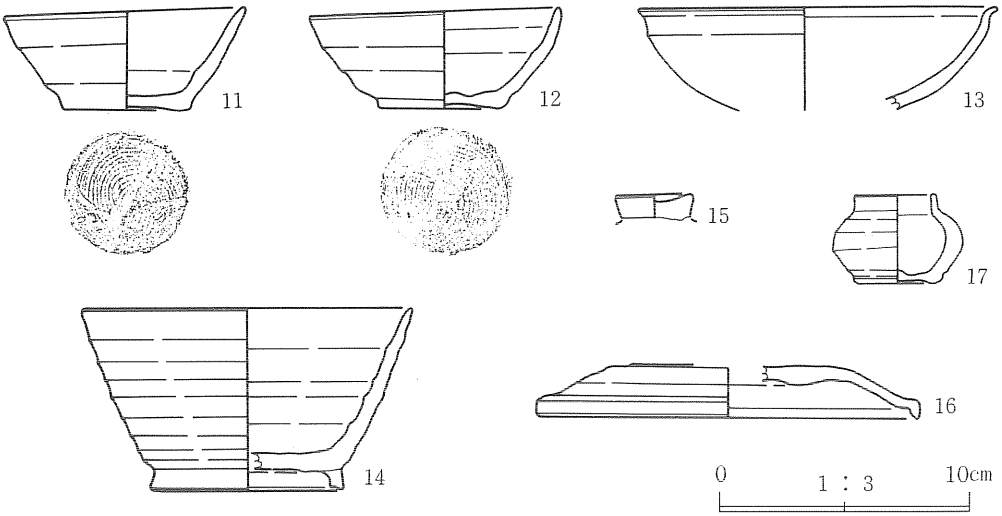
（－はピットの確認面からの深さ）

第130図　柱穴群配置図



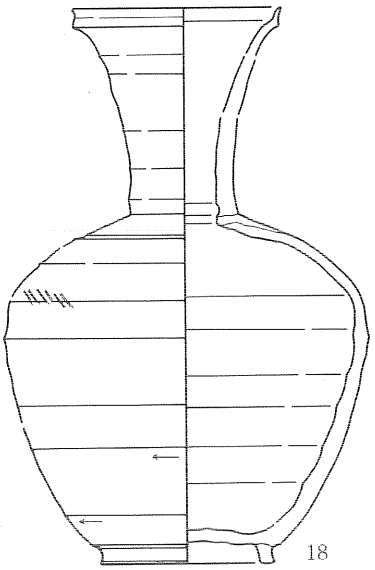
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	器高	残存率	備　考
1	須・坏A0	273、281	13.1	6.5	3.7	完	「写」8
2	須・坏A0	120	13.1	6.5	3.5	完	「写」7
3	須・坏A0	150	13.2	6.8	3.6	完	「写」10
4	須・坏A0	308	13.2	6.5	3.6	2/3	「写」9
5	須・坏B0	136、249、281	13.5	5.1	3.9	1/2	「写」5
6	須・坏B0	147、301、303、308	13.6	5.1	4.0	完	「写」1
7	須・坏B0	90、114、134	13.6	5.0	3.9	2/3	「写」2
8	須・坏B0	98、148、301、311	13.7	5.0	4.1	完	「写」3
9	須・坏B0	窯内	13.9	5.3	3.7	完	「写」6
10	須・坏B0	74、75、308、429	13.9	5.0	3.6	2/3	「写」4

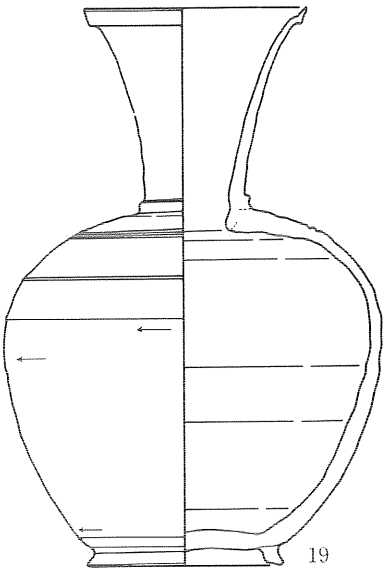
第131図　SJ201須恵器窯跡出土土器(1)

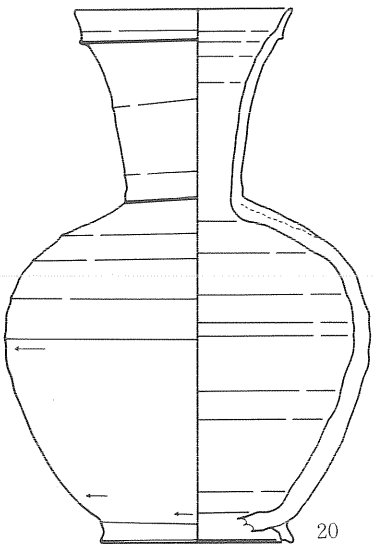


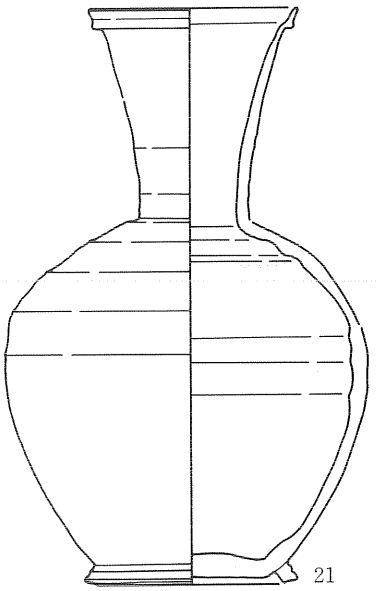
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
11	須・坏B0	サタ	9.4	4.9	－	3.9	2/3	「写」11
12	須・坏B0	コサトハヒモ	9.7	5.1	－	3.9	1/2	「写」12
13	須・坏D0	135	14.1	－	－	(4.0)	1/3	「写」13
14	須・高台付坏A2	15W11	12.9	7.3	－	7.2	1/3	「写」14
15	須・坏蓋D	テ	－	－	－	(1.0)	つまみ	つまみ径3.1　－
16	須・坏蓋	ハムメ	15.0	－	－	(2.1)	1/3	－
17	土・ミニチュア壺	ク	3.2	3.3	5.1	3.5	完	「写」15

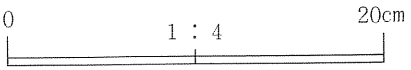
第132図　SJ201須恵器窯跡出土土器(2)





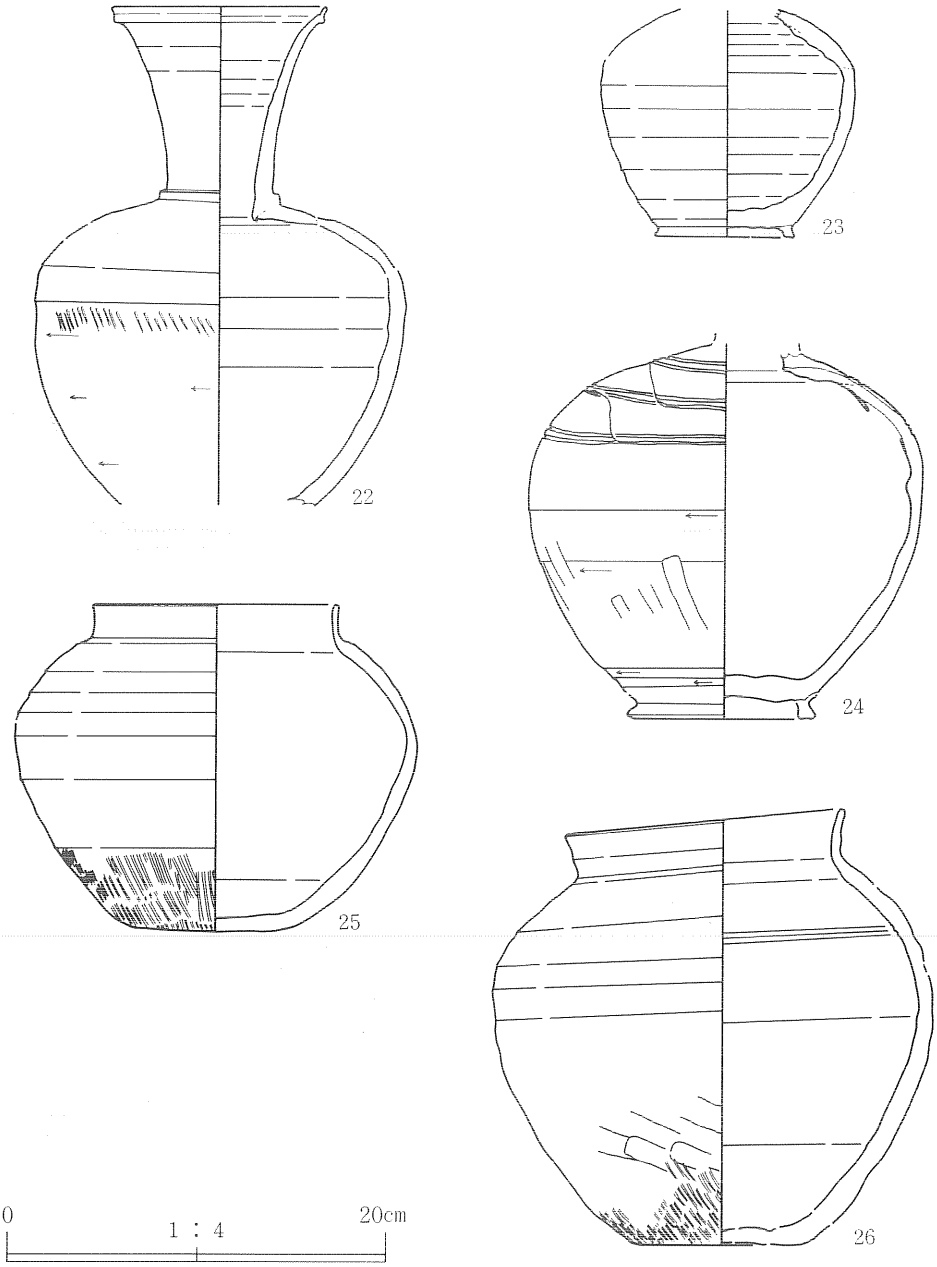






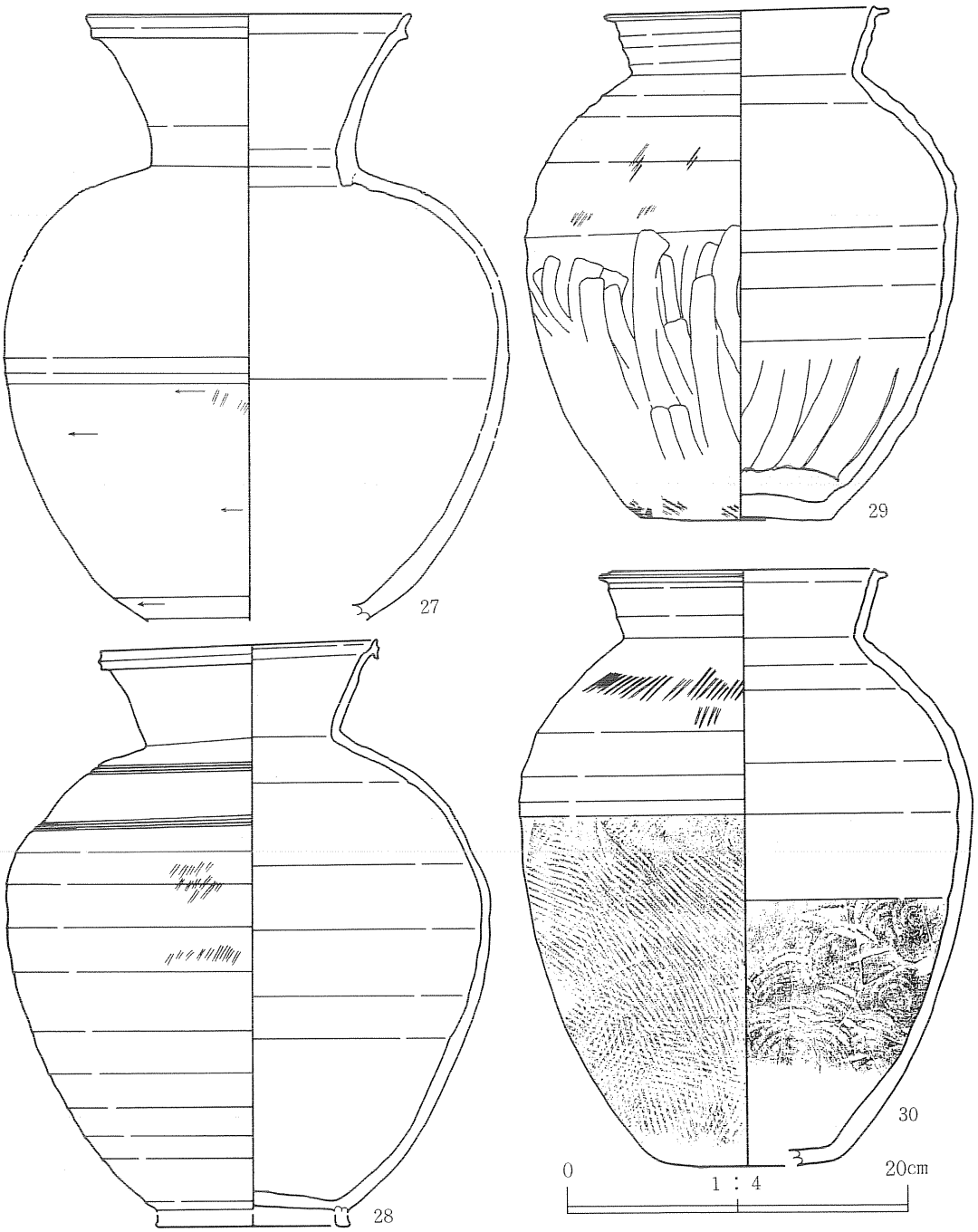
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
18	須・長頸壺B1a	ニネノフミムリルレ	11.0	9.2	19.4	29.5	2/3	「写」17
19	須・長頸壺B1a	59、61、86、104、110、123、159、173、コサシテトナハムモロ	11.8	10.4	20.0	29.6	完	「写」18
20	須・長頸壺B1a	161、294、307、308、311、ケテトノハヒムメ	11.4	10.2	19.3	28.4	1/2	「写」19
21	須・長頸壺B1a	6、14、33、50、265、286、297、411、コテナノハヒムメモ	10.9	11.3	19.3	30.6	1/2	「写」20

第133図　SJ201須恵器窯跡出土土器(3)



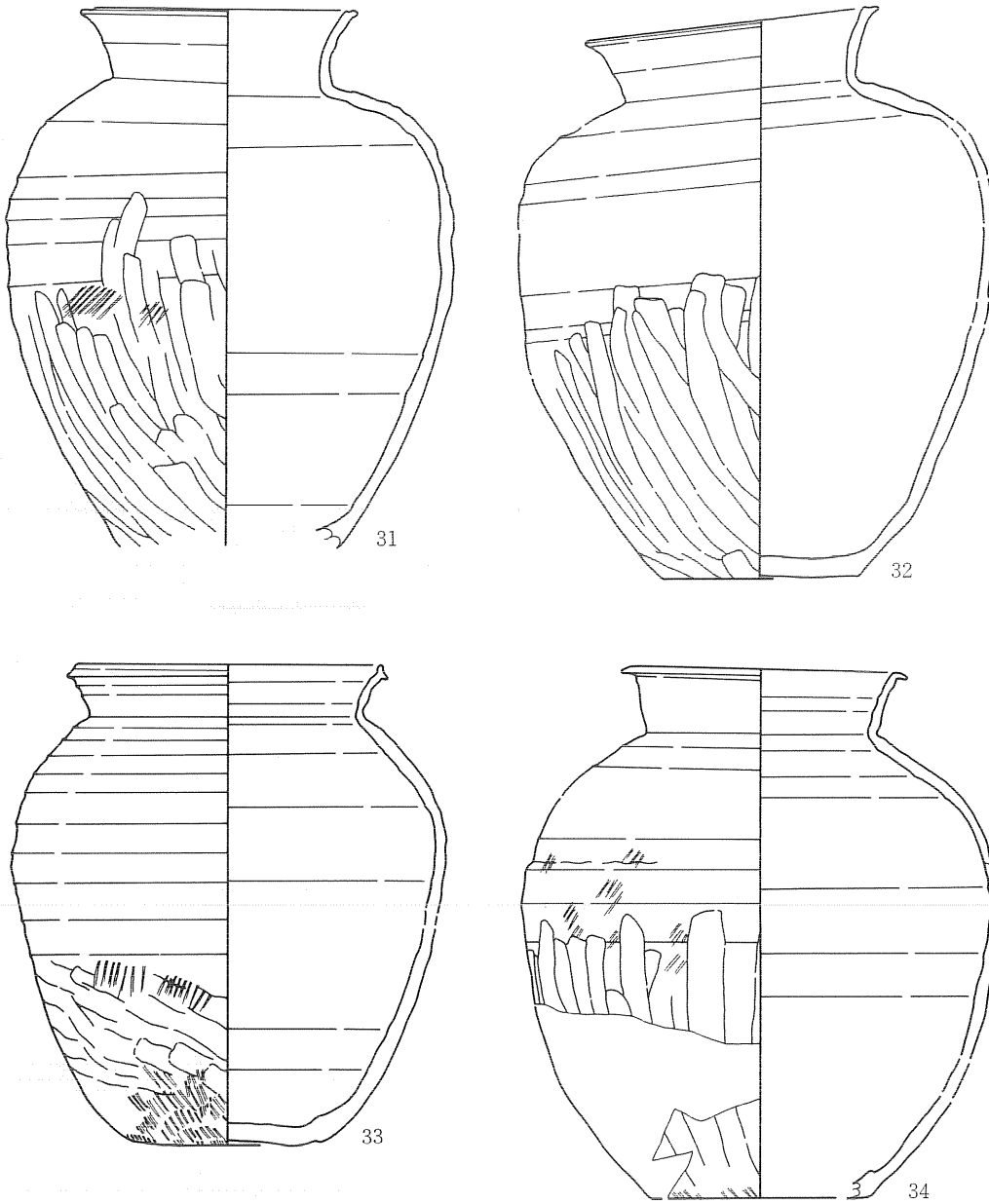
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
22	須・長頸壺Ba	サシノ	11.3	－	19.5	(26.6)	2/3	「写」21
23	須・長頸壺B1a	コハメ	－	7.3	13.4	(12.0)	1/2	「写」16
24	須・長頸壺B1b	ツネノミムル	－	9.6	20.9	(15.8)	1/2	歪み大　22
25	須・短頸壺Ob	240、307、ケ	12.8	8.6	21.4	17.3	1/2	23
26	須・短頸壺Ob	16、280、299、309、キケコツノヒモ	14.5	8.8	23.2	22.6	1/2	24

第134図　SJ201須恵器窯跡出土土器(4)



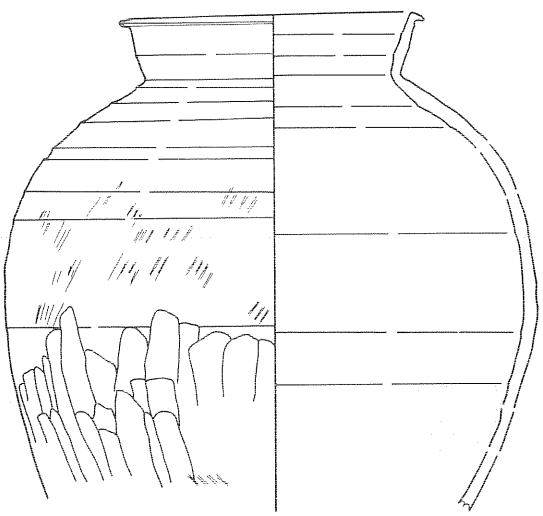
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
27	須・広口壺1a	ケチツネノミ	18.8	－	29.5	(35.5)	1/2	「写」29
28	須・広口壺1a	73、95、103、107、128、139、165、168、169、289、407、413、420、432、433、ケコサツテノハヒフムメモ	16.2	11.2	28.3	(34.1)	2/3	「写」30
29	須・中甕Bb	152、271、308、412、414、シツテノハフムヤ	15.6	11.1	25.2	29.9	2/3	「写」27
30	須・中甕Bc	36、38、79、119、143、220、308、310、クケツ	15.4	－	26.4	35.0	1/3	「写」31

第135図　SJ201須恵器窯跡出土土器(5)

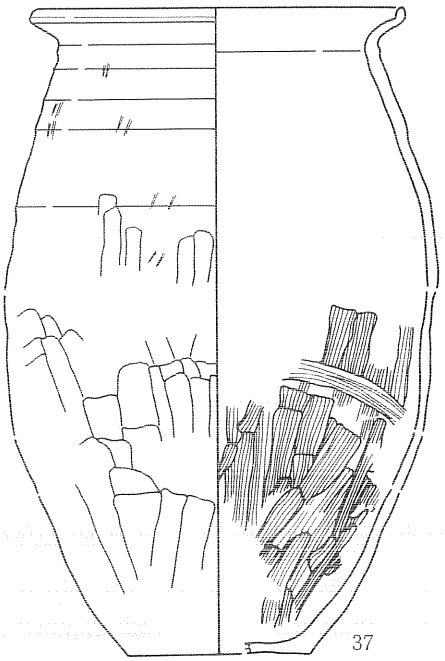


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
31	須・中甕Bb	ネノミムモルレ	14.8	－	24.4	(29.1)	1/2	「写」26
32	須・中甕Bb	245、シスナニハフヘホ	15.7	10.6	25.8	30.4	完	「写」33
33	須・中甕Bb	18、25、34、78、92、126、133、136、209、213、215、306、307、310、422、432、ケコサシテナニ	16.5	10.5	23.6	26.1	2/3	「写」25
34	須・中甕Bb	191、276、290、304、307、310、サシトナヒフモヤ	14.3	11.9	26.0	29.0	1/3	32

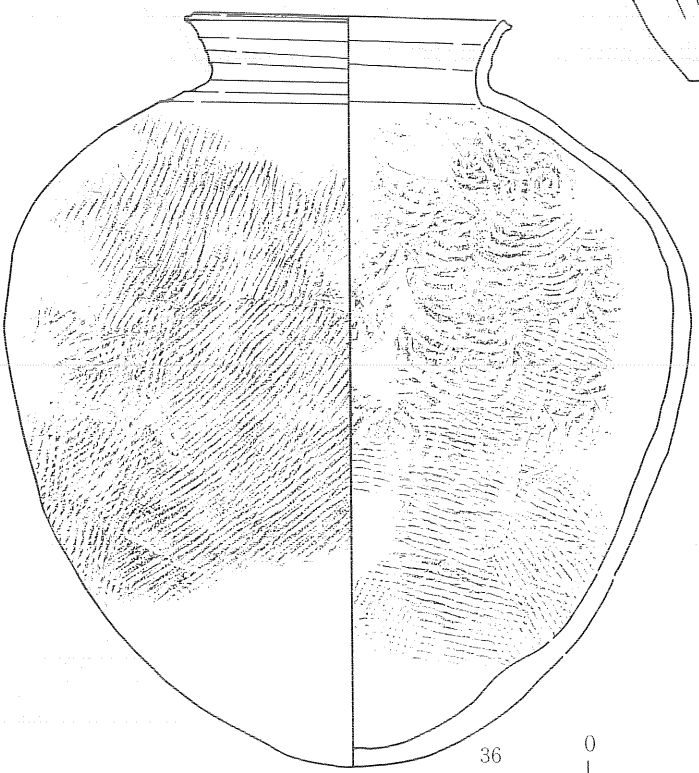
第136図　SJ201須恵器窯跡出土土器(6)



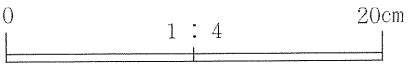
35



37

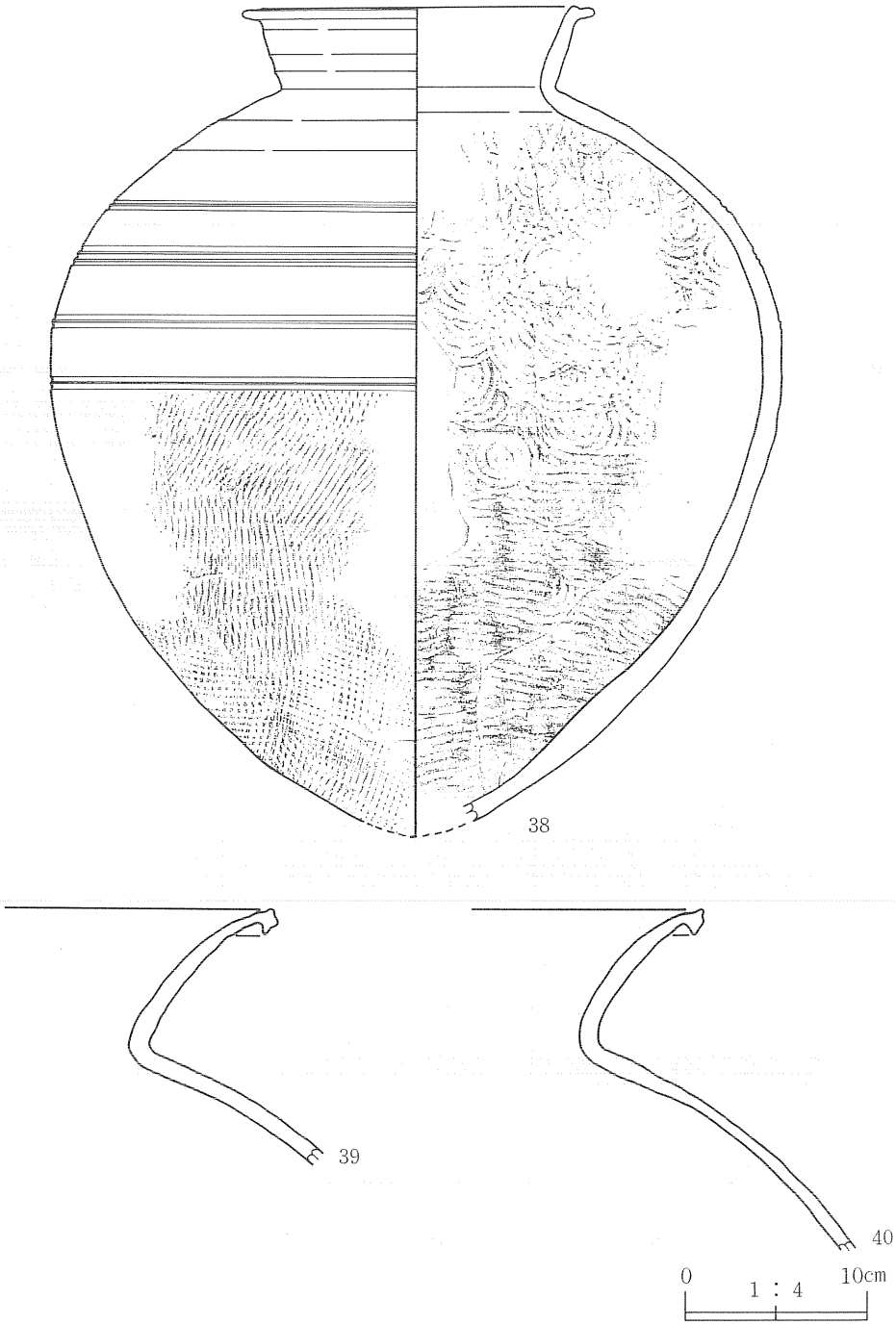


36



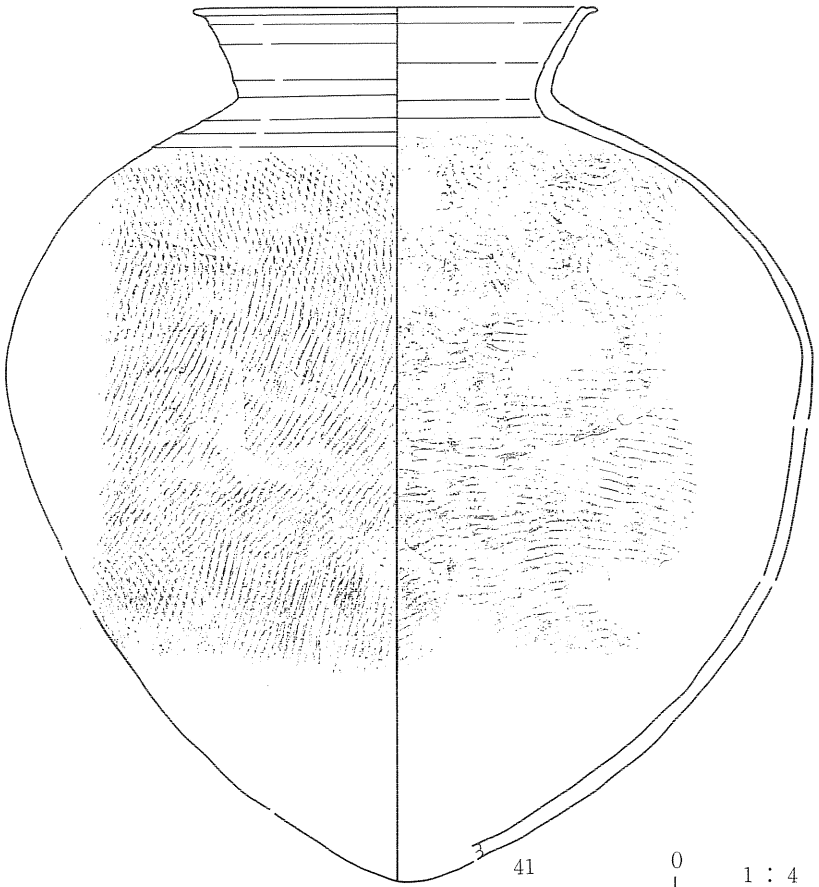
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
35	須・中甕Bb	2、10、19、46、55、76、145、185、208、225、オケコサシナ	14.8	－	28.4	(26.2)	1/3	「写」28
36	須・中甕A	29、88、100、106、112、151、156、160、175、178、179、193、195、226、231、233、235-237、264、277、292、293、307、308、310、311、432、スチテヒヘ	16.4	丸底	36.4	40.0	2/3	「写」36
37	土・甕	300、テトノハヒ	19.4	9.6	－	－	1/3	還元化している「写」41

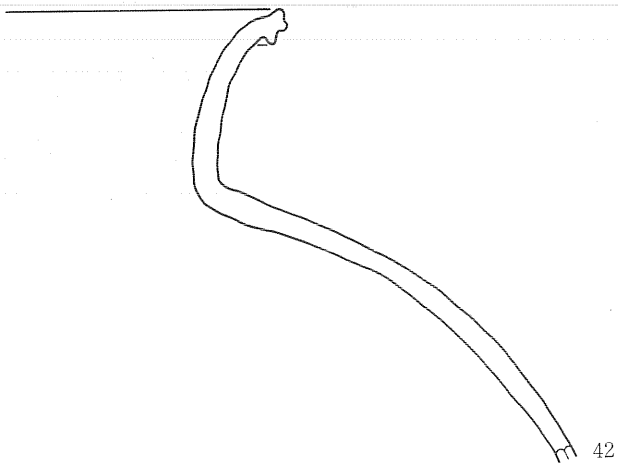
第137図　SJ201須恵器窯跡出土土器(7)



番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
38	須・中甕A	12、17、44、186、207、210、255、258、262、266、キタチネ	16.9	丸底	40.3	(45.0)	1/3	34
39	須・大甕	チツノ	52.1	－	－	(14.1)	1/3	(7)
40	須・大甕	チツネミ	47.3	－	－	(18.8)	1/3	(6)

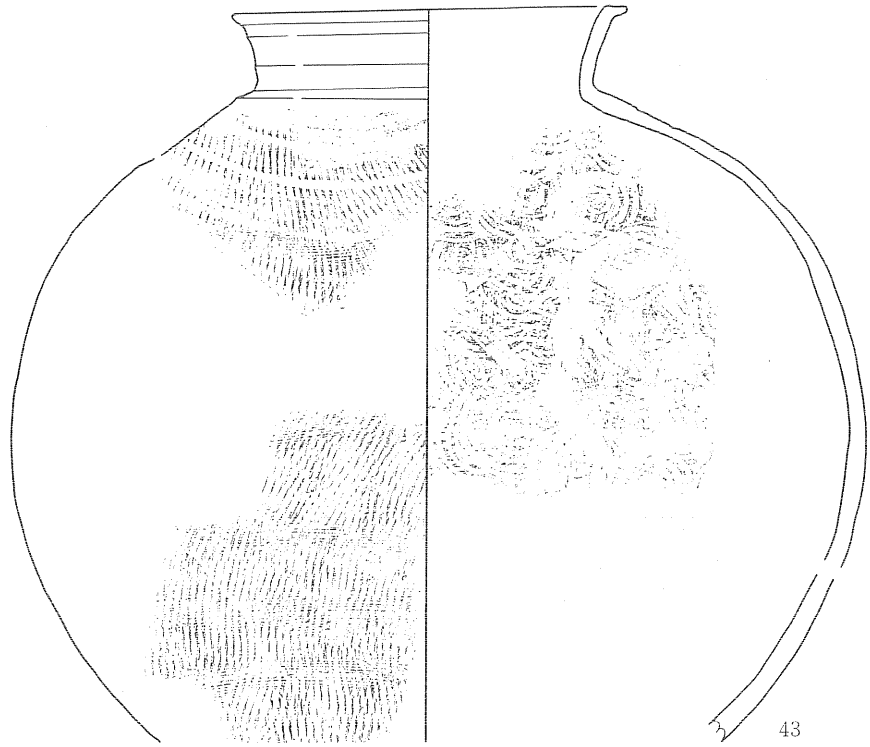
第138図　SJ201須恵器窯跡出土土器(8)

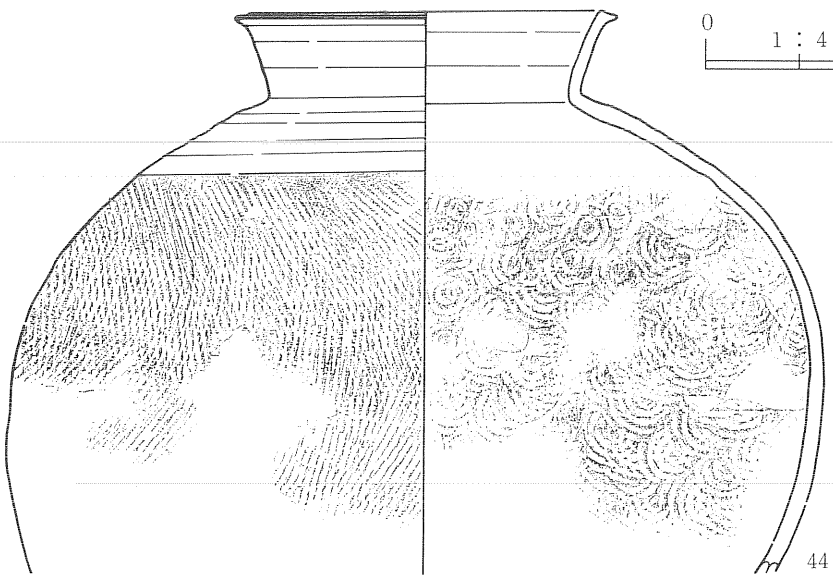


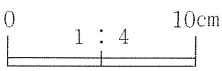


番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
41	須・中甕A	ツネノミムメモ	20.0	丸底	42.8	(46.5)	2/3	「写」35
42	須・大甕	247、424	49.5	－	－	(24.3)	1/3	「写」(5)

第139図　SJ201須恵器窯跡出土土器(9)

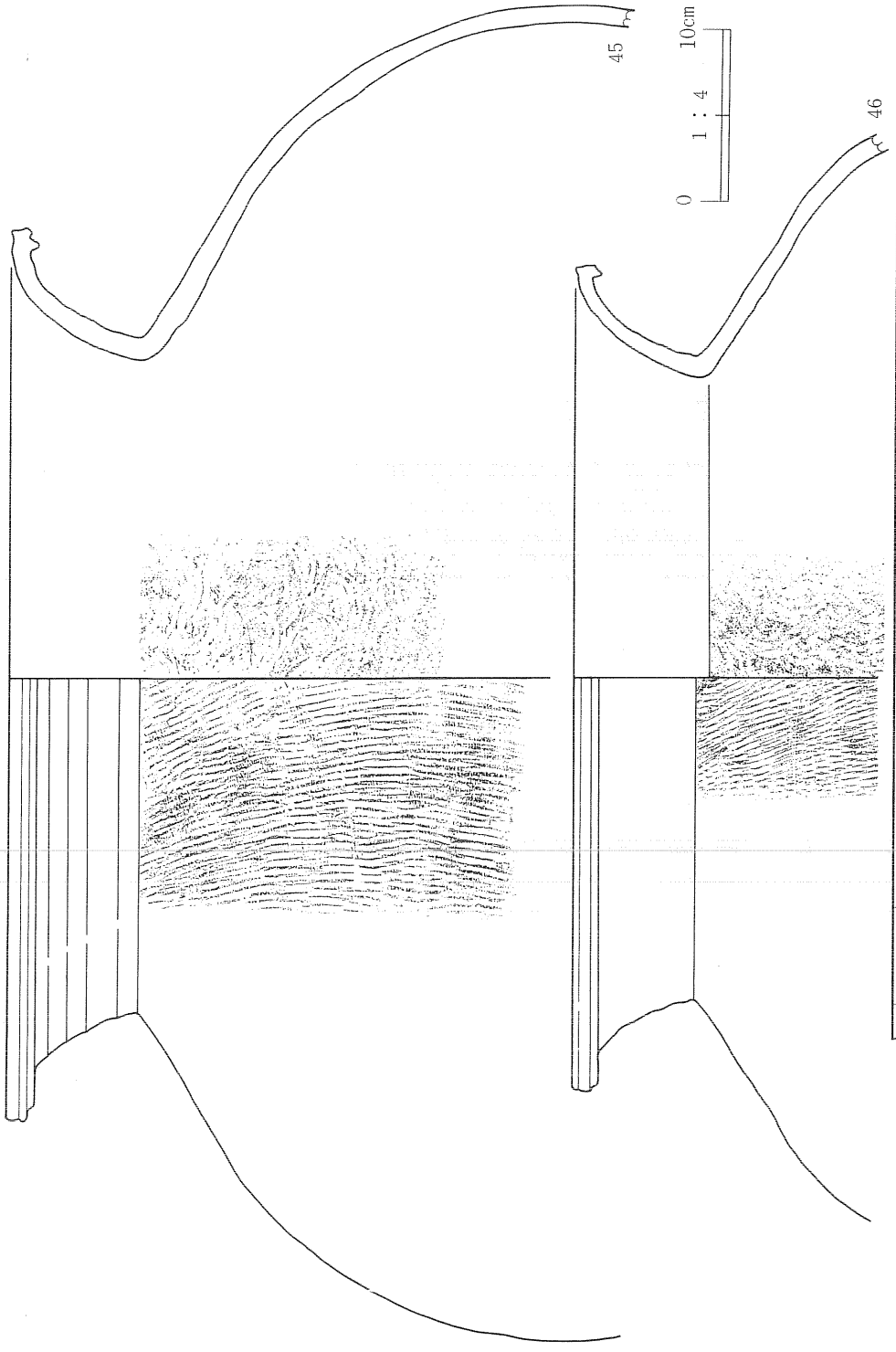






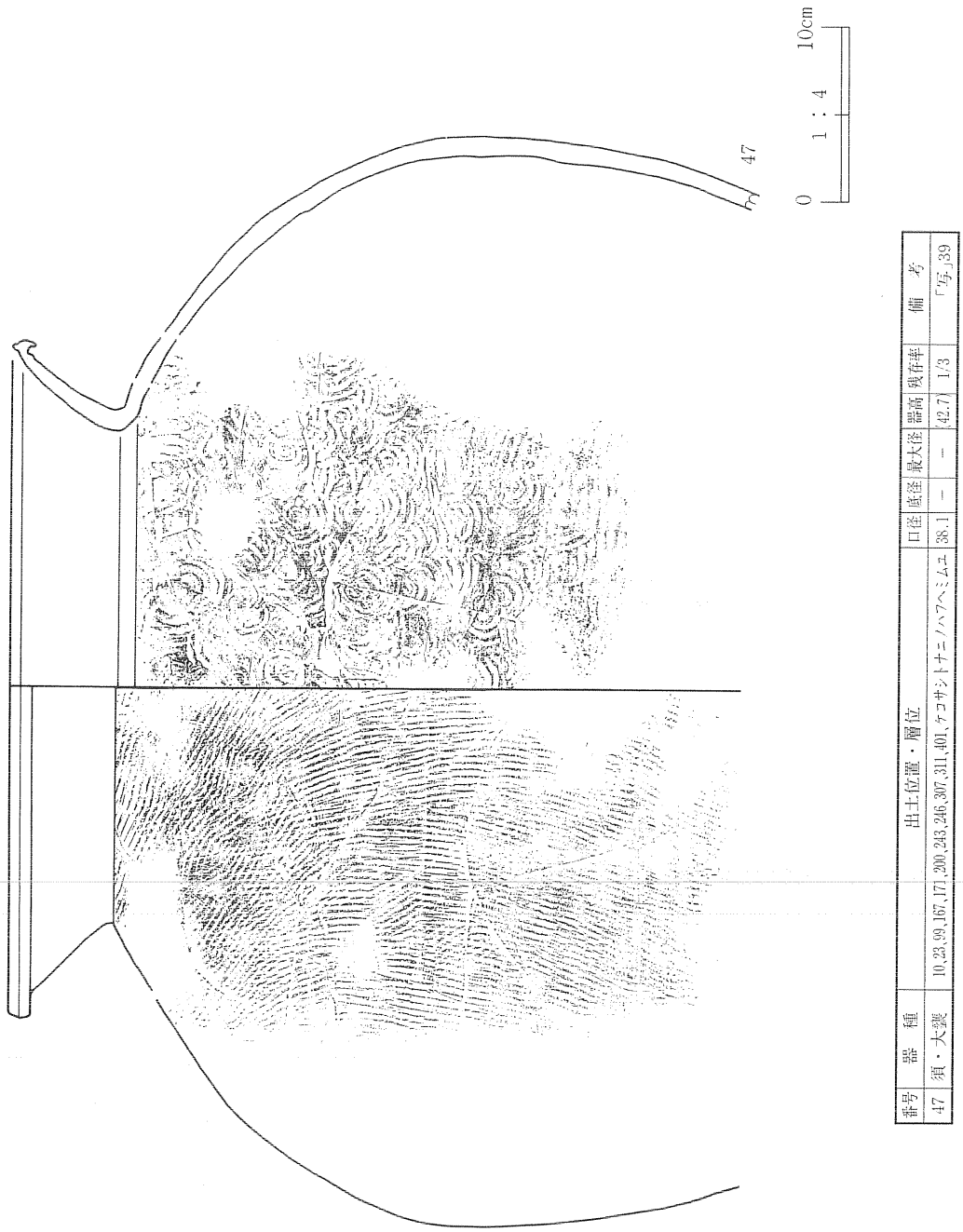
番号	器　種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備　考
43	須・中甕A	21,24,27,43,117,187,206,212,220,221,224,241,244,254,270,278,オムス	20.7	－	45.4	38.7	1/3	「写」37
44	須・中甕A	402、ネノハミムメモルワ	18.3	－	43.2	30.2	1/2	(1)

第140図　SJ201須恵器窯跡出土土器(10)



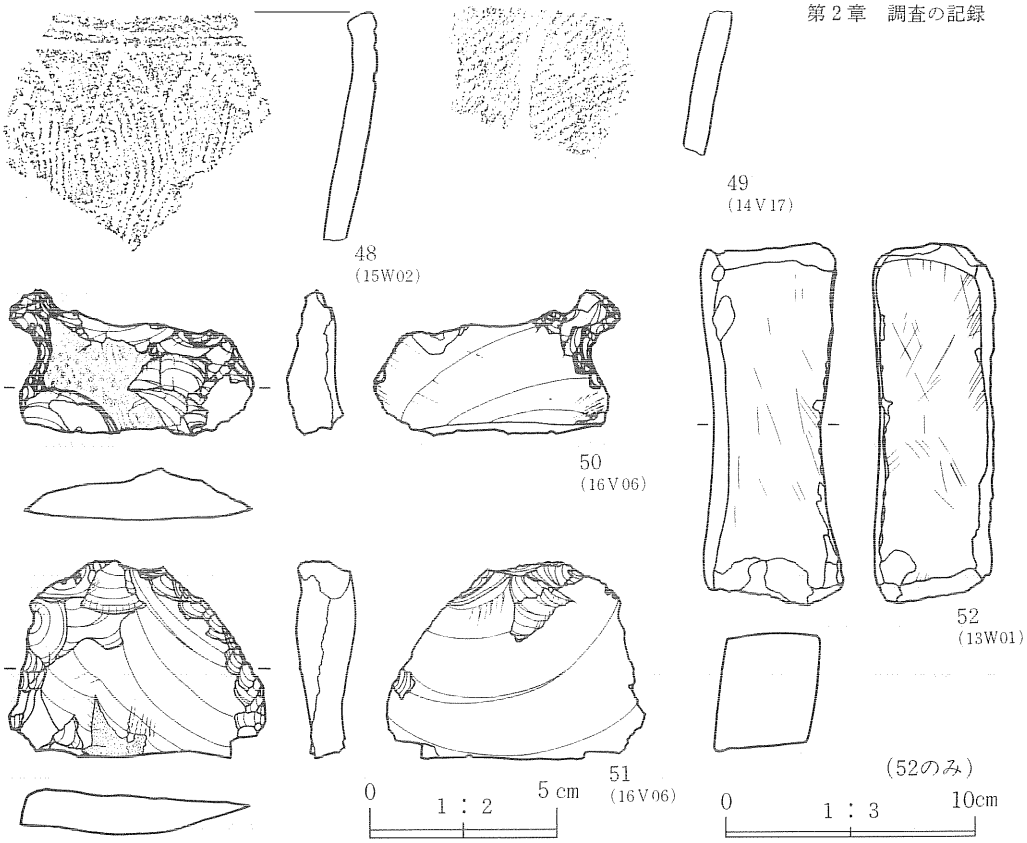
番号	器種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備考
45	須・大甕	26,27,40,132,157,211,238,239,260,275,279,287,302,304,310,ストハ	51.6	—	—	36.2	1/3	40
46	須・大甕	ソノムメ	47.6	—	—	18.1	1/3	38

第141図　SJ201須恵器窯跡出土土器(11)



番号	器種	出土位置・層位	口径	底径	最大径	器高	残存率	備考
47	須・大甕	10,23,99,167,177,200,243,246,307,311,401,ケコサシトナニノハフへミムユ	38.1	—	—	42.7	1/3	「写」39

第142図　SJ201須恵器窯跡出土土器(12)



第143図　遺構外出土遺物

第２節　遺構外出土の遺物

１　縄文時代の遺物（第143図48～51）

該期と思われる遺物は、縄文土器３点、石器・剥片２点の計５点のみである。

48は遺跡中央北西側、15W02グリッドⅡ層出土である。口縁部資料であり、地文の上に縄文（ＬＲ）を押圧している。内面は土師器に認められるような細かいミガキが成されている。49は遺跡東端中央14Ｖ17グリッドⅠ層出土である。摩滅しているが、細かいＬＲ縄文が見られる。

50、51は遺跡北部、16Ｖ06グリッドⅠ層出土の石器・剥片である。50は、横型の石匙である。

２　平安時代の遺物（第143図52）

平安時代の遺物は、遺跡西側の斜面上方を除くほぼ全域より少量ではあるが、須恵器破片が出土している。ＳＪ201窯に係わりのある遺物と考えられる。

その他、遺跡南側13W01グリッドⅠ層より、砥石が１点得られている。図示裏面を除く３面を使用面としている。石材は凝灰岩である。重量は616ｇ。出土位置から窯業に係わりある時期の遺物か、それ以降に使用されたものか明らかではない。

第３章　小　　結

富ヶ沢Ｃ窯跡で検出された遺構は、須恵器窯跡１基、竪穴住居跡１軒、土坑３基、炭化物（材）集積遺構２基、及び柱穴群である。いずれも平安時代の構築と考えられる。

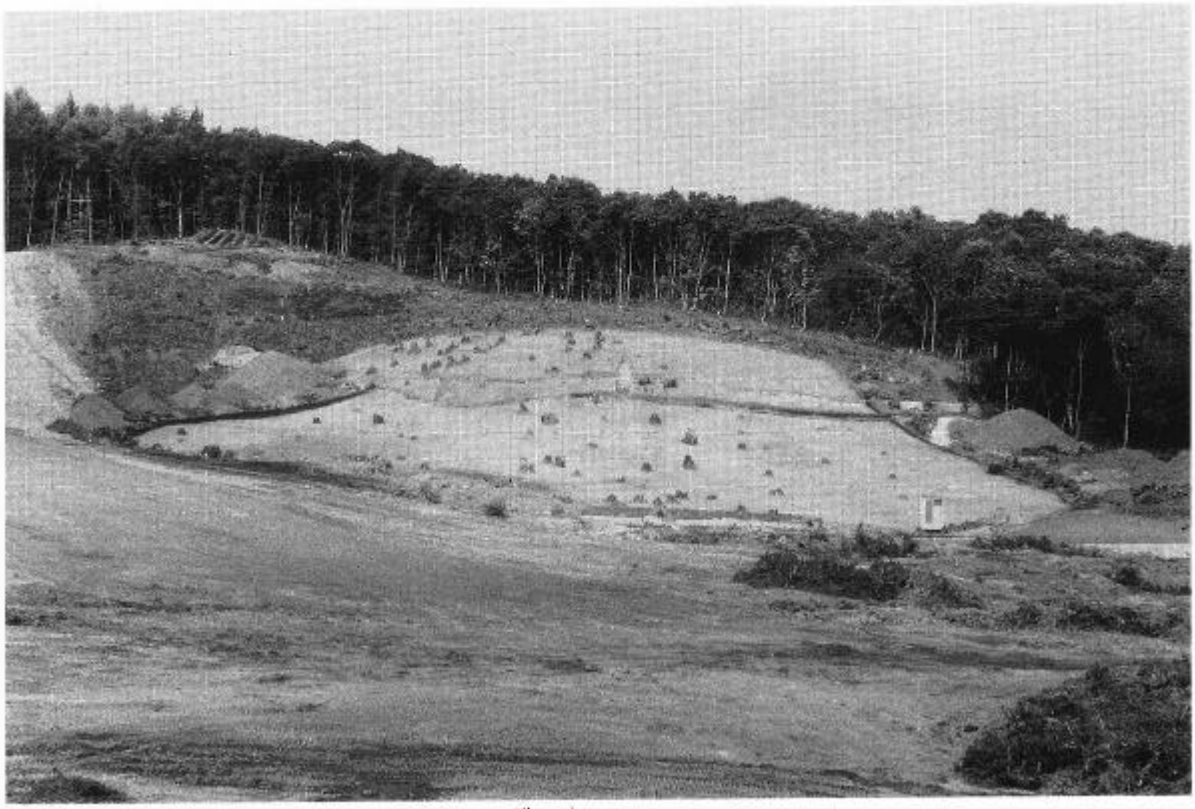
遺構配置上では、１基の須恵器窯跡と工房と考えられる竪穴住居跡が１軒及び２～３基の土坑が点在する様は、富ヶ沢Ａ窯跡に類似する。須恵器生産に係る最小の単位と読み取ることができるのかもしれない。

須恵器窯構造上では、富ヶ沢Ａ・Ｂ窯跡のような架構材は確認できなかったが、側壁面に貼り付けられているスサ入り粘土から、半地下構造を呈していたと想定できる。

ＳＪ201須恵器窯跡で焼成された須恵器は、遺棄された資料から判断する限りにおいては、外面にタタキ目を有する比較的大型の甕類を主体とする製品を焼成していたと言える。次いで壺類、中型の甕類が全体の1／5を占め、少量の無台の坏が生産されている。蓋、高台付坏及び富ヶ沢Ｂ窯跡などに認められる器高15㎝前後かこれ以下の小型の壺・甕類はそれぞれ１～数個体しか確認できなかった。また大甕に波状文の施される個体、横瓶は確認できなかった。

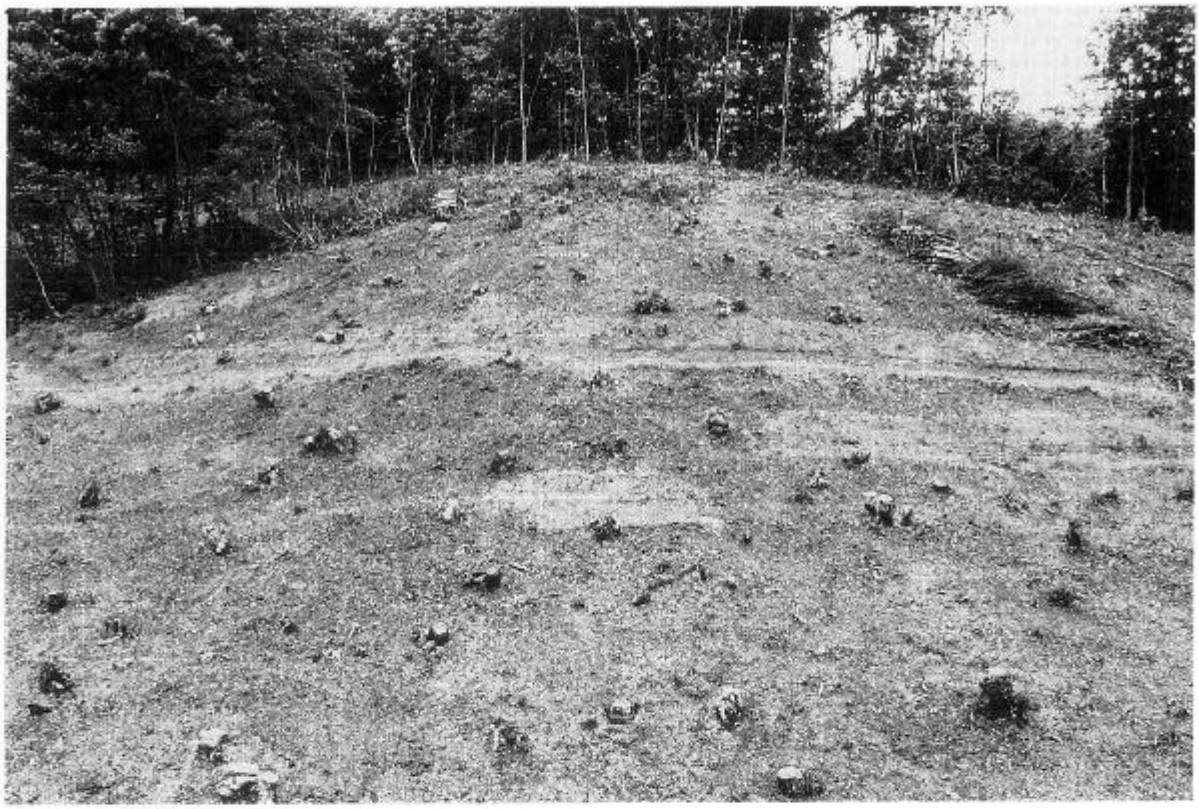
窯の操業時期は、富ヶ沢Ａ窯跡ＳＪ01、富ヶ沢Ｂ窯跡ＳＪ102のように灰白色火山灰の堆積が認められず、この点からは特定できない。ただ窯内、灰原出土の須恵器とＡ・Ｂ窯跡出土須恵器との比較では形態・法量上での大きな相違はなく、時間的な開きは各窯跡間ではあまりないと思われる。

富ヶ沢C窯跡　調査前全景（東→）

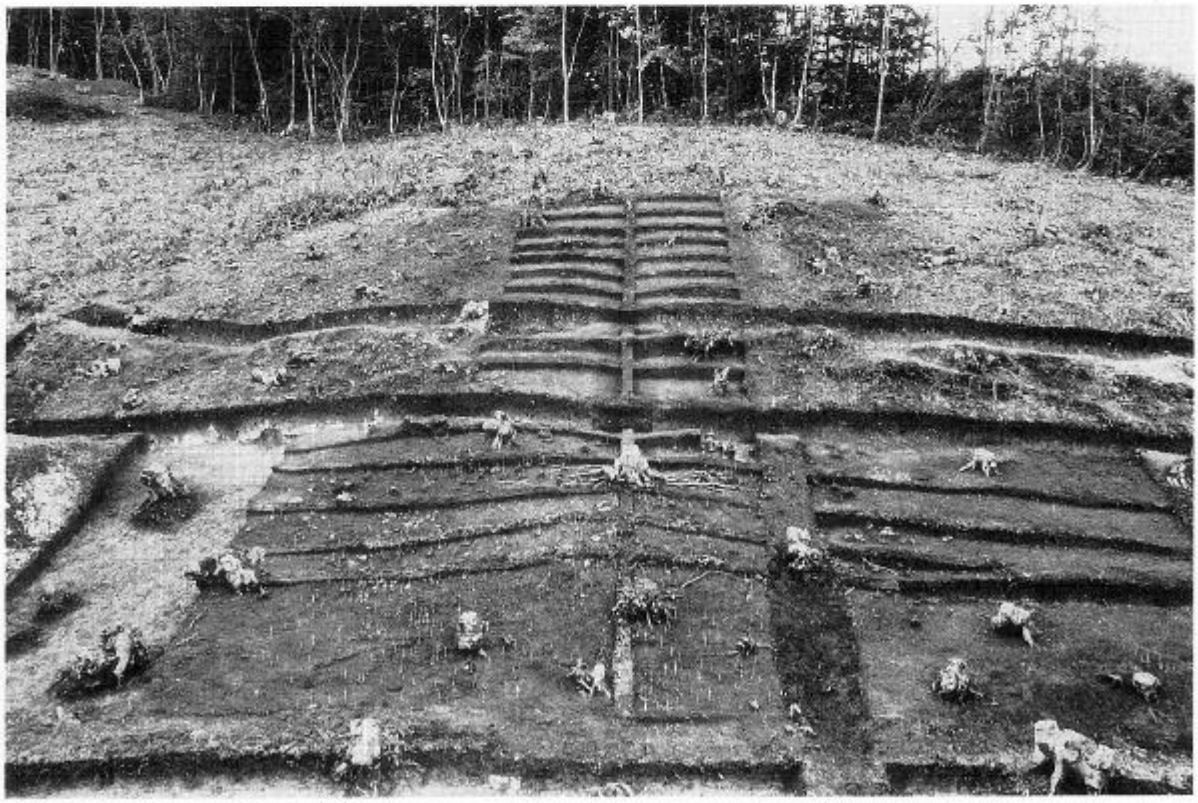


同上　調査後全景（東→、4号塚頂部より臨む）

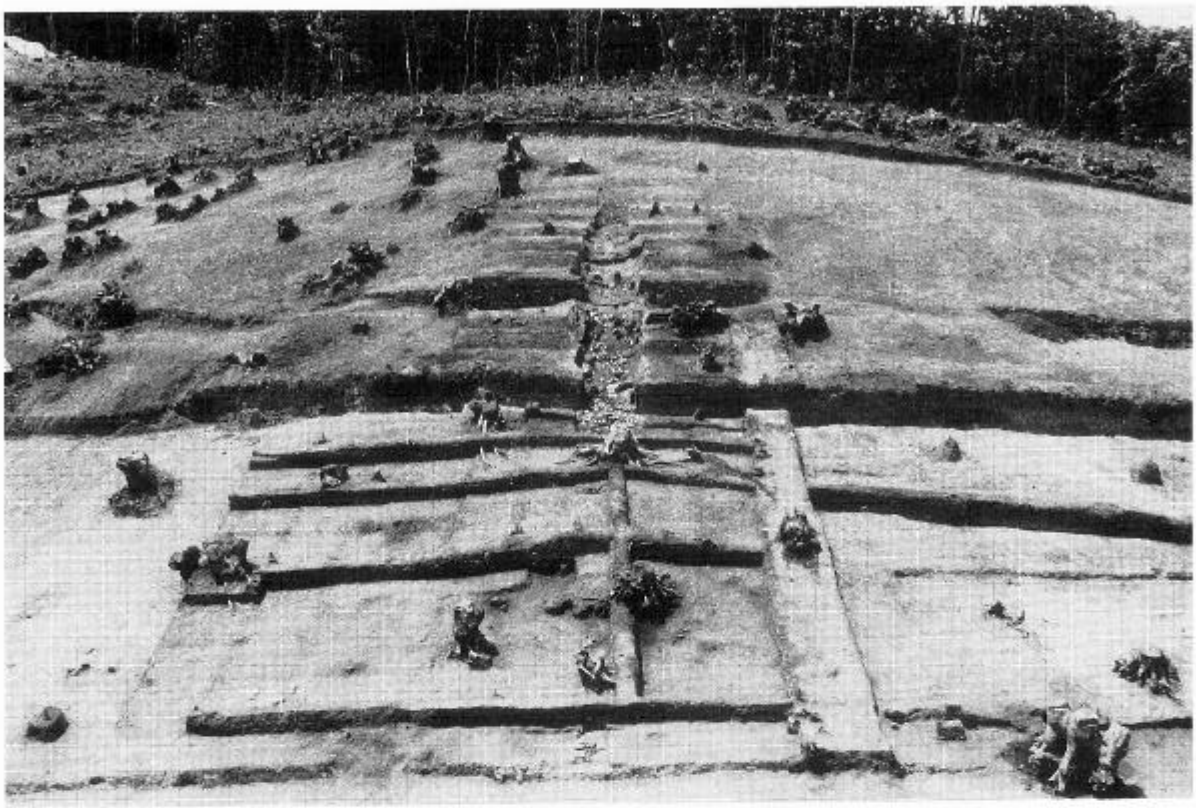
図版44



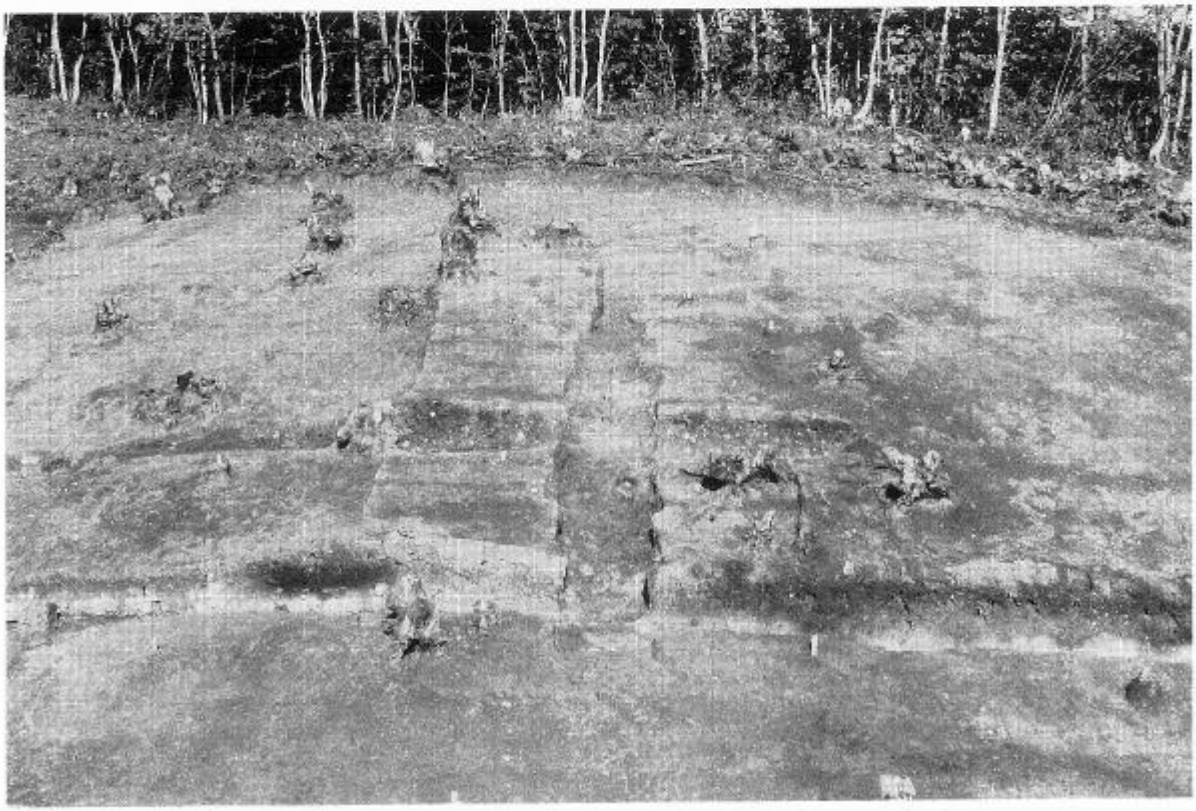
ＳＪ201　確認状況（東→）



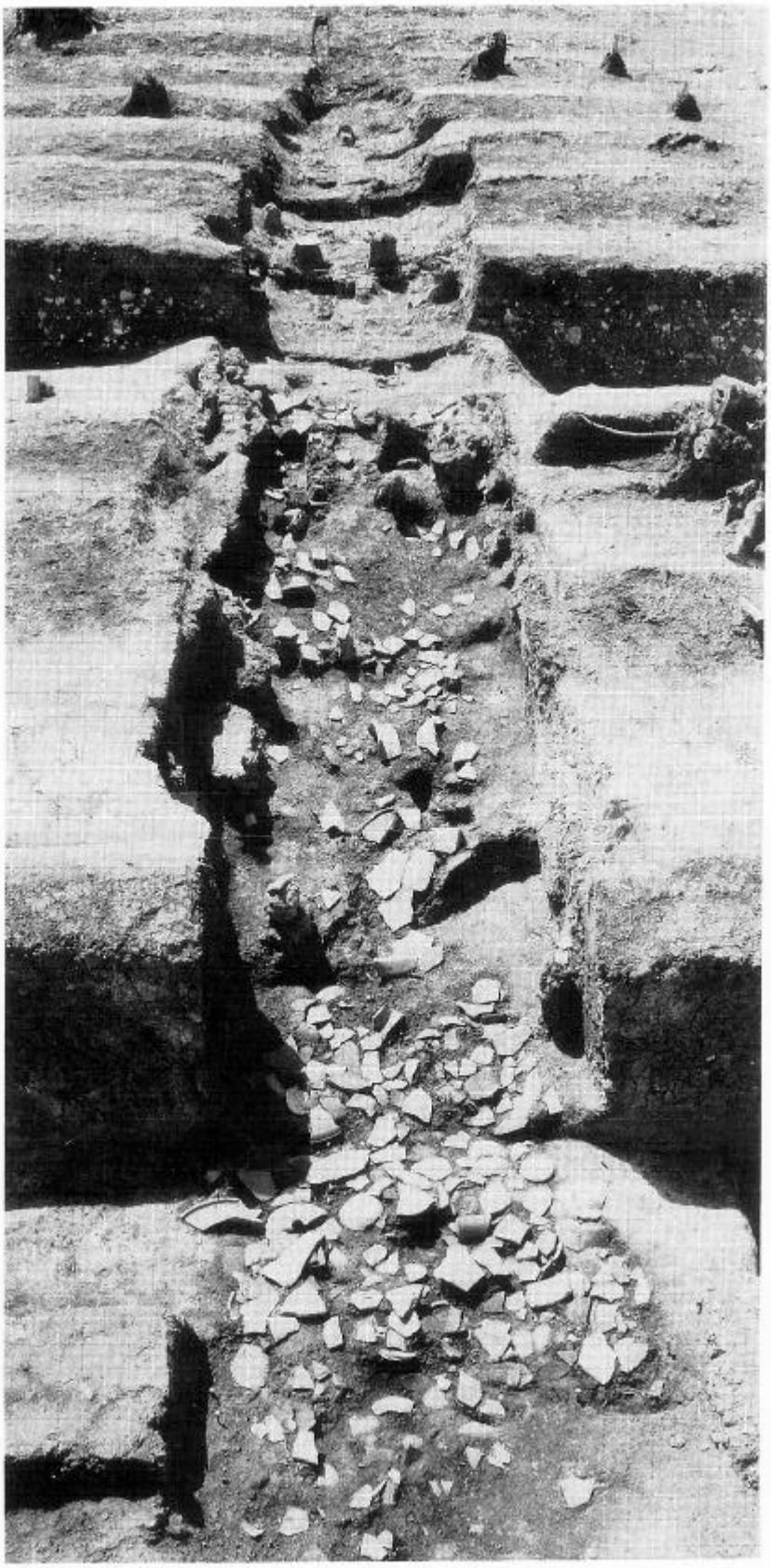
同上　窯体確認状況（東→）



S J 201　窯内遺物出土状況（東→）



同上　完掘（東→）



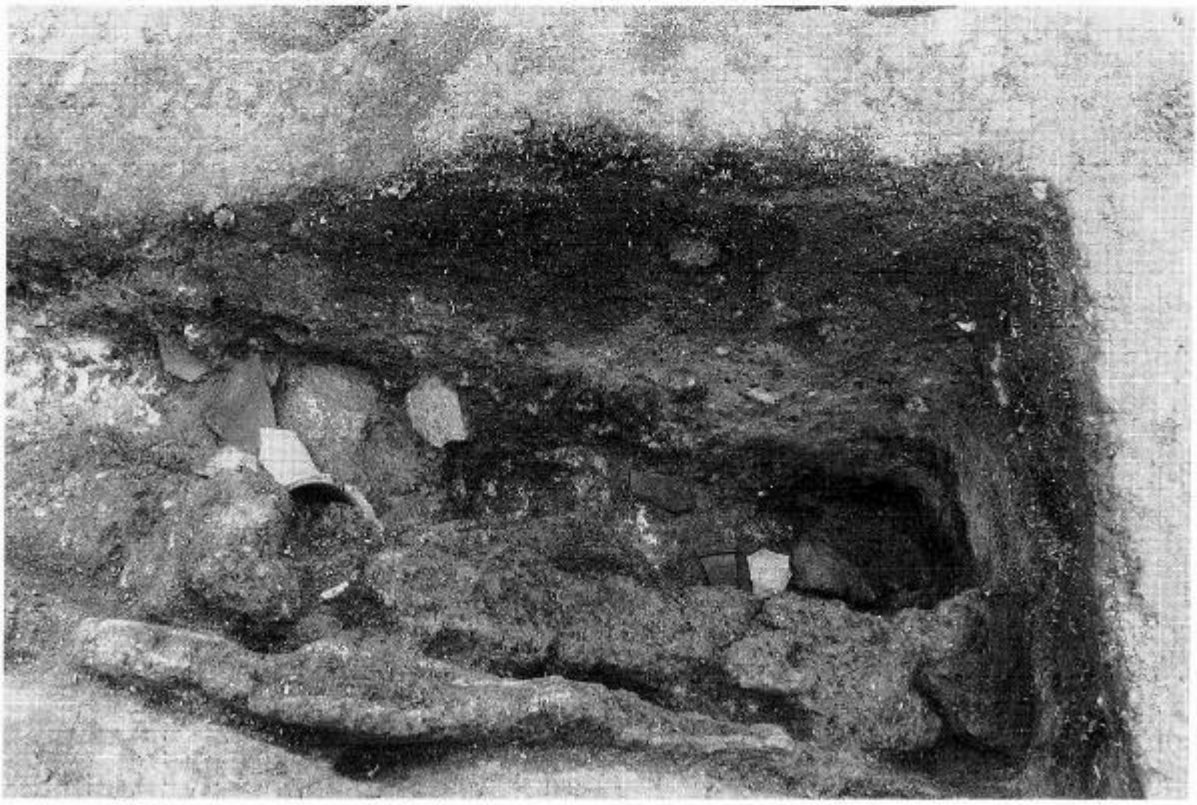
SJ201　窯内遺物出土状況（東→）

SJ201　土層断面（G－H間、東→）

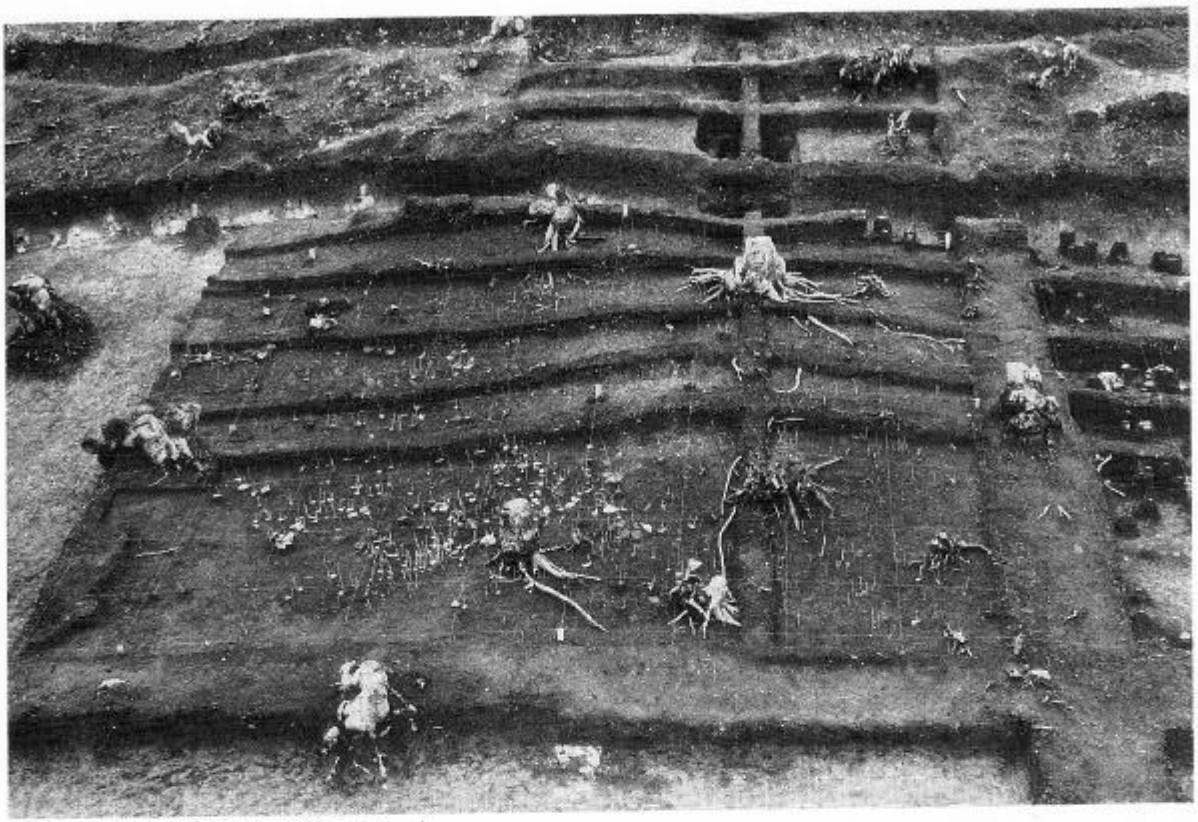
同上　土層断面（I－J間、東→）

図版48

SJ201　土層断面（南東→）



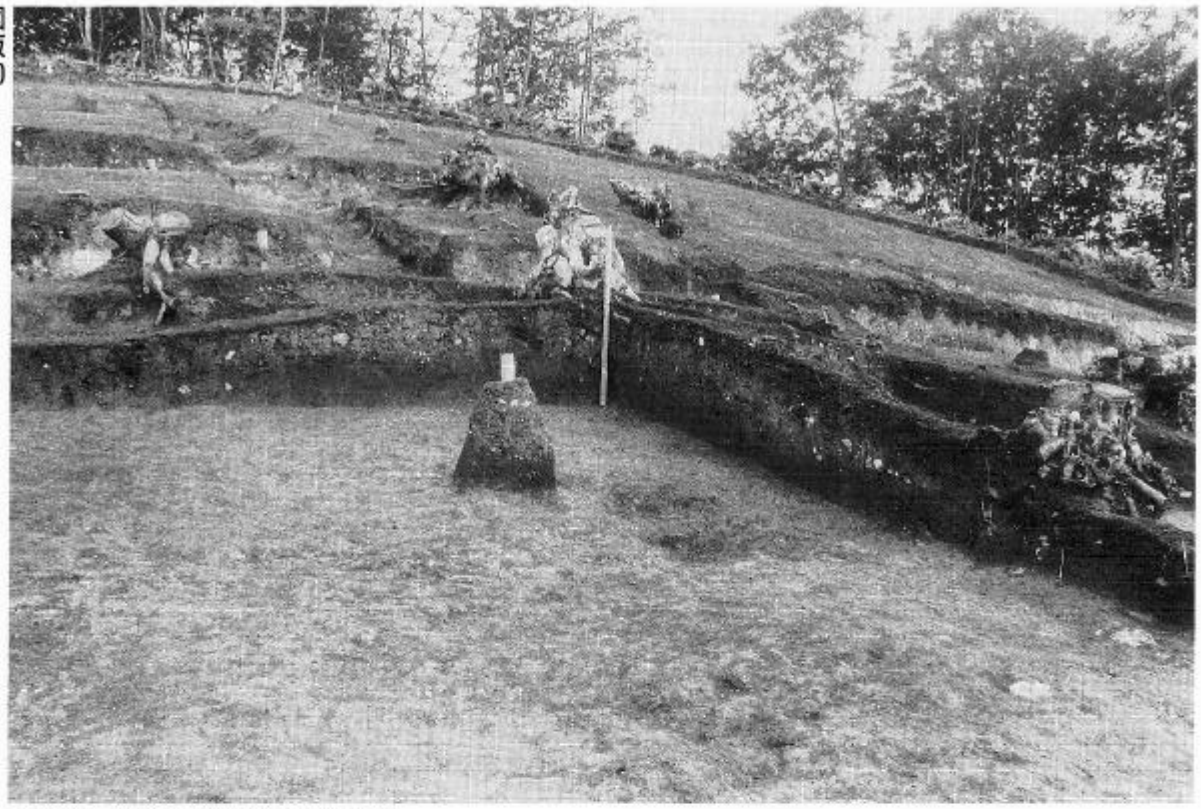
同上　土層断面（E・F－G・H間、南→）



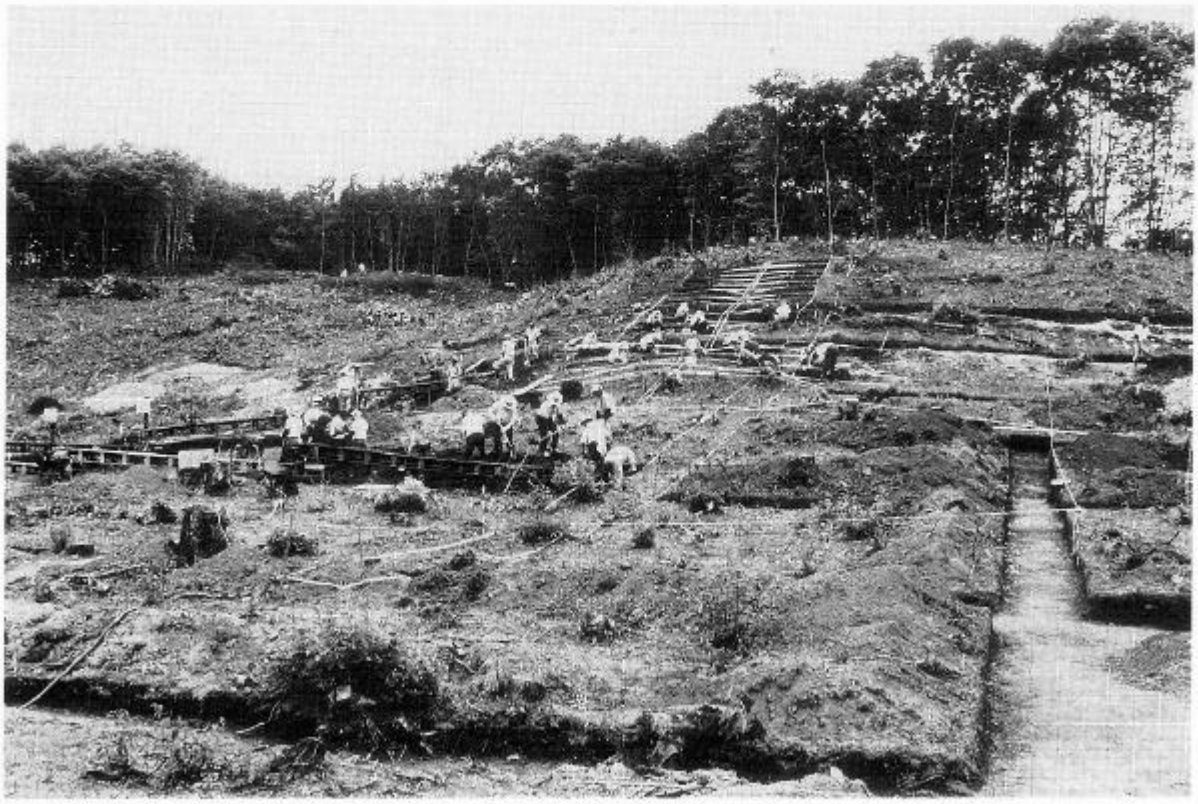
SJ201　灰原遺物出土状況（東→）

同上（東→）

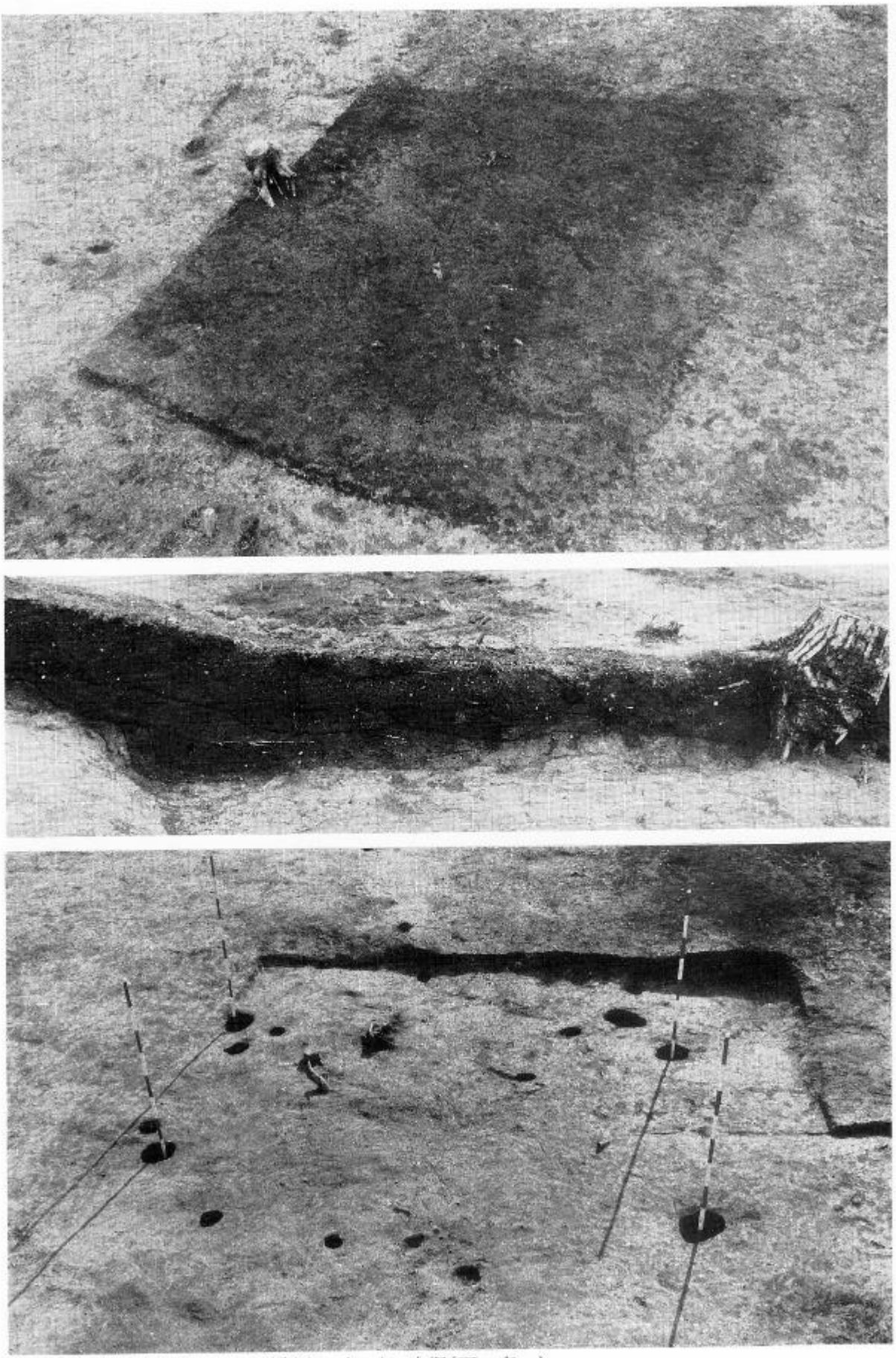
図版50



ＳＪ201　灰原土層断面（南東→）

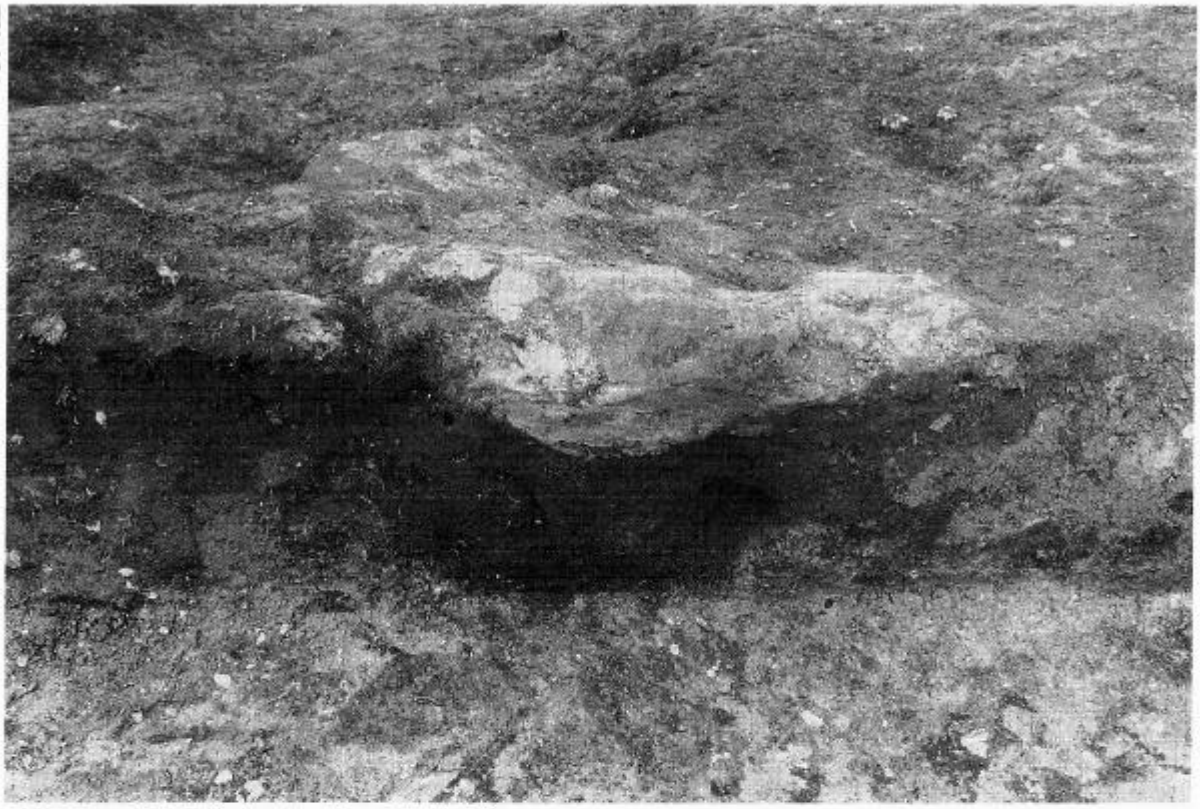


調査風景（北東→）



SI202　確認(上、東→)、土層(中、南→)、完掘(下、東→)

図版52



SK203　土層（西→）白っぽいのが火山灰

SK206・207　完掘（東→）